

歴史学による前近代歴史地震史料集

前近代歴史地震史料研究会 編

はじめに

矢田 俊文

『歴史学による前近代歴史地震史料集』は、前近代歴史地震史料研究会が編集した史料集である。地震史料集には、東京大学地震研究所編の『新収日本地震史料』などがあり、前近代の地震研究に大きな役割を果たしているが、歴史研究者が前近代の地震を研究するための史料集としては使いにくいものとなっている。また、前近代の地震史料を活用して防災・減災に役立てるための史料集としても使いづらいものとなっている。

歴史研究者にとって地震研究に役立ち、さらに、防災・減災に役立てるための史料集にするためにはどうすべきか。そのための試みの史料集が『歴史学による前近代歴史地震史料集』である。本史料集には、原本等の調査による翻刻と注釈をつけた。また、必要に応じて現代語訳もつけ、史料群ごとに解説を付した。末尾にはそれぞれの地震に対応する史料がわかるよう索引をつけた。

本史料集の前近代歴史地震史料研究会は、科学研究費基盤B「前近代の地震による家屋倒壊率と津波到達点の研究――七〇七年宝永地震を中心に――」研究グループが立ち上げた研究会である。

本研究グループには歴史研究者と考古学・地理学研究者が参加している。歴史地震の解明には遺跡の地震痕跡データはかせない。本史料集には特論として考古学研究者による地震痕跡データの検討結果を掲載した。地震災害絵図等の検討も重要で、地理学研究者はかせない。本史料集には地理学研究者による地震災害絵図のトレース図を掲載している。なお、地震災害絵図等の史料の分析には多色刷による原図掲載が必要と考え、本史料集とはべつに、『前近代歴史地震被害絵図史料集成』を作成することにした。

歴史学研究者を中心とする地震史料集はじめての試みである。本書を基礎に次のあらたな地震史料集の作成をめざしたい。

目次

はじめに
目次
凡例

鎌倉大日記（書籍館旧蔵本）

愛媛県松山市薬師寺大般若経卷第十七奥書

寛文以来万覚書

野村家記録

柏井氏難行録

江府京駿雜志

地震海溢記

岡本元朝日記

志摩・伊勢国村指出帳（宝永地震記事）

「宝永六年極月一日 奥熊野尾鷲組流失已後建家之品書上帳（控）」

「見聞闕疑集」

「嘉永七年海嘯ノ記」

「宝永海嘯ノ記」

「大地震之事」（「金五郎日記歳代覚書」）

「年代記 上野田郷馬草村山田氏」

長岡藩御附録

弘化四丁未三月廿四日夜 正四時大地震大變覚

弘化四丁未年三月廿四日夜四時大地震ニ付諸雜談聞書覚

吉城郡小鷹利郷小鳥川筋往還損所道造自普請一件

特論「地震と遺跡——新潟県——」

歴史地震史料目録

執筆者一覧

凡 例

一、現地名については、原則として新潟県内は自治体名を記し、県外は○○県○○市または○○町とし、郡名等の記載は行わない。

一、解説・特論の執筆者は次の通りである。

1 片桐昭彦、2・4・5 西尾和美、3・10 矢田俊文、6 西山昭仁、7・8 原 直史、9 谷口 央、
11・12 原田和彦・宮澤崇士、13 小野映介・片桐昭彦、特論 齋藤瑞穂

一、旧字体・異体字等については、原則として常用漢字に改めた。

一、文末の欠字・平出・台頭はそのまま示した。

一、助詞として用いる「而・茂・者・与」や「𠬞」「𠬟」など合字はそのままとした。

一、誤字や当て字は傍らの（ ）に正しい字を入れるか、右側に（ママ）・（カ）記してそれを示した。

一、塗抹がある箇所には□を付し文字の横にゝを付して示した。

1-1 鎌倉大日記（書籍館旧蔵本） 永享五年条

五月廿一日午刻、大地震、
九月十六日子刻、大地震、夜中三十餘度、築地倒懸而、其後廿ヶ日間、不止地震、

〔読み下し〕

五月二十一日午の刻、大地震、
九月十六日子の刻、大地震、夜中三十余度、築地倒れ懸りて、其の後廿ヶ日間、地震止まず、

〔注解〕（1）午の刻は、午前十二時、またその前後二時間。（2）子の刻は、午前零時、またその前後二時間。（3）築地塀のこと。土で造った垣根。両側に板を立て、内に土をつめ、つき固めて造った塀。一般的に屋根の上に葺く。

〔解説〕記事によれば、永享五年五月二十一日（ユリウス暦一四三三年六月八日）の午前十二時前後に大地震が起きたことがわかる。そして、同年九月十六日（ユリウス暦一四三三年十月二十八日）の午前零時前後に大地震が起こり、夜中の間に三〇回余りの揺れがあり、築地塀が倒れかかったこと、また、地震はその後二十日間続いたとする。

『鎌倉大日記』とは、中世の武家の補任年表および年代記であり、とくに南北朝期以降の鎌倉府を中心とした関東の記事を伝える史料として知られ、複数の写本が残される。本書に掲載した記事を所収する『鎌倉大日記』は、一般的に利用されてきた彰考館所蔵本（竹内理三編『増補續史料大成 鎌倉年代記・

裏書 武家年代記 鎌倉大日記』臨川書店、一九七九年、以下彰考館本と略す）ではなく、国立公文書館に所蔵される書籍館旧蔵本（以下書籍館本と略す）である。書籍館本は、粘葉装の縦長本であり江戸時代中期以前の写本であると考えられる（片桐昭彦「明応四年の地震と『鎌倉大日記』」『新潟史学』七二号、二〇一四年）。右の記事のうち、九月十六日の「築地倒懸而、其後」の「而、其後」の字が彰考館本にはないが、書籍館本には記される。

また、『鎌倉大日記』の別本である生田氏所蔵本（『家伝年代記 頼朝公以来判鑑』、以下生田本と略す）には、「五・廿一午刻、地震」「九・十六夜子刻、大地震、山崩、築地悉顛倒、夜中動事三十余度、惣而其後廿ヶ日計、昼夜動事数十度也」と記される（神奈川県企画調査部県史編集室編『神奈川県史編集資料集第四集 鎌倉大日記』神奈川県、一九七二年）。地震の起きた月日時刻は同じであるが、五月二十一日の地震について書籍館本・彰考館本は「大地震」とするが、生田本は「地震」である。九月十六日の地震について生田本は、山崩れが起き、築地が悉く顛倒したことなど、より具体的に記されている。

『鎌倉大日記』にはどこで地震が起きたか記されない。しかし、同時代に生きた伏見宮貞成親王の書き残した『看聞日記』によれば、永享五年九月十六日条に「今夜、大地震兩度、帝尺動也」とあり、京都でも大地震であったことがわかるが、同年十月二十六日条には「抑関東有不思議之怪異、先大地震、堂舎顛倒、人多死、又八幡宮鶴岡歟、金燈爐焼失全焼云々、又、刀禰川逆二流云々、凡四箇條有不思議、今一箇條不聞、去夏秋之間事也」と記される。関東ではさらに大きな地震であり、堂舎が倒れ、人が多く死に、八幡宮の金燈籠が全焼したこと、また利根川が逆流したことが、一ヶ月余り後に伝わったことになる。すなわち、九月十六日の子の刻に起きた地震は、京都よりも関東で大きな被害があったと考えられる。

したがって、『鎌倉大日記』の記事に特定の場所や主語がない場合には、記主が所在した鎌倉かその近辺でおきた出来事であったことになろう。つまり、『鎌倉大日記』諸本の九月十六日の地震記事は、鎌倉かその近辺の被害状況を示していると言えよう。

(片桐)

1―2 鎌倉大日記(書籍館旧蔵本) 永享十二年条

八月十四日、大風、
八月十六日、満天赤如紅、
九月十八日、大地震、

〔読み下し〕

八月十四日、大風、
八月十六日、満天の赤、紅の如し、
九月十八日、大地震、

〔解説〕記事によれば、永享十二年八月十四日(ユリウス暦一四四〇年九月十日)に大風が吹き、同十六日には空一面が紅のように赤く染まり、同年九月十八日(ユリウス暦一四四〇年十月十三日)に大地震が起きたとする。前掲永享五年の記事解説をふまえれば、特定の場所が記されないことから、これらの風や地震、自然現象は鎌倉やその近辺で発生したと考えられる。

『鎌倉大日記』彰考館本にこの記事はみられない。しかし、生田本には、年次は異なり永享十一年の記事として「八・十四巳午剋、大風、同十六日戌剋、

大風、九・十八亥剋、大地震」と記される。月日は同じであるが、八月十六日の記事は、書籍館旧蔵本の「満天赤如紅」に対し「大風」と記され異なる。しかし、生田本には大風や大地震が発生した時刻が記されており詳しい。

年次については検討が必要である。江戸幕府の命で林鷲峰が編纂し寛文十年(一六七〇)に成立した編年体の日本通史『続本朝通鑑』には、永享十二年として八月丙戌(十六日)条に「天赤如紅」、九月丁巳(十八日)条に「地大震」と記している。しかし、生田本の年代記記事は、当該記事の年次である永享十一年で終わっている。つまり、生田本を追筆した最後の記事であり、追筆した時期に最も近い同時代記事である可能性が高い。

(片桐)

1―3 鎌倉大日記(書籍館旧蔵本) 文明十八年条

相州江嶋前海忽成陸、明応地震又成海、

〔読み下し〕

相州江嶋^{〔1〕}の前海、忽ち陸と成り、明応の地震、又海と成る、

〔注解〕(1) 相模国の江の島(神奈川県藤沢市)のこと。

〔解説〕記事によると、文明十八年に相模国江の島の前にある海がたちまち陸となったが、「明応地震」の際に再び海になったとある。「明応地震」とは、『鎌倉大日記』において明応年間で唯一記載のある明応四年八月十五日(ユリウス暦一四九五(1)年九月三日)に発生した地震と考えてよいだろう。つまり、明応四

年の地震時に、江の島と陸続きとなっていた部分は沈降し海になったこととなる。つまり、文明十八年に江の島と陸続きとなっていた部分は、明応四年の地震によって、再び沈降し海になったことになる。

『鎌倉大日記』彰考館本には、「相州江島前海忽成陸、明応地震又為海」と記され、「又為海」・「又成海」の「為」と「成」の一字が異なる。

(片桐)

1—4 鎌倉大日記(書籍館旧蔵本) 明応四年条

八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比濱海水到千度檀、水勢入大佛殿破堂舎屋、溺死人二百余、

九月、伊勢早雲、攻落小田原城大森入道、

〔読み下し〕

八月十五日、大地震、洪水、鎌倉由比濱の海水、千度檀^②に到る、水勢、大仏殿^③に入り、堂舎屋を破る、溺死人二百余、
九月、伊勢早雲^④、小田原城の大森入道^⑤を攻落す、

〔注解〕(1) 神奈川県鎌倉市由比ガ浜。鎌倉市内を流れる滑川河口の西側の海岸とその周辺をさす。(2) 鶴岡八幡宮の参道中央にはしる一段高く造られた段葛のこと。(3) 鎌倉大仏が所在する鎌倉市長谷の高徳院境内一帯のことか。(4) 伊勢新九郎盛時か。出家入道して早雲庵宗瑞を号す。当時は伊豆国韭山(静岡県伊豆の国市)に拠る。(5) 神奈川県小田原市。(6) 小田原城主大森氏の当主。入道とは、仏門に入り僧になることを指すが、僧体ながら世俗的な生活を行う者も指す。

〔解説〕記事によれば、明応四年八月十五日(ユリウス暦一四九五年九月三日)に発生した大地震の津波により、由比ヶ浜の海水が鶴岡八幡宮の千度檀まで達し、水勢は大仏殿まで入り込み、境内の建物を壊し、溺死者は二〇〇人余りであつたとする。そして、九月には伊勢早雲(宗瑞)が小田原城の大森入道を攻め落としたとする。

『鎌倉大日記』彰考館本には、「八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比濱海水到千度檀、水勢大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余」「九月、伊勢早雲、攻落小田城大森入道」と記され異同が二箇所ある。八月十五日記事の「水勢大仏殿」部分における「入」の字の有無、および九月記事の「小田」と「小田原」の違いである。八月十五日記事の解釈について、彰考館本では、洪水の水勢が直接そのまま大仏殿の堂舎屋を破ったかのように捉えられるのに対し、本記事(書籍館本)では、水勢が大仏殿に入り込んだ上で堂舎屋を破ったという、経過時間や段階差を含む表現になっている点で違いがみられる。

(片桐)

2 愛媛県松山市薬師寺大般若経卷第十七奥書

文禄五^丙申潤七月九日二大ニ地振候て、国中迷惑仕候、其時

〔注解〕(1) 伊予国

〔解説〕薬師寺は、愛媛県松山市放免に現在も所在する真言宗寺院。同寺に伝来・所蔵される大般若経の卷第十七の奥書に、文禄五年(一五九六)閏七月九日に伊予国で大地震があつたとの記述が見える。同時期は京都、豊後などで地

震が多発しており、本奥書によって伊予でも地震があったことが確認される。奥書が書かれた時期や筆者は不明。なお、「其時」はそれ以前とは異筆。また「其時」より後はもともと何も書かれていなかった。

〔参考文献〕土居聡朋「愛媛県松山市保免・薬師寺所蔵の『大般若経』について」『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』第十八号、二〇一三年。

(西尾)

3—1 寛文以来万覚書 天和三年条

(天和三年)

一、五十里^①、地しん^②而突埋、水海^③成候ハ、天和三年亥ノ年八月晦日、則御普請有之候

〔注解〕(1) 五十里、いかり。五十里村は栃木県日光市。元藤原町。会津藩領地南山領にあった。(2) 天和三年(一六八三)の日光南会津地方を襲った大地震。この地震によって五十里湖ができた。(3) 水海とは湖(五十里湖)のこと。

〔解説〕寛文以来万覚書は、福島県只見町大字熊倉の目黒武男家に所蔵される年代記で、現在、福島県歴史資料館に寄託されている。目黒家は代々熊倉村の名主を勤めた。只見町地域は南山御蔵入領で、五回の会津藩預り支配と四回の直支配が行われた地域である。

寛文以来万覚書は、これまで『只見町郷土史資料第4集 寛文以来万覚書』が利用されていたが、本史料集では福島県歴史資料館寄託史料によって翻刻を

おこなった。原本を調べると本来は別々の冊子だが、一冊に合綴されていた。弘化四年(一八四七)の記事が前に来るなど、年代が前後する箇所がみられるのはこのためである。

天明八年(一七八八)五月十九日の記事の次に、

「是迄ハ寛明筆也

是ハ勝興筆也」

という記事が記される。この記事の次に、文化六年(一八〇九)九月五日の記事が記される。このことから、天明八年頃までは寛明による筆記で、文化六年頃からは勝興によって記された、と考えてよいと思われる。『只見町郷土史資料第4集 寛文以来万覚書』所収の目黒氏系図によると、本史料の筆者寛明は享保十七年(一七三七)に生まれ、文化八年(一八〇七)に没している。寛明は、地震によって五十里湖ができた天和三年(一六八三)には生まれていない。寛明の祖父寧経(やすつね)は天和元年生れである。寛明の次の筆者勝興は、寛明の孫にあたる。

3—1には天和三年の地震で五十里は突き埋まり、湖ができたと書かれている。地震で土砂がせき止められ天然ダムができたのである。この地震については「朝林」にも記されている。「朝林」天和三年四月条には次のようにある。

(天和三年四月)

一 去月廿九日之夜、大地震之節、奥州会津領保科肥後守御預り地三依川^エ五十里^カ村高百式十石之場、西者日光御神領高原峠^ハ五十里村之川^江崩掛^リ、五十里村^江水溜出来申由、山崩掛^リ処、高^サ式丈四、五尺ほど根はり四百五、六十間程有之、五十里村亡所^ニ成候由沙汰有

「朝林」には、尾張藩が幕府から得た地震災害情報が多く記されている。右の天和三年の地震記事も幕府に入ってきた情報であると考えられる。3—1

は、「朝林」ほど詳細ではないが、正確であることが確認できる。

〔参考文献〕只見町史編さん委員会編『只見町史 第4巻 資料編1 原始・古代・中世・近世』只見町、一九九九年。朝林研究会編『共同研究報告書8 朝林前編』名古屋学芸大学短期大学部東海地域文化研究所・名古屋外国語大学国際コミュニケーション研究所、二〇〇六年。矢田俊文「一七〇七年宝永地震と大坂の被害数」『災害・復興と資料』第二号、二〇一三年。

（矢田）

3-2 寛文以来万覚書 元禄十六年条

（元禄十六年）

一、江戸地しん^①にて損候ハ、元禄十六年末ノ十一月廿二日之晩、夜半過^②ゆり、御城下破損致候由、其^③さい^④ゆり、翌申ノ正月廿日ノ晩、明方^⑤地しんゆり申候、同十一月十八日、廿九日兩度之大火事^⑥にて、江戸さハかしく、其^⑦五万石^⑧の江戸へ御廻米被仰付出申候

〔注解〕（1）江戸地しんとは、元禄十六年（一七〇三）十一月二十三日、相模トラフ沿いに起こった巨大地震（元禄地震）により江戸が揺れた地震のことをさす。

（矢田）

3-3 寛文以来万覚書 宝永四年条

（宝永四年）

一、上方地震^①にて界・大坂其外浦^②ノ損候ハ、宝永四年亥ノ十月四日ノ四ツ時分^③ゆり、并ハツ時分^④つなミにて四国・西国・熊野浦・大坂大分^⑤つなミひかれ、海中共^⑥人損候由、同年十一月廿三日ノ晩^⑦ぶち山焼^⑧、煙り^⑨にて武蔵・相模くらやミ^⑩なり、夜昼共^⑪ちやうちん^⑫而、三、四日あるき申候、毎日、近国砂降り申^⑬付而、さしかさをさし上下致候由、何辺、暮中迄けふり晴切り不申由、其^⑭付、砂割錢とて、百石^⑮式兩宛割錢諸国分出申候

〔注解〕（1）上方地震とは、宝永四年（一七〇七）南海トラフ沿いに起きた巨大地震で、上方が揺れた地震のこと。（2）界、さかい、堺（大阪府堺市の旧中心部）のこと。（3）四ツ時分とは午前九時から十一時の間のこと。（4）八ツ時分とは午後一時から三時の間のこと。（5）ぶち山焼とは、宝永四年十一月二十三日の富士山噴火のことをさす。

（矢田）

3-4 寛文以来万覚書 宝永七年条

（宝永七年）

一、大地震ゆり候ハ宝永七年寅八月四日ノ朝五ツ時分^①候、大地かハれ^②、家々ノ戸さま間々^③はつれ、大さわき^④候、此時^⑤五十三以前、万治元年庚戌ノ三月ノ地震^⑥同前^⑦可有之候、其時、南山三王峠^⑧ゆりくつれ、大地かひきハれ候、其後、五十里も損、日光も損候へ共、此度之地震ほと^⑨は無^⑩之候

〔注解〕(1) 宝永七年(一七二〇) 会津南山地震。(2) 朝五ツ時分とは午前七時から午前九時迄の間の時間。(3) 万治元年庚戌ノ三月ノ地震とは、万治二年(一六五九) 二月三十日の地震のことをさす。(4) 南山、みなみやま。幕府の蔵入地で、会津藩が預っていた領地のことをさす。(5) 山王峠、さんのうとうげ。福島県南会津町と栃木県日光市の境界にある峠。当時は会津藩預地南山領のうちにあった。会津と関東を結ぶ道で江戸時代に会津西街道として整備された。

〔解説〕本史料は、宝永七年(一七二〇) 八月四日の会津南山で被害のあった地震のことを記録していて、地震は朝五つに地震がおき、大地が割れ、家々の戸がはずれ、大騒ぎになった。五十三年前の万治の地震と比べると、今度の地震ほどではなかった、とある。

宝永七年会津南山地震については、尾張藩の記録「朝林」には次のように記されている。

(宝永七年八月)

一同廿七日 松平肥後守御預所之内会津南山、去四日夕七日迄度々地震にて、百姓家十四、五軒潰、山も少々崩、沼杯も埋候由、城内領分ハ無別

条

松平肥後守の御預所の会津南山地域は八月四日に地震があり、百姓家が一四、五軒潰れ、山も少々崩れ、沼なども埋まったが、城内は無事だったとある。松平肥後守は会津藩主保科正容である。

次に、会津藩「家世実紀」(巻之九六)の記事を見てみよう。

(宝永七年)

八月四日、地震

今朝空強鳴候処、卯之下刻地震、南山之内伊南・伊北・金山谷別而強、禿

家十四軒内四軒ハ半禿、所々破損山々崩れ、畠を埋、道を塞、土地も五分七分宛割候所有之、同五日六日二も一兩度地震有之、此儀江戸江言上、大地震ニ付御聞番を以、御老中井上河内守様江御届被仰上、御勘定所江も御蔵入郡奉行より書状を以致御届候

「家世実紀」には、潰家一四軒で、そのうち四軒は半潰れとある。潰家・半潰れの情報は「朝林」よりも詳細であるが、「朝林」の記述もそれほど間違っていない。また、「御老中井上河内守様へ御届仰せ上られ、御勘定所へも御蔵入郡奉行より書状をもって御届候」とあり、会津藩より老中井上正岑に被害報告が行われ、さらに、南山は幕府領であることから、御蔵入郡奉行から勘定所に被害報告が行われている。災害のあった藩から被害報告が幕府に上げられ、各藩はそれを入手して国元に持ち帰った。尾張藩が幕府から得た会津藩の被害情報が「朝林」に記録され、残ったということになる。

さて、3―4には、宝永七年の会津南山地震と万治の地震が比較して書かれている。同時代の日記で信頼できる情報である会津藩家臣の日記「名倉信充日記」にも万治の地震について、次のように記されている。

(万治二年二月)

一同晦日九ツ前大地震ス、去トモ御城下近辺破損モナシ、南ノ山田嶋ニて町家数二百軒程潰、土蔵三、四十潰、男女死人十四人、過スル者男女七十九人、馬五疋、其外近郷ニて家五軒三軒潰、或ハ山崩岩飛木タオレ、山王峠悉崩、往来絶ル、其外方〳〵不思議共在之由、塩原ノ湯少破滅スルモ有之由、御城下ニテモ西之方ニ付テ井之水不出或ハアセタルモ有之由

右の「名倉信充日記」によると、万治二年の地震によって会津南山領にある田島は町屋二〇〇軒ほど潰れ、死者は一四人であると記している。また、会津

藩「家世実紀」(巻之一九)には次のようにある。

(万治二年)

二月晦日、地震

今日已刻地震、近年稀なる様子ニ候得共、御城始侍屋敷・町鄉村共ニ破損無之、南山田嶋町ニ而人家押倒怪家等在之由、同所検断方々注進申出候間、御蔵入郡奉行諏訪十左衛門、明細ニ相改候得は、家数百九拾七軒・土蔵三拾九棟押倒、死人男貳人・女六人有之、外ニ男女七拾九人・馬五疋致怪家不便成体ニ付、加判之者とも僉議之上手当申付之、

この地震で、南山田嶋町では家が倒れ怪我人があると、田嶋町検断方より注進があつたので、御蔵入郡奉行諏訪十左衛門が詳細に調査を行った。被害数は潰家一九七軒潰れ、死者数八人(男二、女六)であると記載されている。

「名倉信充日記」・「家世実紀」は、家屋の被害数についてほぼ同じ数字を記しているが、死者数に違いがある。「家世実紀」は一八一五年に成立した編纂物ではあるが、幕府南山領の被害は蔵入郡奉行諏訪十左衛門が詳細に調査し勘定所に報告した記録に依拠して記されている。依拠した史料が同時代の史料であれば、「家世実紀」の被害数に従うべきであろう。

正保二年(一六四五) 田嶋町差出帳には、家三七二軒、本百姓三四四人、水呑二八人、人数一六五三人とある。万治二年(一六五九)の地震被害は、潰家一九七軒、死亡者八人(「家世実紀」)である。万治元年直前の家数情報ではないが、家屋全壊率と一軒当り死亡者数を出すと、家屋全壊率五三パーセント、一軒当り死亡者数〇・〇四人となる。

本史料では、宝永七年会津南山地震がこのような被害をもたらした万治二年の地震よりも大きかったと記しているのである。

〔参考文献〕朝林研究会編『共同研究報告書13 朝林後編』名古屋学芸大学短期大学部東海地域文化連携センター・名古屋外国語大学国際コミュニケーション研究所、二〇〇六年。名倉英三郎編『名倉信充日記』発行者名倉英三郎、一九九一年。正保二年田嶋町差出帳『田嶋町史 第6巻上 近世史料1』一九八六年(同史料の典拠は『田嶋町史資料集第五集』所収)。

(矢田)

3—5 寛文以来万覚書 享保八年条

(享保八年)

一、五十里ノ水海、^①此度、享保八年卯ノ八月十日之洪水^②ぬけ、段々五十里之者共、本所へ帰、家作り居申候、天和三年亥八月^③ノ四十壹年とて、ぬけ申候

〔注解〕(1) 五十里ノ水海とは、天和三年(一六八三)九月一日、地震のため五十里村に天然ダムができたことをいう。湖ができたことをいう。(2) 享保八年卯ノ八月十日之洪水ニぬけとは、享保八年(一七二三)八月十日、五十里村の天然ダムが決壊して水が抜けたことをいう。(3) 天和三年亥八月とは、天和三年(一六八三)九月一日に地震が起こった時のことをさす。

(矢田)

3—6 寛文以来万覚書 寛延四年条

(寛延四年)

一、越後高田今町、地しん^①而大分^②そん^③し候ハ、同年四月廿五日夜半時分^④大

分^ニ家をゆりたをし、其故^ニ火事出来致、高田近在^ニ而人死有之事、三千人死申由

〔注解〕(1) 越後高田とは、新潟県上越市高田地域。高田藩の城下町があった。(2) 今町、いままち。新潟県上越市直江津地域。(3) 地しんとは、寛延四年(一七五二)四月二十六日に高田に大きな被害を与えた地震のこと。

(矢田)

3―7 寛文以来万覚書 安永八年条

(安永八年)

一、大地しん^①ハ十一月十日夜亥刻也

〔注解〕(1) 大地しんとは、安永八年(一七七九)佐渡地震をさす。

〔解説〕3―7の大地震は、会津で感じた地震の記録で、佐渡沖を震源域とする地震である。地震被害を受けた地名等が記されていないので、筆者が感じた地震を記したものと考えてよいだろう。

「佐渡年代記 巻五」(新潟県立図書館写本) 安永八年条には佐渡沖を震源とする地震について次のように記している。

(安永八年)

一、十一月十日夜、大二震ふ、翌十一日朝、濁川沖海中より登龍ありて大間町・濁川の町家所々破損す

佐渡年代記は佐渡奉行所の記録で、慶長六年(一六〇一)から嘉永四年(一

八五二)までの記事が収められている。記事には安永八年十一月十日の夜に大きな地震があり、翌十一日の朝、濁川沖より登龍があった、とある。大間町・濁川は、佐渡市大間町と濁川町(旧相川町)で、ともに海沿いの地域である。濁川沖から津波が押し寄せたことを、「海中より登龍あり」と表現しているものと思われる。

佐渡沖で地震が起こり、津波が押し寄せ、海沿いの大間町・濁川の家屋が破損した。3―7は、この地震が会津地方でも揺れを引き起こしたことを示している。

(矢田)

4 野村家記録

一、宝永四亥年九月廿九日朝、与茂四郎生レ、名ヲ祖父松と改、其後宮松と申候、

一、同年十月四日之昼八ツ時、式百年来も伝ニも無之大地しん^①、平太郎十式歳之時、西なべ高畠山へ薪ヲ取ニ参り、かくい片荷^②・しだ片荷^③拵さすニさし申時、右大なや、足元ニきじなき諸方土けむり立、十間より先ハ見へ分ち不申、さそく驚入荷を捨、宿へ帰り申内、親人母をふとんニ与茂四郎とも入をい^④、娘おしゆん・おぎんを引連、家西ノ溝田迄来、親人申様ハ、先ほどの大じしんニ付、大し^⑤を入申旨ニ而、数人山へにけ申事ニ候、我々も此通、はやく子どもヲ引連、たるミ山^⑥へ参候へ、然し御証文物・御検地御帳、流申事^⑦さんねんニ存候と申ニ付、立帰り取参り可申候と申候へハ、母申様、命ニ^⑧かへ申様無之、まニ仕候へと申、平太郎存ハ少ノ間ニしを来り可申様も無之と存、彼是申内ニ居宅へかけ参り、家ニ入見レハ、形替こわげ立候へと^⑨もふ

ミ込、大はさみ箱をも力に合不申、如何と存、槌二而打割、存知之書物ヲ取、山へかけ参り、山本二而母と一所二着居床ヲ拵、火ヲ出シ薪ヲ寄、其外過分ノ人数山へ登り心をしづめ居申内、海面二うミ鉄炮と申物、なりひかり、地しんも小ゆりやみ不申、同五日之晩迄夜二五度、昼七度ほどゆり、三日昼夜二伯り家々へ帰り候、母ち病痛ミ、小女郎谷と申所三休と申しや罷居、薬取二参りあたへ能成候、

〔注解〕(1) 一七〇七年。(2) なる。地震のこと。もとは大地の意。(3) 阿波国海部郡四方原村にあった山。「たるみ」は現在も残る字名で、同地域にあった山と考えられる。

〔解説〕「野村家記録」は、阿波国海部郡四方原村(現徳島県海部郡海陽町四方原)の庄屋を務めた野村家に伝来・所蔵される史料である。近世初頭からおおよそ安永三年(一七七四)に至るまで、代々、庄屋を務めた当主が一族や四方原村に起こった主な事柄を記録したものである。『海南町史』下巻および東京大学地震研究所編『新収日本地震史料』第三巻別巻(宝永四年十月四日)に、「野村家文書」として、宝永四年(一七〇七)地震に関係する記述が掲載されている。本書掲載の翻刻は、後掲の西尾二〇一四から転載した。

野村家は、寛永十四年(一六三七)に野村惣太夫が四方原に入植し、寛文四年(一六六四)に庄屋役を仰せ付けられた。宝永四年、庄屋を務めていたのは惣太夫から数えて三代目にあたる七左衛門喜伝治で、同人は当時四十代半ば過ぎであったと見られる。

ただ、地震記述は、そこに見える続柄表記から考えて、後に喜伝治の息子平太郎が庄屋となった時期に平太郎によって書かれたと判断される。平太郎十二

歳の頃の体験を、二十代後半から六十代半ば頃までのいずれかの時期、すなわち地震発生当時から十五年〜五十五年後くらいまでのいずれかの時期に書き残したものである。達者で物覚えがよかったという父の記憶を参照しつつ記述したと考えられ、父子の記憶を照合した家の体験としてそれなりに信頼に足る内容と判断される。

そこに知られる野村家家族の避難行動は、以下のごとくである。

地震は、平太郎が「西なべ高畠山」で薪を取っていた時に発生した。雉が鳴き土煙が立って周囲が見えない中、平太郎は荷を捨てて家へ帰った。その途中、「家西ノ溝田」で、母と弟与茂四郎を布団に入れて背負い、姉妹二人を引き連れた父と出会う。父の背の母子は、前月末に生まれた赤子とその母親である。父は、津波を警戒して村人数人がすでに山へ避難しており、自分たちも「たるミ山」へ逃げるところだと語っている。「たるミ山」が当時四方原の人々が津波を警戒して避難する山であったことが知られる。

平太郎と出会った父親は、家に残してきた証文類、検地帳などが津波で流失することを惜しみ、母親は命には代えられないと止めたが、平太郎が取りに帰った。十二歳の平太郎は、津波はすぐには来ないとの知識があったようだが、家に入ると恐怖心が起こった。しかし、即座に、重たい大きな挟箱ごと持って逃げるのは困難と判断し、箱を壊し中味だけを持って家族のもとへ戻った。

海面には「うみ鉄炮」が鳴り光り、地震は翌五日の晩まで繰り返し揺れ、家族は三日三晩を山で過ごした。産後の母はその間に痔を悪化させ、帰宅後、平太郎が医者により薬を取りに出かけている。

以上の限りでは、四方原の津波被害は記述されておらず、少なくとも野村家の住宅と家族に津波による被害が出た様子は知られない。

〔参考文献〕海南町史編さん委員会編集『海南町史』下巻、徳島県海部郡海南町発行、一九九五年。徳野隆「近世史料に見る阿波の地震と津波」『史窓』第四二二号、二〇一二年。西尾和美「宝永四年地震の中の家族とその史料―阿波『野村家記録』・土佐『柏井氏難行録』の場合―」『災害・復興と資料』第四号、二〇一四年。

(西尾)

5 柏井氏難行録

享保甲寅上巳^①の日^②

国君参勤として高知の城発駕し給ふ、予は船廻りの数につらなり、城東農人町といふ所より船にのり、おなし日の黄昏に浦戸の港に到りぬ、ふねは国君の乗らせ給ふ御船なれば、高いいやしきおのく一ふねにのり侍りぬ、おともに旅泊の身にしあれば、千里の遠きを憂ひ、みなく往事をのミ語りぬ、予か家翁^③、宝永丁亥^④の年此浦のとなりなる種崎浦^⑤にて大地震・綱波の変災に逢ひ、予、綱波の中より希有にして命をのかれし事をいふ、皆、其次第を具に語れとしきりにし^⑥いられ、ありしむかしを思ひ出れはむねふさかり、言葉^⑦しふりてやうくその大概をのふといふ、

宝永四年丁亥十月四日、家翁病ありて家にあり、日午にちかつくころ、地大に震ひ、家転倒せんとす、家内男女老たるも若きもみな、後園^⑧にはしり出つ、予は家翁と共に南の庭に出て、門外の浜に出つ^⑨り、宅種崎^⑩の南の端にあり海中を見れば満たる潮忽かれて汐^⑪薄となり、百尋の海底も徒跣^⑫にてつたりつへし躰なり、東西海畔および市中を見れば、平地のふるひ動きてうねとなり谷となり、地の升降する事、只大海の浪打か如し、家翁、老母の事を思ひ、後園にいたらん事を欲して道なし、東隣に明屋舗あり、其境にいたれば垣堅固にして通行を得ず、予、

垣の上にのほり梅樹の枝をよぢて家翁をしてつゝきのほらしめ、つゝに後園にいたる事を得、こゝにて家族に逢ぬ、地震ふるハ猶やます、老祖母謂曰、これなやと云ものなり、かゝる折しも藪中に入事とて、家族を伴ひて北藪の中にいりぬ、暫時有て東方海畔の町より呼て曰、大浪市の中に入、みな山にいたるへしと、爰にをゐて家翁五歳になる女子を背負ひ、老たる母の手を引、予か兄専五郎^⑬、此年十歳^⑭ハ母を伴ひ、弟三五郎^⑮、此歳^⑯奴婢に命して腰抱せしめ、後園を出んとす、家兄転倒之家に入、重代の刀を取出これをおひ、予にも腰刀をあたへて一同に西隣^⑰右衛門表門を出、仁井田の山をこゝろさし、御座町といふ所に出、北にむかひ逃行事凡十余町、其逃行人ハ稻麻竹葦のことく、逃るもの何かわしらず、かなしき声を出しわめきておほえす、跡にしりそく事一町はかり、忽然として潮足下に溢れ、其色黒くして煤のことく塵芥小砂を捲出、其水先電光のことく忽綱波溢来、其声雷霆^⑱の地に落ることく、逃行数千の人の声ハ只わあくといふて蚊虻のことく、是東北池十市の海畔より綱波溢来る其音也、須臾の間に綱波頭上をひたし人皆沈弱^⑲す、予は行手の左なる生垣にのほり流れ来れる板戸にのほらんとして乗得ず、忽浪中に沈む、浪中にてたれとハしらず人に流れかゝりぬ、其人の腰刀をつかみとりはつし又とりつきて、はなれしと帯にしつかと取付ぬ、浪中の事なれば誰とハしらず、しかるに其人ハ家翁なり、綱波溢行、漸潮家翁の肩をひたすはかり二成ぬ、其時家翁かへりミ見れば、老母破屋^⑳のほとりにありて危き躰也、家翁おとろき、其所へゆかんと欲すれ共、背中に女子を負ひたり、ゆかされハ母をうしなふ、せんかたなく負たる女子を浪中に投捨、浪をしのきかろうして母のもとにいたりぬ、破屋にあからんとすれと、潮はむねをはらふはかりにて、腰はおもく、予かいたきつきぬる事ハしらすして、塵芥の身をまとうかと、われをして押はなたんとする事たひく^㉑なり、家翁破屋にあからんとするかへりミ見れば、腰なるものは我子也、おとろきたすけん

とて地下に足を付れば、予ハ又浪中に沈む、せんすべなき所に、人ありて家翁を見付忽来りて、先予をして破屋の上に投上げ、家翁をもたすけ上らしむ、家翁老母のもとに到り、老母を破屋の上堅固の所にいさなひ行て、死をまぬかれぬ、潮ハ須臾のうちに引落て平地となりぬ此難に逢し所、行手の左ハ船倉のうしろにて堤有、赤松有、寄あり、それゆへ海へ流れいてさるなり、こゝにて家内のもの皆散乱して見へす、即今薨をならへし数千の官舎民屋、皆流没し、庭樹・垣牆、或流或倒、忽白砂となりぬ、老母命を助かりし破屋ハ其所に藏と船頭弥平次ト云者土藏也大樹とありてこれに流れかゝりし家也、其破屋におされ半死半生のもの五七人あり、家翁これをたすけんと欲して人を集め其家をやぶらしむといへとも、大家倒れて棟梁かさなりぬれば、たやすく除かたくして、皆眼下に命をおとしぬ、家翁及老母、家内の行衛を尋見んとて、ぬれたる衣類をぬき、予をしてこれを守らしめ、四方にめぐり行く、只奴婢二人を尋得たり、予、母及兄弟の行方しれすばうぜんとしてせんすべなし、時に又大潮入ると呼るゆへ一所に相集り、家翁老母をすゝめとかく仁井田の山に逃へしといふ、老母のいわく、是天地滅亡の時来ると見へたり、何地にゆきて死をのかれんや、只此所をうかすして溺死センのミと、家翁しるて曰、のかるへしほとは通れ見、其行先にてにもかくにも成へしと、老母をすゝめ肩にかけ、予か手を引てゆかんとす、しかるに予此時纔に九歳、綱波に沈て万死をのかれ身體つかれて一步も引事を得ず、家僕三藏と云、謹代之者肩にかけゆかんとすれと、かれも又足立得ず、綱波入るとよばわれとも、一同にみな足ひかれされば、其なやミたとへていわんかたなし、只管砂中を一步はあゆミ一步はまろひ、千苦万勞して漸仁井田の五本松にいたりぬ、其時綱波又うち寄、兵を洗ひ土砂を崩す、されとも此所ハ地高くして潮入来らず、荊棘をしのきたとりく、はうく聖導寺といふ寺にいたりぬ聖導寺真言宗、仁井田山下ニアリ、家翁住持に乞て白米一囊を得て母にすゝむ、此寺えも潮入来るとてさわきぬれば、せんかたなく又山によちのほり、浦戸・種

崎・三畳瀬(1)の浦をかへり見れば、数千の家皆流没して白砂となりぬ、大海を見れば、沙浜半里計の際は赤土をたてたることく、それより滄海の方ハ其色煤のことく、神無月の初なれハほとなく日も山の端に入なんとす、とかく寺に下りて庭上に畳をならへ居侍りぬ、扱浦戸・三畳瀬の山上・山下に火をとほし、親は子をたつね、子は親をよびさけぶ、其音たとへていわんかたなし、五日といふになれとも、もとより朝飯とて喰へしものもなく、やゝありて一人役人申出けるハ、大坂へ積登る米船きのふ浦戸を出帆せし、船此大變ゆへ又港に只今漕戻りぬと、家翁其人に命していうよりはやく其米取揚、貴となく賤きとなくそれくゝにわかちあとふべし、後難はわか身一人に蒙り申へく、はやくとりはからへと、それよりほとなく俵物とり来、清導寺の庭上にて石をならへ鍋を求て、うすつかぬ米を炊けとも飯とならず、されともそれをもてうへをしのきぬ、其日の昼過大津氏務右衛門ト云且譜代家僕喜衛門ト云尋来りぬ大津氏喜衛門高知より仁井田にゆかんとしてふねなし、潮江より西孕山にいたり山内監物て意口をもて權として、東孕の磯に漕寄せ、其所より山を越、清導寺に尋来りぬるなり、其後、高知御仕置所より、家翁・国沢氏へ書状来、各存命之段聞伝申、弥其所にふミ留り相勤候様二との御奉行所おほせのよしなり、其舟使に高橋氏務兵衛ト云尋来ければ、老母予ハ務兵衛に附して古郷久万村にかへし、家翁は其儘清導寺に侍りぬ、嗚呼、家翁いかなる前世の宿業にや、高祖父以来百十有余年住馴し古郷を離れ、此浦に來住する事纔に七年にして、かゝる変災に逢、妻子四人一時に流没しぬ、任役によりて住ぬる宅と思へは、君の為に身を致すの忠清とやいふへし、なげきてもあまりある事なり、

柏井貞明録之

〔注解〕(1) 享保十九年(一七三四)。(2) 三月三日。(3) 家長の意。ここでは、柏井貞明の父である柏井実慎のこと。(4) 一七〇七年。(5) 高知城下の南に広が

る浦戸湾の口に東から突出した位置にある。(6)なる。地震のこと。もとは大地の意。(7)仁井田は種崎の北東に接する村。仁井田の山は同村の大平山か。(8)壊れて傷んだ家。東京大学地震研究所編『新収日本地震史料』第三卷別巻(宝永四年十月四日)では「砂屋」としているが、「破屋」が適切。(9)仁井田村の太平山の麓にあった真言宗寺院。(10)浦戸湾を挟んで種崎の南の対岸。(11)浦戸湾を挟んで種崎の西の対岸。(12)高知城下の北を流れる久万川の北方。(13)曾祖父の父。

〔解説〕「柏井氏難行録」は、土佐種崎に役宅のあった土佐藩士、柏井実慎の家族の宝永四年(一七〇七)地震・津波の被災記録である。種崎は、高知城下の南にひらける浦戸湾の南端の入り江付近に東から突出した地にあり、外洋からの入り口に位置する。対岸の浦戸、三畳瀬とともに壊滅的被害を受けた地である。「柏井氏難行録」は、享保甲寅すなわち同十九年(一七三四)上巳の日、藩主参勤の船中で往時の話となり、実慎の次子貞明が周りに求められて宝永の地震・津波で希有に助かった次第を語り、後に一卷として名付けたものという。貞明九歳の頃の体験を三十代半ば頃に回想し、まとめたもので、細部には記憶の変容や後日の知識もあろうが、全体的には信憑性に足りると判断される。

写が土佐山内宝物資料館に所蔵されている。それによれば、柏井貞明の手になる右に掲載した文章の後に、以下のような後人の付記が見える。

吉凶禍福莫非命也、而人之所自取、亦有不可誣者焉、柏井貞寿君四世之祖実慎君、在種崎之官舎、宝永丁亥十月四日地震、海潮遽至、家人四人溺没、君及令堂・次子貞明君三人得免、後貞明君因人問海潮之變、叙其事為一卷、

名曰柏井氏難行録、其手沢之書、有故藏於好田谷先生之家、今茲貞寿君、切請得之因謄寫此卷、以報之、請予書其事於卷尾、予読之再三每、至実慎君捨所負子、而救令堂之危難、及散官粟与飢民、曰檀命之罪我任之、未嘗不舍書而感嘆也、宜哉、君之脱万死而救母、存子家系永世之基、一無所欠、乃其所自取非、所謂順受其正命者也耶、嗚呼、君之孝慈如此、然而貞明君以来、三世無子、皆養家族某子、以継家、亦非天乎、至貞寿君、有螽斯之慶、又将使子孫永藏此書、時省不忘此、予之所以不辭其請也、于時弘化甲辰嘉平月、竹邨修撰、

これによれば、貞明が叙述した「柏井氏難行録」は、貞明以降代々子がない事情とも関わって、同家を離れ「好田谷先生之家」に蔵されていた。ところが貞寿の代に至り子孫に恵まれ、貞寿が切に同書の謄写を請い、「予」(「好田谷先生之家」の後代の者か)にその間の事情を巻尾に記してくれと頼んできた。弘化甲辰すなわち元年(一八四四)十二月のことという。最末尾に見える「竹邨修」あるいは「竹邨」がそれを書いた人名(すなわち「予」)であろう。「柏井氏難行録」は、貞明が被災体験を一書にまとめてから約百年ぶりに、その写本が子孫の手許に戻ったことになる。

同史料に知られる柏井家の家族の避難・被災状況は以下のごとくである。

当時、柏井家は「種崎の南の端にあり、門外は則海畔」に位置していた。同家の家族構成は祖母、父、母、兄(十二歳)、貞明(九歳)、妹(五歳)、弟(二歳)の七人であった。地震が発生した十月四日は、病のため父が在宅しており、家族はまず後園に逃げた。門外の海は潮が曳き、陸地は波打つような揺れが続いていた。

その後、家族は父と兄を二つの中心としつつ避難をした。父は祖母の手を引

き、背中に妹を背負った。兄は母を伴い、使用人の懷に抱かれた弟と逃げた。さらに兄は転倒した家に入り、重代の刀を取り出し、貞明にも腰刀を持たせた。一時、地震のときは藪の中に入るといふ祖母の言に従ったが、津波到来を知らされ、一同で種崎からは北東の内陸部にある仁井田の山を目指した。一〇余町逃げたところで津波が来て家族は離散した。

海水はあつという間に頭上に達して人々は溺れた。貞明も流れてきた板戸に上ろうとしたが沈み、水中でだれかの腰刀をつかみ、その人の帯に取り付いたところ、父であつた。父は、離れてしまった祖母が破屋のあたりに危険な状態でいるのを助けに行こうとするが水の中を進めず、せん方なく背中の妹を水中に捨てて、胸まで水につかりながら祖母のもとに達した。腰に取り付く貞明にも気付き、結果的に貞明と祖母が助けられ、父とともに存命した。父と祖母は生き別れた家族を捜したが、使用人二人と出会えたのみであつた。

さらにまた津波が来るというので、父は祖母と貞明を連れ、仁井田の五本松に至り、聖導寺に入った。疲れて動かぬ足でやつと至つたのだが、そこへも津波が押し寄せるといふので、背後の山へ登つた。眼下には壊滅した浦戸・種崎・三疊瀬の光景が広がっていた。その夜は寺に下り、庭に並べた畳の上で過ごした。

翌五日も食べ物がなかつたところ、昨日浦戸を出航して大坂へ上る米船が、地震のため戻ってきた。父が役人に命じて、その精米もされていない米を、寺の庭で石を並べて鍋で炊き、飢えをしのいだ。父は奉行所の命でその後もそこに留まり、祖母と貞明は使用人を付けて故郷の久万村へ帰らせた。種崎の居宅は、高祖父以来住み慣れた故郷を離れ、父の任役により七年前に移り住んだところであつた。

柏井家の家族の生死については、祖母・父・貞明が存命し、ほかの四人は一

時に流没したとある。各人の死が確認されたのかなど、子細は不明である。

〔参考文献〕西尾和美「宝永四年地震の中の家族とその史料―阿波『野村家記録』・土佐『柏井氏難行録』の場合―」『災害・復興と資料』第四号、二〇一四年。磯田道史『天災から日本史を読みなおす』中央公論社、二〇一四年。

（西尾）

6 江府京駿雑志

（表紙・左上題箋）

江府京駿雑志

雑志

元禄宝永江戸御沙汰書少々

街文
可有

公方六十御賀略

重相公御両親贈位

本庄家昇進加増

西丸附衆究且越智氏出身

上野^{元禄十七}五月万部聴衆数

紀伊家種々略談

閉門遠慮等格

佳節服西丸登宮格 公御事
モアリ

宝永五年廿万石高為公領談

蜂須賀家出頭人惡逆略談

摂州大地震 宝永四年

浪速出入舟一石三錢新役

不尽山然砂降

右之事ニ付百石二両出金談落書

宝永五年三月八日洛大火略談落書

等

(中略)

一宝永四年十月四日、摂浪速ヲ初、其辺大ニ地震ス、寛文初、江州朽木谷地震ノ後ノ大震也、委事ハ雖不知、阿ノ鳴門此震ノ本ト云々、例ノ種々ノ沙汰有トイヘトモ、不慥故ニ大概迄ヲ記ス、崩家一万六百卅軒余、押ニウタレ死タル者三千六百廿人、溺水死者一万二千人、十死一生ノ者七千八百人、大船ノ損七百八十艘、但自三百石積至二千五百石、右ハ同月七日迄相知タル分也、他国ノ在合テ死タルハ不慥知、大坂地ノ者如右、此外ニモ日々十人、廿、卅人計出骸スル事、中旬ニ至テモ不止、堀中ヨリ掘出者不可勝計云々、右ノ外、死馬數百疋云々、員數多少無実説、先一説ヲ写志ス、定而已後ノ実記ニ合セ見ハ可違、後來猶可改志也、震ノ起時尅、震潮ノ漲溢事定レル儀ニテ、今度モ震ニ驚、小舟ニ乗浮タル者、溢汐ノ為ニ逆上スル大船ノシカレテ死タル者不數知云々、浪速ノ震初ハ、午ノ下尅揺ノ間可一時、其後モ昏ニ及迄三、四度、夜中・翌日モ其ヨリ連日大小ノ動同月中旬ニ至リ、又ハ一両日間ヲ障テノ動氣ノ不鎮ハ、十一月迄モ同事、依之不得改、潰家・流失ノ家主ハ不及建家、入矯屋草葺而売買ノ道ノ失ヒ、一日ヲ過スヲ專トスル風情云々

(頭注・行間書)

細川分流記ト云物ニ書タル赴、考ノタメニ追加ス

一弘治三年丁巳八月廿六日、始東風吹テ、後南風吹高潮上リ、尼カ崎、別所、難波、鳴尾、今津、西宮、兵庫、明石ノ間、浦々へ上ル、取分ケ尼崎ニテ六十一人流死ト云也、何ノ里々堤ハ平等ニナル也、昔此浦々高汐ノ上ル事八十年ニ当ナリ、依之米売買金一両ニ五斗也云々、弘治三ヨリ宝永四年迄百五十年、此間大潮富田了慶和尚溺死ノ事、其外ニモ如此変一兩度乎

天満橋ノ左右ハ、潮逆登スル事平地ノ上三尺計也、仍大船潮ノ為ニ河上ニ往、是カ為ニ落破スルノ大中ノ橋卅余橋名末ニ、道頓堀ノ辺以ノ外ノ破損、舟手奉行衆ノ屋敷尤大破、河村氏カ當作セシ川筋、其所新地ト云遊女町ノ家不殘波ニトラレ、男女僉溺死、他国ノ在合テ死タルハ幾許ト云事會而不知、昨日迄繁榮ノ地、今日ハ泥瀉トナル、御城内大分ノ破損・押死モアレトモ、御隠密トテ実説不知、諸国ノ米藏潮ノ為ニ大小ノ破損、米穀ノ凶失多ク、珍器・重宝ノ流凶不識其數云々、京辺ニ至テ東山等麓ハ小動半腹已上破損少々アリ可大動所ノ、サモナク不慮所ノ大破アリ、摂尼崎ハ浪速ニ次テ大動ニテ、城内ヲ初、武家・商屋・民間大破、泉・河・和州大動、郡山城中町座ニ至迄大破、紀州同事死人三千七百余云々、四国同事、播備以西ハ摂ヨリモ輕トイヘトモ、古老ノ者モ不覺地震云々、明石城下無大破、是ヲ以、已西ノ事不云シテ可知、八月ノ十九日、九月十二日ノ大風ニ、讃ノ高松・丸亀、土州・阿州・山陽・西海ノ諸国、損毛風ノミニ非ス、潮込入、大雨、洪水皆不納程ノ上ニ、震後ノ溢潮又多テ、押並テ凶年云々、然処ニ右四日ノ震變、武江又多動五年先十一月、廿三日ヨリ輕原又大破、駿府并久能御宮大破御隠密云々、田原等大破、勢ノ津・志鳥羽・尾名護屋・濃大垣等大破、其委趣ハ不知、此外諸国ノ事巨細不知、但、自大坂伝来海

道筋ノ覺書如左、

○自江府至駿州之原(鬼力)無別条、○元吉原・吉原潰候へトモ人死無之、○神原・由比少宛損、清見寺膏藥屋不殘崩、奥津宿大(應)崩、○江尻家大分崩、○府中・丸子少宛損、○岡部・藤枝・嶋田・金谷・新坂此分無事、○掛川・袋井不殘潰、○見付・浜松・舞坂半崩、天龍迄道割ル所多、○荒井(新居)ハ津波ニテ番所不殘海へ執テ行、家ハ不及言、人死太甚多、渡力、リタル舟七艘有之内、二艘ハ無事ニ上リ、五艘ハ行衛不知失由、御荷物数十五駄・長持二棹浜ニ並置ノ処ニ、此宰領共ニ浪ニトラル、銀座者ノ荷物并乗捨ノ駕籠共ニ波ニトラル、主人ハ昼飯時ニテ、支度シ無事云々、自大坂下ス足袋荷物ニ駄波ニトラレ、宰領ハ無事、如此故ニ往来留リ、本坂へ回ル云々、○白須賀駅家一軒モ不殘、塩見坂ノ茶店二軒ニ武家ノ荷物、三度飛脚ノ荷物逗留スレトモ、道筋ノ事埒明サル故、御油迄数駅立帰、本坂へ廻云々、○二川半潰、○吉田城大破、町屋大分損、○御油・赤坂・藤川無事、○岡崎少損、○池鯉鮒無事、○鳴海・宮半潰、○名護屋大分潰、○大垣城損、○桑名無事、但四日市迄橋不殘落損、○四日市半潰、○薬師・庄野・龜山少損、大光寺巖道筋切テ、道川ヲ通ル、○自関至大津家々少損云々、已上

北国筋モ越・能・賀ハ所ニ因テ強弱アリ、越後・信州等猶輕シ、府ヨリ小松、小松ヨリ大正持(大聖寺)、○正寺ヨリ越前中段々ニ強シ、十一月ニ至テモ震氣不鎮云々

○大坂落橋卅五云々、書付来ル処ハ五所カキ洩シテ卅也、其名如左、日吉橋、汐見橋、幸橋、住吉橋、大黒橋、戎橋、相合橋、太左衛門橋、金屋橋、木綿橋、堀江橋、隆木橋、高台橋、瓶橋、鉄橋、西北橋、湊橋、越中橋、汐津橋、舟津橋、芦分橋、安治川橋、国津橋、中ノ橋、古川橋、龜井橋、サゴ橋、御他橋、高橋、敷屋橋、

○大坂ニテ橋ヲ渡リ懸リタル者ハ、橋ヲ渡リ超ル事ナラス、震出ルト等ク倒レ、

等ク橋其傾キ落タル故ニ、橋ノ上ニ在合セタル者一人モ助ルハ無テ、水ニ陷テ死ケルト也、総テ地震ノ強キ所ト云ハ、西ノ方難波橋ヨリ下南へ掛テ也(大坂西南)

ノ方ハ地形畧ニ卑シ、昔ハカワラニテ漸々ニ地ヲ築、家ヲ立ケルト、云々、然レハ其故ニテ卑地ノ方強高キ、岡ノ方ハ輕カリシニヤト云リ、前廉ハ阿波ノ鳴門地震ノ元ナトイヘトモ、大坂辺・四国・紀・勢ヨリ東海道迄モ、磯ヨリ一里沖ニテハ漁舟モ常体ニ獵ヲシ、往来ノ舟モ何事ナク、常ヨリハ少波高シ、陸地ハ震變ノ体ト望見ケル、唯々浜涯・磯端強ク動テ、陸ニ及ケルト也、○大坂ノ家々展倒夥布事ハ当地ニテ察シタル如ク、四十年計已来瓦屋多ナリケルカ、其瓦屋ノ分皆々潰ケル、殊ニ大坂作事ト云テ、作事ノ龜相ナルハ大坂ニ限レリ、其龜相ナル作事ニ瓦屋ヲ仕タレハ、倒タルモ尤也、念ノ入タル作事ノ所ハ、瓦屋ニテモ不潰、勿論コケヒ屋ノ分ハ皆無事也云々、震之時ニ西南ノ方在宅ノ者トモハ、逃行ヘキ方無テ、玉造口ノ騷タマリヘ集寄、番衆出テ是ハイカ、早速可散トイヘトモ、是ヨリ出テ罷越ヘキ方ナシ、死ニ往ト申ナレハ、一向ニ是ニテ堀溝ヘモ御入候ヘトテ、其俣居ル故ニ、流石打タ、ク事モナラス、数モ千万人ニ及ヌレハ、可為ヤウ無テ、其俣ニ指置ケルニ、一日又ハ一晝夜食セヌ者ハ不珍、或二晝・三晝夜カケテ居ケル者多カリシハ、食ヲ用意スヘキ様ナキ故也、是先前代未聞ノ騷動云々、○大浪ノ溢上ケルハ川口南北二ノ内、大川筋ハ川口乾、又ハ北方ニ向ヒ、南方ニ三原多統、故ニ波川ヘ不指込、南ノ方ノ木津川ト云川口ハ、西南ニ向ヒ、町舟ノ多出入ノ口也、仍塩浪指込故、五、六百石、千石ニ及積舟トモ川上ヘハセ登、橋一ツ舟ニテ押落スヤ否ニ橋ノ落、地上ヘ水三尺程宛モ溢ケル故ニ、溺死ノ者多シ、地震ニテ死タルヨリハ溺死ノ者多カリケルト也、近辺モ北ノ方角ハ輕、南ノ方ハ強ト云々、翌春、初夏ヘ掛テ、余程ノ地震モ般々有之、輕キ震ハ細々ナリ、京モ翌春大火後、地震余程ツヨクユル、大坂モ不有付体、翌年ニ至ル、天地不和、人心不和、天災地妖ノ起ル処可考者乎、○四国ノ内土左モ大海ニテ、皆不納体ニ成ケルモ、一、二里外ノ海上ハ常ニ不易ト也、

追々聞出ル事ハ追々可書加也、小大ノ語違、聞違ハアルヘシ、大概大變ト心得、大概ヲ聞置テ可然

一宝永四年浪速川出入ノ商船ニ新役ヲ懸テ被歛、当御代下ニハ萩原近江守勘定奉行

上ニハ稲垣対馬守老若、勘弁者トシテ、公方御勝手御不如意ノツクナヒノ為ト

テ、混ト新役ヲ掛トラル、仍末々ニ迄迄、恭御政道ハ無テ、殊ノ外ニ被取上

迷惑スルトテ、上ヲサミシ舌上ニ載ル事、近頃耳ニアリ、在江戸ノ町人トモ

ノ不忘憚言散スヲ以、京辺田舎云々ノ沙汰ハ可推量、仍町方ヨリ御為ト号シ

テツモリ出シ、新政ヲ願者多ク、萩原ヲ初、役人ヘノ賂山ヲ積、故ニ願事各

成就云々、新金銀ノ事モ以賂賂、後藤并銀座ノ者トモ願テ、終ニ万姓ノ不納得、

新政トハナレリ、是モ近年金子少成タルヲ、一倍ニ多セントノ事ナレトモ、

却而日本ノ金ノ減減ノ政トナリ、日本ノ土産ハ云ニ不及、中華ヨリ渡売スル

諸色モ、直価ハ高クナリ、其物ハ輕薄ニシテ、遙ニ御先代渡朝ノ物トモニ劣

レリ、当代ノ奢体甚事ナレハ、此所ヲ先可被改モノヲ、其所ハ閣キテ金銀不

足トテ新政ヲ行ヒ、下ヨリ聚歛セラル、ハ如何、儒学御好、仏道御信仰ハ何

ノ為ソ、是トテ後代ノ御聞ヘ迄カ、人皆心アリ、左右史ナラテモ、何トカ後

代ニ記シ殘シ置ヘキ、仍置船ノ役モ、上部ハ今年ノ地震ニテ川々浅ク成タレ

ハ、此川掘ノ為ニ諸国ノ人人寄合、力ヲ等シテ川ヲ掘、舟ノ出入自由ニシテ、

諸人徳ヲ得ノ巧ト見ユル歟、ナレトモ必以左様ナルヘカラス、例ノ願ノ者有

テ、金銀ヲ役人ヘ出シ、願テ三分一ノ御蔭ヲ望テ催之、当代限り此役不改シ

テ、上ヘモ下ヘモ取ントノ事ナルヘシ、今度ノ役、塵積テ如山ノ程可察、京・

大坂ノ諸商ノ吟吟不吟少吟最也、右被仰渡ノ趣、自波卷来紙面末ニ記之者也、此

後又如何ハカリノ珍政ヤ出ヌラン、イマタ申度事アレトモ、憚テ閣毫者也、

可念可念

覚

一大坂両川口年々アサク成、諸舟出船入津不自由ニ有之候故、此度当地并他国

諸廻船又ハ渡海舟之石錢ヲ以、水尾サラヘ申候、石錢ハ舟出入トモ諸荷物積
候舟ヨリハ、荷物多少ニヨラス、其舟ノ石高ニ応可出之、右ノ趣從江戸被仰
下候間可存其旨者也

亥十一月廿一日

一諸舟川内ニテ荷物積候者勿論、縦沖積仕、又者沖ニテ荷物致瀨取候共、大坂江
来候舟ハ出入トモ、荷物不寄多少ニ其舟之石高ニ応、一石ニ付三錢宛、積石錢
可差出事

但、錢一貫文、銀十五匁替之相場
ヲ以、右石錢ヲ銀ニ直シ可差出事

一積荷物無之カラ舟ニテ出入候節ハ、其段相斷、石錢ヲ不及差出ニ候事

一大坂并伝法村廻船ハ、舟主ヨリ直ニ石錢可差出事

一他国之舟大坂ニ藏屋敷有之分ハ、其舟ノ石錢名代之丁人取立可指出事

附、海手渡海舟茂、右同前之事

一定タル藏屋敷無之、俵物并諸荷物大坂江登、度々藏ヲ借入置候テ、名代之者

無之分ハ、其舟ノ石錢荷物支配之丁人取立可差出事

一藏屋敷無之他国舟之石錢ハ、其舟問屋取立可指出候、問屋江着セス舟宿ヘ着候

舟之石錢者、舟宿取立可差出事、御城米積候舟茂、無差別石錢可差出事

但、是ハ御城米之舟請負候者ニテモ
又ハ舟ニテモ相對之趣次第石錢
出之其石錢右請負之者相納可申事

一武家手舟ニテモ、諸荷物積候舟ハ、石錢可差出事

右ノ通可相心得候、石錢取集候タメ、三口惣年寄一人宛三人廻船年寄二人年番

定置候間、諸舟入舟之度々、何方之船何百石積何荷物ヲ積、何月何日本津川・

安治川河口江出船、又ハ入津仕候、此舟石錢何程差出候由、証文相添年番之年

寄共江石錢可相渡候、以上

亥十一月廿一日

右両通御書付之趣、委細被仰渡奉承知候、諸廻船石錢之儀、昨廿一日ヨリ出船

入船ノ分無相違可指出旨奉畏候、私トモ丁内家持之儀者不及申、上三借屋末々迄早速相触可申候、為年寄判形仍如件

宝永四年

丁年寄

亥十一月廿二日

判形

住吉屋藤左衛門殿

吉文字屋三郎兵衛殿

中村左近右衛門殿

〔注解〕(1) 寛文近江・若狭地震は、寛文二年五月一日に発生しており、大坂城内や外曲輪で破損・大破した箇所があり、大坂市中の町屋でも被害が生じて、死者が大勢出た。(2) 外洋を航行する商品輸送のための廻船で、菱垣廻船や樽廻船などがあつた。(3) 安治川は貞享元年(一六八四)に河村瑞賢が、淀川の治水を目的として淀川の河口部を直線に開削した川であり、その両岸には安治川新地があつた。(4) 大坂市中の河川や堀川沿いには、多数の米蔵を有する諸藩の蔵屋敷が設けられていた。(5) 道頓堀川では、津波による大船群の遡行によって、下流側から相生橋まで八ヶ所の橋が崩落している。(6) 堀江川では、下流側から堀江橋まで六ヶ所の橋が崩落している。(7) 土佐堀川では、下流側から越中橋まで二ヶ所の橋が崩落している。(8) 西横堀川では、道頓堀川との合流地点から上流側の御池橋まで、三ヶ所の橋が崩落している。(9) 当時の瓦葺きは本瓦葺きであり、屋根が重い構造であつた。(10) 大坂の港は、安治川と木津川の両河口付近にあつた。

〔解説〕『江府京駿雑誌』(こうふけいすんざっし)は、金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫の所蔵であり、翻刻はこれによつた。本史料は、四つ目和綴じの冊子形態で(七三丁、縦一九・五センチメートル)、今枝氏旧蔵である。内容は、元禄十六年(一七〇三)～宝永五年(一七〇八)の江戸、京都、駿河

の大名諸侯を中心とした見聞記である(金沢市立図書館編『加越能文庫解説目録』下巻、五七四頁、金沢市立図書館、一九八一年)。本史料の成立は宝永五年であり、序文や跋文はない(日下幸男「今枝直方年譜稿」『龍谷大學論集』第四七四・四七五合併号、四七九～五二三頁、二〇一〇年)。著者の今枝直方(いまえだなおかた)は、承応二年(一六五三)生まれで、江戸時代前期から中期の金沢藩士であつた。伯父今枝近義の養子となり、家老として世子前田吉徳の守役をつとめた。藩の故実などについて多くの著作を残しており、著作に『重輯雑談』や『温故雜録』などがある。享保十三年(一七二八)十一月に七六歳で死去した(上田正昭・他編『日本人名大辞典』二三二頁、講談社、二〇〇一年)。また、延宝三年(一六七五)に今枝近義より家督を相続しており、直方の禄高は一万一千石であつた(日下幸男前掲「今枝直方年譜稿」)。

この史料には「摂州大地震 宝永四年」として、宝永四年(一七〇七)十月四日に発生した宝永地震における大坂での被害状況が記されている。この地震は津波を伴っており、東海道沿岸での地震・津波による被害が簡潔に述べられている。大坂では、地震を恐れた多くの人々が、河川や堀川に浮かぶ多数の川船に避難していた。この人々を乗せた川船へ、津波によって河口から押し上げられてきた大船群が次々に衝突し、川船は押し潰され沈没して、多数の溺死者の出た状況が記されている。また、津波によって押し上げられた大船群が、大坂市中の河川や堀川を遡行したために、川に架けられた橋が下流側から次々と落橋していった。その落橋した三〇箇所の橋の名称についても記されている。

またこの史料には「浪速出入舟一石三銭新役」とあり、大坂へ入津する諸廻船に対して、積荷一石につき三銭の石銭を徴収する旨について記されている。これは、地震や津波の影響かどうか定かではないが、地震後、大坂の港であつた安治川・木津川の両河口や、大船の航路である水尾に土砂が堆積していた。

そのため、諸廻船や通船の航行が渋滞しており、川底を浚せつする必要があった。石銭の徴収はその費用を確保するためであった。

〔参考文献〕西山昭仁「一七〇七年宝永地震における大坂での地震・津波被害への対応」『災害・復興と資料』第四号、五六―七二頁、二〇一四年。

(西山)

7 地震海溢記

(表紙・左上題簽)

地震海溢記

勢州⁽¹⁾大地震

当月四日辰刻四ヶ市宿大地震⁽²⁾而人家三十軒計りたをれ、同日申刻又々震出し有之、津辺も同様之事、白子・神戸⁽⁷⁾・松坂⁽⁹⁾・桑名浜辺大汐大浪にて大さわき、山田⁽¹⁾あれ大半潰れ家も多く御座候由、志州鳥羽⁽¹²⁾辺地震大つなみ御家中町家大半流れ申候よし承り候、此段御しらせ奉申上候、以上

十一月七日

尾張屋
吉兵衛⁽¹⁴⁾

南都地震⁽¹⁵⁾

一昨四日五ツ半時よりゆり出し申候、当夏同様之あれ二御座候旨申来候、猶委細之義相分り次第奉申上候へく候

十一月六日

東海道筋大地震

御油宿破損多く、吉田・白須賀⁽²⁰⁾辺七八步通り損し即死怪我人少々、二川宿六步通り大破、荒井御閑所崩れ宿内八步通り損し、高浪二而渡船不残流失、死人怪我人在之、藤川⁽²³⁾・岡崎⁽²⁴⁾辺ハ御油より軽く、矢矧⁽²⁵⁾・池鯉鮒⁽²⁶⁾辺甚敷、三州田原⁽²⁷⁾皆々打潰れ候よし、其上高浪打入死人夥敷、舞坂大荒れ、浜松⁽²⁹⁾・見附⁽³⁰⁾辺半崩れ、袋井⁽³¹⁾・掛川⁽³²⁾大半焼失、金谷⁽³³⁾大崩れ、島田⁽³⁴⁾少々打潰し、藤枝⁽³⁵⁾・岡部⁽³⁶⁾・丸子⁽³⁷⁾辺過半潰れ、江尻⁽³⁸⁾不残焼失、府中宿三分通り焼失、沖津大半潰津波打入、由井宿は無事二有之、蒲原⁽⁴²⁾過半焼失、岩渕⁽⁴³⁾同様、吉原⁽⁴⁴⁾不残潰、富士川⁽⁴⁵⁾干水二相成歩行二而相渡候

右之通申来候間不取敢為御知奉申上候、以上

十一月十日

津の国屋

十右衛門⁽⁴⁶⁾

(中略)

十一月七日⁽⁴⁷⁾

土方備中守⁽⁴⁸⁾

領分地震二而陣屋其外破損可為難儀被

思召、出格之訳を以金五千両拝借被 仰付之

右於波之間老中列座伊賀守申渡之⁽⁴⁹⁾

十一月十日⁽⁵⁰⁾

御目付

大久保右近將監⁽⁵¹⁾

駿府表地震二付 御城内外久能山

御宮其外近国御取締見分為御用罷越候二付被下旨、御序も無之候故御目見

不被 仰付之

右於御右筆部屋縁頼老中列座伊賀守申渡之、若年寄中侍座

十一月十二日⁽⁵⁴⁾

金二枚⁽⁵⁵⁾

御勘定

時服二⁽⁵⁶⁾

田辺彦十郎⁽⁵⁶⁾

東海道筋宿々地震二付場所見分之上旅人休泊人馬繼立方其外御救助取調為

御用罷越候二付被下之

右於御右筆部屋縁頼伊勢守申渡之、但馬守侍座⁽⁵⁷⁾

(中略)

大坂大地震津浪之事⁽⁵⁸⁾

一 宝永四年亥十月四日昼八ツ時比、大坂地震半時計、其後大津浪山の如く大潮さし込、沖なる大船川口江さし込橋を打越て登る、是か為に橋落人死等有之 (朱書)「委細ハ別冊ニ有之」

十月四日昼未ノ刻迄地震半時計ゆる、其夥敷事^(大誤字カ)土^(大誤字カ)地も破れ土^(大誤字カ)木も

打倒れ、山も崩れ大海もかたむく、川水も梢に登るが如く土砂の立事火事の如し、地震納りて堂社民家の鳴音半時計余りも止ず、此地震二而押二打れ死する人々数を知らず

大坂二而者大津浪大潮西之方と思しくて鳴音しければ、又地震のゆりかへしかと心も空に成し処二、西海夥しく鳴渡りて大山の如く大潮さし込、沖なる大船川口江さし入て、橋を打越登る、大船五艘、其外潮水高くして在家悉く水ニおぼれ、橋々ハ大船小船に打落され人の通ひハなかりけり

大坂之騒動上を下へと交返す、前代未聞之事、橋より落て死する人々、小船二乗りて逃るも有しが、大船ニしかれ死る人、水ニとられて死る人、其数かぞへ難し

住吉、⁽⁶²⁾尼崎城内破損、⁽⁶³⁾堺・紀州其外海辺之在家多く津浪にとられ死人夥し

大坂倒家数 五百十三軒

内

南組⁽⁶⁶⁾ 貳百三十六軒

北組 百十五軒

天満組 百六十二軒

死人 百二十八人

内

水死人 四百十四人

ノ五百四十二人

橋落 廿二ヶ所

内 北組 十四橋
天満組 八ヶ橋

南組 死人十五人 水死百三十人

北組 同六十人 同 貳百二十六人

天満組 同五十三人 同 五十八人

(朱書)「外本ニハ高汐之節水死人
壺万式千余人とあり」

寛文二壬寅年五月朔日^(四十七年)_{前なり}大地震ゆるといへともヶ程之損亡なし、廿二日
晦日迄一日二二三度宛ゆる、晦日ハ余程大地震ゆる、此後ハゆらず

- 一 座摩宮石ノ鳥井おれ申候
- 一 堺 浜辺ヶ地割れ 潰家貳百七十七軒 橋二ヶ所落申候
- 一 住吉鳥井五六寸ゆがミ 石灯笼 三百余倒れ候
- 一 尼ヶ崎御城天守之外御矢倉等破損、人家十五軒倒れ候
- 一 淀御城破損、天守もゆがミ候よし
- 一 京都ハ地震強候得共倒家なし、東寺塔之九輪落る
- 一 大津⁽⁷⁾人家百軒余倒れ候
- 一 勢州外宮町之人家潰損候、津ノ高田門徒之太鼓樓落申候、勢州長嶋⁽⁷⁴⁾は津浪
二而高五千人計之内生残候もの貳百人計と承る
- 一 西尾隱岐守殿遠州横須賀御城内、矢倉・多門・堀・土居・石垣・御城廻り
及び大破し、侍屋敷・町屋大破、在々之義は未相知候、四日未刻⁽⁷⁾
- 一 諏訪安芸守殿信州諏訪郡御城内、門・矢倉・石垣・堀及大破、本丸・二の
丸・三の丸之内所々潰申候由、其外侍屋敷・町屋潰家破損、四日午之刻⁽⁸⁾
- 一 松平伊賀守殿信州上田も夥敷事二候
- 一 駿州久能御宮御宝殿は無御別条、御城石垣等崩る有之、稲垣対馬守殿御見
分御越
- 一 遠州掛川御城致大破、御家中町家悉く潰候よし
- 一 同浜松御城内所々矢倉・多門・堀大破、御家中屋鋪大分潰申候

- 一 伊豆御崎津浪四度あかり、御船藏浪ニとられ申候よし、御奉行御屋鋪⁽⁸⁶⁾ハ高
地ニ而別条無之、潮五尺計り上り候
- 一 相州小田原⁽⁸⁸⁾者はめはづれ申程之義、乍去五ヶ年以前之地震⁽⁸⁹⁾者軽く御城は
無別条候よし
- 一 内藤紀伊守殿御下駿州田中者従未刻到申刻、翌五日卯之上刻又大地震、本
丸・二ノ丸・三ノ丸・曲輪門々崩れ、石垣ハ大形崩候、侍屋鋪百壺軒、足輕
長家百九十軒、寺貳軒、藤枝の町家同谷町二十五軒潰申候、岡部町家不残潰、
人馬牛等怪我ハ無之候

道中筋之覚

- 一 沖津宿潰家三十二軒
- 一 江尻百六十六軒、蒲原大潰津浪
- 一 府中潰家不知数 一 丸子・岡部半潰
- 一 原⁽⁹³⁾・吉原大潰少々類焼 一 島田・金谷潰家不数知
- 一 日坂無別条 一 見附も同断
- 一 掛川・袋井二建家無之、死人五十人計り
- 一 荒井御番所并町家四十六軒津浪にとられ
- 一 信州松本御城内侍屋敷大破、町家同断
- 一 勢州津御城下大破損、太鼓櫓潰、橋とも落る
- 一 美濃加納御城大手門外東之方高堀十間余落、三ノ丸御門櫓二階ヶ上崩、櫓
多門高堀并二城中家居不残破損、御家中且寺社町家大分潰る、人馬ハ怪我無之
- 一 荒井御番所・白須賀大分人死、渡旅人船荷物流し、向分通路無之、御油ヶ
本飯越往還仕候、松平薩摩守殿御家来御役人之内式人、白須賀の渡口ニ而流
失⁽⁹⁴⁾<sub>船百六十艘之内六艘ハ
残り候、其外流失</sub>
- 一 和州郡山大破、委細未知らず

- 一 戸田采女正殿美濃大垣矢倉四ヶ所崩并天守損し、多門五ヶ所崩、此外附多門及大破候、所々石垣高塀等、御家中侍屋敷八十九軒潰候、其外大破、町家破損多潰家六十九軒、在中之潰家未相知、寺社とも破損多く候
- 一 松平和泉守殿志州鳥羽地震之上高潮入、御城内外破損、人死多候
- 一 松平左兵衛殿播州明石御城廻り塀石垣其外破損、委細不未知
- 一 本田隠岐守殿膳所御城櫓門など余程破損
- 一 勢州四日市町家五百軒潰、朝日川橋落、同桑名御城少々破損、町家余程損候
- 一 岡崎之大橋少々震込、昔の橋(杭誤写カ)九尺程震出候、御城内少々破損、町家四拾軒潰候
- 一 吉田之御城大分損、町家も六七拾軒潰候
- 一 遠州浜松御城鉄門并二矢倉不殘潰、町家も大分損候、人死怪我等無之
- 一 岩渕之茶屋不殘潰候、是ハ山崩富士川江すり込申候、死人五十人程、大地もわれ候
- 一 箱根宮山分大石ころげ出、榎木坂通り道ノ外江廻り申候
- 一 予州大洲御城天守台石垣西北方崩、本丸之門二ヶ所石垣孕候、二ノ丸櫓二ヶ所石垣崩、其外御城廻石垣とも不殘崩或ハ孕申候
- 一 遠州掛川御城天守大破、二重櫓五ヶ所潰、門五ヶ所潰、御城米蔵二ヶ所大蔵五ヶ所潰、此外破損不悉記、侍屋鋪百二十四軒、足輕家三十八軒、町家三百二十六軒、寺一ヶ所、死人五人、其外半潰之家等大分在之、民家千百十八軒潰申、千五百五十七軒ハ半潰れ、破船七艘、死人四人
- 一 予州宇和島地震高潮居宅迄指込大破相成候
- 一 豊後臼杵稻葉伊予守殿御城内外櫓石垣大破、其上潮さし込
- 一 土井山城守殿三州西尾御城天守櫓大破、太鼓門崩、侍屋敷二十六軒破損、

町在之家潰候分百三十八軒、破船六艘、田畑高三千式百八十八石潮入相成候

一 松平土佐守殿御国元御城并町家大分破損崩候由、未た不数知

一 越後新潟夥敷候、其外奥州津輕・仙台迄不殘震候得共、上方筋程二者無之候、就中丹後・但馬・播州・若狭路ハ殊之外からく御坐候由、京都少も不損、凡諸国不殘地震いたし候、同七日八日両日戌下刻天火南分北江指て飛候、すべて地震いたし候砌ハ星近く大ニ相見へ、天火飛事あり、此節も九月中旬の温氣にて三四月よりあつめ、殊前之三日昼夜給着候而も汗出候と申人有之候四五年以来大坂井戸之水殊の外すくなく候、如此候得者頓けて地震ゆり候ものと申潰候に、將して如此候、翌子の正月十三日ハ百ヶ日に相当り候とて、心ある僧侶ハ無縁之吊めされ候、読經の最中朝五ツ時余程つよくゆり申候、毎日于今ゆり候内是と同廿二日巳之刻地震は年明ての大震り也と申事二候

宝永四亥年十月四日地震津浪之儀前ニ控有之候得とも慥ならず、依之此度御城日記帳之写左之通写置

大坂御城内日記書拔

一 昨四日午下刻当地余程之地震ニ候得共、御城内無別条、差而大破も無御座候、併所々破損之儀土岐伊予守迄申達候事

一 町家潰家等も有之候、委細遂吟味追而可申上候事

十月五日

御城番

渡辺越中守⁽¹²⁾

内藤式部少輔⁽¹²⁾

町奉行

太田和泉守⁽¹²⁾

御老中四人様

大久保大隅守⁽¹³⁾

十月四日午下刻地震高汐二付大坂町中并撰河在々⁽¹³⁾
潰家死人落橋潰船之覺

一 潰家 九百九十三軒

但土藏納家とも

一 大坂之分潰寺 七ヶ寺

一 撰州在々潰寺 二十一ヶ寺

一 河州在々潰寺 二十三ヶ寺

一 落橋 三十一ヶ所

但此外公儀橋二而ハ京橋日本橋少々破損⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾

一 潰船大小 七百七艘

但大坂諸川船

一 破船 九十三艘

一 死人 五百四十人 内 男二百十二人
女三百二十九人

一 潰家 穢多村 百八十六軒

一 道場潰家 同 壱軒

「地震ニ付死人之事歟」(朱書)

一 溺死人 十三人 内 男壱人
女十人

(朱書)「外ノ書物ニ水死壱万式三十人と有之」

以上

十一月十三日

先比爰許地震ニ付死人大分ニ有之候由風説被聞召候、最前有増申上候得共、相
分候分可申上与奉得貴意候、追々委細遂吟味可申上と延引仕候、此段早紙差上
申候、以上

十一月十三日

土岐伊予守

御老中

十月四日後々廿日迄毎日六七度宛地震致し
大坂町中てうちん出⁽¹⁰⁾し番致し申候
地震も追々軽く相成候得共折々者震り申候

一 以手紙申上候、此度地震破損之所々御修復御入用、大概吟味仕候処、御櫓
御門等今度之御修復金千百九十五両掛可申由、御破損奉行考之通書付差出候
間、奉入御披見候、各様思召之外少々之御入用二而、此度地震ニ付致破損候
与申程之儀二而ハ無御座候様奉存候事
一 御殿之破損者御張付少々、御座鋪御張付少々御座候、御繕ひ御入用金六十
六両余掛可申候、則絵図ニ付奉入御披見候事
右早々御修復ニ取掛り候様ニ申談候、其分ニ差置候ハ、輕き地震二而も痛可
申与奉存候付、右之通申渡候事

十月廿九日

土岐伊予守

御老中

土屋相模守様⁽¹²⁾

稲葉但馬守様⁽¹³⁾

大久保加賀守様⁽¹⁴⁾

井上河内守様⁽¹⁵⁾

十月十日夜	雨降り	同十八日	雨降
同廿三日夜	地震	同廿四日	少々震
同廿六日雨		同晦日夜	大震
十一月朔日	昼夜兩度震	同二日	少々震
同三日	少々震	十二月十八日夜	七ツ時比 大ニ震

宝永五年

正月十三日	少々震	正月十九日朝	震
同廿七日朝	大ニ震	壬正月二日	少々震
壬正月廿七日朝	大震	二月廿五日朝	余程震
	昨十月四日ノ如し		
四月三日	少々震	三月廿七日	余程震
四月四日八ツ時比少々震		四月廿六日昼	大ニ震
五月十八日夜	少々震	五月十九日朝	少々震
六月五日昼	兩度震	八月十九日夜	余程震
九月五日夜	余程震		

(中略)

嘉永七寅年十一月四日地震

五日地震津浪之事

一 地震ニ付破損所

町数合四拾五町
薩摩堀広教寺門前町

潰家合八十三軒
潰土蔵八ヶ所
潰納家七ヶ所
潰土塀九ヶ所
潰道場壺ヶ所
座摩宮
天満宮御旅所⁽¹⁴⁾石之華表崩る、
潰井戸屋形式ヶ所
死人 三人

一 津浪ニ而破船之次第書上之写

安治川通船津橋迄入込候分⁽¹⁴⁾
八百石積込五十石積位迄 百四十艘余
外ニ破船三百石積込四十石積位迄 二十艘余
木津川通土佐堀川迄入込候分⁽¹⁴⁾
千五百六百積込五六十石積迄 四百五拾艘余
外ニ破船三百石積込五十石積迄 五十艘余
立売堀通下上手間間堀迄入込候分⁽¹⁴⁾
八百石積込貳百石積迄 十五六艘
外ニ破船百石積 貳艘
長堀川筋通玉造橋迄入込候分⁽¹⁴⁾
四百石積込五十石積迄 廿一艘
外ニ破船五十石積 四艘
堀江川通瓶橋迄入込候分⁽¹⁴⁾

千五百石積込六七十石積迄 五拾艘余

外二破船貳百石積込六十石積迄 四艘余

道頓堀川筋通大黒橋迄入込候分⁽¹⁵⁴⁾

千石積込百石積迄百三十八艘余

外二破船貳百石積込四十石積迄 九艘余

新川江入込候分⁽¹⁵⁵⁾

百石積込四十石迄 六艘

一 破船之分調書

一 大小廻船 千百廿一艘

一 諸川船 七百二十二艘

内

四百八十九艘 上荷船

九十艘 茶舟

三艘 屋形船

貳十艘 劍先舟

百二十艘 通船并漁舟

一 落橋

木津川筋 亀井橋⁽¹⁵⁷⁾

安治川筋 安治川橋⁽¹⁵⁸⁾

道頓堀川筋 汐見橋⁽¹⁵⁹⁾ 日吉橋⁽¹⁶⁰⁾ 幸橋⁽¹⁶¹⁾ 住吉橋⁽¹⁶²⁾

堀江川筋 瓶橋 水分橋⁽¹⁶³⁾ 鉄橋⁽¹⁶⁴⁾

長堀筋 高橋⁽¹⁶⁵⁾

一 津浪之節 潰家 四軒

大破損家 七十五軒

潰土蔵 壱ヶ所

潰納家 八ヶ所

一 三郷溺死人 貳百十二人

生知不知者 六十四人

内

北組溺死人 百廿五人 生死不知者 三十六人

南組同 五十五人 同 十人

天満組同 二十二人 同 十八人

ノ

先達申上候津浪二而大船押入候河岸潰建家損并破船
怪我人等之儀取調仕候二付左二申上候

木津川筋

一 難波嶋中江新田⁽¹⁶⁶⁾ 崩家貳ヶ所

溺死人二十三人 内 男二人 女九人 子供十二人

一 三軒家⁽¹⁶⁷⁾ 崩家五ヶ所

溺死人三十九人 内 男二人 女二十二 子供十五人

一 千嶋新田⁽¹⁶⁸⁾ 崩家貳ヶ所

一	西側町 ⁽¹⁷⁾	崩家三軒	一	新戎町 ⁽¹⁹⁾	崩家五軒	土蔵損 三ヶ所
一	材木置場 ⁽¹⁶⁾	同 十人 内 女六人 子供四人	一	新大黒町 ⁽¹⁸⁾	溺死人 四人 内 女二人 子供二人	
一	海部堀町 ⁽¹⁶⁾	同 五人 内 女三人 子供二人	一	新難波西之町 ⁽¹⁸⁾	溺死人 子供壱人	
一	戎島町 ⁽¹⁷⁾	溺死人 六人 内 女三人 子供三人	一	徳寿町 ⁽¹⁸⁾	崩家二軒	土蔵損 二ヶ所
一	木津川町 ⁽¹³⁾	溺死人 七人 内 女三人 子供四人	一	新難波中之町 ⁽¹⁶⁾	溺死人 男壱人	
一	寺嶋町 ⁽¹⁷⁾	同 三十七人 内 男四人 女二十五人 子供八人	一	釜屋町 ⁽¹⁶⁾	同 七軒	土蔵損 壱ヶ所
一	岩崎新田 ⁽¹⁷⁾	同 男貳人	一	湊町 ⁽¹⁸⁾	同 八軒	
一	勘助嶋 ⁽¹⁶⁾	同 十一人 内 男二人 女三人 子供六人	一	同 貳丁目 ⁽¹⁸⁾	同 十軒	
一	今木新田 ⁽¹⁶⁾	同 二十七人 内 男壱人 女十三人 子供十三人	一	同 壱丁目 ⁽¹⁸⁾	同 六軒	
			一	幸町四丁目 ⁽¹⁷⁾	同 三軒	
			一	幸町五丁目 ⁽¹⁷⁾	崩家四軒	
			一	溺死人 十貳人 内 男貳人 女五人 子供五人	崩家六軒	
			一	溺死人 二十人 内 男貳人 女九人 子供九人		

一	同	六丁目 ⁽¹⁹⁶⁾	同	十二人	内	女六人 子供六人
一	同	七丁目 ⁽¹⁹⁷⁾	同	五人	内	女二人 子供三人
一	橋通	八丁目 ⁽¹⁹⁸⁾	同	九人	内	女六人 子供三人
一	葭屋町 ⁽¹⁹⁵⁾	同	子供一人			
一	桑名町 ⁽¹⁹⁴⁾	溺死人十一人	内	男四人 女七人		
一	松本町 ⁽¹⁹³⁾	溺死人七人	内	女三人 子供四人		
		崩家二軒				
		溺死人十八人	内	男一人 女十五人 子供二人		
一	下博旁町 ⁽¹⁹²⁾	崩家一軒	土蔵損一ヶ所			
		溺死人二十人	内	男一人 女十七人 子供二人		
一	伏見屋四郎兵衛町 ⁽¹⁹¹⁾	土蔵損一ヶ所				
		溺死人八人	内	男一人 女五人 子供二人		

一	同	壺丁目 ⁽¹⁹⁹⁾	同	六人	内	男一人 女二人 子供三人
一	南堀江	五丁目 ⁽²⁰⁰⁾	崩家一軒			
		溺死人二十三人	内	男一人 女十二人 子供十人		
一	南堀江	四丁目 ⁽²⁰¹⁾	溺死人	女一人		
一	北堀江	三丁目 ⁽²⁰²⁾	同	子供二人		
一	北堀江	五丁目 ⁽²⁰³⁾	溺死人	十五人	内	男一人 女十人 子供四人
一	御池通	四丁目 ⁽²⁰⁴⁾	同	男一人		
一	南勘四郎町 ⁽²⁰⁵⁾	同	女一人			
一	西浜町 ⁽²⁰⁶⁾	崩家一軒				
		溺死人九人	内	女五人 子供四人		
一	二本松町 ⁽²⁰⁷⁾	同	三人	内	女一人 子供二人	
	安治川筋					
一	安治川南	一丁目 ⁽²⁰⁸⁾	溺死人	八人	内	男二人 女三人 子供四人
一	同	貳丁目 ⁽²⁰⁹⁾	崩家二ヶ所			

- 溺死人四人 内 女二人 子供二人
- 一同 三丁目⁽²⁰⁾ 損し家三ヶ所 土蔵一ヶ所
- 一同 四丁目⁽²¹⁾ 崩家四ヶ所
- 一 安治川北巷丁目⁽²²⁾ 溺死人 八人 内 男二人 女三人 子供三人
- 一同 式丁目⁽²³⁾ 崩家二軒
- 溺死人 三人 内 女二人 子供一人
- 一同 三丁目⁽²⁴⁾ 崩家一ヶ所 土蔵損一ヶ所
- 溺死人 六人 内 男一人 女三人 子供二人
- 一 安治川北上二丁目⁽²⁵⁾ 崩家二ヶ所
- 溺死人 三人 内 女二人 子供一人
- 一同 上式丁目⁽²⁶⁾ 崩家二ヶ所
- 一 下福島村⁽²⁷⁾ 損し家七ヶ所
- 溺死人 五人 内 女二人 子供三人
- 一 富嶋式丁目⁽²⁸⁾ 崩家一ヶ所 土蔵損二ヶ所

溺死人四百九人 内 男四十一人 女二百二十二人 子供百四十六人

建家損 百十四ヶ所

土蔵損 十四ヶ所

落橋 十二ヶ所

右之通承り候付此段奉申上候、以上

寅十一月十七日

諸国地震洪浪

南無阿弥陀仏

水陸横死大菩提

右四天王寺石碑文⁽²⁹⁾

高井田和尚筆⁽²⁹⁾

石碑の裏二

去季霜月四日五日地震を遁ん為に小船に乗居し輩、俄の洪浪湧か如く、木津川辺の大小数船一時に川上に押寄、橋を落し船を摧き、漂没死人夥し、尤前日夕海鳴潮の干満乱しをしらすして死に至る者寔憐むへし、后世海鳴潮の干満みだれし時は早く津浪の兆と知りて難をのかれ玉ふへしと云爾⁽²⁹⁾ 安政二乙卯春建之

編有者大事
(梵字キリク) 雷地震火難洪水除祈之御守

変無様に小

住吉明神太々神樂五穀成就

大無変

(中略)

十月六日⁽²⁸⁾

藤堂和泉守⁽²⁹⁾

領分地震二而城内住居向其外及大破可為難儀被

思召候、当時御殊多二ハ候得共出格之訳を以金貳万兩拝借被

仰付之

右於御白書院縁頼伊勢守申渡之⁽²⁶⁾

松平越中守⁽²⁶⁾

名代松平老岐守⁽²⁷⁾

同断二付居城破損其外損所不少候二付、可為難儀被 思召候、当時御殊

多二ハ候得共出格之訳を以金五千兩拝借被 仰付之

右於御黒書院溜列座同前同人申渡之

十一月六日阿部伊勢守殿御渡

此節度々地震在之候二付而ハ、此後之儀も難計、銘々立退方之儀心得も可在
之候得共、兼々火之元之儀嚴重二手当いたし置、早速立退候様可被達置候事

十一月

〔注解〕(1) 勢州は伊勢国、三重県北部。(2) 当月四日は後掲日付からみて十一月

四日のこと。旧暦十一月四日の大地震であることから嘉永七年十一月四日(一八五四年十二月二十三日)の安政東海地震の記事と判断される。(3) 辰刻は午前八時前後。(4) 四ヶ市宿は東海道四日市宿、三重県四日市市。(5) 申刻は午後四時前後。

(6) 津は藤堂氏津城下町、三重県津市。(7) 白子は宿場町・湊町の白子村、三重県鈴鹿市。(8) 神戸は本多氏神戸城下町、鈴鹿市。(9) 松坂は和歌山藩分領の松坂城下町、三重県松阪市。(10) 桑名は松平氏桑名城下町、東海道桑名宿、三重県桑名市。(11) 山田は伊勢外宮の門前町山田十二郷、三重県伊勢市。(12) 志州鳥羽は稲垣氏鳥羽城下町、湊町、三重県鳥羽市。(13) 御家中はここでは稲垣氏家臣が居住する城下町の武家屋敷のこと。(14) 尾張屋吉兵衛は未詳。本史料は書状としては不自然な部分があり、架空の人物の書状に仮託した被害情報の可能性もある。(15) 南都は大和国奈良町、奈良県奈良市。(16) 五ツ半時は午前九時頃。(17) 当夏同様とは、嘉永七年六月十五日(一八五四年七月九日)の伊賀・伊勢・大和の大地震を指す。(18) 東海道御油宿、愛知県豊川市。(19) 吉田は東海道吉田宿、松平氏吉田城下町、愛知県豊橋市。(20) 白須賀は東海道白須賀宿、静岡県湖西市。(21) 東海道二川宿、豊橋市。(22) 荒井は東海道荒井宿、湖西市。関所所在。(23) 藤川は東海道藤川宿、愛知県岡崎市。(24) 岡崎は東海道岡崎宿、本多氏岡崎城下町、岡崎市。(25) 矢矧は矢作川に架けられた矢作橋の付近。(26) 池鯉鮒は東海道池鯉鮒宿、愛知県知立市。(27) 三州田原は三宅氏の三河国田原城下町、愛知県田原市。(28) 舞坂は東海道舞坂宿、静岡県浜松市。(29) 浜松は東海道浜松宿、井上氏浜松城下町、浜松市。(30) 見附は東海道見附宿、静岡県磐田市。(31) 袋井は東海道袋井宿、静岡県袋井市。(32) 掛川は東海道掛川宿、太田氏の掛川城下町、静岡県掛川市。(33) 金谷は東海道金谷宿、静岡県島田市。(34) 島田は東海道島田宿、島田市。(35) 藤枝は東海道藤枝宿、本多氏田中城下町、静岡県藤枝市。(36) 岡部は東海道岡部宿、藤枝市。(37) 丸子は東海道鞠子宿、静岡県静岡市。(38) 江尻は東海道江尻宿、静岡市。(39) 東海道府中宿、駿府城下町、静岡市。(40) 沖津は東海道興津宿、静岡市。(41) 由井宿は東海道由比宿、静岡市。(42) 蒲原は東海道蒲原宿、静岡市。(43) 岩

測は蒲原宿・吉原宿の間、東海道の富士川渡河地点にあたる村、静岡県富士市。
(44) 吉原は東海道吉原宿、富士市。(45) 東海道が蒲原・吉原宿間で渡る川。(46) 津の国屋十右衛門は未詳。前注(15) 同様架空の人物の可能性もある。(47) 十一月七日は内容・人名等から嘉永七年十一月七日と比定できる。この申渡は『続徳川実紀』にも同年十一月七日付で収載されているが、地震三日後に被害規模も把握した上で拝借金拝領まで確定するのは早いとも考えられることから、十二月などの誤写の可能性もある。(48) 土方備中守は伊勢孤野藩主土方備中守雄嘉。(49) 伊賀守は幕府老中松平伊賀守忠優(忠固)。(50) 十一月十日は人物名等から嘉永七年十一月十日と比定できる。(51) 大久保右近将監は幕府目付大久保右近将監忠寛(一翁)。(52) 駿府は駿府城下町、静岡市。(53) 久能山御宮は久能山東照宮のこと。静岡市。(54) 十一月十二日は人物名等から嘉永七年十一月十二日と比定できる。(55) 時服は褒美として拝領する衣類。(56) 田辺彦十郎は幕府勘定田辺彦十郎。(57) 伊勢守は幕府老中阿部伊勢守正弘。(58) 但馬守は幕府若年寄遠藤但馬守胤統。(59) 摂津国大坂、大阪府大阪市。(60) 宝永四年十月四日は一七〇七年十月二十八日。(61) 昼八ツ時は午後二時前後。(62) 住吉は摂津国住吉大社門前付近、大阪市。(63) 青山氏の尼崎城下町、兵庫県尼崎市。(64) 和泉国堺、大阪府堺市。(65) 紀州は紀伊国、和歌山県周辺。(66) 以下南組、北組、天満組は大坂三郷を構成する三つの町組。それぞれ惣年寄が置かれ都市行政の単位として機能した。(67) 寛文二年五月朔日(一六六二年六月十六日)の近畿地方を中心とした地震を指す。(68) 座摩宮は大坂船場地区の坐摩神社、大阪市。(69) 石川氏の淀城、京都府京都市。(70) 東寺は京都九条の真言寺院、京都市。(71) 近江国大津町、滋賀県大津市。(72) 勢州外宮町は伊勢神宮外宮の門前町である山田を指す。三重県伊勢市。(73) 津ノ高田門徒は伊勢国一身田の専修寺を指す。津市。(74) 勢州長嶋は増山氏の伊勢国長島城下町、桑名市。(75) 西尾隠岐守は横須賀藩主西尾隠岐守忠成。(76) 遠江国横須賀城、掛川市。(77) 未刻は午後二時前後。(78) 諏訪安芸守は諏訪藩主諏訪安芸守忠虎。(79) 信濃国高島城、長野県諏訪市。(80) 午之刻は午後零時前後。(81) 松平伊賀守は上田藩

主松平伊賀守忠徳(忠周)。(82) 信濃国上田城、長野県上田市。(83) 御城はここでは駿府城のこと。(84) 稲垣対馬守は幕府若年寄稲垣対馬守重富。(85) 伊豆御崎は相州(相模国) 御崎の誤記か。御崎(三崎)は港町、神奈川県三浦市。(86) 幕府の船蔵。三崎には江戸湾出入りの船を改める三崎番所が設置され、三崎奉行が配されていたが、既に元禄九年(一六九六)に廃止され伊豆下田の番所に統合されている。施設の一部が残ったものか。または伊豆下田の被害との混同がある可能性もある。(87) 前注(86) 参照。(88) 相州小田原は大久保氏の小田原城下町、神奈川県小田原市。(89) 元禄十六年十一月二十三日(一七〇三年十二月三十一日)の元禄関東地震。(90) 内藤紀伊守は田中藩主内藤紀伊守式信。(91) 駿河国田中城、藤枝市。(92) 卯之上刻は午前五時頃。(93) 原は東海道原宿、静岡県沼津市。(94) 日坂は東海道日坂宿、掛川市。(95) 信州松本は水野氏の松本城下町、長野県松本市。(96) 美濃加納は松平(戸田)氏の加納城下町、岐阜県岐阜市。(97) 向分は当分の誤写か。(98) 本飯越は本坂越の誤写。本坂越は浜名湖北部を通る東海道の迂回路。(99) 松平薩摩守は薩摩藩主島津吉貴。(100) 和州郡山は本多氏の大和国郡山城下町、奈良県大和郡山市。(101) 戸田采女正は大垣藩主戸田采女正氏定。(102) 美濃大垣は戸田氏の大垣城下町、岐阜県大垣市。(103) 松平和泉守は鳥羽藩主松平和泉守乗邑。(104) 松平左兵衛は明石藩主松平左兵衛督直常。(105) 播州明石は松平氏の播磨国明石城下町、兵庫県明石市。(106) 本田隠岐守は膳所藩主本多隠岐守康慶。(107) 膳所は本多氏の膳所城下町、大津市。(108) 朝日川は朝明川の誤写か。朝明川は四日市宿と桑名宿の間で東海道が横切る川。(109) 岡崎之大橋は矢作橋のことか。(110) 榎木坂は箱根山中の東海道の難所の名、榎木坂。(111) 予州大洲は加藤氏の伊予大洲城下町、愛媛県大洲市。(112) 孕(はらむ)は土手や石垣が崩れかけて膨らむこと。(113) 予州宇和島は伊達氏の伊予国宇和島城下町、愛媛県宇和島市。(114) 豊後臼杵は稲葉氏の豊後臼杵城下町、大分県臼杵市。(115) 稲葉伊予守は臼杵藩主稲葉伊予守恒通。(116) 土井山城守は西尾藩主土井山城守利意。(117) 三州西尾は土井氏の三河国西尾城下町、愛知県西尾市。(118) 松平土佐守は土佐藩主山内豊隆。(119) 越後新潟は長岡藩

牧野氏領の湊町、新潟県新潟市。(120) 弘前藩津軽氏の領国。(121) 仙台藩伊達氏の領国。(122) 丹後・但馬・播州・若狭はそれぞれ京都府北部、兵庫県北部、兵庫県南部、福井県南部。(123) 頓けては頓かて(やがて)の誤写か。(124) 将しては「はたして」。(125) 吊は「つり」ではなく弔(とむらい)の略字。(126) 午下刻は午後零時頃。(127) 土岐伊予守は大坂城代土岐伊予守頼殷。(128) 渡辺越中守は大坂定番渡辺備中守基綱の誤写か。(129) 内藤式部少輔は大坂定番内藤式部少輔正友。(130) 太田和泉守は大坂東町奉行太田和泉守好敬。(131) 大久保大隅守は大坂西町奉行大久保大隅守忠香。(132) 土屋相模守は幕府老中土屋相模守政直。(133) 稲葉但馬守は幕府老中稲葉丹後守正通(ただし宝永四年八月に老中を辞している)と幕府老中秋元但馬守喬朝(喬知)が混同され誤写されたものか。(134) 大久保加賀守は幕府老中大久保加賀守忠増。(135) 井上河内守は幕府老中井上河内守正岑。(136) 摂河在々は大阪近郊の摂州(摂津国、大阪府北部・兵庫県東部)・河州(河内国、大阪府東部)の農村部のこと。(137) 公儀橋は幕府の費用で維持管理が行われた橋。(138) 京橋は大坂城北方寝屋川に架けられた橋、大阪府中央区・都島区(139) 日本橋は大坂市中道頓堀川に架けられた橋、大阪府中央区。(140) てうちは提灯。(141) 薩摩堀は大坂市中西部の堀川のひとつ。(142) 広教寺は薩摩堀に面した地にかつて存在した寺院。現在は豊中市に移転。(143) 天満宮御旅所は戎島町にあった天満宮(大阪天満宮)の御旅所、大阪府西区。(144) 安治川は旧淀川本流の最下部の呼称。(145) 船津橋は安治川上流堂島川に架かる橋。大阪府北区・福島区。(146) 木津川は旧淀川本流最下部の分流のひとつ。(147) 土佐堀川は木津川の上流中之島の南部を流れる川。(148) 立売堀は大坂市中西部の堀川のひとつ。(149) 下上手間堀は不詳。百間堀などの誤写を含むか。(150) 長堀川は大坂市中西部の堀川のひとつ。(151) 玉造橋は長堀川に架けられた橋、大阪府西区。(152) 堀江川は大坂市中西部の堀川のひとつ。(153) 瓶橋は堀江川に架けられた橋、大阪府西区。(154) 道頓堀川は大坂市中西部の堀川のひとつ。(155) 大黒橋は道頓堀川に架けられた橋、大阪府中央区。(156) 新川は道頓堀川と難波御蔵をつなぐ難波入堀川のこと。(157) 亀井橋は木津川に架けられていた橋、大阪

市西区。(158) 安治川橋は安治川に架けられていた橋、大阪府西区・福島区。(159) 汐見橋は道頓堀川に架けられていた橋、大阪府西区・浪速区。(160) 日吉橋は道頓堀川に架けられていた橋、大阪府西区・浪速区。(161) 幸橋は道頓堀川に架けられていた橋、大阪府西区・浪速区。(162) 住吉橋は道頓堀川に架けられていた橋、大阪府西区・浪速区。(163) 水分橋は堀江川に架けられていた橋、大阪府西区。(164) 鉄橋は堀江川に架けられていた橋、大阪府西区。(165) 高橋は長堀川に架けられていた橋、大阪府西区。(166) 難波嶋中江新田は難波嶋中口新田の誤写か。中口新田は大阪府大正区三軒家東三丁目。(167) 三軒家(三軒屋)は大阪府大正区三軒家東二一六丁目等。(168) 千嶋新田(千島新田)は大阪府大正区千島一一三丁目等。(169) 今木新田は大阪府大正区三軒家東二一三丁目。(170) 勘助嶋は大阪府大正区三軒家西一一二丁目等。(171) 岩崎新田は大阪府西区千代崎三丁目。(172) 寺嶋町(寺島町)は大阪府西区千代崎三丁目。(173) 木津川町は大阪府西区千代崎二丁目。(174) 戎島町は大阪府西区川口一丁目等。(175) 海部堀町は海部堀川町、大阪府西区靱本町二一三丁目。(176) 材木置場は大阪府浪速区木津川一一二丁目等。(177) 西側町は大阪府浪速区木津川一丁目。(178) 幸町五丁目は大阪府浪速区幸町三丁目。(179) 幸町四丁目は大阪府浪速区幸町二一三丁目。(180) 幸町三丁目は大阪府浪速区幸町二丁目。(181) 幸町式丁目は大阪府浪速区幸町一一二丁目。(182) 幸町壱丁目は大阪府浪速区幸町一丁目。(183) 湊町は大阪府浪速区湊町一丁目。(184) 新難波上之町は新難波東之町か、大阪府西区南堀江一丁目。(185) 釜屋町は大阪府西区南堀江一丁目。(186) 新難波中之町は大阪府西区南堀江一一二丁目。(187) 徳寿町は大阪府西区南堀江二丁目。(188) 新難波西之町は大阪府西区南堀江三丁目。(189) 新大黒町は大阪府西区南堀江四丁目。(190) 新戎町は大阪府西区南堀江四丁目。(191) 伏見屋四郎兵衛町は大阪府西区南堀江四丁目。(192) 下博労町は大阪府西区南堀江四丁目。(193) 松本町は大阪府西区南堀江四丁目。(194) 桑名町は大阪府西区南堀江四丁目。(195) 葎屋町は大阪府西区南堀江四丁目。(196) 橘通八丁目は大阪府西区南堀江四丁目。(197) 橘通七丁目は大阪府西区南堀江四丁目。(198) 橘通六丁目は大阪府西区南堀江四丁目。(199) 橘通

老丁目は大阪市西区南堀江一丁目。(200) 南堀江五丁目は大阪市西区南堀江四丁目。
 (201) 南堀江四丁目は大阪市西区南堀江三丁目。(202) 北堀江三丁目は大阪市西区北
 堀江三丁目等。(203) 北堀江五丁目は大阪市西区北堀江四丁目。(204) 御池通四丁
 目は大阪市西区北堀江二―三丁目。(205) 南勘四郎町は大阪市中央区南船場三―四丁
 目。(206) 西浜町は大阪市西区北堀江四丁目。(207) 二本松町は大阪市西区北堀江四
 丁目。(208) 安治川南一丁目(一丁目)は大阪市西区安治川一丁目。(209) 安治川南
 二丁目は大阪市西区安治川一―二丁目。(210) 安治川南三丁目は大阪市西区安治川二
 丁目等。(211) 安治川南四丁目は大阪市港区波除六丁目等。(212) 安治川北一丁目は
 大阪市此花区西九条一丁目。(213) 安治川北二丁目は大阪市此花区西九条二丁目。
 (214) 安治川北三丁目は大阪市此花区西九条二―三丁目。(215) 安治川北上一丁目は
 安治川上一丁目、大阪市福島区野田一丁目。(216) 安治川北上二丁目は安治川上二丁
 目、大阪市福島区野田四丁目。(217) 下福島村は大阪市福島区玉川一丁目等。(218)
 富島二丁目は富島町二丁目、大阪市西区川口三―四丁目。(219) 四天王寺は大阪市天
 王寺区に現存する寺院。この石碑も現存する。(220) 高井田和尚は未詳。河内国高井
 田村の長栄寺は四天王寺と同様聖徳太子創建の由緒を伝える寺であり、同寺の人物
 である可能性がある。(221) 寔は「まことに」。(222) 云爾は「しかいふ」、漢文文末
 の慣用句。(223) 内容的に嘉永七年の安政地震に関するものと考えられるが、十月六
 日は地震以前の日付である。十二月などの誤写か、または翌安政二年の記事か。
 (224) 藤堂和泉守は伊勢津藩主藤堂和泉守高猷。(225) 伊勢守は幕府老中阿部伊勢守
 正弘。(226) 松平越中守は桑名藩主松平越中守定猷。(227) 松平老岐守は今治藩主松
 平駿河守勝道の世子(養子)松平老岐守定法。

〔解説〕作者不詳の年代記。慶應義塾図書館蔵。文化五年(一八一八)にいつ
 たん跋文が書かれたが、それによれば「此年代記ハ予か祖父元禄七年(明和八
 年迄書留置候処、予又安永元年(今文化五年迄書留申候)ものである」といふ。

しかしさらにその後追記が重ねられ、特に安政地震に関しては読売類を中心に
 大量の情報が集積されることとなった。祖父も「予」も大坂在住者と思われ、
 当初は災害に限定されない一般的な年代記として書かれたが、この安政地震記
 事が充実したことにより「地震海溢記」という題簽が後に付されることになっ
 たと思われる。付表に見るように、いずれかの時点で錯簡が生じたらしく、冒
 頭の1―3は本来末尾65―67と並ぶ位置にあり、4より前にあった「元禄七年」
 以来の記事の一部が失われていると考えられる。このようにして冒頭部に地震
 記事が来たことも、前記の表題が付される要因となった可能性がある。なお
 『新修日本地震史料』第三巻別巻(東京大学地震研究所、一九八三年)、第五巻
 別巻五―二(東京大学地震研究所、一九八七年)にすでに抄録されているが、
 そこでの「地震海溢考」という表題は誤りであり、本文にも若干の誤読箇所が
 ある。

安政地震とともに宝永地震についても、幕府内部の史料写を含めた情報集積
 がなされているが、前記した構成の順序や、例えば「宝永四亥年十月四日地震
 津浪之儀前二控有之候得とも慥ならず、依之此度御城日記帳之写左之通写置」
 等の記載から考えると、安政地震の情報収集の過程で関連して収集されたもの
 とも考えられる。本史料集には、読売類は省いた上で、安政地震・宝永地震に
 関して作者が収集したと思われる史料の部分を抄出して掲載した。このような
 複合的な成り立ちを有する本記録は、災害情報の流通・蓄積のあり方を考察す
 るうえでの好素材となるであろう。なお一部に現代の人権意識にてらして不適
 切な語句が用いられているが、歴史史料としての性格に鑑みそのまま記した。

(原)

「地震海溢記」記事一覧（ゴシック体は本史料集に収載した部分）

1	11月4日勢州大地震 11/7付尾張屋報知	35	寛政13年4月天満天神正遷宮
2	11月4日南都地震 11/6付報知	36	同8/2大坂龍天登
3	東海道筋大地震 11/10付津の国屋報知	37	享和2年6/晦大風雨北河内
4	(四つ宝銀以来相場混乱の見聞筆記)	38	文化3年大坂町人買米
5	11/7付土方備中守宛拝借金仰付	39	(跋文)「此年代記ハ予カ祖父元禄七年〆明和八年迄書留置候処、予又安永元年〆今文化五年迄書留申候…」
6	11/10付目付大久保右近将監宛見分申付	40	去戌年秋大坂川々埋立の取沙汰
7	11/12付勘定田辺彦十郎宛見分申付	41	(朱筆)「是〆書加江」
8	(4の続き 金銀通用の考察 天保期まで)	42	文政2年6/12大坂地震「先代日記帳ニ控有之」
9	宝永2年抜け参り	43	嘉永7年6月本志らべ「山城勢州大和三河江州越前聞書大地震并出火の次第」(読売書写)
10	大坂大地震津浪之事	44	「御津八幡宵の夜中祢怒物の番付」(震災関連)
11	宝永4年富士山焼之覚 江戸表聞書	45	「嘉永七甲寅厄暦」(暦に見立てた震災余聞)
12	宝永5年12/29大坂火事 (以下大坂中心の年代記となる)	46	嘉永七寅年十一月四日地震五日地震津浪之事(大坂被害数)「右之通承り候付此段奉申候以上 寅十一月十七日」
13	享保6年米価	47	四天王寺石碑文写「諸国地震洪水津浪陸横死大菩提」安政2年建之
14	享保8年江戸中老人吟味	48	(住吉明神雷地震火難洪水除祈之守札書写)
15	享保9年3/21大坂火事	49	「江戸吉原おいらん詞」(読売書写)
16	享保17年飢饉	50	「嘉永七甲寅十一月大地震相撲取組」(読売書写)
17	元文3年豊年	51	「嘉永七甲寅十一月大津浪相撲取組」(読売書写)
18	宝暦5年竹生嶋参詣船破損乗組82人船頭3人死	52	「大地震大津浪世直し万歳」(読売書写)
19	宝暦6年畿内水損	53	「大地震大津浪継づくし」(読売書写)
20	宝暦10年大坂町中富貴人改 御用金	54	「大地震大津浪太功記十段目抜文句」(読売書写)
21	明和5年大坂打ち毀し	55	「大地震大津浪忠臣蔵九段目抜文句」(読売書写)
22	明和8年おかげ参り	56	「大昔宝永四年地震津浪聞書」(読売書写)
23	安永6年12/19大坂火事	57	「地震津浪もちづくし」(読売書写)
24	天明4年大坂打ち毀し	58	「大地震大津浪安達原三段目抜文句」(読売書写)
25	天明6年江戸火事 関東洪水 大坂大汐	59	「大地震大津浪一口ばなし」(読売書写)
26	天明6年9月公方様他界 大坂四辻番所	60	「江戸吉原おいらん詞」(読売書写)
27	天明7年大坂米騒動	61	「地震津浪精進料理献立」(読売書写?)
28	天明8年京都火事 朱筆「安政元甲寅年二月朔日初午也しに四月六日京都大火大内焼失不思議と云ふべし」	62	「いたこもちり」(震災関連)
29	寛政元年松平越中守様御順見	63	「かるかやかへうた大津ゑぶし」(震災関連)
30	同大坂大雪	64	「淀乃川瀬かへ歌」(震災関連)
31	寛政2年肥前島原津浪大地震	65	10/6(ママ)藤堂和泉守宛拝借金仰付
32	寛政3年大坂洪水	66	松平越中守名代松平壱岐守宛拝借金仰付
33	寛政4年5/17大坂火事	67	11/6阿部伊勢守殿仰渡
34	寛政10年太閤二百年忌 京大仏焼失		

8 岡本元朝日記

(表紙・左題簽)

岡本元朝日記 宝永四年、十、十一、十二月

(内表紙)

宝永四丁亥年十月日記

(朱印) 「寄付

明治四十年八月八日

羽生氏熟

十月大

(一) 三日略

一 四日天気よし○(中略)○巳ノ刻御殿へ罷出候○(中略)○未ノ刻地震、よほと強ク候、天水こほれ、ため水大桶七分めほと水有之をゆりこほし候なり、御会所ニ罷在候が、則 御前へ走罷出候、折節御弓場ニ被成御座候、御庭へ御出御座候、智清院様ニも御物見へ被為出御座候故、是も同所へ御出被成候、御城へ窺御機嫌入可申候と申上、則下山田新五郎為出合候間、申付さし出候、申刻前ハ 御城へ何時も罷出候、申刻ハ御用番御老中様へ罷出

候筈故、其通勤候へと申渡候也○大書院小壁われ候なり、さてくよほとふれ候と相見得候、永クふれ候也○今晚御の場にて御膳召上られ候、御相伴いたし候○少々腹中氣ニ候間、未ノ下刻まづ退出いたし候○山方奉ニて手紙あり、拙者少々不快之由被 聞召候間、今日夜詰御免被 成置候間、養生いたし明日可罷出由被 仰付候、難有奉存候、依之御礼御請申上、今夜ハ休候也○今日今作事鳴物いたし候也、内々大御目付衆御申之由也

一 五日朝霧ふかく曇ル○卯ノ上刻地震、昨日程に無之候へ共、よほとふれ候間、髪も不結候へとも早々御殿へ罷出候、屋形様御床之上る加藤市兵衛いたき奉り、早々御庭へ御出之由、我等罷出候節ハ地しん止候而、御寝之間ニ被成御座候間、奉窺御機嫌、松田・野村兩老女也頼、智清院様へ申上候て退出仕候、御留守居白土嘉右衛門罷出候間、御茶屋口にて、又候御城窺御機嫌可入候哉、大方それニハ不及ニて可有之候、天水ハ昨日之地震ニこほれ候て水少ク候間、今日こほれさるニて可有之候、然ハ是もかくニ不成候間、世間為承合候へと申渡候也○(中略)○御的場にて今御夕飯御相伴いたし、御的過申ノ中刻御暇ニて退出、小袖着替候処火事と申候、(以下火事騒ぎへの対応記事略)、酉ノ中刻過地震ニ御座候、少之事ニ候、さてく地しん火事ニこまりはて候也○(以下略)

一 六日朝曇ル、辰ノ刻今晴○(中略)○今夜子ノ刻少地震有り、夜も曇ル一 七日曇ル○去四日之地震、小田原よほと強有之、戸はめ地も割候程ニ候へ共、先年ほとには無之候由、尤御城大變無御座候由也、依之大久保加賀守様へ御勤御無用之由也、五日朝之地震ハ箱根強候由也、四日ハ信州もつよく御座候由也○(以下略)

(八日略) 一 九日晴又ハ曇ル○(中略)○去四日未ノ刻地震ニて、遠州浜松御城櫓門屏

侍屋敷町屋潰家崩候事多候由、是ハ松平豊後守様御領也、其外駿州田中⁽³⁰⁾同断、右ハ内藤紀伊守様御領也、信州諏訪⁽³²⁾、是ハ諏訪安芸守様御領同断、遠州横須賀⁽³⁵⁾、西尾隠岐守様御領同断也、右之通公儀へ被仰立有之由廻状二申来候也○
(以下略)

(十日・十一日略)

一 十二日晴又ハ曇ル○(中略)○去四日地震大坂町屋家潰死人も多候よし廻状二申来候、摂州尼ヶ崎青山播磨守殿御城崩、町屋も東ノ方潰候由、西侍屋敷無別状候由申来候、江州膳所⁽⁴¹⁾それ程地震強無之由申候、京都之さた未承候へ共、膳所之様に御座候ハ、大坂之様ニハ有之ましく候也、信濃・美濃⁽⁴²⁾も城町家も崩候由也○(以下略)

一 十三日薄曇ル○(中略)○去四日之地震大坂 御城ハ無別条、但瓦落壁割まで之由、京橋筋銅御門倒候由、尤御曲輪之外也、高汐ニて廻船川中へ流込候由、町屋土蔵共二九百軒程潰候よし、橋三十五六落候所、損候所共二有之、男女死人式百六十人余有之由廻状二申来候也○(以下略)

一 十四日雨降ル○(中略)○安部式部様坪内角左衛門様去四日地震ニて東海道大坂迄大破候由故、方々城々為見分被遣候よし、去十二日被 仰付候旨申来候、尤城之外潰町変地見分之由也、京都も書付二入候、未様子不聞候也、勢州龜山⁽⁴⁶⁾板倉周防守様御領城町屋潰、高汐ニ而蒔置候稻流失候由也、東海道駅路地震ニて通候事不罷成候而、藤堂備前守様⁽⁴⁸⁾など御在所へ御越この十五日被延置候也、町人共も右之通也、信州濃州右之通故東仙道⁽⁴⁹⁾も通り不成由也○
(以下略)

(十五日略)

一 十六日曇ル○辰上刻少々地震有り○(中略)○藤堂和泉守様御領地勢州阿濃津御城⁽⁵²⁾、去四日地震ニて櫓屏門石垣崩候由、同備前守様御領ハそれ程二無

之候由申来候也○(中略)○今晚秋田去六日申ノ下刻出足之御飛脚未ノ刻参着、連状七通参候、去四日地震秋田ハ無何事由御飛脚申候、連状二無沙汰候也、御用少々申来候也、無替儀候也、御台所荷式駄登候也

(十七日・十九日略)

一 廿日雨降ル○(中略)○去四日之地震ニて大坂之死人壹万六千人余、怪我人数不知、潰家町積五百六十町余ノ由今申廻状二申来候也、土佐国右之地震津浪ニて御城破損、舟等浪ニとられ候由也○(以下略)

(廿一日略)

一 廿二日天気よし○(中略、晩方まで)○少地しん有り○夜中雨少ツ、降ル○(以下略)

(廿三日・廿四日略)

一 廿五日朝曇ル、辰ノ刻迄天気よし○(中略)○四国去ル四日之地震ニて高浪有之、浦々家共浪ニひかれ潰家多候由、松平土佐守様⁽⁵⁸⁾などハ土佐守様無御恙迄申来、死人之員数潰家浪ニとられ候様子未具二申来候由、松平讃岐守様御領地も右同断之由、紀州様地しんニて御破損、高浪ニて浦々之家七百軒余とられ、其外千七十軒余潰候由、死人も六七千人可有之由、輕侍も廿人計不見得候由申来候也○(以下略)

(廿六日・廿八日略)

一 廿九日天気よし○(中略)○未ノ刻あやつり中少計地震有り、今日ハ天気よく候なり○(以下略)

(晦日略)

宝永四丁亥年十一月日記

十一月大

(朔日・二日略)

一 三日曇ル○(中略)○御公儀分此中町中へ御触候ハ、今度国々地震ニ付諸

色高直可仕と考、買置いたし高直二売候ハ、曲事ニ可被 仰付候、品ニより蔵々御吟味可被成候△町人共御法度之衣類を着いたし候様ニ相聞不届ニ御座候、前々被 仰付之通弥物每かく可仕候、於相背人ヲ御廻し可被召捕旨被 仰渡候由なり○(以下略)

(四日～七日略)

一 八日曇ル○(中略)○京都分酒寄弥兵衛申越ハ、先頃申遣候御借金之事、此度大坂地震、西国所々札遣止候ニ付、金銀不自由ニて御銀難調由申来候也、何様秋田より申来候間早々秋田へ申遣候様ニと申渡候也○(以下略)

一 九日天気よし○(中略)○秋月長門守様御在所日向国高鍋、去月四日之地震御城民家亡損有之、公儀へも御届御座候由廻状ニ申来候、然ハ九国之内ニも変ノ国有之候也○(以下略)

(十日略)

一 十一日曇ル、已之刻晴○(中略)○土佐国去月四日地震高浪ニて御城破損多、流家七千六十軒余、潰家五千六百軒余之由、損田三万式百石余、米流失壹万九千式百石余、舟二百四五十艘、怪我人男女七百八十人、死人男女千五百七十余人、死牛馬四百余疋之由也、右之内山内何某と云者知行壹万石被下候人、其身ハ其節御城ニ居合助命候、留守之家ニて母妻子并家来不残流死候由也○松平薩摩守様御暇御帰国御礼之御使者、壹万五千石知行取候人、去四日地震高浪之節荒井渡海候、其身ハ御番所前ニ休居候内、先へ薩摩守様御荷物自分之諸道具遣候ニ、高浪ニて舟共ニ流失候由、其身と具足箱刀筒計残候由也○(以下略)

一 十二日天気よし少風あり○(中略)○松平土佐守様御領内去月四日ノ地震ニて人死多、御家中指立衆家内流死候由申候間、孕石主水へ書状遣候也○

(以下略)

(十三日略)

一 十四日天気よし涼候也○(中略)○伊達遠江守様御留守居衆分此方御留守居へ申来候ハ、此度八月之大風十月之大地震高汐ニ而領内亡損、兼て之不如意ニ右之通ニ候間、此末音進等ハ不及申、只今迄使者進候事ハ書状ニ而可申述候、其旨御心得被下度旨御断ニ候也○(以下略)

(十五日～廿一日略)

一 廿二日曇ル○(中略)○此度井上河内守様御老中稲垣对馬守様御老中地震ニて道中破損所御普請被 仰付候由也○(以下略)

一 廿三日曇○(中略)○今朝分地震少ツ、四五度有之候也、其間地ハ不震とろく鳴候て戸などがたく鳴候事三時計也、強クも無之候也、其後少々雷有之候也、替候天気合也、未ノ刻ニ至而ほこりの様成物ふり候、硯箱之ふたへ市郎右衛門・善左衛門ため候て見せ候、指ニていろいろ候へハあくのことくニ候也、降始ハ午ノ中刻比よりふり候由、其時ハ細雪かと氣も不付候なり、震動ハそれ分不止有之候○今晚御納戸ニて御相伴いたし、申ノ刻御暇ニ而退出、降候物いよく不止候、から笠さし候であるき候也、屋根道地ニもあくをしき候様ニたまり、足跡付候也、しんどく不止候、強も無之候、雷其間ニ有り、稲ひかり有り、拟昼過より暗候て暮近ク之ことくニて候、申ノ中刻分あかしともし候也、めつらしき事ニて候○暮比御殿へ罷出候、降物不止候、震動不止候、屋形様御機嫌よし、未御風氣残候故御納戸ニ被成 御座候、御夜食御相伴いたし戌ノ下刻比屋形様御寝被成候、然とも震不止候間先々御座ノ間ニ罷在候、降物ハ戌ノ中刻比止候へとも、震動有之候、子ノ刻迄罷在候へ共不相替候間、御番衆も可休と与左衛門同前ニ退出いたし候、しんどくハ夜中不止候也

一 廿四日晴候て辰ノ刻⁸⁴日出候也、併震動残不止候也○(中略)○今日ハ天氣

よく候へ共少風有り、昨日之砂吹立候也、窓へ吹当候ハ秋田之雪を風之吹あて候ニ似候也、震動之残今日も時々有之候○(中略)○暮ニ御殿へ罷出候、いまた震動之残有之候、酉ノ下刻地震有之候、それ程強クハ無之候へ共、御庭へ御出被成候様ニ申上候而、御ゑん迄御出候処止候也、雷少ツ、時々有之候○御しんノ間ニてうとん御相伴いたし候、亥ノ中刻退出○今夜もしんどうのきミ有之候○子ノ刻又地震有之候、可罷出存候処止候也

一 廿五日曇ル、雷有り○巳ノ刻御殿へ罷出候○今日も時々震動有り、暗候なり○(中略)○屋くらハ申上候ハ、世間暗なり候て和泉守様之屋くらも不見得候、出火候ても見得ましき由申候間、山方太郎左衛門へ申候而、今夜ハ御山辺へ御足輕二三人附置、火も候ハ、早々為知候様ニと申候、尤和泉守様衆へも為知可然と申付候也、申ノ刻御暇ニて退出致候○暮時ハ又砂降候、先日ハ砂黒色ニ候、多降候也○下山田新五郎今日井上河内守様^{御用番也}にて承候、伊豆之大嶋⁸⁷焼候て小石ヲ為飛、箱根辺一昨日ハ通り留候由、御代官衆被申立候由なり○暮ニ御殿へ罷出候、さし笠ニてあるき候也、砂地へ溜り候也、亥ノ中刻退出、いまた砂降ル○今日寒候也○今日御舞台棟上也

一 廿六日曇ル、暗候也、雷時々有り、砂降候也○(中略)○御納戸ニて如毎夜御相手いたし、亥ノ中刻退出、砂少々小晴ニ成候也

一 廿七日曇候○(中略)○御勘定衆⁸⁸様躰書写来候、去廿三日駿河地震朝ハ三十度計有之、富士山鳴出煙り立候処へ、雪流カ、煙卷上り、震動近郡之者共男女氣を失候者多候へ共、死人ハ無之由、昼ハ晩迄黒煙ニて不見分候、暮ハ煙りと見得候処火炎ニ候由、駿州吉原村名主老百姓御代官へ申上候由也、然ハ御当地へ砂降り候ハ右富士山之巻上候砂灰等ちり降り候と相見得候、震動も右之ひゞきニ御座候、大山ニ右之通り候ハ、関八州へひゞき可

有之事ニ候也、震動ハ廿二日ハ有之候とも申候○(中略)○今晚も申ノ下刻ハ砂ふり成ノ刻止候也○富士山近郷家も潰候由也

一 廿八日昨夜中薄雪少降候、今朝天氣晴候なり○(中略)○今日ハ晴候てよく候、いまた南ノ方雲有之候へ共時々雲切有之能候也

一 廿九日天氣よし、今日午ノ三刻冬至也○(中略)○富士山又ハ其外之大山も焼候由為見分、御徒目付市野新八郎・安田彦太夫・馬場藤左衛門⁸⁹、御小人目付安田助八郎・黒川理助・小林兵助・野村太兵衛・矢沢文四郎・岡田次郎兵衛⁹⁰、此衆廿五日被仰付、其日出足之由也○(中略)○今日之御飛脚ニ去廿五日上着之連状返事遣候、此度砂ふり震動之様子も委申遣候、御用別帳ニ有之故不記○(以下略)

一 晦日昨夜中ハ少雨降ル○(中略)○今夜中も又砂降り候也、震動ハ廿七日ハ無之候、いまた富士山焼候と相見得候也

宝永四丁亥年十二月日記

十二月大

(朔日略)

一 二日天氣よし○(中略)○東海道筋地震破損所々御普請御手伝、酒井左衛門尉様⁹¹、真田伊豆守様⁹²、本田吉十郎様⁹³、昨日被仰付候よし也○(中略)○今日ハ天氣能あた、かなり○戌ノ刻曇也○今夜中も少砂降候也

(三日略)

一 四日朝曇ル、時々晴ル○(中略)○昼より砂又候降り候、風少々有之吹立候也、昼ノ内地震アリ○(中略)○今晚御相伴いたし、それより部屋ニて与左衛門と壱岐守様⁹⁴御意之趣相談いたし、申ノ刻退出いたし候、砂多ふり候てから笠さし帰候也○暮ハ御殿へ罷出亥ノ中刻退出、其節砂晴候て夜よし

一 五日曇ル○(中略)○今日捻泉寺⁹⁵へ御仏参被遊候故、御先へ参候、天氣

能候へ共風少有之、町屋上之砂吹立申候也、未ノ刻 御帰弥天氣よし、御馬にて御帰被成候、御相伴いたし申ノ刻退出いたし候○（以下略）

（六日略）

一 七日天氣よし、併風少々有り○（中略）○巳ノ中刻御屋敷罷出鍛冶橋へ参候（中略）風有之此中之砂を家上より吹落、世間ほこり立候て目へ入ことくく難儀いたし、午ノ下刻御屋敷へ帰候、（下略）

（八日・十日略）

一 十一日晴又ハ曇ル○（中略）○寒氣強事秋田ニおとらす候、硯水氷其外たるひなと江戸ニハ近年不覚由何も申候なり、しかし風ハさのミ多無之候、今日は少々風有之候○（以下略）

（十二日略）

一 十三日天氣よし○（中略）○暮より御殿へ罷出亥ノ中刻退出いたし候、此中之寒氣秋田におとらさる氷ニ候、近年江戸ニ無之寒之由御当地之者共も申候也○亥ノ下刻少地震有り

一 十四日天氣よし○（中略）○此度東海道筋御普請御手伝衆之御受取場、撰州守口、江州大津、勢州庄野、同四日市、同白須賀、同舞坂、同池田村、同見付、三州吉田ノ橋、荒井御番所、同御番人小屋、天龍川堤川除、右宿々橋共本多吉十郎様御受取之由、△遠州袋井、同金谷、駿州嶋田、同丸子、同江尻、同興津、大井川堤川除、阿部川堤川除、右宿々道橋ともに酒井左衛門尉様御受取之由なり○（以下略）

（十五日・十六日略）

一 十七日天氣よし○（中略）○家千代様ニ御附被成候松平大蔵少輔様、西ノ丸御側衆二被 仰付候由、神尾五郎兵衛殿御徒頭被 仰付候由廻状ニ申来候也、伊達遠江守様去比地震ニて御在所亡所ニ付、来年之御参勤御免被 仰付

候由也○（以下略）

（十八日以下略）

〔注解〕（1）巳ノ刻は午前十時前後、（2）御殿は秋田藩江戸藩邸の御殿。当時岡本元朝は江戸出府中。（3）未ノ刻は午後二時前後。（4）御前は秋田藩四代藩主佐竹義格のもとを指す。当時十三歳（5）智清院様は佐竹義格の実母。（6）ここでの御城は江戸城のこと。（7）下山田新五郎は秋田藩江戸留守居。（8）申刻は午後四時前後。申刻を境にして將軍御機嫌伺いの登城の作法に相違があったことが知れる。（9）御用番御老中様は幕府のその月の月番老中のこと。（10）藩主が戸外で夕食をとったことを示すか。（11）未ノ下刻は午後二時すぎ。（12）山方奉は秋田藩士山方某（おそらく山方太郎左衛門）が藩主の意を奉じて手紙を作成したことを示す。（13）將軍世子徳川家宣の次男家千代逝去に伴う作事鳴物停止が明けたことを示す。（14）卯ノ上刻は午前五時頃。（15）屋形様は佐竹義格。（16）加藤市兵衛は秋田藩士。（17）老女は藩の奥女中を統括する役職、松田・野村の両名がこれにあたる。（18）白土嘉右衛門は秋田藩江戸留守居。（19）天水は天水桶のこと。天水桶の水が揺りこぼれるか否かが、江戸城への御機嫌伺いの判断基準であったことが知れる。（20）かくは格。格にならない、判断基準としてふさわしくないの、の意味。（21）西ノ中刻は午後六時頃。（22）辰ノ刻は午前八時前後。（23）子ノ刻は午前零時前後。（24）小田原は相模国の地名、神奈川県小田原市。（25）元禄十六年十一月二十三日（一七〇三年十二月三十一日）の関東地震ほどではなかったことを示す。（26）大久保加賀守は小田原藩主・幕府老中大久保忠増。（27）箱根は相模国の地名、神奈川県箱根町。（28）信州は信濃国。長野県一帯。（29）遠江国浜松城、静岡県浜松市。（30）松平豊後守は浜松藩主松平資俊。（31）駿河国田中城、静岡県藤枝市。（32）内藤紀伊守は田中藩主内藤式信。（33）信濃国高島城、長野県諏訪市。（34）諏訪安芸守は諏訪藩主諏訪忠虎。（35）遠江国横須賀城、静岡県掛川市。（36）西尾隠岐守は横須賀藩主

西尾忠成。(37) これら大名から幕府への被害報告が廻状で共有されたことを示している。(38) 摂津国大坂、大阪府大阪市。(39) 摂津国尼崎城、兵庫県尼崎市。(40) 青山播磨守は尼崎藩主青山幸督。(41) 近江国膳所城、滋賀県大津市。(42) 美濃国は岐阜県南部。(43) 筋銅御門は大坂城三ノ丸京橋側にあった銅葺屋根の門。(44) 安部式部は幕府目付安部式部信旨。(45) 坪内角左衛門は幕府目付坪内覚左衛門定常。(46) 伊勢国亀山城、三重県亀山市。(47) 板倉周防守は伊勢亀山藩主板倉重冬。(48) 藤堂備前守は伊勢久居藩主藤堂高堅。(49) 東仙道は東山道に同じ。中山道のこと。(50) 辰上刻は午前七時頃。(51) 藤堂和泉守は津藩主藤堂高睦。(52) 伊勢国安濃津城(津城)、三重県津市。(53) 前注(48) 藤堂高堅。(54) 出羽国秋田城(久保田城)、現秋田県秋田市。(55) 申ノ下刻は午後四時すぎ。(56) 連状は連名で作成した公用の書状。(57) 土佐国は高知県。(58) 松平土佐守は土佐藩主山内豊隆。(59) 松平讃岐守は高松藩主松平頼豊。(60) 紀州様は紀州(和歌山) 藩主徳川吉宗。ここではその領地をさしている。(61) 軽侍は身分の低い侍か、あるいは清書時の「足軽侍」の誤写か。(62) あやつりは操り人形芝居。当日は秋月藩世子黒田長軌に嫁いだ藩主姉の膝直し(里帰り)の宴席が江戸藩邸で催されており、その余興に人形芝居の一座が招かれていた。(63) 酒寄弥兵衛は京都藩邸の秋田藩士。(64) 同年十月に発令された藩札通用の禁令のこと。(65) 秋月長門守は高鍋藩主秋月種政。(66) 日向国高鍋城、宮崎県高鍋町。(67) 九国は九州のこと。(68) 松平薩摩守は薩摩藩主島津吉貴。(69) 荒井は東海道荒井宿、静岡県湖西市。浜名湖開口部の渡船場がある。(70) 御番所は荒井関所のこと。(71) 孕石主水は土佐藩家老孕石元矩。(72) 伊達遠江守は宇和島藩主伊達宗賛。(73) 井上河内守は幕府老中井上正岑。(74) 稲垣対馬守は幕府若年寄稲垣重富。(75) 市郎右衛門は秋田藩士沢畑市郎右衛門か。(76) 善左衛門は秋田藩士川井善左衛門か。(77) あくは灰のこと。(78) 午ノ中刻は午後零時頃。(79) から笠は傘。(80) 申ノ中刻は午後四時頃。(81) 戌ノ下刻は午後八時すぎ。(82) 戌ノ中刻は午後八時頃。(83) 与左衛門は秋田藩家老梅津与左衛門忠経。(84) 辰ノ刻は午前八時前後。(85) 酉ノ下刻は午後六時すぎ。(86) 亥

ノ中刻は午後十時頃。(87) 屋くらはここでは藩邸に設けられた火の見櫓を指す。(88) 和泉守様の屋くらは前注(51) 藤堂和泉守高睦の津藩江戸藩邸の火の見櫓。当時の秋田藩邸は現台東区竹町付近、津藩邸は現千代田区神田和泉町付近にあり、直線距離は一キロメートル弱であった。(89) 山方太郎左衛門は秋田藩士。(90) 御山は東叡山寛永寺のこと。秋田藩は藩邸の位置から寛永寺の防火の役を負っていた。(91) 伊豆大島、東京都大島町。(92) 御勘定衆は幕府勘定所の役人。(93) 駿河は静岡県中部。(94) 東海道吉原宿のこと、静岡県富士市。(95) 午ノ三刻は午後零時すぎ。(96) 市野新八郎・安田彦太夫・馬場藤左衛門はそれぞれ幕府目付。(97) 安田助八郎・黒川理助・小林兵助・野村太兵衛・矢沢文四郎・岡田次郎兵衛はそれぞれ幕府小人目付。(98) 酒井左衛門尉は出羽庄内藩主酒井忠真。(99) 真田伊豆守は信濃松代藩主真田幸道。(100) 本田吉十郎は越後村上藩主本多忠孝。(101) 沓岐守様は秋田新田藩主佐竹義長。若年の秋田藩主佐竹義格の叔父にあたり、後見の役割を果たしていた。(102) 捻泉寺(総泉寺)は秋田藩佐竹氏の江戸における菩提寺。浅草橋場(東京都台東区橋場一・二丁目)にあった。(103) 巳ノ中刻は午前十時頃。(104) 鍛冶橋はここでは藩主佐竹義格の姉が嫁いでいた備中津山藩主松平宣富の江戸藩邸のこと。(105) 午ノ下刻は午後零時すぎ。(106) たるひは垂氷。つららのこと。(107) 亥ノ下刻は午後十時すぎ。(108) 東海道守口宿、大阪府守口市。(109) 東海道大津宿、大津市。(110) 東海道庄野宿、三重県鈴鹿市。(111) 東海道四日市宿、三重県四日市市。(112) 東海道白須賀宿、湖西市。正しくはここより「同」ではなく遠江国。(113) 東海道舞坂宿、浜松市。(114) 池田村は天竜川の渡船場、静岡県磐田市。(115) 東海道見附宿、磐田市。(116) 東海道吉田宿はずれの豊川に架けられた橋。愛知県豊橋市。(117) 東海道荒井関所、湖西市。(118) 天龍川浜松・見附宿間で東海道が横切る川。(119) 東海道袋井宿、静岡県袋井市。(120) 東海道金谷宿、静岡県島田市。(121) 東海道島田宿、島田市。(122) 東海道丸子(鞠子)宿、静岡県静岡市。(123) 東海道江尻宿、静岡市。(124) 東海道興津宿、静岡市。(125) 大井川は東海道が金谷・島田宿間で横切る川。(126) 阿部川(安倍川)は東海道が鞠子・府中宿間で横切る川。(127) 前注

(13) の徳川家千代。(128) 旗本松平勝以。(129) 旗本神尾元連。

〔解説〕 秋田藩家老を勤めた岡本又太郎元朝の日記。秋田県公文書館蔵。元禄八年(一六九五)から正徳二年(一七一二)まで、一部の年次を欠くが六四冊が伝存している。元朝自身の公務の記録から、伝聞した各種情報、私事に至るまで豊富な記載内容を持つ一級の史料であるが、本史料集では、宝永四年(一七〇七)十月～十二月の三ヶ月分の日記から、宝永地震、および宝永富士山噴火に関する記述の部分を抄出した。また、元朝が屋敷のどこに居てそれぞれの体験をしたのかがわかるような記述も抄出した。宝永地震関係部分については、宇佐美龍夫編『日本の歴史地震史料』拾遺五ノ上(東京大学地震研究所、二〇一二年)に同様に抄出されているが、一部読みの誤りなども見られる。

元朝自身が体験した地震や噴火の鳴動、灰降りの記録の詳細さはもちろんであるが、本日記では、全国各地の被害の情報などがどのような形でもたらされているかという点も興味を引く。とくに情報の共有に際して具体的に用いられた「廻状」や「様牒書」といった媒体については、原直史「江戸藩邸をめぐる災害情報の流通について―宝永地震・宝永富士山噴火を中心に―」(『災害・復興と資料』第六号、二〇一五年)でやや詳細に触れているので参照されたい。また、日々の天候の記載は元々この日記で必ず触れられている事項だが、富士山噴火後は異例の寒気がこれと結びついて意識されたと思われることから、その記述を抄出してある。

(原)

9—1 享保十一年午ノ四月 志摩国英虞郡浜島村差出帳

下々田六反壹畝拾五歩 新田八之盛^①

分米四石九斗式升 定免三ツ^②

右新田之儀、式拾年以前亥之年津浪^ニ而潮入^③罷成候場所、御見分之上一作御引被下候、

(中略)

外

下々田貳畝貳拾四歩 新田八之盛

分米貳斗式升四合 定免三ツ

下々田四反六畝廿四歩 新田八之盛

分米三石七斗四升四合 定免貳ツ五歩

右新田之儀、式拾年以前亥之年津浪^ニ而潮入^ニ罷成候場所、御見分之上一作御引被下候、^④

(中略)

一田畑破損^并道・橋・堤等普請、少宛之儀^者村^ニ而繕申候、大分^ニ而御座候得ハ、

他村之人夫被召遣候、弥々他村之普請^ニ茂参候、土井周防守様御代^者、他

村^江人夫差遣申覚無御座候、松平和泉守様御代^者式拾年已前亥之年、津浪^ニ

本田・古新田外、新田堤破損仕候^ニ付、十九年以前子ノ年御願申上、本田・

古新田堤筑立申候分ハ、人夫御積^リ被為遊、一日壹人^ニ付御扶持方米五合宛

被下候而、村中^ニ而繕申候、板倉近江守様御代^者拾六年前卯之年、穴川村^⑧

堤普請人夫被 仰付参候節、一日壹人^ニ付七合五勺宛御扶持米被下候御事、

〔読み下し〕

下々田六反一畝十五歩 新田八の盛

分米四石九斗二升 定免三ツ

右新田の儀、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

ほか

下々田二畝二十四歩 新田八の盛

分米二斗二升四合 定免三ツ

下々田四反六畝二十四歩 新田八の盛

分米三石七斗四升四合 定免二ツ五歩

右新田の儀、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

一田畑破損ならびに道・橋・堤等普請、少しづつの儀は村にて繕い申し候、大分にて御座候えば、他村の人夫召し遣われ候、いよいよ他村の普請にも参り候、土井周防守様御代は、他村へ人夫差し遣わし申す覚え御座無く候、松平和泉守様御代二十年以前亥の年、津波に(て)本田・古新田ほか、新田堤破損仕り候に付き、十九年以前子の年御願ひ申し上げ、本田・古新田堤築立て(建て)申し候分は、人夫御積り遊ばさせられ、一日一人に付き御扶持方米五合ずつ下され候て、村中にて繕い申し候、板倉近江守様御代十六年以前卯の年、穴川村堤普請人夫仰せ付けられ参り候、一日一人に付き七合五勺ずつ御扶持米下され候御事、

〔注解〕(1) 一反当たり八斗の石盛(年貢率)であること。(2) 「定免」とは、過去の年貢高の平均数値を基に、一定の期間内、定額の年貢を徴収する方法である。また、「(定) 免三ツ」とあるのは、その土地の石盛高の三割(30パーセント)が年貢となっていたことを示す。ここでは「定免」とあることから、毎年三割の年貢率であった。この数値は他の数値の場合も同様で、例えば「免三ツ一分」とある場合は、三割一分(31パーセント)、「免四ツ」の場合は四割(40パーセント)の年貢率であったことを示す。(3) 波をかぶるなどにより畑地に塩が混ざる状態。(4) 作付けのできない田畑など、その年の生産が見込めない土地の年貢を免除すること。(5) 志摩国鳥羽藩主土井利益。なお、「土井周防守」の上が一字空いているのは、闕字と呼ばれ、その下の人物に対する敬意を示す。以下同。(6) 志摩国鳥羽藩主松平乗邑。(7) 志摩国鳥羽藩主板倉重治。(8) 志摩国答志郡穴川村、現在の三重県志摩市磯部町穴川。

9—2 享保十一年午四月 志摩国英虞郡片田村指出シ帳

(土井周防守様御代新田)

下々田三町六畝拾三歩 新田八之盛

分米貳拾四石五斗壹升五合 定免貳ツ

右新田、貳拾年以前亥ノ年津浪^ニ而潮入^ニ罷成候場所、御見分之上^ニ一作御引被下候、

(中略)

一深谷山 小松六百四拾八本

^{〔一〕}
五寸廻り
貳尺廻り迄

右ハ 松平和泉守様御代貳拾四年以前未ノ年、当村大浦^ニ而新田貳町歩、作人迫子村^{〔三〕}百姓九左衛門開発仕候所、貳拾年以前亥ノ年津浪^ニ而右新田不残打破^リ

申候故、右九左衛門得取立不申 殿様江右新田子ノ年指上ケ申候ニ付、右之新田片田村庄屋安兵衛御願申上、取立申ニ付、右松木枝葉共申請、坑木并枝葉之儀ハねりしばニ仕、新田取立申候御事、

〔読み下し〕

下々田三町六畝十三歩 新田八の盛

分米二十四石五斗一升五合 定免二ツ

右新田、二十年以前亥の年津浪にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

一深谷山 小松六百四十八本 五寸廻りより二尺廻り迄

右は松平和泉守様御代二十四年以前未の年、当村大浦にて新田二町歩、作人迫子村百姓九左衛門開発仕り候所、二十年以前亥の年津浪にて右新田残らず打ち破り申し候故、右九左衛門取り立て得申さず、殿様へ右新田子の年指し上げ申し候に付、右の新田片田村庄屋安兵衛お願い申し上げ、取り立て申すに付、右松木・枝葉共申し請け、坑木ならびに枝葉の儀はねりしば(練り芝カ)に仕り、新田取り立て申し候御事、

〔注解〕(1) 約一五・二センチメートル。(2) 約六〇センチメートル。(3) 志摩国英虞郡迫子村、現在の三重県志摩市浜島町迫子。(4) 志摩国英虞郡片田村、現在の三重県志摩市志摩町片田。

9-3 享保十一年午四月 志摩国英虞郡畔名村差出帳

下々田壹町六反三畝廿壹歩 新田八之盛

分米拾三石九升六合

是者年々定免三ツ御物成ニ差上ケ申候所、式拾年以前亥之年津波にて潮入ニ罷成、御見分之上一作御引被下候、其後大風波御座候而不作仕候へ者、御見分之上一作御引被下候御事、

(中略)

一田畑破損并道・橋・堤・川除等之普請、少々之儀者村ニて繕申候、大破之節ハ御願申上御奉行中様御出被遊、其村他村人夫被召遣候、御扶持米之儀ハ、土井周防守様御代一日壹人ニ付米五合ツ、被下候、松平和泉守様御代亥年、津波にて土手堤田畑大破仕、御奉行中様御出御見分之上普請仕、右之通御扶持米被下候、五合宛にてハ百姓共普請難勤、其後一日壹人ニ付米七合五勺宛被下候御事、

〔読み下し〕

下々田一町六反三畝二十一歩 新田八の盛

分米十三石九升六合

是は年々定免三ツ御物成に差し上げ申し候所、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り、御見分の上一作御引き下され候、その後大風波御座候て作り仕らず候へば、御見分の上一作御引下され候御事、

(中略)

一田畑破損ならびに道・橋・堤・川除けなどの普請、少々之儀は村にて繕い申し候、大破の節は御願い申し上げ、御奉行中様御出で遊ばされ、その村他村

人夫召し遣わされ候、御扶持米の儀は、土井周防守様御代一日一人に付き米五合ずつ下され候、松平和泉守様御代亥年、津波にて土手堤田畑大破仕り、御奉行中様御出で御見分の上普請仕り、右の通り御扶持米下され候、五合ずつにては百姓共普請勤め難く、その後より一日一人に付き米七合五勺ずつ下され候御事、

〔注解〕（1）年貢のこと。

9—4 享保拾一年午ノ四月 志摩国英虞郡和具村指出シ帳

一田畑破損^并道・橋・堤等普請、少々之儀ハ村ニ而繕申候、土井周防守様御代四拾六年以前酉之年、片田村之普請人夫参候節、飢饉ニ付一日一人ニ付御扶持米五合宛被下候、松平和泉守様御代廿七年以前辰巳兩年、片田村普請ニ参候節、一日一人御扶持米五合宛被下候、他村ハ人夫参候義無御座候、松平和泉守様御代廿年以前亥之年、津波ニ而本田潮かこい・新田堤等破損仕候ニ付、拾九年以前子之年御願申上候得者、御見分之上人夫御積^り被為遊、本田潮かこい・堤築立申候分^ケ人夫御積^り被為遊、一日一人ニ付御扶持米五合宛被下、村中ニ而繕申候、板倉近江守様御代拾六年前卯之年、穴川村^ハ堤普請^ニ人夫被 仰付参候節、一日一人ニ付御扶持米七合五勺宛被下候御事、

〔読み下し〕

一田畑破損ならびに道・橋・堤など普請、少々之儀は村にて繕い申し候、土井周防守様御代四十六年以前酉の年、片田村の普請人夫参り候節、飢饉に付一

日一人に付御扶持米五合ずつ下され候、松平和泉守様御代二十七年以前辰巳兩年、片田村普請に参り候節、一日一人御扶持米五合ずつ下され候、他村より人夫参り候義御座無く候、松平和泉守様御代二十以前亥の年、津波にて本田潮囲い・新田堤など破損仕り候に付、十九年以前子の年御願い申し上げ候えば、御見分の上人夫御積^り遊ばさせられ、本田潮囲い・堤築き立て申し候分^ケ人夫御積^り遊ばさせられ、一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され、村中にて繕い申し候、板倉近江守様御代十六年以前卯の年、穴川村へ堤普請に人夫仰せ付けられ参り候節、一日一人に付き御扶持米七合五勺ずつ下され候御事、

〔注解〕（1）潮の侵入を防ぐための囲い。

9—5 享保十一年午ノ四月 志摩国英虞郡迫子村指出帳

下々田貳反八畝貳拾壹歩 新田八之盛
分米貳石貳斗九升六合 定免三ツ五分
右新田之儀、貳拾年以前亥ノ年津浪ニ而潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、

下々田三町壹反八畝貳拾壹歩 新田八之盛
分米貳拾五石四斗九升六合 定免三ツ

右新田之儀、貳拾年以前亥ノ年津浪ニ而潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、

（中略）

（土井周防守様御代新田）

下々田八町貳拾七歩 新田八之盛

分米七斗壹升貳合 定免三ツ壹歩

右新田之儀、貳拾年以前亥ノ年津浪ニ而潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、

(中略)

一青苔百目⁽¹⁾毎年正月ノ二月中ニ捕申候而差上ケ申候得共、貳拾年以前亥ノ年津浪以後はえ不申候ニ付、板倉近江守様御代御改申上、差上ケ不申候御事、

(中略)

一田畑破損^并道・橋・堤・川除等之普請、少々之儀者村ニ而繕申候、松平和泉守様御代貳拾年以前亥ノ年、津波ニ而本田・古新田外、新田堤等破損仕候ニ付、拾九年以前子ノ年御願申上候得者、御見分之上本田・古新田堤繕申候分^者人夫御積^リ被為遊、一日壹人ニ付御扶持米五合宛被下、村中ニ而普請仕候、板倉近江守様御代拾六年以前卯ノ年、穴川村堤普請^ニ人夫出^シ申候処ニ、一日壹人ニ御扶持米七合五勺宛被下候御事、

〔読み下し〕

下々田二反八畝二十一步 新田八の盛

分米二石二斗九升六合 定免三ツ五分

右新田之儀、二十年以前亥の年津浪にて潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

下々田三町一反八畝二十一步 新田八の盛

分米二十五石四斗九升六合 定免三ツ

右新田の儀、二十年以前亥の年津浪にて潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

(土井周防守様御代新田)

下々田八町二十七歩 新田八の盛

分米七斗一升二合 定免三ツ一步

右新田の儀、二十年以前亥の年津浪にて潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

一青苔百目、毎年正月より二月中に捕り申し候て差し上げ申し候えども、二十年以前亥の年津浪以後生え申さず候に付き、板倉近江守様御代御改め申し上げ、差し上げ申さず候御事、

(中略)

一田畑破損ならびに道・橋・堤・川除けなどの普請、少々之儀は村にて繕い申し候、松平和泉守様御代二十年以前亥の年、津波にて本田・古新田ほか、新田堤など破損仕り候に付き、十九年以前子の年御願い申し上げ候えば、御見分の上本田・古新田堤繕い申し候分は人夫御積り遊ばせられ、一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され、村中にて普請仕り候、板倉近江守様御代十六年以前卯の年、穴川村堤普請に人夫出し申し候処に、一日一人に御扶持米七合五勺ずつ下され候御事、

〔注解〕(1) 約三七五グラム。(2) 「生える」の意。

9—6 享保拾壹年午之四月 志摩国英虞郡御座村指出シ帳

一田畑破損^并道・橋・堤等之普請、少々之儀ハ村ニ而繕申候、大分ニ而御座候得

ハ、他村之人夫被召遣候、弥々他村之普請^江茂参候、土井周防守様御代^ニハ他村^江人夫差遣申候覺無御座候、松平和泉守様御代^ニ拾年以前亥之年、津浪^ニ而本田堤^并潮囲外、新田堤破損仕候^ニ付、拾九年前子之年御願申上、御見分之上本田堤・潮囲繕申分ハ人夫御積^リ被遊、一日壹人^ニ付御扶持方米五合宛被下、村^ニ而普請仕候、板倉近江守様御代^ニ拾六年前卯之年、穴川村堤普請之節人夫出^シ申候所、一日壹人^ニ七合五勺宛御扶持米被下候御事、

〔読み下し〕

一田畑破損ならびに道・橋・堤などの普請、少々の儀は村にて繕い申し候、大分にて御座候えば、他村の人夫召し遣われ候、いよいよ他村の普請へも参り候、土井周防守様御代には他村へ人夫差し遣わし申し候覺え御座無く候、松平和泉守様御代二十年以前亥の年、津浪にて本田堤ならびに潮囲いほか新田堤破損仕り候に付、十九年前子の年御願い申し上げ、御見分の上本田堤・潮囲い繕い申す分は人夫御積り遊ばされ、一日一人に付き御扶持方米五合ずつ下され、村にて普請仕り候、板倉近江守様御代十六年前卯の年、穴川村堤普請の節人夫出し申し候所、一日一人に七合五勺ずつ御扶持米下され候御事、

9—7 享保十一年午ノ四月 志摩国英虞郡立神村指出シ帳

下々田壹町八畝貳拾七步 新田八ノ盛

分米八石七斗壹升貳合 定免三ツ

是ハ廿年以前亥年津波之節、年^ニ潮入^ニ罷成候場所、御見分之上一作御引被下候、

町数ノ四拾壹町七反六畝拾四步
分米四百八拾七石九斗壹升貳合

(中略)

土井周防守様御代新田畑

外

下々田壹反貳畝六步 新田八ノ盛

分米九斗七升六合 定免三ツ

下々畑六畝三歩 新畑六ノ盛

分米三斗六升六合 定免三ツ

反畝ノ壹反八畝九歩

分米壹石三斗四升貳合

松平和泉守様御代新田畑

下々田三反四畝拾四歩半 新田八ノ盛

分米貳石七斗五升九合 定免三ツ壹分

下々田貳畝五歩 新田八ノ盛

分米壹斗七升三合 定免三ツ

右三口新田、貳拾年以前亥ノ年津浪之節、年^ニ潮入^ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、

下々田四町三畝四歩 新田八ノ盛

分米三拾貳石貳斗五升壹合 定免貳ツ

内

壹町六畝廿四歩 上^ケ地⁽¹⁾

分米八石五斗三升三合

是ハ廿年以前亥ノ十月津波^ニ而堤破損仕候^ニ付、翌年子ノ春ノ段々堤普請仕候

得共成就不仕候^ニ付、上ヶ地^ニ御願申上度旨作人共奉願候^ニ付、拾三年前午ノ年御願申上候処、願之通被仰付被下候処、右之内壺石六升七合先御代七年以前子ノ年御願申上ヶ起^リ罷成候、

右新田、廿年以前津浪^ニ而潮入^ニ罷成候場所ハ、御見分之上^ニ一作御引被下候、但^シ新田入用ハ格別、御公役^并地下諸役掛^リ物等御赦免被遊被下候、

〔読み下し〕

下々田一町八畝二十七歩 新田八の盛

分米八石七斗一升二合 定免三ツ

是は二十年以前亥年津波の節より、年により潮入りにまかり成り候場所、御

見分の上^ニ一作御引き下され候、

町数メ四十一町七反六畝十四歩

分米四百八十七石九斗一升二合

(中略)

土井周防守様御代新田畑

外

下々田一反二畝六歩 新田八の盛

分米九斗七升六合 定免三ツ

下々畑六畝三歩 新畑六の盛

分米三斗六升六合

反畝メ一反八畝九歩

分米一石三斗四升二合

松平和泉守様御代新田畑

下々田三反四畝十四歩半 新田八の盛

分米二石七斗五升九合 定免三ツ一分

下々田二畝五歩 新田八の盛

分米一斗七升三合 定免三ツ

右三口新田、二十年以前亥の年津波の節より、年により潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上^ニ一作御引き下され候、

下々田四町三畝四歩 新田八の盛

分米三十二石二斗五升一合 定免二ツ

内

一町六畝二十四歩 上げ地

分米八石五斗三升三合

是は二十年以前亥の十月津波にて堤破損仕り候に付き、翌年子の春より段々堤普請仕り候えども成就仕らず候に付き、上げ地に御願い申し上げたき旨作人共願い奉り候に付き、十三年以前午の年御願い申し上げ候処、願の通り仰せ付けられ下され候処、右の内一石六升七合、先御代七年以前子の年御願い申し上げ起こし帰りにまかり成り候、

右新田、二十年以前津浪にて潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上^ニ一作御引下され候、但し新田入用は格別、御公役ならびに地下諸役掛^リ物など御赦免遊ばされ下され候、

〔注解〕(1) 領主に収公された無年貢地。

9—8 享保十一年午四月 志摩国英虞郡志嶋村差出帳

一田畑破損^并道・橋・堤・川除等之普請、少々之儀ハ村^ニ而繕申候、大破之節

者御願申上、御奉行中様御出被遊、其村他村人夫被召仕候、御扶持米之儀、土井周防守様御代一日壹人^ニ付米五合宛被下候、松平和泉守様御代亥年、津波^ニ而土手堤・田畑大破仕、御奉行中様御出御見分之上普請仕、右之通御扶持米被下候、五合宛^ニ而者百姓共普請難勤、其後一日壹人^ニ付米七合五勺宛被下候御事、

(中略)

一池田川樋上下式ヶ所

是ハ甲賀村・志嶋村田地入交^リ申候、津波以来度々高波満水^ニ而田地江潮打込、又ハ水旱荒、百姓共難儀奉存候^ニ付、去巳年松平丹波守様御代両村ハ金子御拝借御願申上、普請仕候御事、

〔読み下し〕

一田畑破損ならびに道・橋・堤・川除けなどの普請、少々之儀は村にて繕い申し候、大破の節は御願ひ申し上げ、御奉行中様御出で遊ばされ、その村他村人夫召し仕られ候、御扶持米の儀、土井周防守様御代一日一人に付き米五合ずつ下され候、松平和泉守様御代亥年、津波にて土手堤・田畑大破仕り、御奉行中様御出で御見分の上普請仕り、右の通り御扶持米下され候、五合ずつにては百姓ども普請勤め難く、その後より一日一人に付き米七合五勺ずつ下され候御事、

(中略)

一池田川樋上下式ヶ所

是ハ甲賀村・志嶋村田地入り交^リ申し候、津波以来たびたび高波満水にて田地へ潮打ち込み、又ハ水旱荒れ、百姓ども難儀に存じ奉り候に付き、去巳年松平丹波守様御代両村より金子御拝借御願ひ申し上げ、普請仕り候御

事、

〔注解〕(1) 志摩国英虞郡甲賀村、現在の三重県志摩市阿児町甲賀。(2) 志摩国英虞郡志島村、現在の三重県志摩市阿児町志島。(3) 志摩国鳥羽藩主松平光慈。

9—9 享保十一年午四月 志摩国英虞郡甲賀村差出帳

下々田五反五畝拾貳歩 同(新田) 八之盛
分米四石四斗三升貳合 定免三ツ取
是ハ亥之年津波^ニ而大破^ニ付、拾九年以前子之年御願申上、永川成^ハ以荒地^ニ罷成候、

(中略)

石淵 癸未年改^② 午年^③ハ永荒之内、庚子年改起返^{④⑤}

下々田壹反三畝拾歩 新田 八之盛

分米壹石六升七合 定免貳ツ取

同所 癸未年改之内

下々田九反三畝拾歩 同 八之盛

分米七石四斗六升六合 定免貳ツ取

是ハ亥之年津波^ニ而大破^ニ付、拾三年^{①ニカ}以前午之年御願申上、永荒^ニ罷成候、

田畑分米合貳拾六石壹斗六升

内七石四斗六升六合 右石淵永荒引

(中略)

一田畑破損^并道・橋・堤・川除等之普請、少々之儀ハ村^ニ而繕申候、大破之節者御願申上、御奉行中様御出被遊、其村他村人夫被召仕候、御扶持米之儀、土

井周防守様御代一日壹人^ニ付米五合宛被下候、松平和泉守様御代亥之年、津波^ニ而土手堤大破仕、御奉行中様御出御見分之上普請仕、右之通御扶持米被下候、五合宛^ニ而者百姓共普請難勤、其後一日壹人^ニ付米七合五勺宛被下候御事、

(中略)

一壺ヶ所 并木松原

右松木之儀、田畑囲・波除ヶ・潮風除ヶ^ニ植松仕大切之場所ニ御座候、式拾年以前亥之年津浪^ニ而間々倒木枯申候^ニ付、段々植松仕候、先々御代様御伐被遊候儀無御座候御事、

〔読み下し〕

下々田五反五畝十二歩 同(新田) 八の盛

分米四石四斗三升二合 定免三ツ取

是は亥の年津波にて大破に付き、十九年以前子の年御願ひ申し上げ、永川成りを以って荒地にまかり成り候、

(中略)

石淵 癸未年改め 午年より永荒の内、庚子年改め起こし返り

下々田一反三畝十歩 新田八の盛

分米一石六升七合 定免二ツ取

同所 癸未年改めの内

下々田九反三畝十歩 同八の盛

分米七石四斗六升六合 定免二ツ取

是は亥の年津波にて大破に付き、十三年以前午の年御願ひ申し上げ、永荒にまかり成り候、

田畑分米合二十六石一斗六升

内七石四斗六升六合 右石淵永荒引き

(中略)

一田畑破損ならびに道・橋・堤・川除けなどの普請、少々の儀は村にて繕い申し候、大破の節は御願ひ申し上げ、御奉行中様御出で遊され、その村他村人夫召し仕られ候、御扶持米の儀、土井周防守様御代一日一人に付き米五合ずつ下され候、松平和泉守様御代亥の年、津波にて土手堤大破仕り、御奉行中様御出で御見分の上普請仕り、右の通り御扶持米下され候、五合ずつにては百姓ども普請勤め難く、その後より一日一人に付き米七合五勺ずつ下され候御事、

(中略)

一、一ヶ所 並木松原

右松木の儀、田畑囲い・波除け・潮風除けに植松仕る大切の場所に御座候、二十年以前亥の年津浪にて間々倒木を枯れ申し候に付、段々植松仕り候、先々御代様より御伐り遊ばされ候儀御座無く候御事、

〔注解〕(1) 長期間の川成り(常に水がつく川と一体化した状態)のこと。(2) 元禄十六年(一七〇三)。(3) 正徳四年(一七一四)。(4) 享保五年(一七二〇)。(5) 休耕となっていた土地を開墾し直すこと。

9—10 享保十一年午ノ四月 志摩国英虞郡鵜方村指出帳

下々田貳町壺反四畝拾八歩 新田八之盛

分米拾七石壺斗六升八合 定免三ツ

右新田之儀、式拾年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作
御引被下候、

下々田七反八畝式拾七歩 新田八之盛

分米六石三斗壹升式合 定免式ツ

右新田之儀、式拾年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作
御引被下候、

(中略)

土井周防守様御代新田畑

畝数合三反三步

分米壹石八斗六升式合

下々田式町式畝拾式歩 新田八之盛

分米拾六石壹斗九升式合 定免式ツ五分

右新田之儀、式拾年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作
御引被下候、

下々田式町壹反壹畝七歩 新田八之盛

分米拾六石八斗九升八合 定免三ツ壹分

右新田之儀、式拾年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作
御引被下候、

(中略)

下々田三反三畝歩 新田八之盛

分米式石六斗四升 定免三ツ

右新田之儀、式拾年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作
御引被下候、

下々畑式反七畝式拾歩 新畑六之盛

分米壹石六斗六升 定免三ツ

下々田拾八町壹反八畝拾六歩半 新田八之盛

壹町三反歩

拾八年以前丑ノ年ノ潮入永荒引

内 壹町式畝式拾八歩

五年以前寅ノ年ノ上地引

五町式反式畝式拾歩

去巳ノ年ノ上地引

分米百四拾五石四斗八升四合 定免式ツ

拾石四斗

拾八年以前丑ノ年ノ潮入永荒引

内 八石式斗三升五合

五年以前寅ノ年ノ上地引

四拾壹石八斗壹升三合

去巳ノ年ノ上地引

右新田之儀、式拾年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作
御引被下候、

(中略)

一田畑破損^并道・橋・堤等之普請、少宛之儀ハ村中ニ而繕申候、他村之普請ニ茂
參候、土井周防守様御代ニハ他村江人夫差遣シ申候覺無御座候、松平和
泉守様御代式拾年以前亥ノ年、津波ニ而本田・古新田外、新田堤破損仕候ニ
付、拾九年以前子之年御願申上御見分之上、本田・古新田堤築立申候分ハ人
夫御積^リ被為遊、一日壹人ニ付御扶持米五合宛被下、村中ニ而繕申候、勿論
他村之普請ニ參候節茂一日壹人ニ付御扶持米五合宛被下候得共、五合宛被下
候而ハ百姓共普請難勤候ニ付、拾八年以前丑ノ年御断申上候得者、一日壹人ニ
付御扶持米七合五勺宛被下候、板倉近江守様御代拾六年以前卯之年、穴川
村堤普請之節茂一日壹人ニ付七合五勺宛被下候御事、

〔読み下し〕

下々田二町一反四畝十八歩 新田八之盛

分米十七石一斗六升八合 定免三ツ

右新田の儀、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

下々田七反八畝二十七歩 新田八の盛

分米六石三斗一升二合 定免二ツ

右新田の儀、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

土井周防守様御代新田畑

畝数合三反三歩

分米一石八斗六升二合

下々田二町二畝十二歩 新田八の盛

分米十六石一斗九升二合 定免二ツ五分

右新田の儀、二十年以前亥の年、津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

下々田二町一反一畝七歩 新田八の盛

分米十六石八斗九升八合 定免三ツ一分

右新田の儀、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

下々田三反三畝歩 新田八の盛

分米二石六斗四升 定免三ツ

右新田の儀、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

下々畑二反七畝二十歩 新畑六の盛

分米一石六斗六升 定免三ツ

下々田十八町一反八畝十六歩半 新田八の盛

一町三反歩

十八年以前丑の年より潮入り永荒引

内 一町二畝二十八歩

五年以前寅の年より上げ地引

五町二反二畝二十歩

去る巳の年より上げ地引

分米百四十五石四斗八升四合 定免二ツ

十石四斗

十八年以前丑の年より潮入り永荒引

内 八石二斗三升五合

五年以前寅の年より上げ地引

四十一石八斗一升三合

去る巳の年より上げ地引

右新田の儀、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

一田畑破損ならびに道・橋・堤などの普請、少しずつの儀は村中にて繕い申し候、他村の普請にも参り候、土井周防守様御代には他村へ人夫差し遣し申し候覚え御座無く候、松平和泉守様御代二十年以前亥の年、津波にて本田・古新田外、新田堤破損仕り候に付き、十九年以前子の年御願ひ申し上げ御見分の上、本田・古新田堤築き立て申し候分は、人夫御積り遊ばさせられ、一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され、村中にて繕い申し候、勿論他村の普請に参り候節も、一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され候えども、五合ずつ下され候ては百姓ども普請勤め難く候に付き、十八年以前丑の年御断り申し上げ候えば、一日一人に付き御扶持米七合五勺ずつ下され候、板倉近江守様御代十六年以前卯の年、穴川村堤普請の節も一日一人に付き七合五勺ずつ下され候御事、

9—11 享保十一年午四月 志摩国英虞郡神明浦村指出帳

下々田貳町三畝貳拾壹歩 新田八之盛

分米拾六石貳斗九升六合 定免三ツ

是ハ貳拾年以前亥之年津波之節、年ニハ潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之上
一作御引被下候、

(中略)

土井周防守様御代新田

下々田五反七畝歩 新田八之盛

○分米四石五斗六升 定免三ツ

是ハ貳拾年以前亥ノ年津波之節、潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御
引被下候、

松平和泉守様御代新田畑

○高九升四合 畑田成斗代増^①
②

本免

下々田壹町三反貳畝八歩 新田八之盛

○分米拾石五斗八升壹合 定免三ツ壹分

下々田壹反六畝六歩 新田八之盛

△分米壹石貳斗九升六合 定免三ツ

下々田壹町壹反七畝拾三歩 新田八之盛

一分米九石三斗九升五合 定免貳ツ五分

右三口新田、貳拾年以前亥ノ年津波之節、潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之
上一作御引被下候、右新田之内貳反六畝歩、分米貳石八升定免貳ツ五分御
物成、是ハ貳拾年以前亥十月津波ニ而堤破損仕候ニ付、翌年子之春、段々堤

普請仕候得共、高潮故成就不仕候ニ付、御公儀様江指上ケ申度と作人共奉
願候ニ付、其段十三年以前午ノ年以書付御願申上候得者、永荒ニ被 仰付、
年々御免定ニ御引被下候、

下々田三町四反七畝貳拾七歩 新田八之盛

分米貳拾七石八斗三升貳合 定免貳ツ

是ハ貳拾年以前亥之年津波之節、年ニハ潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之
上一作御引被下候、右新田之内三町壹反貳畝廿八歩、分米貳拾五石三升五
合定免貳ツ御物成、是ハ貳拾年以前亥十月津波ニ而堤破損仕候ニ付、翌年
子ノ春、段々堤普請仕候得共、高潮故成就不仕候ニ付、御公儀様江指上ケ
申度と作人共奉願候ニ付、其段十三年以前午ノ年以書付御願申上候得ハ、永
荒ニ被 仰付、年々御免定ニ御引被下候、

〔読み下し〕

下々田二町三畝二十一歩 新田八の盛

分米十六石二斗九升六合 定免三ツ

是ハ二十年以前亥の年津波の節より、年により潮入りにまかり成り候場所は、
御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

土井周防守様御代新田

下々田五反七畝歩 新田八の盛

○分米四石五斗六升 定免三ツ

是ハ二十年以前亥の年津波の節より、潮入りにまかり成り候場所は、御見分
の上一作御引き下され候、

松平和泉守様御代新田畑

○高九升四合 畑田成り、斗代増

本免

下々田一町三反二畝八歩 新田八の盛

○〇分米十石五斗八升一合 定免三ツ一分

下々田一反六畝六歩 新田八の盛

△分米一石二斗九升六合 定免三ツ

下々田一町一反七畝十三歩 新田八の盛

一分米九石三斗九升五合 定免二ツ五分

右三口新田、二十年以前亥の年津波の節より潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、右新田の内二反六畝歩、分米二石八升定免二ツ五分御物成、是は二十年以前亥十月津波にて堤破損仕り候に付き、翌年の春より段々堤普請仕り候えども、高潮ゆえ成就仕らず候に付き、御公儀様へ指し上げ申したくと作人ども願ひ奉り候に付き、その段十三年以前午の年、書付をもつて御願ひ申し候えば、永荒に仰せ付けられ、年々御免定に御引き下され候、

下々田三町四反七畝二十七歩 新田八の盛

分米二十七石八斗三升二合 定免二ツ

是は二十年以前亥の年津波の節より、年により潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、右新田の内三町一反二畝二十八歩、分米二十五石三升五合定免二ツ御物成、是は二十年以前亥十月津波にて堤破損仕り候に付き、翌年の春より段々堤普請仕り候えども、高潮ゆえ成就仕らず候に付き、御公儀様へ指し上げ申したくと作人ども願ひ奉り候に付き、その段十三年以前午の年書付をもつて御願ひ申し上げ候えば、永荒に仰せ付けられ、年々御免定に御引き下され候、

〔注解〕(1) 畑地を開墾し、田地となったこと。(2) 一反当たりの石盛高が増加すること。

9—12 享保十一年午四月十三日 志摩国答志郡河内村指出帳

一松平和泉守様御代、舟津村^①新田堤式十年前以前亥之年津波^②而破損仕、賀茂五ヶ村・磯部組^③寄人夫罷出相勤、御扶持米一日壹人^④付五合宛被下候、右惣而御扶持米之義者御年貢継^⑤仕候、併百姓迷惑仕候節者其時々^⑥申請候御事、

〔読み下し〕

一松平和泉守様御代、舟津村新田堤二十年以前亥の年津波にて破損仕り、賀茂五ヶ村・磯部組より寄人夫まかり出で相勤め、御扶持米一日一人に付き五合ずつ下され候、右惣じて御扶持米の義は御年貢継ぎに仕り候、しかしながら百姓迷惑仕り候節は、その時々^⑥に申し請け候御事、

〔注解〕(1) 志摩国答志郡船津村、現在の三重県鳥羽市船津町。(2) 答志郡内の加茂川流域に位置する、船津、河内、岩倉、松尾、白木の五か村。(3) 江戸期は、各村を支配するため、その上部組織として大庄屋による支配体制を敷いたが、鳥羽藩ではそれを組と呼んでいた。磯部組は、その内の一つとなり、伊雑ノ浦沿岸に位置する、五知・杵掛・山田・上之郷・恵利原・築地・迫間・穴川・下之郷・飯浜・坂崎・神明浦・立神の一三か村が所属していた。(4) 扶持米として支給される分を年貢収納高より引く形で処理すること。

9—13 享保拾一年午四月十三日 志摩国答志郡指出シ帳

岩倉村

一松平和泉守様御代、舟津村新田堤式拾年以前亥ノ年津波ニ破損仕、加茂五ヶ村・磯部組寄人夫罷出相勤、御扶持米一日壹人ニ付五合宛被下候、右惣而御扶持米之義ハ御年貢次ニ仕候、併百姓めいわく仕候節ハ其時々ニ申請候御事、

〔読み下し〕

一松平和泉守様御代、舟津村新田堤二十年以前亥の年津波にて破損仕り、加茂五ヶ村・磯部組寄人夫まかり出で相勤め、御扶持米一日一人に付き五合ずつ下され候、右惣じて御扶持米の義は御年貢次ぎに仕り候、しかしながら百姓めいわく(迷惑)仕り候節は、その時々申し請け候御事、

9—14 享保十一年午四月 志摩国答志郡安乗村差出帳

一安乗村之儀式拾年以来津波以後、村囲石垣并田畑囲波ニ而節々被打破難儀仕候ニ付、段々繕仕候処、別而近年及度々百姓共居屋敷囲方便ニ盡申候而、先祖分之屋敷を捨テ立退申躰ニ罷成候ニ付、段々村難立難儀至極ニ奉存、去春右あせ山の小松当分冥加金差上、以後ハ山年貢ニ而被為下置候ハ、見生立成来仕候て囲杭ニ仕村相続仕候様ニ仕度御願申上候処、御聞届ケ御免被成下候処、折節御収役ニ御障り御座候由被仰聞、右願書御下ケ被遊難儀至極奉存候処、国府村分右之山ハ論所之山ト申出シ候と承候ニ付、当春御願申上候ハ、右山之義ニ付国府村分論所と申候儀ニ御座候て乍恐被遂御詮議御見分之上被為仰付被下候様ニと御願申上候得ハ、最早御交代之節ニ成御取込候間、大庄屋五人と

して取計、右之訳立申様ニ可仕旨被仰渡候由ニ而大庄屋中分被申付候ハ、右之山江先入込申候間鋪候、御交代茂過候ハ、御取計可被成旨被申付候ニ付相守罷有候、

〔読み下し〕

一安乗村の儀、二十年以来津波以後、村囲い石垣ならびに田畑囲い、波にて節々打ち破られ難儀仕り候に付き、段々繕い仕り候処、別て近年たびたびに及び百姓ども居屋敷囲い方便につき申し候て、先祖よりの屋敷を捨て立ち退き申す体により成り候に付き、段々村立ち難く難儀至極に存じ奉り、去る春右あせ山の小松当分冥加金差し上げ、以後は山年貢にて下し置かさせられ候はば、見生え立ち成り来たり仕り候て、囲杭に仕り村相続仕り候様に仕りたく御願い申し上げ候処、御聞届け御免成し下され候処、折節御収役に御障り御座候よし仰せ聞せられ、右願書御下げ遊ばされ難儀至極存じ奉り候処、国府村より右の山は論所の山と申し出で候と承り候に付き、当春御願い申し上げ候は、右山の義に付き国府村より論所と申し候儀に御座候て、恐れながら御詮議を遂げられ、御見分の上仰せ付けさせられ下され候様にと御願い申し上げ候えは、最早御交代之節に御取込に成り候間、大庄屋五人として取り計らい、右の訳立ち申す様に仕るべき旨、仰せ渡され候よしにて大庄屋中より申し付けられ候は、右の山へ先ず入り込み申し候まじく候、御交代も過ぎ候はば御取り計らい成らるべき旨申し付けられ候に付き、相守りまかり有り候、

〔注解〕(1) 志摩国答志郡安乗村、現在の三重県志摩市阿児町安乗。(2) 山にかか

貢徴収された。(3) 志摩国答志郡国府村、現在の三重県志摩市阿児町国府。(4) 村境・山論などの争論となった土地。(5) 最早、さつそくの意。(6) 複数の村を統括する組ごとに置かれた者。農民身分ではあるが、各村の代表者である庄屋に対し、その上位統括者として位置づけられる存在。

9—15 享保十一丙午年四月十三日 志摩国答志郡安楽嶋村指出シ帳

下々新田壹町四反五畝九歩 八ノ盛

分米拾壹石六斗式升四合

是ハ年々定免三ツ御物成ニ指上候得共、式拾年以前亥之年津波ニ而潮入ニ罷成、御見分之上一作御引被下候、

内四斗九升六合 是ハ津波ニ而荒申ニ付、其節御願申上御改請、永荒ニ御引被下候、

(中略)

一松平和泉守様御代式拾年以前亥年、津波ニ而大破仕候田地、百姓手前ニ而普請難叶所ハ、御願申上御見分被遊人足何程と御積り、一日壹人ニ付御扶持米五合宛被下候、并新田堤破損浪請仕候節ハ松杭木枝葉等共申請候、ゆり板損候節茂松木申請候而ゆり板ニ仕候、右杭木・ゆり板之義ハ樋野山小浜村山之内ニ而先御代々申請候御事、

(中略)

一松平和泉守様御代式拾年以前亥十月、津波ニ付村中家財并稲粃・俵物不殘流失仕候ニ付、村中御年貢御赦免被遊被下候、但鳥羽出作之義ハ御上納仕候、

村中之者共及喝命ニ申ニ付、御願申上壹人ニ付米五升ツ、三年賦ニ御拝借仕候御事、

〔読み下し〕

下々新田一町四反五畝九歩 八の盛

分米十一石六斗二升四合

是は年々定免三ツ御物成に指し上げ候えども、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り、御見分の上一作御引下され候、

内四斗九升六合 是は津波にて荒れ申すに付き、その節御願い申し上げ御改を請け、永荒に御引き下され候、

(中略)

一松平和泉守様御代二十年以前亥年、津波にて大破仕り候田地、百姓手前にて普請叶い難き所は、御願い申し上げ御見分遊ばされ、人足いかほどと御積り、一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され候、ならびに新田堤破損し、浪請け仕り候節は松杭木・枝葉などとも申し請け候、ゆり板損じ候節も松木申し請け候て、ゆり板に仕り候、右杭木・ゆり板の義は樋野山・小浜村山の内にて先御代より請け候御事、

(中略)

一松平和泉守様御代二十年以前亥十月、津波に付き村中家財ならびに稲粃・俵物残らず流失仕り候に付き、村中御年貢御赦免遊ばされ下され候、但し鳥羽出作の義は御上納仕り候、村中の者ども喝命に及び申すに付き、御願い申し上げ一人に付き米五升ずつ三年賦に御拝借仕り候御事、

〔注解〕(1) 志摩国答志郡小浜村、現在の三重県鳥羽市小浜町。(2) 鳥羽城下とな

る志摩国答志郡鳥羽、現在の三重県鳥羽市。

9—16 享保十一年午之四月 志摩国英虞郡 塩屋村指出帳

下田壹畝拾五歩 新田拾壹之盛

分米壹斗六升五合 定免三ツ

右新田之儀、式拾年以前亥之年津波^ニ而潮入^ニ罷成候場所ハ、御見分之上^一作御引被下候、

下々田拾八歩 新田八之盛

分米四升八合 定免三ツ五分

下々田五反七畝九歩 新田八之盛

分米四石五斗八升四合 定免三ツ

右新田之儀、式拾年以前亥之年津波^ニ而潮入^ニ罷成候場所ハ、御見分之上^一作御引被下候、

(中略)

(土井周防守様御代新田)

下々田七畝九歩 新田八之盛

分米五斗八升四合 定免三ツ

右新田之儀、式拾年以前亥之年津波^ニ而潮入^ニ罷成候場所ハ、御見分之上^一作御引被下候、

下々畑五畝拾三歩 新畑六之盛

分米三斗式升六合 定免三ツ

下々田六反五畝拾式歩 新田八之盛

分米五石式斗三升式合 定免式ツ五分

右新田之儀、式拾年以前亥之年津波^ニ而潮入^ニ罷成候場所ハ、御見分之上^一作御引被下候、

(中略)

一田畑破損^并道・橋・堤・川除等之普請、少々之儀ハ村^ニ而繕申候、松平和泉守様御代式拾年以前亥之年、津波^ニ而本田・古新田外、新田堤等破損仕候^ニ付、十九年以前子之年御願申上候得者、御見分之上本田・古新田堤繕申候分ハ人夫御積^リ被為^遊、一日壹人^ニ付御扶持米五合宛被下、村中^ニ而普請仕候、板倉近江守様御代拾六年以前卯之年、穴川村堤普請^ニ人夫出^シ申候所^ニ、一日壹人^ニ付御扶持米七合五勺宛被下候御事、

[読み下し]

下田一畝十五歩 新田十一の盛

分米一斗六升五合 定免三ツ

右新田の儀、二十年以前亥之年津波^ニにて潮入^リにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

下々田十八歩 新田八の盛

分米四升八合 定免三ツ五分

下々田五反七畝九歩 新田八の盛

分米四石五斗八升四合 定免三ツ

右新田の儀、二十年以前亥之年津波^ニにて潮入^リにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

(土井周防守様御代新田)

下々田七畝九歩 新田八の盛

分米五斗八升四合 定免三ツ

右新田の儀、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

下々畑五畝十三歩 新畑六の盛

分米三斗二升六合 定免三ツ

下々田六反五畝十二歩 新田八の盛

分米五石二斗三升二合 定免二ツ五分

右新田の儀、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

一田畑破損ならびに道・橋・堤・川除けなどの普請、少々之儀は村にて繕い申し候、松平和泉守様御代二十年以前亥の年、津波にて本田・古新田外、新田堤など破損仕り候に付き、十九年以前子の年御願い申し上げ候えば、御見分の上本田・古新田堤繕い申し候分は人夫御積り遊ばさせられ、一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され、村中にて普請仕り候、板倉近江守様御代十六年以前卯の年、穴川村堤普請に人夫出し申し候所に、一日一人に付き御扶持米七合五勺ずつ下され候御事、

9—17 享保十一年午之四月 志摩国英虞郡 檜山路村指

出帳

外 土井周防守様御代新田

下々田四反式畝歩 新田八之盛

分米三石三斗六升 定免三ツ

右新田之儀、式拾年以前亥之年津波^ニ而潮入^ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、

下々田壹反式畝拾歩 新田八之盛

分米九斗八升七合 定免三ツ壹分

右新田之儀、式拾年以前亥之年津波^ニ而潮入^ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、

下々田六反三畝式拾七歩 新田八之盛

分米五石壹斗壹升式合 定免三ツ

右新田之儀、式拾年以前亥之年津波^ニ而潮入^ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、

(中略)

一田畑破損^并道・橋・堤・川除等之普請、少々之儀ハ村^ニ而繕申候、松平和泉守様御代式拾年以前亥之年、津波^ニ而本田・古新田外、新田堤等破損仕候^ニ付、拾九年以前子之年御願申上^ケ候得者、御見分之上本田・古新田堤繕申候分ハ人夫御積^リ被為^遊、一日壹人^ニ付御扶持米五合宛被下、村中^ニ而普請仕候、板倉近江守様御代十六年以前卯之年、穴川村堤普請^ニ人夫出^シ申候所^ニ、一日壹人^ニ付七合五勺宛御扶持米被下候御事、

〔読み下し〕

外 土井周防守様御代新田

下々田四反二畝歩 新田八の盛

分米三石三斗六升 定免三ツ

右新田の儀、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

下々田一反二畝十歩 新田八の盛

分米九斗八升七合 定免三ツ一分

右新田の儀、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

下々田六反三畝二十七歩 新田八の盛

分米五石一斗一升二合 定免三ツ

右新田の儀、二十年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

一田畑破損ならびに道・橋・堤・川除などの普請、少々の儀は村にて繕い申し候、松平和泉守様御代二十年以前亥の年、津波にて本田・古新田外、新田堤など破損仕り候に付き、十九年以前子の年御願い申し上げ候えは、御見分の上本田・古新田堤繕い申し候分は人夫御積り遊ばさせられ、一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され、村中にて普請仕り候、板倉近江守様御代十六年以前卯の年、穴川村堤普請に人夫出し申し候所に、一日一人に付き七合五勺ずつ御扶持米下され候御事、

9—18 享保十一年午四月 志摩国答志郡畔蛸村差出帳

下々田六畝貳拾四歩 新田八ツ盛

分米五斗四升四合 定免三ツ

右新田貳拾年以前亥年津波^ニ而潮入^ニ罷成、御見分之上一作御引被下候、

(中略)

下々田四畝歩 甲申年改⁽¹⁾ 外新田八ツ盛

分米三斗貳升 定免貳ツ

右新田貳拾年以前亥年津波^ニ而潮入^ニ罷成、御見分之上一作御引被下候、

下々田壱町壱反拾貳歩 外新田八ツ盛

分米八石八斗三升貳合 定免二ツ

右新田之儀、貳拾年以前亥年津波^ニ而潮入^ニ罷成、作人捨申^ニ付、御免定永荒引^ニ御引捨被下候、

(中略)

一御杉山^字寄山<sup>一谷貳拾六間二四間
一谷三拾六間二六間</sup>

右者 松平和泉守様御代貳拾貳年以前酉年、杉苗貳千四百貳拾本両谷へ御植被成候、内千六本生木、千四百拾四本ハ貳拾年以前亥年津波揚^り、其後度々⁽²⁾之大風^ニ而かれ申候、生木千六本之内、先御代去巳年御用^ニ付、拾三本根伐仕差上申候御事、

〔読み下し〕

下々田六畝二十四歩 新田八ツ盛

分米五斗四升四合 定免三ツ

右新田二十年以前亥年津波にて潮入りにまかり成り、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

下々田四畝歩 甲申年改め⁽²⁾ 外新田八ツ盛

分米三斗二升 定免二ツ

右新田二十年以前亥年津波にて潮入りにまかり成り、御見分之上一作御引き下され候、

下々田一町一反十二歩 外新田八ツ盛

分米八石八斗三升二合 定免二ツ

右新田の儀、二十年以前亥年津波にて潮入りにまかり成、作人捨て申すに付き、御免定永荒引きに御引き捨て下され候、

(中略)

一御杉山字寄山 一谷二十六間に四間一谷三十六間に六間

右は松平和泉守様御代二十二年以前酉年、杉苗二千四百二十本両谷へ御植え成られ候、内千六本生木、千四百十四本は二十年以前亥年津波揚り、その後たびたびの大風にてかれ(枯れ)申し候、生木千六本の内、先御代去る巳年御用に付き、十三本根伐り仕り差し上げ申し候御事、

〔注解〕(1) 宝永元年(一七〇四)。(2) 津波が来たこと。(3) 枯れるの意。

9—19 享保十一年午四月十三日 志摩国答志郡浦村指出

シ帳

下々田九反三畝拾五歩 新田 八之盛

分米七石四斗八升

是ハ年々定免三ツ御物成ニ差上申候得共、式拾年以前亥年津波ニ付、潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、

(中略)

下畑三町四反式畝式拾八歩 八之盛

分米式拾七石四斗三升五合

内四畝五歩

是ハ式拾年以前津波ニ付潰地ニ罷成、御見分之上年々御引被下候、

下々畑六反六畝式拾壹歩 六之盛

分米四石式合

内七畝七歩

是ハ式拾年以前津波ニ付潰地ニ罷成、御見分之上年々御引被下候、

(中略)

松平和泉守様御代新田

下々田式反壹歩半 新田 八之盛

分米壹石六斗四合

是ハ壬申年⁽¹⁾亥年迄御改、定免三ツ壹歩御物成ニ差上申候処、式拾年以前亥之年津浪ニ付、潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、
(中略)

松平和泉守様御代新田

下々田壹町七畝式拾六歩 新田 八之盛

分米八石六斗式升九合

是ハ壬午年⁽³⁾亥年迄御改、定免式ツ御物成ニ差上申候処、式拾年以前亥、年より津浪ニ付潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、

同御代

下々畑五畝式拾五歩 新畑 六之盛

分米三斗五升

是ハ戌年⁽²⁾亥年迄御改、定免式ツ御物成ニ差上申候処、式拾年以前亥年⁽²⁾津浪ニ付潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、

(中略)

同（松平和泉守様）御代

一高耆斗三合 丁丑年⁽⁴⁾酉年迄御改
畑田成斗代増

一高耆斗五合 畑田成斗代増

是ハ丙戌年⁽⁶⁾御改、定免式ツ御物成差上申候処、式拾年以前亥年津浪ニ付、潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之上ニ作御引被下候、

（中略）

一松平和泉守様御代式拾年以前亥之年十月、津浪ニ付村中家財^并稻^并・俵物不残流失仕候ニ付、村中御年貢御赦免被遊被下候、但し、いじか村⁽⁷⁾出作之義ハ御上納仕候、村中之者共及喝命申ニ付、耆人ニ付米五升宛三年賦ニ御拝借仕候、田地百姓手前ニ而普請難叶所御願申上ケ、御代官様御見分被遊人足何程と御積り被成、一日耆人ニ付御扶持米五合宛被下候御事、

〔読み下し〕

下々田九反三畝十五歩 新田 八の盛

分米七石四斗八升

是は年々定免三ツ御物成に差し上げ申し候えども、二十年以前亥年津波に付き、潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上ニ作御引き下され候、

（中略）

下畑三町四反二畝二十八歩 八の盛

分米二十七石四斗三升五合

内四畝五歩

是は二十年以前津波に付き潰れ地にまかり成り、御見分の上年々御引き

下され候、

下々畑六反六畝二十一歩 六の盛
分米四石二合

内七畝七歩

是は二十年以前津波に付き潰れ地にまかり成り、御見分の上年々御引き下され候、

（中略）

松平和泉守様御代新田

下々田二反一歩半 新田 八の盛

分米一石六斗四合

是ハ壬申年より壬午年まで御改め、定免三ツ一歩御物成に差し上げ申し候処、二十年以前亥の年津浪に付き、潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上ニ作御引き下され候、

（中略）

松平和泉守様御代新田

下々田一町七畝二十六歩 新田 八の盛

分米八石六斗二升九合

是は壬午年より亥年まで御改め、定免二ツ御物成に差し上げ申し候処、二十年以前亥の年より津浪に付き潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上ニ作御引き下され候、

同御代

下々畑五畝二十五歩 新畑 六の盛

分米三斗五升

是は戌年より亥年まで御改め、定免二ツ御物成に差し上げ申し候処、二十年以前亥年より津浪に付き潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

同(松平和泉守様)御代

一高一斗三合 丁丑年より酉年まで御改め
畑田成り斗代増し

一高一斗五合 畑田成り斗代増し

是は丙戌年御改め、定免二ツ御物成差し上げ申し候処、二十年以前亥年津浪に付き、潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

一松平和泉守様御代二十年以前亥の年十月、津浪に付き村中家財ならびに稲粃・俵物残らず流失仕り候に付き、村中御年貢御赦免遊ばされ下され候、但し、いじか(石鏡)村出作の義は御上納仕り候、村中の者ども喝命に及び申すに付き、一人に付き米五升ずつ三年賦に御拝借仕り候、田地百姓手前にて普請叶いがたき所御願ひ申し上げ、御代官様御見分遊ばされ人足いかほどと御積り成られ、一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され候御事、

〔注解〕(1) 元禄五年(一六九二)。(2) 元禄十五年(一七〇二)。(3) 丁亥〓宝永四年(一七〇七)カ。(4) 元禄十年(一六九七)。(5) 乙酉〓宝永二年(一七〇五)カ。(6) 宝永三年(一七〇六)。(7) 志摩国答志郡石鏡村、現在の鳥羽市石鏡町。

9—20 享保十一年午四月 志摩国答志郡堅子村差出帳

外新田畑

下々田三反式拾四歩 八ノ盛

分米式石四斗六升四合 定免式ツ

下々田四畝拾八歩 八ノ盛

分米三斗六升八合 定免式ツ

右新田式拾年以前亥ノ年、津浪_ニ而潮入場所_ニ罷成、御見分之上一作御引被下候、

〔読み下し〕

外新田畑

下々田三反二十四歩 八の盛

分米二石四斗六升四合 定免二ツ

下々田四畝十八石 八の盛

分米三斗六升八合 定免二ツ

右新田二十年以前亥の年、津浪にて潮入り場所にまかり成り、御見分の上一作御引き下され候、

9—21 享保十一年午四月 志摩国答志郡下之郷村指出シ帳

松平和泉守様御代新田畑

下々田五畝式拾四歩 新田八之盛

分米四斗六升四合 定免式ツ五分

下々田四反四畝貳拾七歩 新田八之盛
分米三石五斗九升貳合 定免貳ッ

内壺反六畝貳拾歩ハ津波以後堤成就不仕候^ニ付、板倉近江守様御代十五年以前辰年永引^ニ御願申上、願之通被仰付候処、十年以前酉年、右場所三反歩取立^①申候而、右反畝之分米壺石三斗三升三合、酉年^②御免定^ニ而御立返^シ被遊候、

右二口新田二十年以前亥年津波之節^①、年^ニ依^リ潮入罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、

〔読み下し〕

松平和泉守様御代新田畑

下々田五畝二十四歩 新田八の盛

分米四斗六升四合 定免二ッ五分

下々田四反四畝二十七歩 新田八の盛

分米三石五斗九升二合 定免二ッ

内一反六畝二十歩は津波以後堤成就仕らず候に付き、板倉近江守様御代十五年以前辰年永引に御願い申し上げ、願いの通り仰せ付けられ候処、十年以前酉年、右場所三反歩取り立て申し候て、右反畝の分米一石三斗三升三合、酉年より御免定にて御立ち返し遊ばされ候、

右二口新田二十年以前亥年津波の節より、年により潮入りまかり成り候場所ハ、御見分之上一作御引き下され候、

〔注解〕(1) (1)では開墾することを指す。(2) 耕作地として回復したこと。

9—22 享保十一年午ノ四月 志摩国答志郡三ヶ所村差出
シ帳

外

新田畑屋鋪町数壺町七反六畝拾歩

此訳

下々田壺反三畝四歩 新田八盛

此分米壺石五升壺合 定免三ッ壺分取

是ハ貳拾年以前亥年、津浪^ニ而潮入^ニ罷成、御見分之上年々御引被下候、

〔読み下し〕

外

新田畑屋鋪町数一町七反六畝十歩

此訳

下々田一反三畝四歩 新田八盛

此の分米一石五升一合 定免三ッ一分取り

是は二十年以前亥年、津浪にて潮入りにまかり成り、御見分の上年々御引き下され候、

9—23 享保十一年午四月 志摩国答志郡国府村指出帳

下田六畝貳拾壺歩 新田十一之盛

分米七斗三升七合 定免三ッ

右新田廿年以前亥年、津波^ニ而潮入^ニ罷成、御見分之上潮入・風損一作御引

被下候、

下々田貳町五反三畝拾八歩 新田八之盛

分米貳拾石貳斗八升八合 定免三ツ

右同断

(中略)

外

下々田壹町三反五畝拾四歩半 新田八之盛

分米拾石八斗三升八合 定免三ツ

右新田廿年以前亥年、津波_ニ而潮入_ニ罷成、御見分之上潮入・風損一作御引被下候、

下々田七反貳歩半 新田八之盛

分米五石六斗七合 定免三ツ壹分

右同断

下々田三反五厘 新田八之盛

分米貳石四斗壹合 定免三ツ壹分

是ハ廿年以前亥年、津波_ニ而打埋申_ニ付、其節御断申上ケ、波荒永引_ニ罷成候、

下々田貳町貳反九畝拾九歩 新田八之盛

分米拾八石三斗七升 定免貳ツ

右新田廿年以前亥年、津波_ニ而潮入_ニ罷成、御見分之上潮入・風損一作御引被下候、

(中略)

下々畑壹畝歩 新畑六之盛

分米六升 定免三ツ壹分

是ハ廿年以前亥年、津波_ニ而打埋申_ニ付、其節御断申上ケ、波荒永引_ニ罷成候、

(中略)

一田畑破損_并道・橋・堤・川除等之普請、少ヅ、之儀者村_ニ而繕申候、土井

周防守様御代片田村普請、一日壹人_ニ付米五合ヅ、御扶持米被下候、松平

和泉守様御代一日壹人_ニ付五合ヅ、被下候、同御代貳拾年以前亥之年、津

波_ニ付大分破損、翌子年田畑_并堤・川除等普請、御見分之上人夫御積、一日

壹人_ニ付米五合ヅ、被下候、同丑年ハ昼扶持米共七合五勺ヅ、被下候御事、

〔読み下し〕

下田六畝二十一歩 新田十一の盛

分米七斗三升七合 定免三ツ

右新田二十年以前亥年、津波にて潮入りにまかり罷成り、御見分の上潮入り・風損一作御引き下され候、

下々田二町五反三畝十八歩 新田八の盛

分米二十石二斗八升八合 定免三ツ

右同断

(中略)

外

下々田一町三反五畝十四歩半 新田八の盛

分米十石八斗三升八合 定免三ツ

右新田二十年以前亥年、津波にて潮入りにまかり成り、御見分の上潮入り・

風損一作御引き下され候、

下々田七反二歩半 新田八の盛

分米五石六斗七合 定免三ツ一分

右同断

下々田三反五厘 新田八の盛

分米二石四斗一合 定免三ツ一分

是は二十年以前亥年、津波にて打ち埋まり申すに付き、其節御断り申し上げ、
波荒れ永引きにまかり成り候、

下々田二町二反九畝十九歩 新田八の盛

分米十八石三斗七升 定免二ツ

右新田二十年以前亥年、津波にて潮入りにまかり成り、御見分の上潮入り・
風損一作御引き下され候、

(中略)

下々畑一畝歩 新畑六の盛

分米六升 定免三ツ一分

是は二十年以前亥年、津波にて打ち埋まり申すに付き、其節御断り申し上げ、
波荒れ永引きにまかり成り候、

(中略)

一田畑破損ならびに道・橋・堤・川除けなどの普請、少ずつの儀は村にて繕い
申し候、土井周防守様御代片田村普請一日一人に付き米五合ずつ御扶持米下
され候、松平和泉守様御代一日一人に付き五合ずつ下され候、同御代二十年
以前亥の年、津波に付き大分破損し、翌子年田畑ならびに堤・川除けなど普
請、御見分の上人夫御積り、一日一人に付き米五合ずつ下され候、同丑年は
昼扶持米共七合五勺ずつ下され候御事、

9—24 享保十一年午ノ四月 志摩国答志郡坂崎村指出帳

松平和泉守様御代新田畑

下々田八反壹畝貳歩 新田八之盛

分米六石四斗八升五合 定免三ツ壹分

下々田七畝四歩 新田八之盛

分米五斗七升壹合 定免三ツ

下々田壹町九歩 新田八之盛

分米八石貳升四合 定免二ツ五分

下々田拾町三反六畝拾九歩 新田八之盛

定免貳ツ

内

壹町壹反六畝歩 潮杯敷地引

分米九石貳斗八升

是ハ拾八年以前丑ノ年潮杯堤敷地御引被下候、

五町 永荒引

分米四拾石

是者三年以前辰年ノ永荒引ニ御引被下候、

残

下々田四町貳反拾九歩 新田八之盛

分米三拾三石六斗五升壹合 定免貳ツ

右之内日出浦新田、貳拾四年以前未之年、舟津村百姓新之丞開発仕候処、
貳拾年以前亥ノ十月、津波ニ而堤破損仕、夫ノ段々取立申候得共成就不仕、
難及自力ニ候ニ付、右新之丞八年以前亥ノ年、上ケ地仕候ニ付、大風雨之節

ハ本田・古新田外、新田潮入ニ罷成難義仕候故、堤普請之儀御願申上候処、願之通被為仰付、人夫之義ハ嶋方中^江御割符被為仰付、一日壹人ニ付御扶持方米七合五勺ツ、樋三ヶ所入用代金五年之間人夫共ニ被為下置、御奉行御出御普請被成候、然処三年前辰ノ年、地下^江被為下置候御事、右五口、式拾年以前亥年津波之節、年ニハ潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候事、

〔読み下し〕

松平和泉守様御代新田畑

下々田八反一畝二歩 新田八の盛

分米六石四斗八升五合 定免三ツ一分

下々田七畝四歩 新田八の盛

分米五斗七升一合 定免三ツ

下々田一町九歩 新田八の盛

分米八石二升四合 定免二ツ五分

下々田十町三反六畝十九歩 新田八の盛

定免二ツ

内

一町一反六畝歩 潮杯敷地引

分米九石二斗八升

是は十八年以前丑の年、潮杯堤敷地御引き下され候、

五町 永荒引

分米四十石

是は三年前辰年より永荒引きに御引き下され候、

残

下々田四町二反十九歩 新田八の盛

分米三十三石六斗五升一合 定免二ツ

右の内日出浦新田、二十四年以前未の年、舟津村百姓新之丞開発仕り候処、二十年以前亥の十月、津波にて堤破損仕り、それより段々取り立て申し候えども成就仕らず、自力に及び難く候に付き、右新之丞八年以前亥の年、上げ地仕り候に付き、大風雨の節ハ本田・古新田外、新田潮入りにまかり成り難義仕り候ゆえ、堤普請の儀御願い申し上げ候処、願いの通り仰せ付けさせられ、人夫の義は嶋（志摩）方中へ御割り付け仰せ付けさせられ、一日一人に付き御扶持方米七合五勺ずつ、樋三ヶ所入用代金五年の間人夫ともに下し置かさせられ、御奉行御出で御普請成られ候、然るところ三年前辰の年より、地下へ下し置かさせられ候御事、右五口、二十年以前亥年津波の節より、年により潮入りにまかり成り候場所ハ、御見分の上一作御引下され候事、

〔注解〕（一）嶋は志摩の事を差すと考えられることから、ここでは志摩国内の村々を指すと考えられる。

9—25 享保十一年午四月 志摩国答志郡千賀村差出帳

下々田壹反六畝拾四歩 右同断^江 八ノ盛

分米壹石三斗壹升七合 定免貳ツ取

右之新田、式拾年以前亥之年、津波ニ而潮入ニ罷成、御見分之上一作御引被下候、

〔読み下し〕

下々田一反六畝十四歩 右同断

八の盛

分米一石三斗一升七合 定免二ツ取

右の新田、二十年以前亥の年、津波にて潮入りにまかり成り、御見分の上一作御引き下され候、

〔注解〕(1)「己酉年改」、直近の己酉年である寛文九年(一六六九)の調査の意味となる。

9—26 享保十一年午四月十三日 志摩国答志郡松尾村指

出シ帳

一松平和泉守様御代、舟津村新田堤式拾年以前亥之年津波^ニ而破損仕、賀茂五ヶ村・磯部組^ノ寄人夫罷出相勤、御扶持米一日壹人^ニ付五合宛被下候、右惣而御扶持米之義ハ御年貢継^ニ仕候、併百姓迷惑仕候節ハ其時々^ニ申請候御事、

〔読み下し〕

一松平和泉守様御代、舟津村新田堤二十年以前亥之年津波にて破損仕り、賀茂五ヶ村・磯部組より寄人夫まかり出で相勤め、御扶持米一日一人に付き五合ずつ下され候、右惣じて御扶持米の義は御年貢継ぎに仕り候、しかしながら百姓迷惑仕り候節は其時々^ニ申し請け候御事、

9—27 享保十一年丙午四月十三日 志摩国答志郡堅神村

指出帳

外二

土井周防守様御代寅年御改

下々田五反式畝式拾壹歩 新田 八之盛

分米四石式斗壹升六合 定免三ツ

下々田六畝三步 新田 八之盛

分米四斗八升八合 定免三ツ壹分

内七升式合、是ハ廿年以前亥ノ年、津浪^ニ而潰地^ニ罷成、年々御引被下候、

下々畑式畝五歩半 新田 六ノ盛

分米壹斗三升壹合 定免三ツ壹分

下々田式反三畝三步半 新田 八之盛

分米壹石八斗五升 皆無 定免三ツ

右同断

下々田三反三畝九歩 新田 八之盛

分米式石六斗六升四合 定免式ツ

内壹石六斗 右同断

(中略)

一田畑破損、川除^ケ・堤普請少々宛之儀者、松ゆり木^并杭木申請^ケ、村^ニ而繕申候、式拾年以前亥之年津浪^ニ而破損普請之節ハ、当村持分山之松木奉願被下候而

普請仕候、尤当村山ニ無御座候節ハ、鳥羽山ニ而申請ケ伐り申候御事、

〔読み下し〕

外ニ

土井周防守様御代寅年御改め

下々田五反二畝二十一步 新田 八の盛

分米四石二斗一升六合 定免三ツ

下々田畝反三步 新田 八の盛

分米四斗八升八合 定免三ツ一分

内七升二合、是は二十年以前亥の年、津浪にて潰地にまかり成り、年々御引き下され候、

下々畑二畝五歩半 新田 六の盛

分米一斗三升一合 定免三ツ一分

下々田二反三畝三步半 新田 八の盛

分米一石八斗五升 皆無 定免三ツ

右同断

下々田三反三畝九歩 新田 八の盛

分米二石六斗六升四合 定免二ツ

内一石六斗 右同断

(中略)

一田畑破損、川除け・堤普請少々ずつの儀は、松ゆり木ならびに杭木申し請け、

村にて繕い申し候、二十年以前亥の年津浪にて破損普請の節は、当村持分山の松木願ひ奉り下され候て普請仕り候、もつとも当村山に御座無く候節は、鳥羽山にて申し請け伐り申し候御事、

9—28 享保十一年午四月十三日 志摩国答志郡白木村指出帳

一松平和泉守様御代、舟津村新田堤式拾年以前亥之年津波ニ而破損仕、賀茂五ヶ村・磯部組より寄人夫罷出相勤候、御扶持米一日壹人ニ付五合宛被下候、右惣而御扶持米之儀ハ御年貢繼ニ仕候、併百姓迷惑仕候節者其時々申請候御事、

〔読み下し〕

一松平和泉守様御代、舟津村新田堤二十年以前亥の年津波にて破損仕り、賀茂五ヶ村・磯部組より寄人夫まかり出で相勤め候、御扶持米一日一人に付き五合ずつ下され候、右惣じて御扶持米の儀は御年貢繼ぎに仕り候、しかしながら百姓迷惑仕り候節はその時々申し請け候御事、

9—29 享保十一年午ノ四月 志摩国答志郡穴川村指出シ帳

(松平和泉守様御代新田畑)

下々田四町六反五畝八歩六厘 新田 八盛

分米三拾七石式斗式升四合 定免三ツ壹分

下々田貳町壹反貳畝貳拾歩 新田 八盛

分米拾七石壹升三合 定免貳ツ五分

下々田拾九町七反八畝拾四歩 新田 八盛

分米百五拾八石貳斗七升八合 定免貳ツ

右三口新田、貳拾年以前亥年、津浪之節今年ニ潮入ニ罷成候場所ハ、御見分之上一作御引被下候、

(中略)

一中川橋壹ヶ所 長九間 幅三尺五寸

是ハ土井周防守様御代三拾九年以前辰年、板ハ五知村御林⁽¹⁾ニ被下、かすかい・つなきくわん⁽³⁾・さと石被下、御奉行御出御指図⁽²⁾ニ人足ハ近郷へ被仰付被下候、先々御代も右之通ニ被成被下候処、松平和泉守様御代三拾五年以前申年、御願申上ヶ候ハ、松板⁽²⁾ニハ木挽賃・山出⁽¹⁾人足⁽¹⁾并度々破損之節人夫大勢掛り、其上年数之間も無御座朽申候而、村之儀ハ勿論近郷迄費多ク奉存候、橋板・休杭買調、かすがいも相調、此外木挽賃・大工料・さと石惣代金以小日記を金子五両余⁽⁴⁾、磯部中・志摩方之内井浜村・三ヶ所村・安乗村⁽⁶⁾を限、下嶋不残村数以上三拾貳ヶ村へ村相応之割合ニ相對仕相極メ、村々々請負之書付請取置申候間、此度者右之通ニ仕掛ケ申度奉願候、然者御用木・かすかい⁽³⁾も不奉願、近郷人足をも不申請、橋掛ケ可申と奉存候、乍恐以後時節ニ先規之通御願申上候儀御座候ハ、被為 聞召分ヶ被下候様ニと願書指上ヶ申候処、願之通被仰付候ニ付、村々々割合之金子請取、橋掛ケ申候処、貳拾年以前亥十月、津浪⁽²⁾ニ右之橋落申候ニ付、右村々⁽¹⁾江相談掛ケ申候得共、埒明不申候ニ付、当分之借⁽⁵⁾り橋掛ケ置申候得共、大水出申候節ハ数度破損仕、殊ニ段々

川中も広ク被成、只今⁽²⁾ニ而ハ川中貳拾貳間御座候故、借⁽¹⁾り橋掛ケ申候儀難成迷惑仕候ニ付、先御代三年以前辰ノ六月御願申上ヶ、右村数以上三拾貳ヶ村へ奉加⁽²⁾仕、去巳八月橋掛ケ申候御事、

〔読み下し〕

下々田四町六反五畝八歩六厘 新田八盛

分米三十七石二斗二升四合 定免三ツ一分

下々田二町一反二畝二十歩 新田八盛

分米十七石一升三合 定免二ツ五分

下々田十九町七反八畝十四歩 新田八盛

分米百五十八石二斗七升八合 定免二ツ

右三口新田、二十年以前亥年、津浪の節より年により潮入りにまかり成り候場所は、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

一中川橋一ヶ所 長九間幅三尺五寸

是ハ土井周防守様御代、三十九年以前辰年、板ハ五知村御林にて下され、かすがい・つなきかん・さと石下され、御奉行御出で御指図にて人足は近郷へ仰せ付けられ下され候、先々御代も右の通りに成され下され候処、松平和泉守様御代三十五年以前申年、御願い申し上げ候は、松板にては木挽賃・山出し人足ならびにたびたび破損の節人夫大勢掛り、その上年数の間も御座なく朽ち申し候て、村の儀は勿論近郷まで費え多く存じ奉り候、橋板・休杭買調え、かすがいも相調え、此の外木挽賃・大工料・さと石惣代金小日記を以て金子五両余を、磯部中・志摩方の内井浜村・三ヶ所村・安乗村を限り、下嶋残らず村数以上三十二ヶ村へ村相応の割合に相對仕り相極め、村々より請負

の書付け取り置き申し候間、このたびは右の通りに仕掛け申したく願ひ奉り候、然らば御用木・かすがいをも願ひ奉らず、近郷人足をも申し請けず、橋掛け申すべきと存じ奉り候、恐れながら以後時節により先規の通り御願ひ申し上げ候儀御座候はば、聞こし召させられ分け下され候様にと願書指し上げ申し候処、願ひの通り仰せ付けられ候に付き、村々より割合の金子請け取り、橋掛け申し候処、二十年以前亥十月、津浪にて右の橋落ち申し候に付き、右村々へ相談掛け申し候えども、埒明き申さず候に付き、当分の借り橋掛け置き申し候えども、大水出で申し候節は数度破損仕り、殊に段々川巾も広く成られ、只今にては川巾二十二間御座候ゆえ、借り橋掛け申し候儀成り難く迷惑仕り候に付き、先御代三年前辰の六月御願ひ申し上げ、右村数以上三十二ヶ村へ奉加に仕り、去る巳八月橋掛け申し候御事、

〔注解〕(1) 志摩国答志郡五知村、現在の三重県志摩市磯部町五知。(2) 材木をとめるための、両端の曲がつた釘。鏝。(3) 環状の木をつなぐ道具カ。繋環。(4) さと石カ、詳細は不明であるが、恐らく橋を復旧するにあたって用いる石材と考えられる。(5) 志摩国答志郡井浜村、現在の三重県志摩市飯浜。(6) 志摩国答志郡三ヶ所村、現在の三重県志摩市磯部町三ヶ所。(7) 志摩国答志郡阿乗村、現在の三重県志摩市阿見町阿乗。(8) 仮橋。(9) 約四〇メートル。

9—30 享保十一年午四月 志摩国答志郡相差村指出シ帳

新田
下田九反式畝拾八歩 拾壹之盛
分米拾石壹斗八升六合 定免三ツ
右新田式拾年以前亥ノ年、津波ニ而潮入ニ罷成、御代々御見分之上一作御引被

下候、

新田
下々田壹反九畝拾五歩 八之盛

分米壹石五斗六升 定免三ツ

新田
下々田七町八反式畝六歩 八之盛

分米六拾式石五斗七升六合 定免三ツ

右新田式拾年以前亥ノ年、津波ニ而潮入ニ罷成、御代々御見分之上一作御引被
下候、

(中略)

癸酉起
下々田 六反七畝四歩 八之盛

分米五石三斗七升壹合 定免三ツ

右新田式拾年以前亥ノ年、津波ニ而潮入ニ罷成、御代々御見分之上一作御引被
下候、

癸未ノ起
下々田五反三畝歩 八之盛

分米四石式斗四升 定免三ツ

右新田式拾年以前亥ノ年、津波ニ而潮入ニ罷成、御代々御見分之上一作御引被
下候、

甲申ノ起
下々田六反五畝歩 八之盛

分米五石式斗 定免式ツ

右新田式拾年以前亥ノ年、津波ニ而潮入ニ罷成、御代々御見分之上一作御引被
下候、

(中略)

下々田貳町貳反拾六歩 甲申・乙酉・丙戌年迄起 八の盛

分米拾七石六斗四升三合

是ハ年々定免貳ツ御物成ニ指上ケ申候処、貳拾年以前亥ノ年、津波ニ而打禿申候ニ付、御断申上、拾九年以前子ノ年ハ波荒永引ニ被遊被下候御事、

(中略)

一田畑破損并道・橋・堤・川除等之普請、少々之儀ハ村ニ而仕候、松平和泉守様御代貳拾年前亥ノ年大変ニ付、子ノ年普請所御奉行中様御見分之上、人夫御積被遊、一日壹人ニ付御扶持米七合五勺ツ、被下候御事、

〔読み下し〕

下田九反二畝十八歩 新田 十一之盛

分米十石一斗八升六合 定免三ツ

右新田二十年以前亥の年、津波にて潮入りにまかり成り、御代々御見分の上一作御引き下され候、

下々田一反九畝十五歩 新田 八の盛

分米一石五斗六升 定免三ツ

下々田七町八反二畝六歩 新田 八の盛

分米六十二石五斗七升六合 定免三ツ

右新田二十年以前亥の年、津波にて潮入りにまかり成り、御代々御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

下々田 六反七畝四歩 癸酉の起し 八の盛

分米五石三斗七升一合 定免三ツ

右新田二十年以前亥の年、津波にて潮入りにまかり成り、御代々御見分の上一作御引下され候、

下々田五反三畝歩 癸未の起し 八の盛

分米四石二斗四升 定免三ツ

右新田二十年以前亥の年、津波にて潮入りにまかり成り、御代々御見分の上一作御引き下され候、

下々田六反五畝歩 甲申の起し 八の盛

分米五石二斗 定免二ツ

右新田二十年以前亥の年、津波にて潮入りにまかり成り、御代々御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

下々田二町二反十六歩 甲申・乙酉・丙戌年まで起し 八の盛

分米十七石六斗四升三合

是は年々定免二ツ御物成に指し上げ申し候処、二十年以前亥の年、津波にて打ち禿り申し候に付き、御断り申し上げ、十九年以前子の年より波荒れ永引きに遊され下され候御事、

(中略)

一田畑破損ならびに道・橋・堤・川除けなどの普請、少々之儀は村にて仕り候、松平和泉守様御代二十年前亥の年大変に付き、子の年普請所御奉行中様御見分の上、人夫御積り遊ばされ、一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され

候、ならびに丑の年右の通り遊ばされ、一日一人に付き御扶持米七合五勺ず
つ下され候御事、

〔注解〕(1) するの意。

9—31 享保十一年午ノ四月 志摩国答志郡飯浜村指出帳

下々田壹町三反壹畝拾八歩 新田八盛

分米拾石五斗貳升八合 定免三ツ

右貳ヶ所之新田、貳拾年以前亥年津波之節、潮入ニ罷成候節ハ、御見分之
上一作御引被下候、

(中略)

松平和泉守様御代新田

下々田壹反壹畝拾八歩 新田八盛

分米九斗貳升八合 定免三ツ壹分

下々田貳拾歩 新田八盛

分米五升三合 定免三ツ

下々田壹反五畝九歩 新田八盛

分米壹石貳斗貳升四合 定免貳ツ五分

下々田四町三反七畝貳拾壹歩 新田八盛

分米三拾五石壹升六合 定免貳ツ

右四ヶ所之新田、貳拾年以前亥年津波之節、潮入ニ罷成候場所ハ、御見
分之上一作御引被下候、

(中略)

下々畑壹反壹畝五歩 新畑六盛

分米六斗七升 定免貳ツ

是ハ、貳拾年以前亥年津波之節、潮入ニ罷成候節ハ、御見分之上一作御引
被下候、

〔読み下し〕

下々田一町三反一畝十八歩 新田八盛

分米十石五斗二升八合 定免三ツ

右二ヶ所の新田、二十年以前亥年津波の節より、潮入りにまかり成り候節は、
御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

松平和泉守様御代新田

下々田一反一畝十八歩 新田八盛

分米九斗二升八合 定免三ツ一分

下々田二十歩 新田八盛

分米五升三合 定免三ツ

下々田一反五畝九歩 新田八盛

分米一石二斗二升四合 定免二ツ五分

下々田四町三反七畝二十一步 新田八盛

分米三十五石一升六合 定免二ツ

右四ヶ所の新田、二十年以前亥年津波の節より、潮入りにまかり成り候場
所は、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

下々畑一反一畝五歩 新畑六盛

分米六斗七升 定免二ツ

是は、二十年以前亥年津波の節より潮入りにまかり成り候節は、御見分の上一作御引き下され候、

9—32 享保十一丙午年四月十三日 志摩国答志郡船津村

指出帳

反畝ノ七反九畝貳拾貳歩九厘

分米五石九斗四升八合

高壺石貳斗七升八合 出高

定免三ツ取之内

内

貳斗九升三合 弁高

貳口分米合七石貳斗貳升六合

右田畑津波以来潮入場所ハ御見分之上ニ而年々御引被下候、

(中略)

一松平和泉守様御代、船津村新田堤貳拾年以前亥年津波ニ而破損仕、賀茂五ヶ村・磯部組ノ寄人夫罷出相勤、御扶持米一日壺人ニ付五合宛被下候、右惣而御扶持米之義ハ御年貢次ニ仕候、併百姓迷惑仕候節ハ其時々ニ申請候御事、

〔読み下し〕

反畝ノ七反九畝二十二歩九厘

分米五石九斗四升八合

高一石二斗七升八合 出高

定免三ツ取りの内

内

二斗九升三合 弁高

二口分米合七石二斗二升六合

右田畑津波以来潮入り場所は御見分の上にて年々御引き下され候、

(中略)

一松平和泉守様御代、船津村新田堤二十年以前亥年津波にて破損仕り、賀茂五ヶ村・磯部組より寄人夫まかり出で相勤め、御扶持米一日一人に付き五合ずつ下され候、右惣じて御扶持米の義は御年貢次ぎに仕り候、しかしながら百姓迷惑仕り候節はその時々申し請け候御事、

9—33 享保十一年丙午四月十三日 志摩国答志郡桃取村

指出帳

下々田八反歩 新田八之盛

此分米六石四斗

是者年々定免三ツ御物成ニ差上ヶ申候処、貳拾年以前亥年、津波ニ而潮入ニ罷成場所、御見分之上一作御引被下候、

〔読み下し〕

下々田八反歩 新田八の盛

此分米六石四斗

是は年々定免二ツ御物成に差し上げ申し候処、二十年以前亥年、津波にて潮入りにまかり成る場所、御見分の上一作御引き下され候、

9—34 伊勢国度会郡中郡村指出帳（享保十一年）

同所（大堀川筋かりはミ）

一堤長貳百九拾八間

内

三拾間 御公料、中大淀村^①相勤申候

右先年ハ垸之辺四・五拾間之通堤^ニ而、其外ハ堤かたち計之事^ニ御座候得共、式拾年以前亥年大地震高潮^ニ而破損仕、百姓共数日罷出普請仕候得共、段々高潮参百姓難及力候^ニ付、拾八年以前丑ノ年 松平左近将監様御代御願申上、御見分之上御領分村々寄人足被為仰付、人夫八百九拾四人^江一日壹人^ニ米壹升宛被下置、右堤御普請被遊被下候、^并杭木被為下惣堤^江打申候、其後拾五年以前辰之年 板倉近江守様御代、腹付上置之御願申上、人夫五百五拾壹人^江一日壹人^ニ米七合五勺宛被為下候、松平丹波守様御代八年以前亥ノ年、腹付之御願申上、人夫貳百五拾壹人^江一日壹人^ニ御扶持米五合宛被為下候御事、

〔読み下し〕

同所（大堀川筋かりはミ）

一堤長二百九十八間

内

三十間 御公料、中大淀村より相勤め申し候

右先年は垸の辺四・五十間之通堤にて、その外は堤かたち計りの事に御座候えども、二十年以前亥年大地震高潮にて破損仕り、百姓ども数日まかり出で普請仕り候えども、段々高潮参り百姓力に及び難く候に付き、十八年

以前丑の年松平左近将監様御代御願い申し上げ、御見分の上御領分村々寄人足仰せ付けさせられ、人夫八百九十四人へ一日一人に米一升ずつ下し置かれ、右堤御普請遊ばされ下され候、ならびに杭木下させられ惣堤へ打ち申し候、その後十五年以前辰の年板倉近江守様御代、腹付けの上げ置きの御願い申し上げ、人夫五百五十一人へ一日一人に米七合五勺ずつ下させられ候、松平丹波守様御代八年以前亥の年、腹付けの御願い申し上げ、人夫二百五十一人へ一日一人に御扶持米五合ずつ下させられ候御事、

〔注解〕（1）伊勢国多気郡中大淀村、現在の三重県多気郡明和町大淀。（2）志摩国鳥羽藩主松平乗邑。（3）志摩国鳥羽藩主板倉重治。（4）堤防の側面を補強すること。（5）志摩国鳥羽藩主松平光慈。

9—35 享保十一年勢州多気郡広瀬大堀川新田差出帳（志

州鳥羽町地主吉崎与惣右衛門・同大野屋吉兵衛・

同地手代新田所伊右衛門）

一新田場所者大堀川・広瀬川と申川筋にて御座候処、土井周防守様御代、御役人中場所御見分之上、鳥羽御領射和村六郎右衛門・浄智式人^江新田^ニ取立候様^ニと被仰付開発仕、御免相之儀者定免式^ツ被仰付候、然^ル処式拾年以前松平左近将監様御代亥十月津浪之節、右新田所大破仕、子年大分物入普請仕候^ニ付、子・丑年両年ハ御年貢御赦免被成下候由之御事、

〔読み下し〕

一新田場所は大堀川・広瀬川と申す川筋にて御座候処、土井周防守様御代、御

役人中場所御見分の上、鳥羽御領射和村六郎右衛門・浄智二人へ新田に取り立て候様にと仰せ付けられ開発仕り、御免相の儀は定免二ツに仰せ付けられ候、然る処二十年以前松平左近将監様御代亥十月津浪の節、右新田所大破仕り、子年大分物入り普請仕り候に付き、子・丑年両年は御年貢御赦免成し下され候よしの御事、

〔注解〕(1) 志摩国鳥羽藩主土井利益。(2) 伊勢国飯野郡射和村、現在の三重県松阪市射和町。(3) 年貢率のこと、ここでは「定免二ツ」、つまり定免で対象地の総石高の二割が年貢として徴収されることが定められている。

9―36 享和元年酉十二月伊勢国三重郡六呂見村差出帳

延宝二^寅年川合助左衛門様御検地御水帳^①御座候

高九石貳斗五升五合 寅浜新田畑

此反別九反七畝廿壹歩

^{亥大地震}
以来亡所^②付 海成分

訳

下畑四反九畝廿貳歩

分米三石九斗七升九合 八斗代

下田四反七畝廿九歩

分米五石貳斗七升六合 壹石壹斗代

(中略)

御朱印地

一観音寺林五反三畝貳歩 松木大小九拾三本御座候、

此林往古者海中^江押出^シ手広^キ林^ニ而御座候由之処、段々欠込四町八反歩^ニ成、

其後宝永四亥年大地震之節より崩^レ六反六畝四歩^ニ成、夫^レ連年測取払、右之畝^と成、堤外之方無跡形海成^ニ相成居申候、

〔読み下し〕

延宝二^寅年川合助左衛門様御検地御水帳御座候

高九石二斗五升五合 寅浜新田畑

此反別九反七畝二十一步 亥大地震以来亡所に付き 海成り分

訳

下畑四反九畝二十一步

分米三石九斗七升九合 八斗代

下田四反七畝二十九歩

分米五石二斗七升六合 一石一斗代

(中略)

御朱印地

一観音寺林五反三畝二歩 松木大小九十三本御座候、

此林往古は海中へ押し出し手広き林にて御座候よしの処、段々欠け込み四町八反歩に成り、その後宝永四亥年大地震の節より崩^レ六反六畝四歩に成り、それより連年測取り払い、右の畝と成り、堤外の方跡かたなく海成りに相成り居り申し候、

〔注解〕(1) 田・畑・屋敷地の面積、石高を測定し記載した土地台帳。現在は一般には検地帳と呼ばれるが、江戸期の史料中では、「水帳」・「縄打帳」・「縄打水帳」と記されることが多い。(2) ここでは水没したことを指す。

9—37 享和元年酉十一月伊勢国三重郡塩浜村差出帳

宝永二酉年石原清左衛門様御検地⁽¹⁾と申伝候、

一 高八拾八石九斗六升 西改浜古新田

是者宝永四亥年大地震⁽²⁾而堤陶⁽²⁾り込候⁽²⁾ニ付、其後者海成無皆、引⁽²⁾罷成居申候、

(中略)

一米九石貳斗五升 浜役⁽³⁾

是者往古者塩取浜⁽²⁾御座候所、宝永四亥年大地震高浪⁽²⁾而、浜損⁽²⁾じ塩取⁽²⁾レ不申候⁽²⁾ニ付、其節御支配様^(江)御願田畑⁽²⁾ニ仕、往古⁽²⁾御定納浜役米上納仕来申候、

〔読み下し〕

宝永二酉年石原清左衛門様御検地と申し伝え候、

一 高八十八石九斗六升 西改浜古新田

是は宝永四亥年大地震にて堤陶⁽²⁾り込み候に付き、その後は海成り皆無、引⁽²⁾きにまかり成り居り申し候、

(中略)

一米九石二斗五升 浜役

是は往古は塩取浜に御座候所、宝永四亥年大地震高浪にて、浜損⁽²⁾じ塩取⁽²⁾れ申さず候に付き、その節御支配様へ御願い田畑に仕り、往古より御定納浜役米上納仕り来り申し候、

〔注解〕(1) 伊勢国四日市代官。(2) 滑り込みの意。(3) 浜にかかる年貢で塩を納めていた。

9—38 享和元年酉十二月伊勢国三重郡馳出村差出帳

一米三斗貳升 船式艘役、古来より年々相納申候、

一米三拾九石八斗 定納浜役御年貢、古来⁽²⁾相納申候、

右者往古不殘塩取浜⁽²⁾而御座候得共、先年大地震高浪⁽²⁾而、浜損⁽²⁾じ塩取⁽²⁾レ不申候⁽²⁾ニ付、田畑⁽²⁾ニ仕候而、古来より御定納⁽²⁾而浜役御年貢年々上納仕来り申候、

〔読み下し〕

一米三斗二升 船二艘役、古来より年々相納め申し候、

一米三十九石八斗 定納浜役御年貢、古来より相納め申し候、

右は往古残らず塩取浜にて御座候えども、先年大地震高浪にて、浜損⁽²⁾じ塩取⁽²⁾れ申さず候に付き、田畑に仕り候て、古来より御定納にて浜役御年貢年々上納仕り来り申し候、

9—39 天保九戌年閏四月村差出明細帳 伊勢国三重郡塩

浜村

宝永二酉年石原清左衛門様御検地水帳紛失、名寄帳⁽¹⁾相用申候、

一 高八拾八石九斗六升 浜古新田

此反別拾壺町三反廿四步五厘

是者宝永四亥年大地震⁽²⁾而、堤陶⁽²⁾り込候⁽²⁾ニ付、其後者海成無皆、引⁽²⁾罷成居申候、

〔読み下し〕

宝永二酉年石原清左衛門様御検地水帳紛失、名寄帳相用い申し候、

高八十八石九斗六升 浜古新田

此反別十一町三反二十四歩五厘

是は宝永四亥年大地震にて、堤陶り込み候に付き、その後は海成り皆無、引にまかり成り居り申し候、

〔注解〕(1) 田・畑・屋敷地の面積、石高を測定し記載した土地台帳である検地帳は、計測された地字順に各耕作地が記されるのが一般的であるが、名寄帳は、検地帳を基に、名請人ごとに記載順を改めて作成した土地台帳。

9—40 天保九年戊閏四月村差出明細帳 伊勢国三重郡六

呂見村

延宝二^寅年川合助左衛門様^①御検地水帳所持仕候、

高九石貳斗五升五合 寅改浜新田

此反別九反七畝廿壹歩^②

御朱印地

一観音寺林五反三畝貳歩

是者此林之儀、往古者手広成林^ニ御座候処、海面段々欠込四町八反歩^ニ相成、其後宝永四^亥年大地震之節震崩六反六畝四歩^与相成、夫々連々測取払、右之畝歩^与相成申候、

〔読み下し〕

延宝二^寅年川合助左衛門様御検地水帳所持仕り候、

高九石二斗五升五合 寅改浜新田

此反別九反七畝二十一步

御朱印地

一観音寺林五反三畝二歩

是は此の林の儀、往古は手広く成る林に御座候処、海面段々欠込込み四町八反歩に相成り、その後宝永四亥年大地震の節震え崩れ、六反六畝四歩と相成り、それより連々測取り払い、右の畝歩と相成り申し候、

〔注解〕(1) 伊勢国四日市代官。(2) 寅改浜新田の高反別の記載はあるも、地震の記事は無し。

9—41 寛保三年い(亥)ノ十一月度会郡有滝村差出明細帳

分米六拾四石六斗三升五合

一上田四町三反廿七歩 石盛壺石五斗

内壺反廿四歩半 畑成

此田方之儀、地低之場所^ニ御座候処、宝永年中大地震以来高潮満申、田地之内一鉢^ニ冷水吹出^シ、至極悪地^ニ罷成、水損多有之難儀^ニ奉存候、

分米廿八石九斗八升

一中田貳町七畝歩 石盛壺石四斗

内七畝廿五歩半 畑成

此田方之儀、地低之場所ニ御坐候処、宝永年中大地震以来高潮満申、田地之内一鉢ニ冷水吹出し、至極悪地ニ罷成、水損多有之難儀ニ奉存候、

一中田貳町四反六畝壹歩 石盛壹石三斗

内七畝拾五歩 畑成

此田方之儀、地低之場所ニ御坐候処、宝永年中大地震以来高潮満申、田地之内一鉢ニ冷水吹出し、至極悪地ニ罷成、水損多有之難儀ニ奉存候、

一下田壹町八反四畝五歩 石盛壹石一斗

内貳反九畝拾九歩 畑成

文言右同断

一上畑七町七畝歩半 石盛壹石貳斗

内三町五反歩程 字いあら 神楽てん 塩方
南川 北川

是ハ地低之場所ニ御座候処、宝永年中大地震以来高潮満申ニ付、毎日潮時ニハ冷水吹出し、至極悪地ニ罷成、其上大雨之節者川通潮満申ニ付、悪水吐落不申、水損多有之難儀奉存候、

三町歩程 字まつはなたたまへ との前
神楽てん 広脇ミその前

是ハ地低之場所ニ御坐候処、宝永年中大地震以来高潮満申ニ付、大雨降申候節ハ川通へ潮満上り申、悪水吐落不申、水損多有之難儀ニ奉存候、

分米拾八石七斗七升三合

一中畑壹町八反七畝廿貳歩 石盛壹石

内

壹町歩程 字ミのふち
いあら 神楽てん 塩方
南川 北川 山中

是ハ地低之場所ニ御坐候処、宝永年中大地震以来高潮満申ニ付、毎日潮時ニハ冷水吹出し、至極悪地ニ罷成、其上大雨之節ハ川通潮満申ニ付、悪水吐落不申、水損多有之難儀ニ奉存候、

六反歩程 字てんはく 古そて
ころく 広脇まこいけ

是ハ地低之場所ニ御座候処、宝永年中大地震以来高潮満申ニ付、大雨之節ハ悪水吐落不申、水損多有之難儀ニ奉存候、

分米四拾八石壹斗五升貳合

一下畑六町壹畝廿七歩 石盛八斗

内

三町五反歩程 字いあら 神楽てん 塩方南川
北川 ミのふち

是ハ地低之場所ニ御坐候処、宝永年中大地震以来高潮満申ニ付、毎日潮時ニハ冷水吹出し、至極悪地ニ罷成、其上大雨之節者川通潮満申ニ付、悪水吐落不申、水損多有之至極難儀ニ奉存候、

壹町五反歩程 字宮ノ前 西村やしき
はちろ 中垣内

是ハ地低之場所ニ御座候処、宝永年中大地震以来高潮満申ニ付、悪水吐落不申、至極悪地ニ罷成、水損多有之難儀ニ奉存候、

分米五石九斗六合

一屋敷四反九畝六歩半 石盛壹石貳斗

分米三百三石五斗三升

御年貢諸役一切高懸り等此高ニて取立仕候、

当村之儀、右書上候通、宝永年中以来毎日潮満候節者、御田地ノ潮高ク御座候故、惣而田畑共一鉢ニ冷水吹出し、至極悪地ニ罷成、其上大雨洪水之節ハ川通之潮満つかへ申ニ付、満水吐落不申、度々水損仕至極難儀之村方ニ御座候、

(中略)

一当村之儀、御代々書上申通、田畑僅成村方ニ御坐候処、宝永年中大地震以来御田地ノ者三・四尺モ潮高ク満上り申候ニ付、田畑共冷水吹出し至極悪地ニ罷

成、立毛実入悪敷御座候、其上過半漁稼之村方ニ御坐候へ共、近年打続漁事
曾而無御座、至極困窮之村方ニ御座候、

〔読み下し〕

分米六十四石六斗三升五合

一上田四町三反二十七歩 石盛一石五斗

内一反二十四歩半 畑成り

この田方の儀、地低きの場所に御坐候処、宝永年中大地震以来高潮満ち申し、
田地の内一体に冷水吹き出し、至極悪地にまかり成り、水損多くこれ有り難
儀に存じ奉り候、

分米二十八石九斗八升

一中田二町七畝歩 石盛一石四斗

内七畝二十五歩半 畑成り

この田方の儀、地低きの場所に御坐候処、宝永年中大地震以来高潮満ち申し、
田地の内一体に冷水吹き出し、至極悪地にまかり成り、水損多くこれ有り難
儀に存じ奉り候、

一中田二町四反六畝一步 石盛一石三斗

内七畝十五歩 畑成り

この田方の儀、地低きの場所に御坐候処、宝永年中大地震以来高潮満ち申し、
田地の内一体に冷水吹き出し、至極悪地にまかり成り、水損多くこれ有り難
儀に存じ奉り候、

一下田一町八反四畝五歩 石盛一石一斗

内二反九畝十九歩 畑成り

文言右同断

一上畑七町七畝歩半 石盛一石二斗

内三町五反歩程 字いあら 神楽てん 塩方
南川 北川

是は地低きに（の）場所に御座候処、宝永年中大地震以来高潮満ち申すに付
き、毎日潮時には冷水吹き出し、至極悪地にまかり成り、その上大雨の節は
川通り潮満ち申すに付き、悪水吐き申さず、水損多くこれ有り難儀に存じ奉
り候、

三町歩程 字まつはな たたまへ との前
神楽てん 広脇みその前

是は地低きの場所に御坐候処、宝永年中大地震以来高潮満ち申すに付き、大
雨降り申し候節は川通りへ潮満ち上り申し、悪水吐き落ち申さず、水損多く
これ有り難儀に存じ奉り候、

分米十八石七斗七升三合

一中畑一町八反七畝二十二歩 石盛一石

内

一町歩程 字みのふち
いあら 神楽てん 塩方
南川 北川 山中

是は地低きの場所に御坐候処、宝永年中大地震以来高潮満ち申すに付き、毎
日潮時には冷水吹き出し、至極悪地にまかり成り、その上大雨の節は川通り
潮満ち申すに付き、悪水吐き落ち申さず、水損多くこれ有り難儀に存じ奉り
候、

六反歩程 字てんはく 古そて
ころく 広脇まこいけ

是は地低きの場所に御座候処、宝永年中大地震以来高潮満ち申すに付き、大
雨の節は悪水吐き落ち申さず、水損多くこれ有難儀に存じ奉り候、

分米四十八石一斗五升二合

一下畑六町一畝二十七歩 石盛八斗

内

三町五反歩程 字いあら 神楽てん 塩方南川
北川 ミのふち

是は地低きの場所に御坐候処、宝永年中大地震以来高潮満ち申すに付き、毎日潮時には冷水吹き出し、至極悪地にまかり成り、その上大雨の節は川通り潮満ち申すに付き、悪水吐き落ち申さず、水損多くこれ有り至極難儀に存じ奉り候、

一町五反歩程 字宮ノ前 西村やしき
はちろ 中垣内

是は地低きの場所に御坐座候処、宝永年中大地震以来高潮満ち申すに付、悪水吐き落ち申さず、至極悪地にまかり成り、水損多くこれ有り難儀に存じ奉り候、

分米五石九斗六合

一屋敷四反九畝六歩半 石盛一石二斗

分米三百三石五斗三升

御年貢諸役一切高懸りなどこの高にて取り立て仕り候、

当村の儀、右書き上げ候通り、宝永年中以来毎日潮満ち候節は、御田地より潮高く御座候ゆえ、惣じて田畑とも一体に冷水吹き出し、至極悪地にまかり成り、その上大雨洪水の節は川通りの潮満ちつかえ申すに付き、満水吐き落ち申さず、たびたび水損仕り至極難儀の村方に御座候、

(中略)

一当村の儀、御代々書き上げ申す通り、田畑わずかなる村方に御坐候処、宝永年中大地震以来御田地よりは三・四尺も潮高く満ち上り申し候に付き、田畑とも冷水吹き出し至極悪地にまかり成り、立毛実の入り悪しく御座候、その上過半漁稼ぎの村方に御坐候へども、近年打ち続き漁事すなわち御座無く、至極困窮の村方に御座候、

〔解説〕 9―1―9―41は、徳川林政史研究所に保管される志摩国・伊勢国の「村明細帳(差出帳)」である。志摩国については享保十一年(一七二六)四月に各村から鳥羽藩に、伊勢国については享保十一年(一七二六)・寛保三年(一七四三)・享和元年(一八〇一)・天保九年(一八三八)に各村から幕府代官所に提出された、各村の村高・田畑の現状・年貢の詳細等の「村明細」を記した「差出帳」である。

本史料は、伊勢国についてはこれまで紹介されていないが、志摩国の場合、現鳥羽市域の各村落の「差出帳」は、すでに『鳥羽市史』上巻(一九九一年)にすべての村分の同史料が全文掲載され、その後、『日本の歴史地震史料』拾遺四ノ上(二〇〇八年)では、志摩国全域を扱った上で宝永地震被害に関わる部分の史料を掲載すると同時に、一部伊勢国についても史料掲載されている。しかし、両者とも一部誤読も見られ、また後者についても、伊勢国すべての村についての同史料が提示されているわけではない。以上から、ここでは、同所に残される同帳の内、地震・津波にかかわる記事(宝永期にあった地震・津波被害状況が確実に確認される箇所)を掲載した。

ただし、「差出帳」は、村の状況を把握するために提出させたものであるため、地震被害については、主に年貢収納に関わる点のみが記されることになる。つまり、地震・津波により年貢・耕作地に被害が見られた場合、もしくは近隣村落の同被害からの復旧事業に人夫の派遣等があった場合のみ、その被害状況及び、復旧にかかわる状況が記されるのであり、年貢・人夫派遣にかかわらない被害の場合、記載されていない。

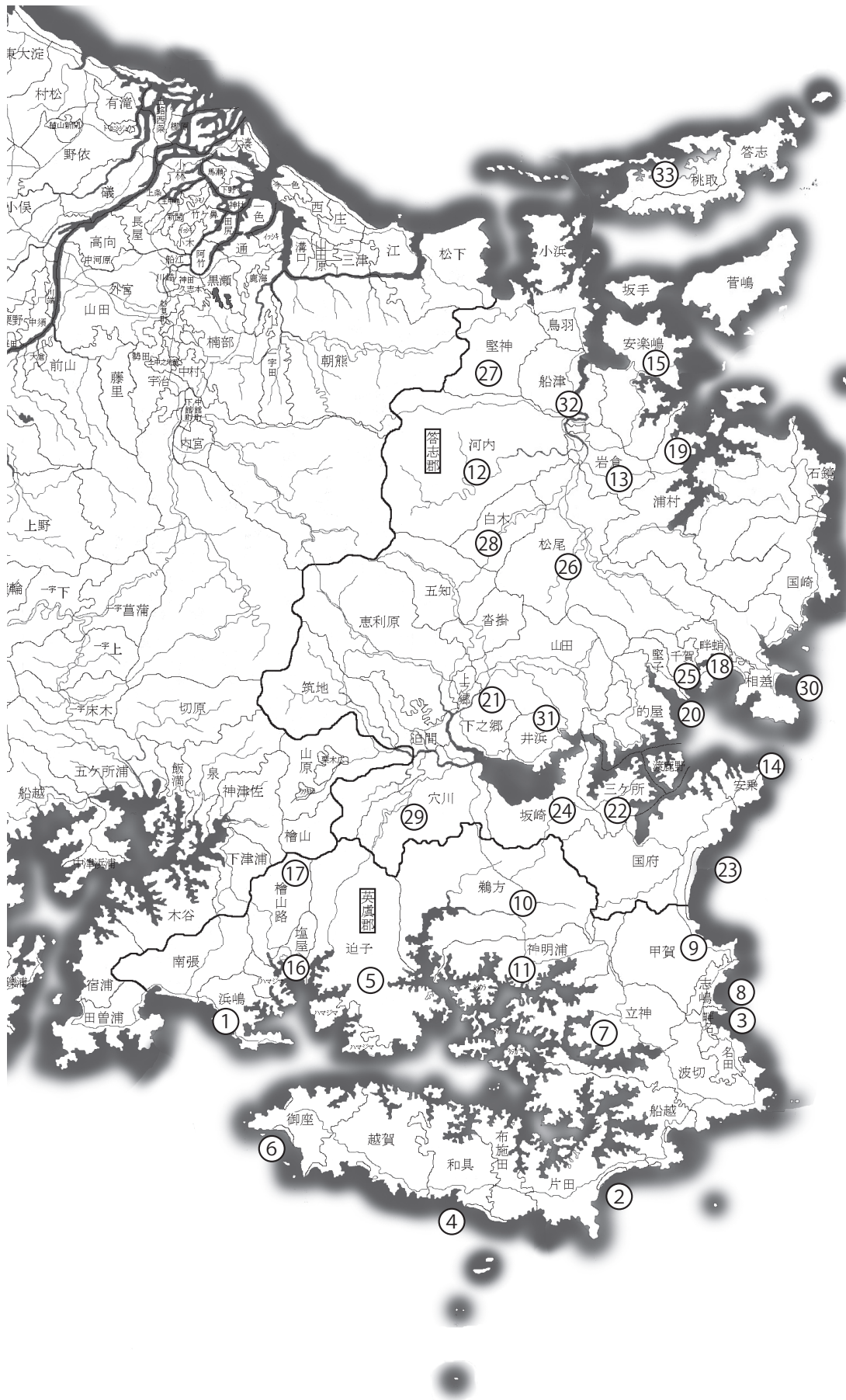
また、伊勢国は、安濃津藩・紀州藩・神戸藩などの諸藩もあったが、これら諸藩の「差出帳」には含まれない。以上から、宝永期の志摩国・伊勢国の地震・津波被害状況のすべてを網羅したものではない。

地震被害の状況は、志摩国の場合はその大半が津波被害となる。これに対し伊勢国の場合は、もちろん津波被害も確認できるが、むしろ地震に伴う地盤沈下・海岸線の落ち込み等を含めた塩田や耕作地の被害も多くあったことが確認できる。

津波被害が大きかった志摩国の場合、同帳面の記載内容を詳細に見ていくと、1地震の二十年後まで残る大きな損害、2津波等の被害はあったが、享保年間までに復旧を終えた被害、3津波被害の大半となる耕作地への潮入りではなく、耕作地自体の損壊が激しい被害、逆に、4自身の村の復旧普請は確認できないが（被害が大きくなかったものと推測される）、近隣他村の復旧普請に人夫を派遣したこのみが確認できる、以上の四種が見られる。

なお、次ページに今回掲載した村を地図に示したので、そちらもご参照願いたい。

（谷口）



志摩国地図

(『三重県史』資料編近世2、2003年、付録「近世中期所領図」を元に作成)

(注) 番号は志摩国明細帳(差出帳)の史料番号に対応



伊勢国地図

(『三重県史』資料編近世2、2003年、付録「近世中期所領図」を元に作成)

(注) 番号は伊勢国明細帳(差出帳)の史料番号に対応

9—42 宝永七年寅七月志摩国英虞郡鵜方村指出シ帳

下々田貳町壹反四畝拾八歩 新田八之盛^①

分米拾七石壹斗六升八合

是ハ年々定免三ツ御物成^②ニ差上ケ申候処、四年以前亥ノ年津浪^③ニ而潮入^④ニ罷成候場所、御見分之上^⑤一作御引被下候、

下々田七反八畝貳拾七歩 新田八之盛

分米六石三斗壹升貳合

是ハ年々定免貳ツ御物成^⑥ニ差上ケ申候処、四年以前亥ノ年津浪^⑦ニ而潮入^⑧ニ罷成候場所、御見分之上^⑨一作御引被下候、

町数ノ六拾四町四反九畝貳歩

(中略)

土井周防守様御代新田畑

畝数合三反三步

分米壹石八斗六升貳合

下々田貳町貳畝拾貳歩 新田八之盛

分米拾六石壹斗九升貳合

是ハ年々定免貳ツ五分御物成^⑩ニ差上ケ申候処、四年以前亥ノ年津浪^⑪ニ而潮入^⑫ニ罷成候場所、御見分之上^⑬一作御引被下候、

下々田貳町壹反壹畝七歩 新田八之盛

分米拾六石八斗九升八合

是ハ年々定免三ツ壹分御物成^⑭ニ差上ケ申候処、四年以前亥ノ年津浪^⑮ニ而潮入^⑯ニ罷成候場所、御見分之上^⑰一作御引被下候、

下々畑八反八畝九歩 新畑六之盛

分米五石貳斗九升八合

是ハ去丑之年迄定免三ツ壹分御物成^⑱ニ差上ケ申候、

下々田三反三畝歩 新田八之盛

分米貳石六斗四升

是ハ年々定免三ツ御物成^⑲ニ差上ケ申候処、四年以前亥年津浪候て潮入^⑳ニ罷成候場所、御見分之上^㉑一作御引被下候、

下々畑貳反七畝貳拾歩 新畑六之盛

分米壹石六斗六升

是ハ去丑之年迄定免三ツ御物成^㉒ニ差上ケ申候、

下々田拾八町壹反八畝拾六歩半 新田八之盛

内壺町三反歩 去丑年ノ潮入永荒引

分米百四拾五石四斗八升四合

内拾石四斗 去丑之年ノ潮入永荒引

是ハ年々定免貳ツ御物成^㉓ニ差上ケ申候所、四年以前津浪^㉔ニ而潮入^㉕ニ罷成候場所、御見分之上^㉖一作御引被下候、

(中略)

一田畑破損^并道・橋・堤等之普請、少々宛之儀者村中^ニ而仕申候、他村之普請^ニも参候、土井周防守様御代^ニハ御扶持米被下候覺無御座候、先御代四年以前亥年、津浪^ニ而本田・古新田外、新田堤破損仕候^ニ付、三年以前子之年御願申上御見分之上、本田・古新田堤築立申候分ハ人夫御積り被為 遊一日壺人^ニ付御扶持米五合宛被下、村中^ニ而繕申候、勿論他村之普請^ニ参候節も、一日壺人^ニ付御扶持米五合宛被下候、然処去年穴川^⑥村庄頂橋普請^ニ参候節ハ、一日壺人^ニ付御扶持米七合五勺宛被下候御事、

〔読み下し〕

下々田二町一反四畝十八歩 新田八の盛

分米十七石一斗六升八合

是は年々定免三ツ御物成に差し上げ申し候処、四年以前亥の年津浪にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上二作御引き下され候、

下々田七反八畝二十七歩 新田八の盛

分米六石三斗一升二合

是は年々定免二ツ御物成に差し上げ申し候処、四年以前亥の年津浪にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上二作御引き下され候、

町数ノ六十四町四反九畝二歩

(中略)

土井周防守様御代新田畑

畝数合三反三歩

分米一石八斗六升二合

下々田二町二畝十二歩 新田八の盛

分米十六石一斗九升二合

是は年々定免二ツ五分御物成に差し上げ申し候処、四年以前亥の年津浪にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上二作御引き下され候、

下々田二町一反一畝七歩 新田八の盛

分米十六石八斗九升八合

是は年々定免三ツ一分御物成に差し上げ申し候処、四年以前亥の年津浪にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上二作御引き下され候、

下々畑八反八畝九歩 新畑六之盛

分米五石二斗九升八合

是は去る丑の年まで定免三ツ一分御物成に差し上げ申し候、

下々田三反三畝歩 新田八之盛

分米二石六斗四升

是は年々定免三ツ御物成に差し上げ申し候処、四年以前亥年津浪候て潮入りにまかり成り候場所、御見分の上二作御引き下され候、

下々畑二反七畝二十歩 新畑六の盛

分米一石六斗六升

是は去る丑の年まで定免三ツ御物成に差し上げ申し候、

下々田十八町一反八畝十六歩半 新田八の盛

内一町三反歩 去る丑年より潮入り永荒引き

分米百四十五石四斗八升四合

内十石四斗 去る丑の年より潮入り永荒引き

是は年々定免二ツ御物成に差し上げ申し候所、四年以前津浪にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上二作御引き下され候、

(中略)

一田畑破損ならびに道・橋・堤などの普請、少々ずつの儀は村中にて仕り申し候、他村の普請にも参り候、土井周防守様御代には御扶持米下され候覚え御座無く候、先御代四年以前亥年、津浪にて本田・古新田ほか、新田堤破損仕り候に付き、三年以前子の年御願ひ申し上げ御見分の上、本田・古新田堤築き立て申し候分は人夫御積り遊ばさせられ、一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され、村中にて繕ひ申し候、勿論他村の普請に参り候節も、一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され候、しかるところ去年穴川村庄頂橋普請に参り候節は、一日一人に付き御扶持米七合五勺ずつ下され候御事、

〔注解〕(1) 一反当たり八斗の石盛(年貢率)であること。(2) 「定免」とは、過去の年貢高の平均数値を基に、一定の期間内、定額の年貢を徴収する方法である。また、「(定) 免三ツ」とあるのは、その土地の石盛高の三割(30パーセント)が年貢となっていたことを示す。ここでは「定免」とあることから、毎年三割の年貢率であった。この数値は他の数値の場合も同様で、例えば「免三ツ一分」とある場合は、三割一分(31パーセント)、「免四ツ」の場合は四割(40パーセント)の年貢率であったことを示す。(3) 年貢のこと。(4) 志摩国鳥羽藩主土井利益。(5) 直前の丑年である宝永六年(一七〇九)。(6) 志摩国答志郡穴川村、現在の三重県志摩市磯部町穴川。

9-43 享保三年戊戌四月志摩国英虞郡鵜方村指出帳

下々田貳町壹反四畝拾八歩 新田八之盛

分米拾七石壹斗六升八合 定免三ツ

右新田之儀、拾二年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作

御引被下候、

下々田七反八畝貳拾七歩 新田八之盛

分米六石三斗壹升貳合 定免貳ツ

右新田之儀、拾二年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上、

一作御引被下候、

(中略)

土井周防守様御代新田畑

畝数合三反三歩

分米壹石八升八斗六升貳合

下々田貳町貳畝拾貳歩 新田八之盛

分米拾六石壹斗九升貳合 定免貳ツ五分

右新田之儀、拾二年以前亥年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作

御引被下候、

下々田貳町壹反壹畝七歩 新田八之盛

分米拾六石八斗九升八合 定免三ツ壹分

右新田之儀、拾貳年以前亥年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作

御引被下候

下々畑八反八畝九歩 新畑六之盛

分米五石貳斗九升八合 定免三ツ壹分

下々田三反三畝歩 新田八之盛

分米貳石六斗四升 定免三ツ

右新田之儀、十二年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作

作御引被下候、

下々畑貳反七畝貳拾歩 新畑六之盛

分米壹石六斗六升 定免三ツ

下々田拾八町壹反八畝拾六歩半 新田八之盛

内壺町三反歩 拾年以前丑年ノ潮入永荒引

分米百四拾五石四斗八升四合 定免貳ツ

内拾石四斗 拾年以前丑年ノ潮入永荒引

右新田之儀、十二年以前亥年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作

御引被下候、

(中略)

一田畑破損^并道・橋・堤等之普請、少宛之儀ハ村中ニ而繕申候、他村之普請^ニも

参候、土井周防守様御代ニハ御扶持米被下候寛無御座候、松平和泉守様^①御代拾貳年以前亥年、津波ニ而本田・古新田外、新田堤破損仕候ニ付、拾壹年以前子年御願申上御見分之上、本田・古新田堤築立申候分ハ人夫御積り被為遊、一日壹人ニ付御扶持米五合宛被下、村中ニ而繕申候、勿論他村之普請ニ参候節も一日壹人ニ付御扶持米五合宛被下候得共、五合宛被下候而ハ百姓共普請難勤候ニ付、拾年以前丑年御断申上候得者、一日壹人ニ付御扶持米七合五勺宛被下候、先御代八年以前卯年、穴川村堤普請之節も、一日壹人ニ付七合五勺宛被下候御事、

〔読み下し〕

下々田二町一反四畝十八歩 新田八の盛

分米十七石一斗六升八合 定免三ツ

右新田の儀、十二年以前亥年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

下々田七反八畝二十七歩 新田八の盛

分米六石三斗一升二合 定免二ツ

右新田の儀、十二年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上、一作御引き下され候、

（中略）

土井周防守様御代新田畑

畝数合三反三歩

分米一石八升八斗六升二合

下々田二町二畝十二歩 新田八の盛

分米十六石一斗九升二合 定免二ツ五分

右新田の儀、十二年以前亥年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

下々田二町一反一畝七歩 新田八の盛

分米十六石八斗九升八合 定免三ツ一分

右新田の儀、十二年以前亥年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候

下々畑八反八畝九歩 新畑六の盛

分米五石二斗九升八合 定免三ツ一分

下々田三反三畝歩 新田八の盛

分米二石六斗四升 定免三ツ

右新田の儀、十二年以前亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

下々畑二反七畝二十歩 新畑六の盛

分米一石六斗六升 定免三ツ

下々田十八町一反八畝十六歩半 新田八の盛

内一町三反歩 十年以前丑年より潮入り、永荒引き

分米百四十五石四斗八升四合 定免二ツ

内十石四斗 十年以前丑年より潮入り、永荒引き

右新田の儀、十二年以前亥年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

（中略）

一田畑破損ならびに道・橋・堤などの普請、少ずつの儀は村中にて繕い申し候、他村の普請にも参り候、土井周防守様御代には御扶持米下され候寛無御座候、松平和泉守様御代十二年以前亥年、津波にて本田・古新田ほか、新田

堤破損仕り候に付き、十一年以前子年御願い申し上げ御見分の上、本田・古新田堤築き立て申し候分は人夫御積り遊ばさせられ、一日一人に付き御扶持米五合づつ下され、村中にて繕い申し候、勿論他村の普請に参り候節も一日一人に付き御扶持米五合づつ下され候えども、五合づつ下され候ては百姓ども普請勤め難く候に付き、十年以前丑年御断り申し上げ候え、一日一人に付き御扶持米七合五勺づつ下され候、先御代八年以前卯年、穴川村堤普請の節も、一日一人に付き七合五勺づつ下され候御事、

〔注解〕(1) 志摩国鳥羽藩主松平乗邑。

9—44 享保十一年午ノ四月 志摩国英虞郡鵜方村指出帳扣

下々田貳町壹反四畝拾八歩 新田八之盛

分米拾七石壹斗六升八合 定免三ツ

右新田之儀、式拾年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作

御引被下候、

下々田七反八畝貳拾七歩 新田八之盛

分米六石三斗壹升貳合 定免貳ツ

右新田之儀、式拾年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作

御引被下候、

(中略)

土井周防守様御代新田畑

畝数合三反三歩

分米壹石八斗六升貳合

下々田貳町貳畝拾貳歩 新田八之盛

分米拾六石壹斗九升貳合 定免貳ツ五分

右新田之儀、式拾年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作

御引被下候、

下々田貳町壹反壹畝七歩 新田八之盛

分米拾六石八斗九升八合 定免三ツ壹分

右新田之儀、式拾年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作

御引被下候、

下々畑八反八畝九歩 新畑六之盛

分米五石貳斗九升八合 定免三ツ壹分

下々田三反三畝歩 新田八之盛

分米貳石六斗四升 定免三ツ

右新田之儀、式拾年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作

御引被下候、

下々畑貳反七畝貳拾歩 新畑六之盛

分米壹石六斗六升 定免三ツ

下々田拾八町壹反八畝拾六歩半 新田八之盛

内 壹町三反歩 拾八年以前丑ノ年ノ潮入永荒引

内 壹町貳畝貳拾八歩 五年以前寅ノ年ノ上地引

五町貳反貳畝貳拾歩 去巳ノ年ノ上地引

分米百四拾五石四斗八升四合 定免貳ツ

拾石四斗 拾八年以前丑ノ年ノ潮入永荒引

内 八石貳斗三升五合 五年以前寅ノ年ノ上地引

四拾壹石八斗壹升三合 去巳ノ年ノ上地引

右新田之儀、式拾年以前亥ノ年津波ニ而潮入ニ罷成候場所、御見分之上一作

御引被下候、

(中略)

一田畑破損^并道・橋・堤等之普請、少宛之儀ハ村中^ニ而繕申候、他村之普請^ニ茂参候、土井周防守様御代^ニハ他村^江人夫差遣^シ申候覺無御座候、松平和泉守様御代式拾年以前^亥ノ年、津波^ニ而本田・古新田外、新田堤破損仕候^ニ付、拾九年以前子ノ年御願申上御見分之上、本田・古新田堤築立申候分ハ人夫御積^リ被為遊、一日壹人^ニ付御扶持米五合宛被下、村中^ニ而繕申候、勿論他村之普請^ニ参候節茂一日壹人^ニ付御扶持米五合宛被下候得共、五合宛被下候而ハ百姓共普請難勤候^ニ付、拾八年以前丑ノ年御断申上候得者、一日壹人^ニ付御扶持米七合五勺宛被下候、板倉近江守様御代拾六年以前卯ノ年、穴川村堤普請之節茂一日壹人^ニ付七合五勺宛被下候御事、

〔読み下し〕

下々田二町一反四畝十八歩 新田八の盛

分米十七石一斗六升八合 定免三ツ

右新田の儀、二十年以前^亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

下々田七反八畝二十七歩 新田八の盛

分米六石三斗一升二合 定免二ツ

右新田の儀、二十年以前^亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

(中略)

土井周防守様御代新田畑

畝数合三反三歩

分米一石八斗六升二合

下々田二町二畝十二歩 新田八の盛

分米十六石一斗九升二合 定免二ツ五分

右新田の儀、二十年以前^亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

下々田二町一反一畝七歩 新田八の盛

分米十六石八斗九升八合 定免三ツ一分

右新田の儀、二十年以前^亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分之上一作御引き下され候、

下々畑八反八畝九歩 新畑六の盛

分米五石二斗九升八合 定免三ツ一分

下々田三反三畝歩 新田八の盛

分米二石六斗四升 定免三ツ

右新田の儀、二十年以前^亥の年津波にて潮入りにまかり成り候場所、御見分の上一作御引き下され候、

下々畑二反七畝二十歩 新畑六の盛

分米一石六斗六升 定免三ツ

下々田十八町一反八畝十六歩半 新田八の盛

一町三反歩 十八年以前丑の年より潮入り、永荒引き

内 一町二畝二十八歩 五年以前寅の年より上げ地引き

五町二反二畝二十歩 去る巳の年より上げ地引き

分米百四十五石四斗八升四合 定免二ツ

十石四斗 十八年以前丑の年より潮入り、永荒引き

内 八石二斗三升五合 五年以前寅の年より上げ地引き

四十一石八斗一升三合 去る巳の年より上げ地引き

分の之上一作御引き下され候、

(中略)

一田畑破損ならびに道・橋・堤などの普請、少ずつの儀は村中にて繕い申し候、他村之普請にも参り候、土井周防守様御代には他村へ人夫差し遣わし申し候覚え御座無く候、松平和泉守様御代二十年以前亥の年、津波にて本田・古新田外、新田堤破損仕り候に付き、十九年以前子の年御願ひ申し上げ御見分の上、本田・古新田堤築き立て申し候分は人夫御積り遊ばさせられ、一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され、村中にて繕い申し候、勿論他村の普請に参り候節も一日一人に付き御扶持米五合ずつ下され候えども、五合ずつ下され候ては百姓ども普請勤め難く候に付き、十八年以前丑の年御断り申し上げ候えば、一日一人に付き御扶持米七合五勺ずつ下され候、板倉近江守様御代十六年以前卯の年、穴川村堤普請の節も一日一人二付き七合五勺ずつ下され候御事、

〔注解〕(1) 領主に収公された無年貢地。(2) 直前の巳年となる正徳三年(一七一三)。

9—45 享保十一年午四月 志摩国答志郡安乗村差出帳

一安乗村之儀、式拾年以前津波以前、村かこい石垣^(注)田畑^(注)、波^(注)而節々被打破難儀仕候^(注)付、段々繕仕候^(注)処、別而近年及度々百姓共居屋敷^(注)間方便^(注)盡申^(注)候而、先祖^(注)之屋敷を捨、立退申^(注)躰^(注)罷成候^(注)付、段々村難立難儀^(注)至極^(注)奉存候、去春右あせ山之小松当分冥加金差上、以後ハ山年貢^(注)而被為下置候ハ、

見生立成木仕候てかこい杭^(注)仕、村相続仕候様^(注)仕度旨御願申上候^(注)処、御聞届^(注)御免被成下候^(注)処、折節御収役^(注)御障り御座候由被仰聞、右願書御下^(注)被遊難儀^(注)至極^(注)奉存候^(注)処、国府村^(注)右之山ハ論所^(注)之山^(注)と申出候^(注)と承候^(注)付、当春御願申上候ハ、右山之儀^(注)付、国府村^(注)論所^(注)と申候儀^(注)御座候て、乍恐被遂御詮議御見分之上被為^(注)仰付被下候様^(注)と御願申上候得ハ、最早^(注)御交代之節^(注)成御取込^(注)候間、大庄屋^(注)五人として取計、右之訳立申様^(注)可仕旨被^(注)仰渡候由^(注)而大庄屋中^(注)被申付候ハ、右之山^(注)へ先入込申間敷候、御交代茂過候ハ、御取計可被成旨被申付候^(注)付相守罷有候、

〔読み下し〕

一安乗村の儀、二十年以前(来)波以前(後)、村かこい(囲い)石垣ならびに田畑囲い、波にて節々打ち破られ難儀仕り候に付き、だんだん繕り仕り候^(注)処、別して近年たびたびに及び百姓ども居屋敷^(注)間方便^(注)につき申し候て、先祖よりの屋敷を捨て、立ち退き申す体にまかり成り候に付き、段々村立ち難く難儀^(注)至極^(注)に存じ奉り候、去春右あせ山の小松当分冥加金差し上げ、以後は山年貢にて下し置かせられ候はば、見生し立ち成る木仕り候てかこい(囲い)杭に仕り、村相続仕り候様にしたき旨御願ひ申し上げ候^(注)処、御聞き届け御免成し下され候^(注)処、折節御収役に御障り御座候よし仰せ聞かせられ、右願書御下げ遊ばされ難儀^(注)至極^(注)に存じ奉り候^(注)処、国府村より右之山は論所の山と申し出で候と承り候に付き、当春御願ひ申し上げ候は、右山の儀に付き、国府村より論所と申し候儀に御座候て、恐れながら御詮議を遂げられ御見分の上仰せ付けさせられ下され候様にと御願ひ申し上げ候^(注)えば、最早御交代の節に御取り込みに成り候間、大庄屋五人として取り計らい、右の訳立ち申す様に仕るべき旨仰せ渡され候よしにて大庄屋中より申し付け候は、右の山へ先

き入り込み申しまじく候、御交代も過ぎ候はば御取り計らい成らるべき旨申し付けられ候に付き相守りまかり有り候、

〔注解〕(1) 志摩国答志郡安乗村、現在の三重県志摩市阿児町安乗。(2) 山にかかる年貢。高が付いている場合は本途物成、高が付いていない場合は小物成として徴収された。(3) 志摩国答志郡国府村、現在の三重県志摩市阿児町国府。(4) 村境・山論などの争論となった土地。(5) 最早、さつそくの意。(6) 複数の村を統括する組ごとに置かれた者。農民身分ではあるが、各村の代表者である庄屋に対し、その上位統括者として位置づけられる存在。

〔解説〕9—42—9—45は志摩市歴史民俗資料館所蔵で、宝永七年(一七〇七)・享保三年(一七一八)・享保十一年(一七二六)の三年分の志摩国英虞郡鵜方村(現三重県志摩市阿児町鵜方)の村明細帳(差出帳)と享保十一年志摩国答志郡安乗村(現三重県志摩市阿児町安乗)の村明細帳(差出帳)の、それぞれ村方に控えとして書き記されて残されたものである。本史料は、9—42・9—43については『資料集』近世鵜方村文書—文政期以前—(阿児ライブラリー、二〇〇一年)、9—44・9—45については『資料集』享保十一年差出帳(阿児ライブラリー、一九九九年)にそれぞれ全文掲載されているが、ここでは一部語句を改めた上で、宝永地震に関わる部分を掲載した。なお、後者、享保十一年鵜方村明細帳と9—45の安乗村明細帳の正本である領主に提出された各帳面は、それぞれ本史料集に掲載される徳川林政史研究所蔵の9—10と9—14の各帳面となる。領主に提出された正本と比べると、特に9—45安乗村の明細帳に見られるように、文言が不正確な箇所も一部見られるが、記載内容についての違いは見られない。

宝永地震の被害は、両村とも津波被害であったことが確認できる。鵜方村の場合は、津波被害当初のみならず、その二年後の宝永六年になってからも耕地への潮入りによる年貢免除認定地が増加している。またこの地は、津波被害の二十三年後となる享保十一年になっても回復しておらず、その被害の深刻さがうかがわれる。

同様に安乗村についても、志摩半島の先端に位置することもあり、津波による被害は甚大であったようである。本史料によると、津波後にその被害の影響により村全体の村民の離村及び困窮化が激しく進んでいたことが確認できる。またそのことも関係するのか、隣に位置する、同じく津波被害が大きかった国府村との山論(山の権利を巡る争い)もあつたことが確認できる。

(谷口)

9—46 天明二年 乍恐以書付奉願上候

乍恐以書付奉願上候

午起新田^①

一^③御瀧川^②通潮請

堤長五百八拾壹間 但御入用堤

右、午改新田之儀、七拾六年以前宝永^④四年、大地震^②而海成^⑤罷成候処、四拾貳年以前寛保元^⑥四年御願奉申上、百姓自力^⑦以堤築立、三拾六年以前延享^⑦四年^⑧御見取米去^⑤丑年迄上納仕候、右堤繕等之儀も百姓自力^②而仕来候、然^⑨所、当年洪水^②而御瀧川堤切込、右潮請^⑩江押通、凡六拾間余切、其外欠^⑨所等出来仕、其上午改新田泥入・砂入^②而田畑共荒所^③相成申候、依之此度堤切所百姓自力^②及かたく御座候間、乍恐右場所 御憐憫^⑩を以御手当被為^⑪成下候様偏奉願上候、田畑泥・砂入之儀者百姓共銘々可仕候、乍恐右難洪被為

聞召分、格別之 御慈悲被為成下候様、百姓共一統奉願上候、以上、
寅^(天明二年) 四日市庄屋

井島太郎治(黒印)

同

伊達源三郎(黒印)

年寄

忠次郎

同

幸助(黒印)

同

治三郎(黒印)

御役所

〔読み下し〕

恐れながら書付をもつて願ひ上げ奉り候

午起新田

一 御瀧川通 堤長さ五百八十一間 但し御入用堤
潮請け

右、午改新田の儀、七十六年以前宝永四亥年大地震にて海成りにまかり成り候
処、四十二年以前寛保元酉年御願ひ申し上げ奉り、百姓自力をもつて堤築き立
て、三十六年以前延享四卯年より御見取り米を去丑年まで上納仕り候、右堤繕
いなどの儀も百姓自力にて仕り来たり候、然る所、当年洪水にて御瀧川堤切れ
込み、右潮請けへ押し通り、凡そ六十間余り切れ、そのほか欠所など出来仕り、
その上午改新田泥入り・砂入りにて田畑とも荒所に相成り申し候、これにより
この度堤切れの所百姓自力に及びがたく御座候間、恐れながら右場所御憐憫を

もつて御手当て成し下させられ候様ひとえに願ひ上げ奉り候、田畑泥・砂入り
の儀は百姓ども銘々仕るべく候、恐れながら右難渋聞こし召させらるる分、格
別の御慈悲成し下させられ候様、百姓ども一統願ひ上げ奉り候、以上、

寅

四日市庄屋

井島太郎治(黒印)

同

伊達源三郎(黒印)

年寄

忠次郎

同

幸助(黒印)

同

治三郎(黒印)

御役所

〔注解〕(1) 現在の三重県四日市市。(2) 現在の三重県四日市市内を流れる三滝川。
(3) 新開地などの耕作地を、海から侵入する海水から守るために設けられた堤(堤防)のこと、潮受け堤防。(4) 宝永四年(一七〇七)。(5) 海水が田地に浸食した状態。(6) 寛保元年(一七八一)。(7) 延享四年(一七四七)。(8) 天明元年(一七八一)。(9) 耕作ができなくなつて収獲が見込めない地、闕所。(10) 「御憐憫」の上が一文字空いているのは、闕字と呼ばれ、その行為を行う者に対する敬意(この史料に記される地は幕府天領のため、ここでは幕府に対する敬意)を示す。三行後の「御慈悲」も同様。(11) 「被為成下(成し下させられ)」が改行されているのは、平出(へいしゅつ)と呼ばれ、その行為を行う者に対する敬意(この史料に記され

〔解説〕本史料は、宝永四年（一七〇七）の地震により海成化（地盤沈下による水没カ、元から地盤が低かったカ）した午起新田のその後の変遷が確認できる史料である。本史料は四日市市立博物館が所蔵する「井島文庫文書」内の史料の一つで、『四日市市史』第八巻史料編近世Ⅰ（一九九一年）に掲載され、その後『日本の歴史地震史料』拾遺三（二〇〇五年）に再掲されている。ここでは、原本により再度確認した結果、文言等の変更の必要が無いことを確認した上で掲載した。

本史料によると、午起新田は、宝永地震から三十四年後の寛保元年（一七四〇）に海との境界となる堤防を築くことにより耕作地としての復活を遂げ、実際に六年後の延享四年（一七四七）より、毛見を受けた上で年貢上納が行われた。しかし、天明二年（一七八二）の洪水により、御滝川（三滝川）の堤防が切れ、同新田に泥・砂の混入があり荒地となつてしまったため、その手当を願ひ上げたものである。

本史料の主たる内容は作成年でもある天明二年の荒地からの復旧願いであるが、その元となる同新田の被害は宝永地震によるものであり、その後世への影響が確認できる。

(谷口)

寶永六年極月一日 奥熊野尾鷲組流失已後建家之

品書上帳（控）（「尾鷲組大庄屋記録」）

(表紙)

宝永六年丑極月一日

奥熊野尾ハシ組^(鷺)⁽¹⁾

流失已後建家之品書上帳

一流失家五拾三軒

九木浦^②

内

貳拾軒

只今迄本家建申候、

三軒

来春中^ニ建申積^リ御座候、

殘三拾軒

小屋懸ケ⁽³⁾来春中ニ建可申覚悟無御座候、

外
二

拾壹軒
破損家

是者前之通_二繕申候、

右之通御座候、以上、

九木浦庄屋⁽⁴⁾

吉右衛門印

同所肝煎⁽⁵⁾

丑極月

清四郎印

一流失家壺軒

行野浦^⑥

是ハいまた小屋懸^ケニ御座候、

外ニ八軒 破損家

是者前之通ニ繕申候、

右之通御座候、以上、

行野浦庄屋

八郎右衛門印

同所肝煎

丑極月

李兵衛印

一流失家拾壹軒

内

大曾根浦⁽⁷⁾

三軒 只今迄本家建申候、

残八軒 小屋懸^ケ来春中ニ建申覚悟無御座候、

外ニ三軒 破損家

是者前之通繕申候、

右之通御座候、以上、

大そね浦庄屋^(曾根)

吉六印

同所肝煎

丑極月

徳兵衛印

一流失家壹軒

是者本家建申候、

向井村⁽⁸⁾

右之通御座候、以上、

向井村庄屋

角七印

同所肝煎

庄三郎印

丑極月

一流失家五拾三軒

内

八軒

只今迄本家建申候、

貳軒

来春中ニ建申積り御座候、

残四拾三軒

小屋懸^ケ

右之通御座候、以上、

矢浜村庄屋

市大夫印

同所肝煎

丑極月

市左衛門印

一流失家百三拾四軒

内

拾七軒

只今迄本家建申候、

残百拾七軒

小屋懸^ケ来中^(余脱カ)ニ建可申覚悟無御座候、

外ニ

藏貳軒

只今迄建申候、

右之通御座候、以上、

林浦庄屋

林浦⁽¹⁰⁾

矢浜村⁽⁹⁾

〔読み下し〕

（表紙）

宝永六年丑極月一日

奥熊野尾鷲組

流失以後建家の品書き上げ帳

一流失家五十三軒

九木浦

内

二十軒 　ただ今まで本家建て申し候、

三軒 　来春中に建て申す積り御座候、

残三十軒 　小屋懸け、来春中に建て申すべき覚悟御座無く候、

外に

十一軒 破損家

是は前の通りに繕い申し候、

右の通り御座候、以上、

九木浦庄屋

吉右衛門印

同所肝煎

清四郎印

丑極月

一流失家一軒

是はいまだ小屋懸けに御座候、

行野浦

与兵衛印

同所肝煎

清右衛門印

丑極月

一流失家百貳拾五軒

南浦^①

内

貳十貳軒 　只今本家建申候、

貳軒 　来春中二建申積り御座候、

残百壹軒

外二蔵五軒 　只今迄建申候、

右之通御座候、以上、

南浦庄屋

伊兵衛印

同所肝煎

武左衛門印

丑極月

一流失家貳百六拾四軒

中い浦^②

内

五拾貳軒 　只今迄本家建申候、

壹軒 　来春中二建申積り御座候、

（以下一部欠）

右御吟味仕候処、相違無御座候間、奉願通御普請ニ被仰付可被下候、以上、

仲助一

喜多村孫九郎様

外に八軒 破損家

是は前の通りに繕い申し候、

右の通り御座候、以上、

行野浦庄屋

八郎右衛門印

同所肝煎

左兵衛印

丑極月

一流失家十一軒

内

三軒 ただ今まで本家建て申し候、

残八軒 小屋懸け来春中に建て申す覚悟御座無く候、

外に三軒 破損家

是は前の通りに繕い申し候、

右の通り御座候、以上、

大曾根浦庄屋

吉六印

同所肝煎

徳兵衛印

丑極月

一流失家一軒

是は本家建て申し候、

右の通り御座候、以上、

向井村庄屋

向井村

角七印

同所肝煎

庄三郎印

丑極月

一流失家五十三軒

内

八軒 ただ今本家建て申し候、

二軒 来春中に建て申す積り御座候、

残四十三軒 小屋懸け

右の通り御座候、以上、

矢浜村庄屋

市大夫印

同所肝煎

丑極月

市左衛門印

一流失家百三十四軒

内

十七軒 ただ今まで本家建て申し候、

残百十七軒 小屋懸け、来（春）中に建て申すべき覚悟御座無く候、

外に

蔵二軒 ただ今まで建て申し候、

右の通り御座候、以上、

林浦庄屋

与兵衛印

丑極月

同所肝煎

清右衛門印

一流失家百二十五軒

南浦

内

二十二軒

ただ今まで本家建て申し候、

二軒

来春中に建て申す積り御座候、

残百一軒

外に蔵五軒

ただ今まで建て申し候、

右之通御座候、以上、

南浦庄屋

伊兵衛印

丑極月

同所肝煎

武左衛門印

一流失家二百六十四軒

中井浦

内

五十二軒

ただ今まで本家建て申し候、

一軒

来春中に建て申す積り御座候、

(以下一部欠)

右御吟味仕り候処、相違御座無く候間、願ひ奉る通り御普請に仰せ付けられ下され候、以上、

仲助一

喜多村孫九郎様

〔注解〕(1) 江戸期の紀州藩の組名。牟婁郡内の尾鷲郷十浦村(水地村・天満浦・堀北村・野地村・中井浦・南浦・林浦・矢浜村・向井村・大曾根村)に須賀利村・行野浦・久木浦・早田浦を加えた十四浦村となる。これらはすべて現在の三重県尾鷲市内に含まれる。(2) 紀伊国牟婁郡九木浦、現在の三重県尾鷲市九鬼町。(3) 仮小屋のこと。(4) 江戸期の村役人であり、村の代表者。(5) 村役人の一つ。ここでは庄屋に次ぐ役職となる。(6) 紀伊国牟婁郡行野浦、現在の三重県尾鷲市行野浦。(7) 紀伊国牟婁郡大曾根浦、現在の三重県尾鷲市大曾根浦。(8) 紀伊国牟婁郡向井村、現在の尾鷲市向井。(9) 紀伊国牟婁郡矢浜村、現在の三重県尾鷲市矢浜。(10) 紀伊国牟婁郡林浦、現在の三重県尾鷲市林町。(11) 紀伊国牟婁郡南浦、現在の尾鷲市南浦。(12) 紀伊国牟婁郡中井浦、現在の尾鷲市中井浦。

〔解説〕本史料は、尾鷲市立中央公民館郷土室蔵「尾鷲組大庄屋記録」内に残される史料である。その内容は、宝永六年(一七〇九)にあった紀州藩による津波被害調査の際に尾鷲組大庄屋であった仲助一がまとめた報告の村控えとなる。最後に記される浦となる中井浦の村役人の署名が無く、また、本史料集に掲載する他の宝永地震・津波の被害状況を記す「見聞闕疑集」・「宝永海嘯ノ記」には、本史料中に記される以外の浦村が津波被害を受けていたことが記され、加えて本史料に記される浦村数は尾鷲組に含まれる村浦数と比べ不足している。以上から、残念ながら、一部欠如していると考えられ、尾鷲組の被害状況をすべて確認できる訳ではない。ここでは尾鷲組の内の久木浦・行野浦・大曾根浦・向井村・矢浜村・林浦・南浦と中井浦(後欠)についての記載のみが確認できると言うことになる。

本史料は、すでに『新収日本地震史料』第三巻別巻(一九八三年)に掲載さ

れているが、表紙・村名に誤りがあり、また、部分掲載であるため、一部語句を変更した上で全文を掲載した。なお、村名の誤りを指摘された上で詳細な分析を行っている研究に中田四朗「三重県漁村災害史の研究上―宝永の地震―」（『年報 海と人間』第十六号、一九八九年）がある。

この時の紀州藩の調査内容は、同じく「尾鷲組大庄屋記録」に記される史料である（『宝永六年』十二月一日付喜多村孫九郎書付控）から、宝永四年の津波被害状況として、どの浦・村へどれだけの範囲で津波が入り、波の高さはどれほどであったのか、また田畑の荒れ具合と復旧具合、流家・流死人・牛馬の被害及び、それに対する「お救い」（藩としての救済）の有無・家の再建状況についてであったことが知られる。十二月二十九日、返答としての調書が送られたようであるが（『宝永六年』十二月二十九日付寒川弥五大夫・浅井忠八連署書状控）「尾鷲組大庄屋記録」、その時提出された調書の控が本史料と考えられる。ここでは、流失家数・家の再建数・小屋掛け止まりとなっている家数が記されている。

前記中田氏によると、本史料に記される流失家数は、中井浦は全滅に近く、また林・南両浦も九割程の家数流失であったとされ、この津波被害の大きさが本史料により知られる。

9—48 「見聞闕疑集」

一 宝永四亥年十月四日午刻、大地震山々崩れ、家・蔵・石垣等をもゆりくすし、
半時⁽¹⁾計過、潮影⁽²⁾敷わき出高浪、但シ⁽³⁾浪高サ浜表にて、林浦⁽⁴⁾・野地村迄入、尾鷲中
家・蔵不⁽⁵⁾残流失、老男女数多溺死、又ハ少々助り上り候者も有之、惣而流死

（谷口）

人五百三拾余人、其外生類⁽⁴⁾迄流失、前代未聞之大変なり、延宝⁽⁵⁾・元禄⁽⁶⁾之頃も津浪入候得共少々之儀にて候、慶長九年⁽⁷⁾にも津浪入候よしに候得とも、人家を流し候程の事ハ無之由申伝へ候、

一 此時、御郡奉行水野九左衛門殿・御代官幸田彦左衛門殿・御郡奉行喜多村孫九郎殿、若山⁽⁸⁾御入被成候、御目附佐武源八殿若山⁽⁹⁾御入、同川合善右衛門殿御儀御役所御当番⁽¹⁰⁾候得共、御城米御用ニ付新宮領井田村へ御越ゆへ、津浪に御のかれ被成候、水野九左衛門殿・幸田彦左衛門殿御両人浦々御見分之上、残り之人数へ米・味噌・塩・着類・農具・湊道具・糸取車、若山⁽¹¹⁾御廻し、在々江被下置候、米者在々御蔵へ御出、粥米として被下命を助り、誠に難有奉存候儀難尽筆紙候、家財を流候面々流道具等拾ひ集め。木屋掛⁽¹²⁾候住居不自由成儀言語に絶候、其年之御年貢御赦免、其上山・海之稼⁽¹³⁾へ元銀、夫々御見計ひ御貸被成下候、

一 亥十月十七日仲助市大庄屋役当分被 仰付、霜月十六日本役に被仰付候、享保三戌九月源十郎と改、

一 御目附役所・御口前銀札役所流失、銀札役所者手代役人不⁽¹⁴⁾残流失、役人一人煩、一人助り上⁽¹⁵⁾ル、先大庄屋小門与助家内不⁽¹⁶⁾残流失、浪入候所々別紙絵図⁽¹⁷⁾に記之、

一 尾鷲之内残り候所々ハ、野地村⁽¹⁸⁾に家三十軒、林浦⁽¹⁹⁾に二十軒余、矢浜村半分程、天満過半、水地少々、九木浦浜端ハ流れ候、早田浦⁽²⁰⁾ハ無別条、須賀利浦半分程、大曾根⁽²¹⁾・行野少々、

一 他所浦々浪入候在々、長嶋⁽²²⁾・三浦⁽²³⁾・矢口⁽²⁴⁾・引本⁽²⁵⁾・錦浦⁽²⁶⁾・古里⁽²⁷⁾・海野⁽²⁸⁾・三木浦⁽²⁹⁾・甫母⁽³⁰⁾・新鹿⁽³¹⁾・遊木⁽³²⁾・大泊り⁽³³⁾・小泊り⁽³⁴⁾但⁽³⁵⁾此⁽³⁶⁾入江に浪入、浜・磯へハ浪不入、名柄少々・梶賀⁽³⁷⁾・曾根⁽³⁸⁾・古江⁽³⁹⁾、

一 浪不入浦々、木本⁽⁴⁰⁾・波田⁽⁴¹⁾・須⁽⁴²⁾・盛松⁽⁴³⁾・須野⁽⁴⁴⁾・早田⁽⁴⁵⁾・道瀬⁽⁴⁶⁾、享保十二未年迄廿一

年ニ成、但シ、浪入候後、若山御目附田中勘八殿・御添奉行浅井忠八殿・御奉行上野三郎右衛門殿段々御廻り被遊候、

〔読み下し〕

一宝永四亥年十月四日午の刻、大地震山々崩れ、家・蔵・石垣等をも揺り崩し、半時計り過ぎ、潮夥しく湧き出で高浪、但し浪高き浜表にて壺丈六尺と言ふ林浦・野地村まで入り、尾鷲中家・蔵残らず流失し、老男女数多溺死、又は少々助かり上り候者もこれ有り、惣じて流死人五百三十余人、そのほか生類まで流失、前代未聞の大変なり、延宝・元禄の頃も津浪入り候えども少々の儀にて候、慶長九年にも津浪入り候よしに候えども、人家を流し候程の事はこれ無きよし申し伝え候、

一この時、御郡奉行水野九左衛門殿・御代官幸田彦左衛門殿・御郡奉行喜多村孫九郎殿、若山に御入り成られ候、御目附佐武源八殿若山に御入り、同川合善右衛門殿御儀御役所御当番に候えども、御城米御用に付き新宮領井田村へ御越しゆえ、津浪に御のかれ成られ候、水野九左衛門殿・幸田彦左衛門殿御両人浦々御見分の上、残りの人数へ米・味噌・塩・着類・農具・湊道具・糸取車、若山より御廻し、在々へ下し置かれ候、米は在々御蔵より御出し、粥米として下され命を助かり、誠もつて有り難く存じ奉り候儀筆紙に尽くし難く候、家財を流し候面々流れ道具など拾い集め、木屋掛け候住居不自由成る儀言語に絶し候、その年の御年貢御赦免、その上山・海の稼ぎへ元銀、それぞれ御見計い御貸成し下され候、

一亥十月十七日仲助市大庄屋役当分仰せ付けられ、霜月十六日本役に仰せ付けられ候、享保三戌九月源十郎と改、

一御目附役所・御口前銀札役所流失、銀札役所は手代役人残らず流失、役人一人煩い、一人助かり上る、先大庄屋小門与助家内残らず流失、浪入り候所々

別紙絵図にこれを記す、

一尾鷲の内残り候所々は、野地村に家三十軒、林浦に二十軒余、矢浜村半分程、天満過半、水地少々、九木浦浜端は流れ候、早田浦は別条無し、須賀利浦半分程、大曾根・行野少々、

一他所浦々浪入り候在々、長嶋・三浦・矢口・引本・錦浦・古里・海野・三木浦・甫母・新鹿・遊木・大泊・小泊、但し、入江に浪入り、浜・磯へは浪入らず、これゆえに津浪と言ふとなり、名柄少々・梶賀・曾根・古江、

一浪入らざる浦々、木本・波田須・盛松・須野・早田・道瀬、享保十二未年まで二十一年に成り、但し浪入り候後、若山御目附田中勘八殿・御添奉行浅井忠八殿・御奉行上野三郎右衛門殿段々御廻り遊ばされ候、

〔注解〕(1) 一時(ひととき)の半分、現在の約一時間。(2) 紀伊国牟婁郡林浦、現在の三重県尾鷲市林町。(3) 紀伊国牟婁郡野地村、現在の三重県尾鷲市野地町。(4) ここでは、人間以外の馬・牛などの生き物のこと。(5) 一六七三年～一六八一年の元号。(6) 一六八八年～一七〇四年の元号。(7) 一六〇四年、この年の十二月十六日に地震・津波があった(慶長地震)。(8) 和歌山城下。(9) 「御城米」の上が一文字空いているのは、闕字と呼ばれ、その行為を行う者に対する敬意(この史料に記される地は和歌山藩領のため、ここでは和歌山藩主に対する敬意)を示す。なお、以下の一文字の空欄も同様。(10) 紀伊国牟婁郡井田村、現在の三重県南牟婁郡紀宝町井田。(11) 各浦・村。(12) 一七一八年。(13) 体調不良。(14) 紀伊国牟婁郡野地村、現在の三重県尾鷲市野地町。(15) 紀伊国牟婁郡林浦、現在の三重県尾鷲市林町。(16) 紀伊国牟婁郡矢浜村、現在の三重県尾鷲市矢浜。(17) 紀伊国牟婁郡天満浦、現在の三重県尾鷲市天満浦。(18) 紀伊国牟婁郡水地村、現在の三重県尾鷲市天満浦水地。(19) 紀伊国牟婁郡九木浦、現在の三重県尾鷲市九鬼町。(20) 紀伊国牟婁郡早田浦、現在の三重県尾鷲市早田町。(21) 紀伊国牟婁郡須賀利浦、現

在の三重県尾鷲市須賀利町。(22) 紀伊国牟婁郡大曾根浦、現在の三重県尾鷲市大曾根浦。(23) 紀伊国牟婁郡行野浦、現在の三重県尾鷲市行野浦。(24) 紀伊国牟婁郡長嶋浦、現在の三重県北牟婁郡紀北町紀伊長島区長島。(25) 紀伊国牟婁郡三浦、現在の三重県北牟婁郡紀北町紀伊長島区三浦。(26) 紀伊国牟婁郡矢口浦、現在の三重県北牟婁郡紀北町海山区矢口浦。(27) 紀伊国牟婁郡引本浦、現在の三重県北牟婁郡紀北町海山区引本浦。(28) 伊勢国牟婁郡錦浦、現在の三重県度会郡大紀町錦。(29) 紀伊国牟婁郡海野浦の一部、現在の三重県北牟婁郡紀北町紀伊長島区古里。(30) 紀伊国牟婁郡海野浦、現在の三重県北牟婁郡紀北町紀伊長島区海野。(31) 紀伊国牟婁郡三木浦、現在の三重県尾鷲市三木浦町。(32) 紀伊国牟婁郡浦母浦、現在の三重県熊野市浦母町。(33) 紀伊国牟婁郡新鹿村、現在の三重県熊野市新鹿町。(34) 紀伊国牟婁郡遊木浦、現在の三重県熊野市遊木町。(35) 紀伊国牟婁郡大泊村、現在の三重県熊野市大泊町。(36) 紀伊国牟婁郡古泊村、現在の三重県熊野市磯崎町。(37) 紀伊国牟婁郡名柄村、現在の三重県尾鷲市長柄町。(38) 紀伊国牟婁郡梶賀浦、現在の三重県尾鷲市梶賀町。(39) 紀伊国牟婁郡曾根浦、現在の三重県尾鷲市曾根町。(40) 紀伊国牟婁郡古江浦、現在の三重県尾鷲市古江町。(41) 紀伊国牟婁郡木本浦、現在の三重県熊野市木本町。(42) 紀伊国牟婁郡波田須村、現在の三重県熊野市波田須町。(43) 紀伊国牟婁郡盛松浦、現在の三重県尾鷲市盛松。(44) 紀伊国牟婁郡須野浦、現在の三重県熊野市須野町。(45) 紀伊国牟婁郡早田浦、現在の三重県尾鷲市早田町。(46) 紀伊国牟婁郡道瀬浦、現在の三重県北牟婁郡紀北町紀伊長島区道瀬。(47) 一七二七年。

〔解説〕本史料は、中田四朗「三重県漁村災害史の研究上―宝永の地震―」(『年報 海と人間』第十六号、一九八九年)によって、その作成過程も含めて詳細に分析されている。それによると、本帳の末尾に記される「尾鷲組大庄屋仲彦助」の父である仲彦十郎が宝永地震・津波の被害を受けた後に大庄屋代役、後

に大庄屋役となって以来の尾鷲七郷にかかわる諸問題を書き残したものを元とし、後に彦助が清書したものとされる。ただ、その記載内容は、前記の内容にとどまらず、特に前半部では大庄屋役の変遷など、それ以前を含む尾鷲七郷(南浦・中井浦・天満浦・矢浜村・向井村・大曾根浦・行野浦)の由緒・歴史について記されている。

本史料末尾には「享保十六年寅正月 尾鷲組大庄屋仲彦助」と署名されているが(序文は享保二十年十一月付け)、現在残される本史料「見聞闕疑集」は、中田氏が指摘されるように、それ自体ではなく、嘉永年間(一八四八―一八五四)以後に書写・加筆されたものと考えられる。なお、今回は尾鷲市立中央公民館内郷土室蔵の同史料写真にて校訂し、『新収日本地震史料』第三巻別巻(一九八三年)に翻刻掲載される同史料の一部語句を修正した。その際に、文字の修正のみでは無く、行の変換箇所・文字の挿入部などから、筆者も後に筆写されたものであると確認した。

本史料は、宝永四年(一七〇七)十月四日正午に地震による家・蔵などの被害があり、その一時間後に、およそ四・八メートルもあると考えられる津波にのみ込まれ、五三〇余人の流死者が出たことが記載されている。

続いて、和歌山藩による見分・生活必需品の支給・年貢免除・生活復旧に向けての貸付金など救済措置が記され、大庄屋小門与助一家の後を受け仲助市(後の仲源十郎)が大庄屋役就任したこと、野地村の三〇軒をはじめ、林浦二〇余軒、矢浜村半数、天満浦大半、水地村は少しの残存家数、尾鷲の北南に位置する現在の紀伊長島区や熊野市など、近隣諸浦の被害状況について記されている。

(谷口)

9—49 「嘉永七年海嘯ノ記」(『念仏寺記録』写)

嘉永七年海嘯ノ記

嘉永七年十一月四日ノ海嘯ハ第十七世浄誉上人ノ代ニシテ当時ノ過去帳(過去帳第五号嘉永二年ヨリ明治十七年四月迄ノ分)ニ上人自ラ其ノ状況ヲ記載セラレシモノアリ、左ニ録ス、

嘉永七寅十一月四日、此日南本町浜中屋四郎助方ニ仏事有之、施餓鬼一会勤め遣し可申答ニて本堂内荘(装ノ誤?)りいたし置く而台所江下、たはこ吸付居り、然る処江大變の地震ゆり出し、直に広庭に飛出し、石畳の上にて暫くイミ、其内地しんもゆり止、下男三兵衛事南本町辺江見舞に遣し置、自分本堂内江這入、直様本尊三昧打敷二包、其内石屋安平と申もの壺人参り、ともとも世話いたし呉、彼是いたす内ニ広庭のあたりとんくからくとすさまじき音が聞江たり、是ハ大變之事也と彼の本堂前障子の側ニ立ち、本家見世の方をみれハ、土けむり計りにて唯とんくからくの音計り聞江、是ハ実ニ大變成事と存し、直に卵塔の築山江登り一見致す心得にて、其内観音堂の側石垣を打ちし浪来るを見而、自分命からく過去帳箱持、中村目当に卵塔石垣のくすれたる所より逃去り、中村山⁽¹⁾ニ而浜吉左衛門老人并ニ家内之ものニ出会候時ハ、一なみだ出たり、中村山に寄集りし人々更ニ生たる心持無之事の有様也、林浦山⁽²⁾之端より向、矢浜⁽³⁾一里塚の処迄ハ平一面の泥海也、中井町・川原町・金剛寺⁽⁴⁾の前通り坂場道筋迄ハ、一向町筋の様子差別無之大海のごとし也、汐のはやき事滝水のおつるがごとし、天満⁽⁵⁾・長浜⁽⁶⁾之方ニ掛り舟七・八般(隻の誤りか)浦か、り是あり、此舟ウツにまかれ居る有様ハ実に恐しき次第、むかし宝永四年亥⁽⁷⁾の十月四日右之仕合なるよし、伊勢屋嘉兵衛所持過去帳記し有之候、夫より昼飯後過、南藤右衛門荒古江行、寺内之者三人共一飯戴き、暮六ツ頃野地村良源寺

江行、厚^キ世話ニ預り、十一日迄居り十二日昼過より寺内江引取申候、

十七代浄誉

〔書き下し〕

嘉永七年海嘯の記

嘉永七年十一月四日の海嘯は第十七世浄誉上人の代にして当時の過去帳(過去帳第五号嘉永二年より明治十七年四月までの分)に上人自らその状況を記載せられしものあり、左に録す、

嘉永七寅十一月四日、この日南本町浜中屋四郎助方に仏事これ有り、施餓鬼一会勤め遣し申すべき筈にて本堂内装りいたし置いて台所へ下り、たばこ吸い付け居り、然るところへ大變の地震ゆり出し、直ちに広庭に飛び出し、石畳の上にて暫くたたずみ、その内地震もゆり止み、下男三兵衛の事南本町辺へ見舞いに遣し置き、自分本堂内へ這い入り、直様本尊三体打ち敷きに包み、その内石屋安平と申すもの一人参り、ともども世話いたしくれ、かれこれいたす内に広庭のあたり、とんとんからからとすさまじき音が聞こえたり、これは大變の事也と彼の本堂前障子の側に立ち、本家見世の方を見れば、土けむりばかりにて唯とんとんからの音ばかり聞え、これは実ニ大變成る事と存じ、直ちに卵塔の築山へ登り一見致す心得にて、その内観音堂の側石垣を打ちし浪来るを見て、自分命からがら過去帳箱持ち、中村目当てに卵塔石垣の崩れたる所より逃げ去り、中村山にて浜吉左衛門老人ならびに家内之ものに出会候時は、一なみだ出たり、中村山に寄せ集りし人々更に生きたる心持ちこれ無き事の有様也、林浦山の端より向い、矢浜一里塚のところまでは平一面の泥海也、中井町・川原町・金剛寺の前通り坂場道筋まで、一向町筋の様子差別これ無く大海のごとし也、汐のはやき事滝水のおつるがごとし、天満・長浜の方に掛り舟七・

八隻浦がかりこれあり、この舟うずにまかれ居る有様は実に恐しき次第、むかし宝永四年亥の十月四日右の仕合せなるよし、伊勢屋嘉兵衛所持過去帳記しこれ有り候、それより昼飯後過ぎ、南藤右衛門荒古へ行、寺内の者三人ども一飯戴き、暮六ツ頃野地村良源寺へ行き、厚き世話に預り、十一日まで居り十二日昼過ぎより寺内へ引き取り申し候、

十七代浄誉

〔注解〕(1) 紀伊国牟婁郡中井浦と南浦の一部にある山。現在の三重県尾鷲市中村町。(2) 紀伊国牟婁郡林浦、現在の三重県尾鷲市林町。(3) 紀伊国牟婁郡矢浜村、現在の三重県尾鷲市矢浜。(4) 三重県尾鷲市北浦町にある寺院。(5) 紀伊国牟婁郡天満浦、現在の三重県尾鷲市天満浦。(6) 紀伊国牟婁郡天満浦の港の一つ、現在の三重県尾鷲市天満浦長浜。(7) 一七〇七年。(8) 紀伊国牟婁郡野地村、現在の三重県尾鷲市野地町。

〔解説〕本史料は、嘉永七年(一八五四)十一月四日の地震・津波を経験した現在の三重県尾鷲市内にある念仏寺十七世浄誉が、そのときの状況を同寺の「過去帳」内に記した文章を、昭和二年(一九二七)に、同寺第二十六世刹誉察音が、考察・筆写したものである。なお、嘉永七年十一月二十七日に安政と改元されたため、この地震は安政東海地震と呼ばれる。

表題に「嘉永七年海嘯ノ記」とあるが、浄誉が記した部分ではなく、その前の察音による記述部に記されていることから、この名称は、恐らく察音による命名と考えられる。また、本史料中に「(装ノ誤?)」「(隻の誤りか)」と記される部分は、察音による考察である。なお、今回は尾鷲市立中央公民館内郷土室にある同史料の写真にて校訂した。

本史料は、地震による揺れがあったため、念仏寺本堂に安置されるご本尊像を避難させる準備を行っていたところ、同寺近辺まで津波が接近してきたため、過去帳箱を持って命からがら中村山に避難したことが記される。浄誉自身は逃げ切れたものの、津波は林浦の山の端から矢浜村にかけて、また、町筋を抜けて金剛寺門前まで押し寄せてきており、尾鷲全体に被害があったことが知られる。

なお、本史料は、中田四朗「三重県漁村災害史の研究下―安政の津波その2―」(『年報海と人間』第十九号、一九九一年)に一部写真が示されている。

(谷口)

9―50 「宝永海嘯ノ記」(『念仏寺記録』写)

宝永海嘯ノ記

宝永⁽¹⁾丁亥十月四日晴天、化日^(昨日)に異り例ならず温なる日也、午の中刻、俄に震動大地を動し、古き家はゆりつぶすべくも見へ稀り、外へ戸板又ハ畳やうの物取出し、地震ゆりさげん事を恐れて、其上に並々居、肝をひやし、只神仏の御力を祈^ル計り也、古き土蔵ハ土壁を落し、けハしき山ハ崩れ落、野の鹿・林の禽・犬猫迄も驚き騒ぎ、物すさまじき有様たとへんに物なし、半時程して地震漸く止ミ、諸の漁船も驚き帰る、沖の模様を尋るに、何とやらんすさまじき気色のよし漁人の物語り聞に、ものうく人々又沖のミに気を付け詠居たる、其内半時ほど過る、浪打側も何とやらん颯々と物すさまじく水の色も赤土をこねたるところとくに見ゆる、中にも賢老人は昔より聞及たる、津波とやらんが来るにて有らんと云出す、夫より我先きにと逃出し、中井本町筋より後を見かへれば、半町も後より只ぐはらぐはらぐと鳴渡り、空ハす、のけむりにて黒雲の落

たる様に見ゆる、それよりいよく息を限りに中村山を心かけ逃のび、後を見かへせば、はや在中海となりて、汐のさし引大川の早き水の行よりもすさまじ、其間に家・蔵は^{いかだ}梓と成る、早き汐のさしひきも一時はとしてやミ、本のごとく陸となれり、中村山より逃のびたる人を見れば、纔ならでハ見へず、人々聲々に^{（説く）}是ハ世の滅ルにてぞ有らん、我も人も此上ともに助るものハ老人も有まじと、只なく計にて其夜ハはし^{（寝て）}の残り家或ハ守屋、其外山野にて夜を明し、夫より親兄弟一家親類をたつね合、其時逃のびざるハ石・材木に打れ、或ひハ水に溺れて死す、沖へ引流されたるも一兩日の間に余ほど助りかへる、見へざるハ方々死骸をたづね葬る、尾鷲五ヶ村にて老若男女死人千余人と書記ス、其外旅人の死する数ハ不知、則（測の誤カ）^{（馬越）}間越の麓に千人塚と申あり、是ハ尋る人なき死人、かたち見分^{（編者）}かたき死人を大なる穴をほり一所に葬る、潮のあがりたる限りハ、

西ハ今御目附屋敷の前まで

北ハ川筋之通坂場の後迄金剛寺堂へ汐二・三尺上^{（4）}ル、庫裡ハ半分ねぢ切^{（5）}ル

南の方家拾軒ほど残り、林浦助九郎屋敷迄にて留り、

今町ハ六太夫家半分残り、浪先ハ垣の内伝八屋しき迄行、

堀ハ町留り迄、野地^{（6）}ハ下横町六分通り流る、敷右衛門家ハ残り、其外ハ不残

流れ行、其夜中地震不絶少々ツ、ゆる、

夫より其年中ハ毎日毎夜地震と高浪の有様也、故に後世の為に是を書残ス者也、

享保十四年^{（7）}己酉十月四日

小河嘉兵衛宜忠三十五才書之

拾参歳之時高浪二逢、今年二十三回ニ当ル、

（察音曰ク、享保十四年ハ当山十世見譽上人代ナリ、先代嘉兵衛ハ当時ヨリ

廿三年前、宝永四年拾月四日ノ海嘯ノ際死亡ス、法号「欣誉浄安」ナリ）

或人問テ曰、地震・高浪亦末世にも可有也、何ノ故を以、ケ様成^{（8）}大変起^{（9）}ル、答テ曰、昔もありといへども書残ス人少ければ知ル人稀也、又今日にも末世にも可有謂有り、易^{（10）}ニ曰、風入^{（11）}テ地中^{（12）}ニ地震^{（13）}スト有り、又漢書五行志下之上^{（14）}三伯陽甫^{（15）}曰ク、陽伏而不能出^{（16）}ルコト陰迫不能^{（17）}ノ昇^{（18）}、於^{（19）}テ是^{（20）}ニ地震^{（21）}ス、或書記^{（22）}ニ曰、大地震^{（23）}裂^{（24）}レ山^{（25）}ヲ崩^{（26）}ス人家^{（27）}ヲ一、此時大海已^{（28）}ニ傾^{（29）}テ盆^{（30）}ヲ如^{（31）}レ洶^{（32）}、高浪起^{（33）}とあり、既^{（34）}ニ慶長、延宝、元禄之頃も地震・高浪有るといへども、人家を流したる程の事も無之、然れハ陰陽之変氣積り^{（35）}て大変をなす、高浪ハ海底の水湧出て其氣発する所なき故也、例よりも高く成て津々湊々へさし込、それより陸に揚^{（36）}ル、大地震する時にて必ず高浪ありと心得、其一郷不殘言^{（37）}イ合、地形高^{（38）}キ所を目当として逃のひ、身命を全^{（39）}する時ハ陰陽不順にて、縦令如何様之大変に逢といへども満てハ闕^{（40）}ケ闕^{（41）}てハ満るの道理を以、天運循環し、陰陽和合して又順にかへる也、其時ハ五穀豊穰にして士農工商ともにそれぞれの家業を失はずして早^{（42）}業に取懸り不怠務^{（43）}ル時ハ、一旦家財不殘流失にをよぶといへども各得^{（44）}ニ其所^{（45）}ヲ一又本のごとく成事無疑、天は開てより以来、生々し尽^{（46）}ル期なし、地震・高浪・大風・大雨雷、此類陰陽不順なれば必^{（47）}ス起^{（48）}ル、兼て可有ものと心得、其期に望て驚き騒^{（49）}ク事なかれ、為^{（50）}其是^{（51）}を書残^{（52）}スもの也、

又曰ク、同年同月廿六日より富士山の東の方焼る、其響大筒を打のごとく、何国ともなく此辺までも相聞ゆ、富士近辺長子（銚子？）まで灰砂ふり、四・五日の間ハ昼夜の分ちなく、焼出しより焼仕尽まで日数廿日ほどの間也、其時富士の東の方に山八歩目程に小山吹出る、則其名を宝永山と名付^{（53）}ク、其謂ハ宝永年中の事なればなり、

于時元文四年^{（54）}己未十月四日

亡父・同妹三十三回偉辰

採筆於南紀熊野尾鷲浦

小河嘉兵衛宜忠四十五歳

(察音曰く、嘉兵衛妹ハ宝永四年十月四日海嘯の際、父嘉兵衛ト共ニ死亡ス、
法号「驚夢童女」ナリ)

安永七戌十月七日八ツ時、大地震人多ク中村山へ逃ル、石垣ハ崩る、所もあれど浪ハ不来と也、

〔読み下し〕

宝永海嘯の記

宝永四丁亥十月四日晴天、陀日に異なり例ならず温かなる日也、午の中刻、俄に震動大地を動し、古き家はゆりつぶすべくも見えはべり、外へ戸板または畳
よの物取り出し、地震ゆりさげん事を恐れて、その上に並々居り、肝をひやし、ただ神仏の御力を祈る計り也、古き土蔵は土壁を落し、けわしき山は崩れ
落ち、野の鹿・林の禽・犬猫までも驚き騒ぎ、物すさまじき有様たとえんに物
なし、半時程して地震漸く止み、諸の漁船も驚き帰る、沖の模様を尋ねるに、
何とやらんすさまじき気色のよし漁人の物語り聞くに、ものうく人々また沖の
みに気を付け詠め居たる、其の内半時ほど過ぐる、浪打側も何とやらん颯々と
物すさまじく水の色も赤土をこねたるごとくに見ゆる、中にも賢老人これは昔
より聞き及びたる、津波とやらんが来るにて有らんと云い出す、それより我先
きにと逃げ出し、中井本町筋より後を見かえれば、半町も後より只ぐわらぐわ
ら、はらはらと鳴き渡り、空はすすのけむりにて黒雲の落ちたる様に見ゆる、
それよりいよいよ息を限りに中村山を心がけ逃げのび、後を見かえせば、はや
在中海となりて、汐のさし引き大川の早き水の行くよりもすさまじ、その間に
家・蔵は梓いかりと成る、早き汐のさしひきも一時ほどしてやみ、本のごとく陸とな

れり、中村山より逃げのびたる人を見れば、纔ならでは見えず、人々聲々にこ
れは世の滅びるにてぞ有らん、我も人もこの上ともに助かるものは一人も有ま
じと、ただ泣く計りにて、その夜は、はしばしの残り家或いは守屋、そのほか
山野に寝て夜を明かし、それより親兄弟一家親類をたずね合い、その時逃げの
びざるは石・材木に打たれ、或いは水に溺れて死す、沖へ引き流されたるも一
両日の間によほど助かりかえる、見えざるは方々死骸をたずね葬る、尾鷲五ヶ
村にて老若男女死人千余人と書き記す、その外旅人の死する数は知れず、則ち
馬越の麓に千人塚と申すあり、これ尋ねる人なき死人、かたち見分けがたき死
人を大なる穴を掘り一所に葬る、潮のあがりたる限りハ、

西は今の御目附屋敷の前まで

北は川筋の通、坂場の後まで金剛寺堂へ汐二・三尺上る、庫裡は半分ねじ切
る

南の方家十軒ほど残り、林浦助九郎屋敷までにて留まり、

今町は六太夫家半分残り、浪先は垣の内伝八屋敷まで行く、

堀は町留りまで、野地は下横町六分通り流れる、敷右衛門家は残り、そのほ

かは残らず流れ行く、その夜中地震絶えず少々ずつ、

それよりその年中は毎日毎夜地震と高浪の有様也、ゆえに後世のためにこれを
書き残す者也、

享保十四年己酉十月四日

小河嘉兵衛宜忠三十五才これを書く

十三歳の時高浪に逢い、今年二十三回に当たる、

(察音曰く、享保十四年は当山十世見誉上人代なり、先代嘉兵衛は当時より
二十三年前、宝永四年十月四日の海嘯の際死亡す、法号「欣誉浄安」なり)
或人問いて曰く、地震・高浪また末世にも有るべき也、何のゆえをもつて、か

様成る大變起る、答て曰く、昔もありといえども書き残す人少なければ知る人稀也、また今日にも末世にも有るべき謂れ有り、易に曰く、地中に風入りて地震すと有り、また漢書五行志下之上に伯陽甫が曰く、陽伏てあたわざること陰迫りの昇るあたわず、於てここに地震す、或いは書記に曰く、大地震えて山を裂し人家を崩す、この時大海すでに傾いて盆をゆるがすが如し、高浪起るこゝとあり、既に慶長、延宝、元禄の頃も地震・高浪有りといえども、人家を流したる程の事もこれ無し、然れば陰陽の變氣積もり積もりて大變をなす、高浪は海底の水湧き出てその氣発する所なきゆえ也、例よりも高く成りて津々湊々へさし込み、それより陸に揚る、大地震する時にて必ず高浪ありと心得、その一郷残らず言い合い、地形高き所を目当てとして逃げのび、身命を全くする時は陰陽不順にて、たとひ如何様の大變に逢うといえども満ちては闕け闕けては満ちるの道理をもつて、天運循環し、陰陽和合してまた順にかえる也、その時ハ五穀豊穰にして士農工商ともにそれぞれの家業を失わずして早く業に取り懸り怠らず務むる時は、一旦家財残らず流失におよぶといえども各その所を得て、また本のごとく成る事疑い無し、天は開きてより以来、生々し尽する期なし、地震・高浪・大風・大雨雷、この類陰陽不順なれば必ず起る、兼ねて有るべきものと心得、その期に望みて驚き騒ぐ事なかれ、そのためこれを書き残すもの也、

また曰く、同年同月廿六日より富士山の東の方焼ける、その響き大筒を打つのごとく、何国ともなくこの辺までも相聞ゆ、富士近辺長子（銚子？）まで灰砂ふり、四・五日の間は昼夜の分ちなく、焼き出しより焼き仕尽すまで日数二十日ほどの間也、その時富士の東の方に山八歩目程に小山吹き出る、則ちその名を宝永山と名付く、その謂れは宝永年中の事なればなり、

時に元文四年己未十月四日

亡父・同妹三十三回偉辰

南紀熊野尾鷲浦において採筆

小河嘉兵衛宜忠四十五歳

（察音曰く、嘉兵衛妹は宝永四年十月四日海嘯の際、父嘉兵衛と共に死亡す、法号「驚夢童女」なり）

安永七戌十月七日八ツ時、大地震人多く中村山へ逃げる、石垣は崩るる所もあれど浪来ずと也、

〔注解〕（1）一七〇七年。（2）紀伊国牟婁郡内の林浦・中井浦・南浦・野地村・堀北浦のこと。すべて現在の三重県尾鷲市。（3）熊野街道にある峠で、現在の尾鷲市と北牟婁郡紀北町にまたがる。（4）三重県尾鷲市北浦町にある寺院。（5）紀伊国牟婁郡林浦、現在の三重県尾鷲市林町。（6）紀伊国牟婁郡野地村、現在の三重県尾鷲市野地町。（7）一七二九年。（8）一七三九年。

〔解説〕本史料は、前史料同様、昭和二年（一九二七）に、現在の三重県尾鷲市内にある念仏寺第二十六世刹管察音が考察・筆写した『念仏寺記録』に記されるものであり、前史料の後ろに続いて掲載されている。

『新収日本地震史料』第三卷別巻（一九八三年）に、本史料は掲載されるが、今回は尾鷲市立中央公民館内郷土室蔵の同史料写真にて校訂し、一部語句を修正した。なお、前史料とよく似た表題が付けられていることから、これも察音による命名と推察される。前史料同様に、本史料中にも察音による筆写の際の考察が（ ）内に確認される。ただ、全体的に読み下しに近い記述であり、他にも察音による校訂が含まれる可能性がある。とは言え、後述するように、元来の筆者が実際の津波被害を被った者であると同時に、その執筆年が確認で

き、加えて記載内容が他史料により信憑性が高いことが確認されることから、記載内容自体については変更がないものと思われる。

さて、その筆者及び執筆年であるが、宝永四年（一七〇七）十月四日に十三歳で地震・津波を経験した小河宜忠が筆者であり、執筆年次は、前半部は二十二年後となる享保十四年（一七二九）、後半部は三十三年後となる元文四年（一七三九）である。なお、宜忠の先代と妹は、同地震の際の津波により亡くなっている。

地震については、古家などに被害があり、一部山崩れもあつたとあるが、一時間ほどでその揺れはまずは収まったようである。しかし、その後の津波が尾鷲五か村の林浦・中井浦・南浦・野地村・堀北浦をのみ込み、これらの村々では千人以上の死者が出たとの記載がある。津波の範囲について、北は金剛寺堂舎に六〇から九〇センチメートルほどの高さで進み、南は林浦まで、西は御目付屋敷前まで、波先は垣の内伝八屋敷まで、堀は町留りなど詳細に記している。この範囲は、中田四朗「三重県漁村災害史の研究上―宝永の地震―」（『年報海と人間』第十六号、一九八九年）によると、中井浦・南浦の全域と、林浦の一部は残り、野地村は中井浦に近い地域とされている。また中田氏は、ここでの記述範囲が、同じく宝永地震・津波について記される前々史料である「見聞闕疑集」に記される状況と一致していることも指摘され、その信憑性を示されている。

後半は陰陽五行説に基づいて、「或人問曰」に答える形で、地震・津波現象の関係を記し、最後に同年同月二十六日から起こった宝永の富士山爆発（宝永山の出現）について記している。

なお、『念仏寺記録』の後半に「嘉永津浪之事」と記される、特に嘉永七年（一八五四）十一月の津波被害に関する記事がある。ただ、これは若林多冲著「津

なみ」の抄録と考えられるので、ここでの掲載は省略した。

（谷口）

9―51 「大地震之事」（「金五郎日記歳代覚書」 蘭目作司氏筆写史料）

一宝永四丁亥十月四日昼午ノ中刻、大地震ゆすり候事、

当九月二十日頃より、雨露之氣無之、晴天にて風も不吹時候、不相応のあた、かさ春三月頃の気色に見え候処に、四日の日に地震そろ／＼とゆり出し、刻限久しくゆすり、大方やみ可申と存候時分、大分強くゆりだし、地の下ドンドと鳴り出し、天地ザワ／＼とさわぎ、しばらくの間大地震仕り、其の内大ゆりの中頃は、老若ともに少しの間性なしになり、十方をにらみ申候、此の時、野田村で潰れ申候家数・屋敷・馬屋・せつちん等迄都合五百八拾軒ころび申候、

ころび家村別の事

一今方村^① 四拾六戸の村

居宅 全潰貳拾六軒 馬屋・せつちん 全潰三十六軒

半潰 十三軒 納屋 半潰三十六軒

一北海道村四拾五戸の村

居宅 全潰二十二軒 馬屋・納屋 全潰四十九軒

半潰 五軒 せつちん 半潰四軒

一市場村四拾九戸の村

居宅 全潰拾五軒 馬屋・納屋 全^{（潰脱カ以下同）}二拾軒

半 拾貳軒 せつちん 半 拾五軒

一保井村⁽⁷⁾四拾壹戸の村

居宅 全 拾九軒 馬屋・納屋 全 三十五軒

半 拾一軒 せつちん 半 二十二軒

一東馬草⁽⁸⁾六拾八戸の村

居宅 全 三軒 小屋 五軒

半 二軒

一西馬草⁽⁹⁾四十一戸の村

居宅 全 二軒 小屋 全十三軒

半 十九軒 半 二十軒

右六ヶ村メ居宅百五拾五軒 小屋メ二百四拾五軒

内、居宅九拾八軒は大地へ入込、はちびしよけに成り申候、

居宅五十七軒は半ころび、小屋八十七軒半ころびとなり申候、

右の外 南方三ヶ村⁽¹⁰⁾(南・彦田・雲明)メ二百二十戸の村

居宅 全潰 三十六軒

半 二十四軒 計六拾軒

小屋 全潰 五拾軒

半 七拾軒 計百二拾軒

谷田方・南方両方合せて都合居宅二百拾五軒

小屋メ三百六拾五軒

右拾月六日に惣家数之書付差上申候処⁽¹¹⁾、十一月十日殿様江戸より田原⁽¹²⁾へ御上

着遊ばされ候に付、又々御触状参り、十一月十七日に居宅の分計り書付上ヶ申

候、

田原領にてハ野田村計り大破損仕候、

御領内にて惣家数・小屋共に千四百軒程ころび申候、

この内五百八拾軒野田村也(四割強)

此の度の地震、大分むらゆり有之候、渥美郡の内にては赤沢村・田原御城内・野田村・赤羽根村・池尻の川筋の村大破⁽¹³⁾及申候、其の外の村にはころび家無之候、

とかく地震の強くゆする筋は定めてあるやに見へ申候、

此の度の大破のところは前々の地震も破損等出来申候、

地震の時刻昼故、人馬、牛共にけが一向出来不申候、

海辺にツナミあがり、浜筋のものは不残山へ逃げ申候、

高松村などはへいぜいの波打より五丈程高く上り申候て、ほうべ底き所は、

少々打越申候、志州鳥羽⁽¹⁴⁾は波の高八丈程上り申候由、

田原御城下藤田の二ツ池堤迄汐差し来り、向ハ漆田正楽寺地内迄⁽¹⁵⁾、西の方は清

谷の橋迄汐さし申候、

表浜筋は網舟不残流し申候、

六^(一七〇一年)年以前東路大地震にて箱根より東、大分破損、其の内小田原宿ハ不残潰申

候、江戸も大破に及申候、往古慶長七年(一六〇二年)中の頃にも小田原はか

り大地震仕候、六年以前(元禄十四、一七〇一年)十一月二十二日夜八^(夜中二時)ツ時の

大地震にて町中家数不残潰申候、手廻りおそきものは家の下敷となり、つぶれ

家の内より出火出来不残焼払、人、馬、牛大分焼申候、その跡へツナミ上り不

残流れ申候、あわれと申もおろかなり、この地震をよその事の様に存居申候、

此度十月四日の大地震、六年以前の小田原よりか尚まさり申候、今年東国の大

地震ハ、来年西国の大地震となるものにて候こと、古書に有之候間、各々油断

致さる、な、そのごとくに六年目に西国方ゆりつぶし申候、六年以前の地震、

箱根より西はかるくゆり申候、此の度は箱根より東わずかにゆり申候、箱根が

ゆり堺と見へ申候、

十一月二十三日（地震は十月四日）朝より何んとも知れずドロ／＼と鳴り出し、野田村にて聞けば、大久保^⑱か田原にて鳴る様に存候処、駿州富士山と足高山の間に、すばしり^⑲と言ふ所に火穴あき、それより火ゑん吹き上げ申候事、富士山より三倍の高サに見へ申候、野田村よりも夜は火見へ申候、

昼は煙はかり見へ申候処、此の火ゑんに土砂まじり、西風毎日吹、依之東国へ砂降り、富士より東七ヶ国潰れ申候、江戸も砂の厚サ四、五寸も積り申候、右火穴近所の村里は砂の高サ一丈も積り、田地ハ勿論村里つぶれ申候、依之 御公儀様より 御救ひとして日本国中高割金と御名付候て、本高百石に金二両宛御取立遊ばされ、翌宝永五年^⑳子の正月仰付けられ、二月晦日に村々より差出候、右の砂、十一月二十三日より降り出し、十二月九日迄降り続申候、此の間は昼中二もちようちんにて諸用たし申候、

〔読み下し〕

一宝永四丁亥十月四日昼午の中刻、大地震ゆすり候事、

当九月二十日頃より、雨露の気これ無く、晴天にて風も吹ざる時候、不相応のあたたかさ春三月頃の気色に見え候処に、四日の日に地震そろそろとゆり出し、刻限久しくゆすり、大方やみ申すべきと存じ候時分、大分強くゆりだし、地の下ドンドと鳴り出し、天地ザワザワとさわぎ、しばらくの間大地震仕り、その内大ゆりの中頃は、老若ともに少しの間性なしになり、十方をにらみ申し候、

この時、野田村で潰れ申し候家数・屋敷・馬屋・せつちん等まで都合五百八十軒ころび申し候、

ころび家村別の事

一今方村 四十六戸の村

居宅 全潰二十六軒 馬屋・せつちん 全潰三十六軒

半潰 十三軒 納屋 半潰三十六軒

一北海道村四十五戸の村

居宅 全潰二十二軒 馬屋・納屋 全潰四十九軒

半潰 五軒 せつちん 半潰四軒

一市場村四十九戸の村

居宅 全潰十五軒 馬屋・納屋 全 二十軒

半 十二軒 せつちん 半 十五軒

一保井村四十一戸の村

居宅 全 十九軒 馬屋・納屋 全 三十五軒

半 十一軒 せつちん 半 二十二軒

一東馬草六十八戸の村

居宅 全 三軒 小屋 五軒

半 二軒

一西馬草四十一戸の村

居宅 全 二軒 小屋 全十三軒

半十九軒 半二十軒

右六ヶ村メ居宅百五十五軒 小屋メ二百四十五軒

内、居宅九十八軒は大地へ入り込み、はちびしよけに成り申し候、

居宅五十七軒は半ころび、小屋八十七軒半ころびとなり申し候、

右のほか 南方三ヶ村（南・彦田・雲明）メ二百二十戸の村

居宅 全潰 三十六軒

半 二十四軒 計六十軒

小屋 全潰 五十軒

半 七十軒 計百二十軒

谷田方・南方両方合せて都合居宅二百十五軒

小屋ノ三百六十五軒

右十月六日に惣家数の書き付け差し上げ申し候処に、十一月十日殿様江戸より田原へ御上着遊ばされ候に付き、またまた御触状参り、十一月十七日に居宅の分計り書付上げ申し候、

田原領にては野田村計り大破損じ仕り候、

御領内にて惣家数・小屋共に千四百軒程ころび申し候、

この内五百八十軒野田村也（四割強）

この度の地震、大分むらゆりこれ有り候、渥美郡の内にては赤沢村・田原御城内・野田村・赤羽根村・池尻の川筋の村大破に及び申し候、その外の村にはころび家これ無く候、

とかく地震の強くゆるする筋は定めてあるやに見え申し候、

この度の大破のところは前々の地震にも破損等出来申し候、

地震の時刻昼ゆえ、人馬、牛共にけが一向出来申さず候、

海辺にツナミあがり、浜筋のものは残らず山へ逃げ申し候、

高松村などはへいぜいの波打より五丈程高く上り申し候て、ほうべ底き所は、

少々打ち越し申し候、志州鳥羽は波の高さ八丈程上り申し候よし、

田原御城下藤田の二ツ池堤まで汐差し来り、向いは漆田正楽寺地内まで、西の

方は清谷の橋まで汐さし申し候、

表浜筋は網舟残らず流し申し候、

六年以前東路大地震にて箱根より東、大分破損、その内小田原宿は残らず潰れ申し候、江戸も大破に及び申し候、往古慶長七年（一六〇二年）中の頃にも小田原はかり大地震仕り候、六年以前（元禄十四、一七〇一年）十一月二十二日

夜八ツ時の大地震にて町中家数残らず潰れ申し候、手廻りおそきものは家の下敷となり、つぶれ家の内より出火出来、残らず焼き払い、人、馬、牛大分焼け申し候、その跡へツナミ上り残らず流れ申し候、あわれと申すもおろかなり、この地震をよその事のように存じ居り申す処、この度十月四日の大地震、六年以前の田原よりか尚まさり申し候、今年東国の大地震は、来年西国の大地震となるものにて候こと、古書にこれ有り候間、各々油断致さるな、そのごとくに六年目に西国方ゆりつぶし申し候、六年以前の地震、箱根より西はかるくゆり申し候、この度は箱根より東わずかにゆり申し候、箱根がゆり堺と見え申し候、

十一月二十三日（地震は十月四日）朝より何んとも知れずドンドロと鳴り出し、野田村にて聞けば、大久保か田原にて鳴る様に存じ候処、駿州富士山と足高山の間に、すばしりと言う所に火穴あき、それより火えん吹き上げ申し候事、富士山より三倍の高さに見え申し候、野田村よりも夜は火見え申し候、昼は煙ばかり見え申し候処、この火えんに土砂まじり、西風毎日吹き、これにより東国へ砂降り、富士より東七ヶ国潰れ申し候、江戸も砂の厚さ四、五寸も積り申し候、

右火穴近所の村里は砂の高さ一丈も積り、田地は勿論村里つぶれ申し候、これにより御公儀様より御救いとして日本国中高割金と御名付け候て、本高百石に金二両ずつ御取り立て遊ばされ、翌宝永五年子の正月仰せ付けられ、二月晦日に村々より差し出し候、右の砂、十一月二十三日より降り出し、十二月九日まで降り続き申し候、この間は昼中にもちようちんにて諸用たし申し候、

〔注解〕（一）一七〇七年十一月四日正午。（二）渥美郡野田村、現在の愛知県田原市野田町。（三）トイレのこと。（四）三河国渥美郡上野田村今方、現在の田原市野田

町。(5) 三河国渥美郡上野田村北海道、現在の田原市野田町。(6) 三河国渥美郡上野田村市場、現在の田原市野田町。(7) 三河国渥美郡上野田村保井、現在の田原市野田町。(8) 三河国渥美郡上野田村東馬草、現在の田原市野田町。(9) 三河国渥美郡上野田村西馬草、現在の田原市野田町。(10) 三河国渥美郡下野田村、現在の田原市野田町。(11) 田原城。(12) 三河国渥美郡赤沢村、現在の愛知県豊橋市東赤沢町・西赤沢町。(13) 三河国渥美郡赤羽根村、現在の愛知県田原市赤羽根町。(14) 現在の愛知県田原市池尻町から太平洋にかけて流れる川筋。(15) 三河国渥美郡高松村、現在の愛知県田原市高松町。(16) 一六・六五メートル。(17) 志摩国答志郡にあった鳥羽城下(18) 三河国渥美郡漆田村にあった寺。(19) 三河国渥美郡大久保村、現在の愛知県田原市大久保町。(20) 駿河国駿東郡須走村、現在の静岡県駿東郡小山町須走。(21) 一一・一から一五・二センチメートル。(22) 一七〇八年。

〔解説〕 本史料は、当時愛知県田原町文化財調査会委員であった蘭目作司氏が筆写収集した「金五郎日記歳代覚書」の抜書で、「大地震之事」の表題を持つ史料である。その内容は、宝永四年(一七〇七)十月四日にあった宝永地震の際の三河国渥美郡内での被害状況が記されたものとなる。

本史料は、『新収日本地震史料』第三巻別巻(一九八三年)に掲載され、また、直接検討される研究として、例えば藤城信幸『『鶴飼金五郎文書』に記された宝永地震による野田村の被害と地盤との関係』(『研究紀要(田原市博物館)』第三号、二〇〇八年)や、最近の研究に藤田佳久「中世末から近世における渥美半島表浜から遠州灘沿岸の地震・津波の諸相」(『愛知大学総合郷土研究所紀要』第五十八号、二〇一三年)があるなど、これまでに多くの研究・分析が見られる史料である。

残念ながら今回は本史料の原本を見つけることができず、田原市博物館所蔵

の蘭目作司氏筆者史料写真によって確認した。そのため、原本のままの状態ではなく、一部蘭目氏による校訂や、読み下しされていると思われる箇所も見られる。できる限り原文のまま翻刻したが、句読点、傍注については一部書き改めたところがある。

本史料は、まず宝永地震による津波被害を受けた渥美半島に位置する野田郷内の各村の倒壊家屋数の詳細を記している。これらを見ると、今方・北海道の二村は全潰数が約半数と被害は甚大で、以下市場・保井が約三分一、東馬草・西馬草はそれぞれ三軒、二軒と被害数は少なくなっている。続いて下野田村内の南・彦田・雲明は二三〇戸中の三六軒が全潰となっており、今方・北海道ほどの被害ではなかったようである。

ここに記される内容は、史料中にあるように、地震直後の十月六日に田原藩に提出した総家数及び倒壊家屋の書き上げの控えと考えられ、地震直後の状況を示す貴重な内容である。なお、ここに記される野田村は「田原領ニてハ野田村計り大破損仕候」とあるように、藩内で被害の大きかった地域であった。実際、その数値・割合は、藩全域で倒壊一四〇〇位軒の内五八〇軒がこの地域の倒壊家屋数であったようである。

この数値は蘭目氏の校訂にもあるように四割強である。ちなみに、田原藩内で津波被害が大きかった地域は「渥美郡の内にては赤沢村・田原御城内・野田村・赤羽根村・池尻の川筋の村」であった。

本史料は後半には津波被害地域の範囲が記され、さらに今後の地震についての過去の経験に基づく予測(東国と西国の順)が記される。そして最後に、同年十一月二十三日にあった富士山噴火についての記事及びその際の幕府によるお救いとしての「国中高割金」の徴収について記している。

9—52 「年代記 上野田郷馬草村山田氏」(闖目作司氏撮

影収集史料)

(谷口)

大地震之事

一 宝永四_丁亥年十月四日八_ツ時大地震、大浪上り海辺通り船・網流失、人馬家を_(世)いてる、

同霜月廿三日富士山鳴動焼、宝永山漏出、

正徳元_{辛卯}年八月廿三日夜四_ツ時、俄に大風・光物・雷光夥敷、大浪上り人馬家舟悉損失、木・竹大分折倒、地震十三年余り、いつとなく年をへて鎮る、

〔読み下し〕

大地震之事

一 宝永四_丁亥年十月四日八_ツ時大地震、大浪上り海辺通り船・網流失し、人馬家を出る、

同霜月廿三日富士山鳴き動き焼き、宝永山漏れ出る、

正徳元_{辛卯}年八月廿三日夜四_ツ時、俄かに大風・光物・雷光夥しく、大浪上り人馬・家・舟悉く損失、木・竹大分折れ倒れ、地震十三年余り、いつとなく年をへて鎮る、

〔解説〕 本史料は、闖目作司氏が写真にて収集した三河国渥美郡上野田村の山田氏作成の「年代記」である。ここには、宝永四年（一七〇七）にあった宝永地震・宝永富士山噴火と、正徳元年（一七一）の大風・大波による被害について記されている。

詳細が記される宝永地震について見ていくと、津波による船・網など漁師道具の流失があったことが記されている。

10—1 長岡藩 御附録 文政十一年十二月条

(文政十一年十二月)

一、同年同月廿一日、去月十二日辰刻、長岡大地震之事、譜中載之₍₁₎

一、左之通注進之覚₍₄₎

一、本丸住居向大破

一、櫓大破、地形割七ヶ所

内 壱ヶ所地形崩傾

一、多門大破二ヶ所

一、門大破七ヶ所

内 二ヶ所石垣崩、壱ヶ所石垣崩傾、四ヶ所石垣崩塀倒

一、冠木門大破三ヶ所

内 壱ヶ所石垣崩傾、壱ヶ所石垣崩

一、塀倒三百式十式間

一、同大破千式百八十七間

一、櫓破損壱ヶ所

一、櫓詰石垣崩壱ヶ所

一、土蔵大破三戸前

一、鎮守社破損壱ヶ所

一、柵大破六十間

一、囲粉蔵破損壱棟

一、御詰米蔵二棟

一、厩破損壹棟

一、役所破損五ヶ所

一、所々地裂

但幅七、八寸、三寸程

一、城外門大破、石垣崩、袖塀倒壹ヶ所

一、冠木門破損五ヶ所

一、塀倒九十三間

一、石垣崩五十七間

一、柵倒式十壹間

一、城外住居破損壹ヶ所

一、役所破損三ヶ所

一、囲籾蔵潰壹棟

一、家中潰家式十七軒

一、同潰土蔵式戸前

一、同大破土蔵十六戸前

一、足輕・中間潰家百六十三軒

一、同大破家三十六軒

一、杜大破三十四ヶ所

一、鳥居大破式十八ヶ所

内一ヶ所倒

一、潰杜家 三軒

一、杜家大破三軒

一、寺潰三十式ヶ寺

内壹ヶ寺焼失

一、寺大破四十三ヶ寺

一、城下町潰家十五軒

一、同大破家四十八軒

一、同大破土蔵三百八十戸前

一、蔵所大破七ヶ所

内

潰米蔵十棟

米蔵大破八棟

潰役所式ヶ所

役所大破二ヶ所

潰蔵牢式ヶ所

同大破三ヶ所

一、番所大破三ヶ所

一、高札場大破六ヶ所

一、郷中潰家三千四百五十式軒

内八軒焼失

一、同大破家四千四百三十九軒

一、同潰土蔵式十戸前

一、同大破土蔵百七十三戸前

一、同潰雜蔵十八戸前

一、同大破雜蔵四十五戸前

一、田畑荒所九百五十五町七反歩余

一、道筋大破式千七百三十三間

一、囲堤大破壹万四千式百九十六間

- 一、樋水道大破式十ヶ所
- 一、用水江堤壱万五千九十九間
- 一、用水溜池大破四十三ヶ所
- 一、山崩六百六十五ヶ所
- 一、倒木千八百八十六本
- 一、落橋五十五ヶ所
- 一、橋大破七十壺ヶ所
- 一、信濃川岸柵崩八百十三間
- 一、死人四百四十式人

内

男 百九十八人

女 式百三十九人

僧 五人

一、怪我人五百五十式人

一、斃死馬十六疋

一、怪我馬四疋

右之外、地裂・砂埋・山崩等^ニ付、所々致変地場所も有之段達之

〔注解〕(1) 辰の刻とは午前七時から九時迄の間。(2) 長岡大地震とは、長岡藩領の地震のこと。この地震は三条地震といわれている。(3) 譜中載之、譜中これを載す。長岡藩の家譜に載せてあるという意。(4) 注進之覚、幕府に報告した文書の覚えのこと。

〔解説〕 10—1は文政十一年(一八二八)十一月十二日に起こった地震の被害

を幕府に提出した報告書の記録である。本史料を収める長岡藩の御附録は現在、長岡市立中央図書館に所蔵される。「家譜」と「附録」は、延享三年(一七四六)十一月に編纂が始まり、宝永三年(一七五三)六月に終了した。「家譜」と「附録」はその後も随時追加されていた。附録は、家譜とは異なり、10—1のように、幕府への提出文書が掲載されるなど、地震等災害史研究にとって重要な史料である。

文政十一年十一月十二日の地震は三条地震といわれる地震であるが、それは三条町(新潟県三条市)の被害が大きかったため、そのように呼ばれている。しかし、震源域は新潟県見附市東部の活断層付近の丘陵地帯であったと推定される。その震源域にあたる地域に長岡藩栃尾組の村があるため、長岡藩の死者数は四四二人とたいへん多い。この数は長岡藩の歴史の中で、洪水により最大の被害者を出した享保十六年(一七三一)の死者数二七人と比べると、はるかに多い数であることがわかる。

〔参考文献〕今泉鐸次郎「解説」今泉鐸次郎編『牧野家譜 上』長岡史料刊行会、一九二一年。矢田俊文・卜部厚志「一八二八年三条地震による被害分布と震源域の再検討」『資料学研究』七号、二〇一〇年。矢田俊文「自然災害の発生頻度と被害規模——越後長岡藩領を事例として——」『災害・復興と資料』第六号、二〇一五年。

(矢田)

10―2 長岡藩 御附録 天保四年十二月条

(天保四年十二月)

一、同年同月七日、領分蒲原郡新潟湊^①并浜手六ヶ村地震、大汐・高波^③打寄せ、破損等の事譜中載之

注進之覚左之通

- 一、潰家 貳拾七軒
- 一、大破家 八拾六軒
- 一、潰土蔵 貳棟
- 一、大破土蔵 七拾貳棟
- 一、大破寺 壹ヶ寺
- 一、倒鐘堂 貳ヶ所
- 一、倒番屋 壹ヶ所
- 一、大破番屋 壹ヶ所
- 一、大破郷蔵 壹ヶ所
- 一、流失橋 壹ヶ所
- 一、碎船 三艘
- 一、大破川船 三拾八艘
- 一、破損船 三拾五艘
- 一、碎魚船 六艘
- 一、流失魚船 貳艘
- 一、流失作場船 九艘
- 一、大破作場船 六艘

右之外、同湊諸国廻船一時に散乱いたし、冬中陸に囲在御廻米御用船九艘

之内、七艘水中へ打入、或横向相成、四、五尺程土砂へ埋、帆柱は田所へ流れ込、尤人馬怪我無之段、月番之老中松平和泉守^⑤殿へ達之

〔注解〕(1) 新潟湊は、新潟市の信濃川河口にある湊。天保十四年まで長岡藩が支配、以降幕府が支配した。(2) 浜手六ヶ村とは長岡藩領のうち海沿いの村。この内には長岡藩領曾根組(新潟市)の村が含まれると思われる。(3) 大汐・高波とは、ここでは津波のことをさす。(4) 新潟湊のこと。(5) 松平乗寛、三河西尾藩主。

〔解説〕天保四年(一八三三)十月二十二日に山形県庄内沖で起こった地震は、山形県庄内地域・新潟県新潟市以北・佐渡市・石川県輪島市を中心とした地域に津波によって大きな被害を与えた。10―2は、長岡藩が幕府の月番老中である松平乗寛に提出した被害報告書である。

長岡藩は信濃川河口の新潟町や海に面した村を含む曾根組などを領地に含んでいたもので、幕府への報告では10―2のように被害数等が掲げられた。被害の大半は新潟市を中心とした地域ではないかと思われる。潰家(全壊家屋)二七軒、大破家八六軒とあるが、その原因は記されていない。

10―2には、被害数を記したのち、新潟湊の被害を次のように記している。

新潟湊の諸国の廻船はいっぺんにばらばらに散って、冬の時期は陸に囲い置いた廻米御用船の九艘のうち七艘は勢いよく水中に入り、あるいは横向きに倒れ、四、五尺ほど土砂へ埋り、帆柱は田地へ流れ込んだが、人馬の被害はなかった、とある。

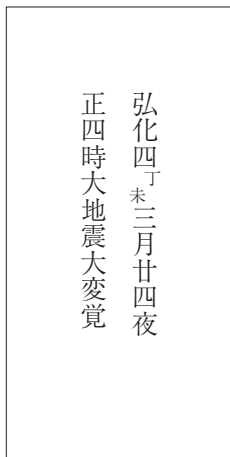
新潟湊の被害だけではなく、新潟町の被害について記される別の史料をみると、この地震は死傷者が出るほどではなかったものの、新潟町まで津波が到達したとある。昭和三十九年(一九六四)に起こった新潟地震では、古町をはじめ

めとする旧新潟町には津波が到達していない。したがって、一八三三年庄内沖地震はいかに大きな地震であったのかがわかる。

〔参考文献〕『長岡市史 通史編上巻』長岡市、一九九六年。長岡郷土史研究会編『長岡郷土史研究会、長岡の古地図 その2』長岡郷土史研究会、二〇〇二年。矢田俊文「文献史料による一八三三年庄内沖地震の津波到達点の研究―新潟市内を中心に―」『資料学研究』九号、二〇一二年。

11 弘化四丁未三月廿四日夜 正四時大地震大変覚

(表紙)



未三月廿四日夜正四ツ時頃大地震、表庭・浦庭^(表)通地さけ、居宅⁽¹⁾地形繰上、玄関・寝間通戸・障子・襖破、表石垣二ヶ所、東土蔵下石垣壱ヶ所拔落、居宅・外座敷共よろひ、鞠懸り屋根・土蔵・前倉・文庫倉・金倉・味噌倉都而うら側瓦落、浦雪隠不残くたけ潰、酒倉酒はよりこほれ、倉は西の方へ式三尺もかしがり、表塀十間程、社倉屋根瓦はき塀五間たをれ、奥庭外かこひ塀倒、浦井東塀四十間余倒れ、諸道具損し

一、下屋敷⁽³⁾へ立退小屋掛住居

(矢田)

- | | | |
|-------------------------------------|--------------------------|--------------------|
| 一、居家 | 潰れ | 伴左衛門 |
| 灰屋 ⁽⁴⁾ 共 | | |
| 一、物置 | | 甚左衛門 |
| 一、居家 | 灰屋 | 重右衛門 |
| | 孫八才 ⁽²⁾ 相成候浅吉 | |
| 一、灰屋 | | 八百蔵 |
| 一、居家・灰屋共 | | 藤蔵 |
| 一、産土神様、御幣殿、御内殿、舞殿 | 不残潰 | |
| 御本社計残り、石宝殿并石宮・石夜燈不残倒れ、御神木たをれ、御鳥居者不難 | | |
| 一、家宅 | 潰 | 左兵衛 |
| 廿五日昼土蔵 | | |
| 一、灰屋 | | 弥五右衛門 |
| 一、灰屋 | | 源左衛門 |
| 一、家宅 | | 儀兵衛 |
| 灰屋 | | |
| 一、居家 | 物置 | 恒七 |
| 一、灰屋 | | 勇作 |
| 一、居家并 | 灰屋 | 伊三郎 |
| 一、本堂くり | 潰 | 真福寺 ⁽⁵⁾ |
| 一、衆寮物置 | | |

- 一、居家物置 定五郎
- 一、灰屋 儀左衛門
- 一、灰屋 半左衛門
- 一、灰屋 龍左衛門
- 一、灰屋 栄左衛門
- 一、居家半分 半三郎
- 一、物置土蔵 勇之助
- 居家半分
- 一、物置土蔵一ヶ所 佐五左衛門
- 一、物置 源右衛門
- 表南倉 平太夫
- 一、酒倉車屋 潰レ
- 奥蔵前倉共
- 一、半潰 多喜八
- 一、土蔵一ヶ所 勇介
- 一、居家 八郎右衛門
- 一、居家 市左衛門
- 一、居家 治左衛門
- 一、居家 幾右衛門
- 一、居家 嘉七
- 物置
- 十四才^二相成候男子力松即死
- 一、台所不残倒れ
- 一、石燈籠類・宝篋印塔類不残倒レ
- 一、嘉源太浦三尺余上り、いきれ⁶、東西沢迄多喜八・勇介・平太夫屋敷へかけいきれ、横山・下田方五尺も上り、陸地^二相成、同所道いきれ、巾四尺余、

- 深サ不知、聖沢三ヶ所戸口^二下^二而切、夫^二沢田川筋^二相成、赤田沖壺丈余田方上り、岩倉虚空蔵山拔落、犀川とめ、三水・田中・四ツ屋辺水中、松代御城御郭不残潰レ、中町・伊勢町不残つふれ候由、山平林・岩倉馬曲不残山拔
- 一、上尾柳沢一郎殿居宅焼失
 - 妾・下頼式人即死^(家米)
 - 一、善左衛門方兩人・小共即死
 - 一、今泉九人即死⁽¹⁵⁾
 - 一、新町・上条不残焼失⁽¹⁶⁾
 - 一、康楽寺潰レ、女子壺人死⁽¹⁷⁾
 - 塩崎村⁽¹⁸⁾三十人余即死^二
 - 一、稻荷山不残焼失⁽¹⁹⁾
 - 一、長谷寺くりつふれ⁽²⁰⁾
 - 一、善光寺大門・後町・二王門焼失、廻向⁽²¹⁾付旅人共即死数不知、本堂其外廿五日昼頃焼失之由
 - 一、篠野井不残潰⁽²³⁾
- 廿五日七時出之御用状、同夜五つ過到来、郡方磯田音門殿^二、山平林村御救方御用懸り被 仰越候^二付、触面を以

○山平林村
 安庭村
 三水村
 今泉村
 ○田野口村
 境新田村

赤田村

○氷熊村

石川村

高野村

○灰原村

大田原村

小田原村

軽井沢村

吉原村

聖沢村

急難ニ付野山ニ罷在、食物水等差支之者、於当屋敷粥差出候間、罷出候様可申達候、以上

右村々

三役人

廿六日明六ツ時、村繼⁽²⁴⁾を以申遣ス

廿六日朝六ツ時、郡方磯田音門殿^江御用状村繼を以申遣ス、石川村へ渡

御平川・会・小森・清野々可差出候、

小日方組中小屋三ツ懸、成丈持合之分^二而^一賄度申出候、城組⁽²⁶⁾同断、中畑組同断、山雨組⁽²⁷⁾同断、

吉原村式十五人死失、吉原村⁽²⁸⁾
須牧北の峰ニ而佐源次申聞

水内橋上⁽²⁹⁾水つき、橋うき、新町今以住居家焼、酒倉迄水つき、小松原村⁽³⁰⁾

式百人も死失之由、下市場へ水つたい候由、廿六日朝嘉平次申聞

高野村⁽³²⁾死失壹人、下石川村式十軒余潰、五左衛門申聞

赤田村專照寺⁽³⁴⁾くり半分下り、七五郎前倉潰^(レ)し、下赤田三軒つふれ、大助申聞

六十七軒之内六十三軒惣潰レ、死人式十七人 牧田中村⁽³⁵⁾

内定吉并三左衛門子平十郎共

内興禪寺⁽³⁶⁾方丈并家来三人

雲水壹人 ム五人

牧之島七十軒皆潰レ、不幸寺共

内人数四十人余死失

氷熊村⁽³⁸⁾名主小左衛門罷出、漸之内者何とか可仕、此上之義者何分奉願度申出候

一、廿六日祖吉・甚兩人至、当廿四日杳左衛門、水内⁽³⁹⁾江罷越候由之處、今以不

罷歸り候^二付、如何可仕哉相伺候付、水内村^江之通路無之付、尋不及と申渡ス、追^而可申立申渡

一、文蔵米拝借願出候付、是迄如何致候哉相尋候處、保左衛門方^二而^一相賄候由

申聞候付、其段保左衛門へ追^而相渡可申聞、同人^江申談候様

善光寺本堂・大勧進^{本願上人}
ヤケル・山門残り、不残焼失、大門町其外焼失、

後町同断

山平林村半右衛門外兩人罷出、明朝取調差出候様申渡

潰家数百三十軒程

死人凡百三十人程申出

岩倉曲馬・桜井六ヶ敷由申聞

下平半左衛門兄弟死失之由

○龍洞院⁽⁴⁰⁾無難、和田与惣右衛門同断

大雲寺⁽⁴¹⁾無難之由、真福寺小僧申聞

○水内平新十郎庭迄水つき、新町雀森^江水つき

○瀬原田五十式軒内⁽⁴²⁾二十一軒潰
十七軒やふれ

死人四人

○玄峰院和尚外三人死⁽⁴³⁾

観照寺法印小僧外一人死去⁽⁴⁴⁾

大澤組⁽⁴⁵⁾五右衛門親并小兒・妾死去

入有旅村桜井組十一軒山拔皆潰レ、此人数四十人、外死人八人⁽⁴⁶⁾

作左衛門、組頭久八（印）、名主三郎右衛門（印）

田地不残山拔、此上右場所^{三而}ハ耕作難起、是迄十二村役場^{二而}取計

同村浅野組潰家八軒、半潰三軒⁽⁴⁷⁾

廿六日昼頃

犀川筋下市場不残水上り、宮田へ登り、仮住居⁽⁴⁸⁾

里穂刈安康寺鐘つき堂迄つき、ほかり藤七申聞⁽⁴⁹⁾

大原村⁽⁵⁰⁾江水つき、追々住居へつき候様見へ⁽⁵¹⁾

灰原潰家二軒⁽⁵²⁾五軒潰 名主喜藤太、組頭銀左衛門

一両日当座凌

境新田五軒潰 吉三郎・専蔵・栄吉・おしか・弁随⁽⁵³⁾

吉三郎子才壺人死失⁽⁵⁴⁾

上石川馬式疋・人六人死失⁽⁵⁵⁾

○赤田村扶食無差支 久助・源吉・半兵衛、⁽⁵⁶⁾

潰勘五郎、吉十、栄左衛門⁽⁵⁷⁾

久左衛門

柳沢一郎殿家宅外^江出置候、穀物為救差出旨被申聞候、村役人厚勘弁を以
若者集り、手明之者持運候様可致候、此節之義、此上好身之者罷越候而も、

救筋相成兼候、役人頭立骨折、差図頼入候、以上

三月廿七日

小林唯蔵

水熊村

入有旅村

三水今泉村⁽⁵⁸⁾

其村住居水中相成候者、此節取計方行届候哉、今以不相分厚勘弁御救筋之

義者早々可申出候、頭立重立厚骨折、当時之義寺社共食物水等差支無之様、

差図可相計候、以上

三月廿七日

小林唯蔵

三水今泉村

山平林村宮平組

三斗 内壺斗五升渡

正方便

三斗 同断

倉蔵

式斗五升 内壺斗五升渡

一作

塩^{ハシ}□貫 五升

味噌式貫め

宮平組

半右衛門

其村隣村急難住家無之者、食物助合居候由、厚致世話引足不申分粉麦共相

渡可申候間、持運用意可致候此節之義、役人頭立小前申合、当座凌出来候

様、実意を以可被取計、追而其次第可申聞候、以上

三月廿七日朝

小林唯蔵

中山新田村

口上覚

有旅村

山平林村岩倉組十九人

桜井十郎司・岩倉常蔵・外四人

塩一叭
味噌八貫め

桜井組八人

昨日申上之通

当廿四日夜分之大変ニ付、居宅屋敷共山拔等ニ而押出し候もの江、当座凌村役人江精々申含為取計候村々

一、山平林村内式十七人、有旅村江罷越居

急難住居無之者、隣村之者其村へ罷越居候由、当座凌実意を以厚致世話、

其上引足不申分見積り、粃麦相渡可申候間、持運当座急難為相凌候様、役

人頭立村中申合候様、厚勘弁取計候様頼入候、其次第追而可申聞候、以上

三月廿七日

小林唯蔵

有旅村

尚々、味噌八貫め・塩壹叭相渡候間、人別当座相凌候様、呉々頼入候

同廿七日

山平林村岩倉馬曲組

岩倉

白米壹石

勇左衛門

久右衛門

左兵衛

喜左衛門

常蔵

女四人

廿七日

白米六斗

入有旅村

喜伝次

八百吉

白米・塩・味噌等相渡

右村役人江も厚世話致候様申遣候

桜井組廿四人十二江罷越

宮平組下平組

右同断に付、塩・味噌・白米等^{相渡}

入有旅村桜井組死失残四十人、隣村中山新田村江罷越候ニ付、又者小屋掛ニ而罷在候ものへ

白米・塩・味噌等相渡申候

右村者早速小屋掛いたし候而、鍋者好身之もの分かり請度、当座相凌候

様村役人頭立之者江精々申含仕置候

一、三水村住居水中ニ相成候者、

追々溜り水ニ付、隣村好身之方、又者野山ニ罷

在、小屋等ニ罷在、扶食者持運び候もの融通仕候様子ニ御座候、右村江も

精々申遣候

一、今泉村者灰原村へ引移候由、右村江差支無之様精々申遣候

一、吉原村江も申遣候得共、有無共今以相知不申候

一、氷熊村・赤田村・境新田村・石川村・田野口村・氷熊村・大田原村・高野村・小田原村・聖沢村・軽井沢村、⁽⁵⁹⁾□□□□右村々ハ潰家而已⁽⁶⁰⁾而、住居流失候もの無之、村方⁽⁶¹⁾融通取計、当座凌候様子⁽⁶²⁾御座候、右村々⁽⁶³⁾江も差支候もの、私方へ申出候様申遣候⁽⁶⁴⁾

一、安庭村者山拔、流失之者多人数、残候者有之哉、通路無御座、当座食物如何哉、一切相知レ不申、犀川⁽⁶⁵⁾メ切ニ相成候場所、水内郡へ引移候も難計、無有相分り不申、此段御勘弁可被成下置候⁽⁶⁶⁾

一、犀川もたい水⁽⁶⁷⁾而、水内村平組、新町村・里穂刈村・下市場村・竹房村者井戸尻と申所迄、大原村も寺迄水つき候由、只今承り候、新町村之内土手と申所は未タ水つき不申由

□□□□□□□□□□追々相分り次第可申上候、以上⁽⁶⁸⁾
⁽⁶⁹⁾右之通今以地震止不申、⁽⁷⁰⁾□□□□□□□□⁽⁷¹⁾
⁽⁷²⁾昨日・今日も居村近村共建家潰候義⁽⁷³⁾御座候

三月廿七日九時

小林唯藏

磯田音門様

右、石川村⁽⁷⁴⁾・矢代村⁽⁷⁵⁾・雨之宮村⁽⁷⁶⁾・土口⁽⁷⁷⁾・岩野村⁽⁷⁸⁾・清野村⁽⁷⁹⁾可差出候

同廿七日

山平林

一、白米三斗

桜井組廿四人

一、玄米

十二組六郎右衛門

人足 梅吉

重吉

山平林村

一、白米式斗五升

孫瀬組

玄米式斗五升

岩倉組

伝右衛門
長五郎

人足 利吉

磯次

三月廿七日昼

安庭村古宿

一、米壹斗

左 門

大変ニ付、急難凌如何⁽⁸⁰⁾候哉、当座差支之者者、救方夫々被 仰出候間、水粥等差出候間無有凌厚ク心懸候者勿論之事⁽⁸¹⁾候得共、不足不行届分者早々可申聞候、以上

三月廿七日九ツ時

小林唯藏

吉原村

今泉村

三役人

右灰原村へ

水内重吉

三月廿七日九ツ時過、中山新田村犬石組⁽⁸²⁾弥左衛門歸り触持参致申聞候者、村方并近村当組へ罷越居候者へは、村方可成丈食物差出可申候間、差支之節者可申出候旨申聞る

水内村安用組舞台重吉、廿四日夕、犀川および吉原へ罷越居候由申聞ル、綿入壺ツ遣ス

赤田村弥平治

三水村役人代相之助罷出、当村人別山野⁽⁸³⁾罷在候得共、食物之義者持運罷在候間、壺両日之中は可取計、其上差支之節可願出旨申出候

左左衛門只今立戻り候⁽⁸⁴⁾与祖吉申出候、廿七日七ツ時水内村二丁田親類へ病人見

舞ニ罷越宅宿仕候処、天井下ニ相成処、隣家之もの家根破出し呉候に付、犀川
ノ切 上通り山平林へ出帰宅仕候、勇五右衛門義も小松原村ニ無難罷在候由、
祖吉申出候

吉原村組頭式右衛門・頭立善兵衛当節之義者、役人頭立評義仕候処、当節之義
者可取計候間、其上差支之義者可願出旨申聞る、帰り触持参

聖沢村同断

中山新田村鶉石組同断、山平林村人数救方式百人程之人数、食物粉挽割粥相用
候様申聞和市親

一、今廿七日朝、水内橋場制札迄水つき、犬石組喜左衛門触持参奉畏旨申出候、

赤田村瀬左衛門見舞参り

覚

(割印) 一、^古焼小判三十三両也

(割印) 一、^古同分金五十三両也

内 真字金三十七両也
草字金十六両也

ノ金八拾六両也

未三月廿七日 柳沢一郎殿ノ預り

島田全隆殿見舞来り

柳沢一郎殿見舞来り

安庭村

古宿十四軒 藤倉七軒 ノ三十一人死失

内八人 内二十二死

田端 角右衛門清吉潰

内角右衛門子壱人死失

廿八日 磯田音門殿御立寄、柳沢焼失之義申立ル

同日昼過 安庭村帰る、触持参

八ツ時大地震

夜八度同断

廿九日曉明六ツ時過大地震⁽⁶⁸⁾

昼時頃中地震

廿九日

一、白米 式斗八升

玄米 式斗八升

山平林村

人足

団右衛門

喜左衛門

ほん

岩吉妹

伝右衛門

長五郎

右者山平林村孫瀬岩倉組

同日

一、玄米 六斗六升

白米 四斗四升

人足

戸左衛門

岩吉

惣吉

栄助

利吉

右者孫瀬組岩倉組桜井組

伝右衛門

長五郎

六郎右衛門

三月晦日

原市場組和平・慶太見舞ニ至り

大田原村吉兵衛・勝五郎、当村者暫之内相凌可申其上之義者、奉願候段申出

候

一、白米
一、味噌

三月廿八日磯田音門殿^江、山平林村上尾組穀物五百表余有之、近村之融通人足相願候処、廿九日出^二而晦日朝御元^ノハ触来り、相糺書付為差出候様申来候^ニ付、早速山平林村へ出役相尋候処、穀物焼残三百表余御座候由之儀、村へ融通仕度旨申聞候^ニ付、其段御元^ノハ^江村繼を以御用状相認、山平林村名主^江相渡

柳沢一郎殿

穀物

山平林村之内

百五十人

孫瀬組

岩倉組

右者山拔死失残、住居無之分^表人半^表宛手充⁶⁹

九十人

桜井組

右同断

式十式人

上尾組

右同断

式十人

岩倉□□□

右者同断

九軒

宮平組

右者潰^ニ付一軒^表表ツ、⁷⁰

十一軒

下平組

右者潰^ニ付壹軒^表表宛

右融通勝手前扶食仕度旨願出候^ニ付、右之通菊池孝助殿・水井忠藏殿申遣⁷¹
ス

村繼 山平林村・氷熊村・赤田・石川・御
平川・東福寺清野村ハ差出筈⁷²
⁷³

專納村名主康平、同村不残拔潰相成、只今扶食無之趣申出候^ニ付、願之通
式十表承り届遣ス

康平方死人数 女房 娘十七^ノ三人
男子二才

嘉門方死失 男子十九才^表人

恩田公⁷⁴被下候由^ニ而、郡方御渡付御元^ノハ怪我膏藥三包、村繼を以到来付

具入一

田野口村役人^江渡

同断

山平林村名主へ渡

同断

柳沢一郎殿渡

小以

其村壳穀有之分、追々御救方願出候村方多^ニ付、伺之上受差図壳払候様、村役
頭立申合、厚世話行届候様可取計候、以上

四月一日

石川村堀内へ渡

廿七日朝 松代長国寺⁷⁶其外潰

同日 戸部宝藏寺潰⁷⁷

同日 小森澤更級左門潰⁷⁸

康樂寺不残潰、女子^表人七才死失之由、今泉村吉郎左衛門穀百三十表、内三十
五表村融通、残百表村人足^ニ而大沼迄相届候由、左源太申聞
三水村与右衛門穀五十八表出し候由

同村平助

玄米壹斗五升

吉原村

久右衛門五人

玄米壹斗五升

嘉忠太 四人

玄米壹斗五升

磯八 五人

名主

佐源次

組頭

甚之丞

同断

式右衛門

長百姓

清右衛門

壹斗

正之助

同

幸右衛門

同

常左衛門

同

勝五郎

其村庄之助外十六軒之者共、必至^与扶食差支之旨越願申出、村役穿鑿之不行届事^{二而}、早々役人頭立之者取調可申出候、以上

四月一日

小林唯藏

吉原村

追啓申達候、其村善兵衛村方万端行届候様、救方行届候様役人^江申談事可取計、追而 御沙汰も可有之候間、骨折相勤候様可致候、以上
寺院式十八ヶ寺

此度変災^二付、其村々^江下市場村人別罷越、仮住居致居候而、世話取計居候哉、右村方住居水中^二相成候付、格段之御救筋被 仰出候間、役人頭立^{二而}村内穿鑿

之上、御救之次第可申出候、且其村々^{二而}も融通不行届之ものハ村役人を以可申出、隣村之者者厚世話いたし追々其次第可申聞候、以上

四月一日

小林唯藏

灰原村

高野村

牧之島村

牧田中村[㊟]

中牧村[㊟]

南牧村[㊟]

入有旅村

桜井組 名主

三郎右衛門

四月二日

同 玄米六斗

組頭

久八

人足 利重太 渡ス
伴太郎

山平林村

岩倉組

長五郎

人足 弥三郎

牧野島村

五兵衛

山平林村孫瀬岩倉

伝右衛門

長五郎

かね

武源太

玄米三升

同 壹斗五合

同 三升

重助

同 四升五合

嘉右衛門

同 六升

佐兵衛

同 九升

喜太夫

四月一日

一、御膏藥一

嘉右衛門渡

右村長五郎始外人別

女房

四月二日

入さ、れ一包

吉原村 伊惣太

同

入串柿一束

同村 龍右衛門

今般変災ニ付而者、御救方ニ付、其村方ニも勝手相応之者融通并献儀・献金等之者も可有之哉、村役人頭立厚世話行届、其筋又者当屋敷江内々可申聞候、今度者格別之 御褒詞も可被成下間、其旨相含取計候様存候、以上

四月二日

小林唯藏

赤田村

三役人

追啓、御勘定元々江申立候間、都合次第可取計候、以上

尚々、序之節此触書可相返候、以上

吉原村善兵衛・三水村平助へ申含、役人頭立申合、取計候様申渡候

一昨卅日、日名村御宮大門先江昼頃水つき、日名村弁之助・量作・弥七水つ

き、弥右衛門卅日昼時灰屋流失、

千原村、橋木村朔日、昨日橋木平へ水つき、

山和田村清四郎・蔦藏・金藏・平左衛門流失、銀右衛門・一郎司・伝左衛門・伝五郎焼失

今般変災ニ付、居村極急難并万端 御救筋厚心懸候様、役人頭立申合取計候様、追而 御沙汰可被成下条如件

弘化四未年

四月三日

小林唯藏

吉原村

友藏家内六人

権平家内六人

頭立善兵衛

和沢組

七五郎

四月三日

一、白米貳升五合
糯米升五合

岩くら

仙吉

一、玄米 七升五合

御膏藥一渡ス

一、同 九升

源次郎

一、同 四升五合

桜井 藤兵衛

一、同 九升

本次郎

一、同 四升五合

梅吉

一、同 四升五合
一、同 九升

多右衛門
久藏

ノ 四斗八升

ノ 岩倉孫瀨組

長五郎

伝右衛門

三月卅日、竹房村源八屋敷水つき、夫々今日迄三千軒程水中ニ相成、竹房定吉
申聞

四月三日

一、玄米七升五合

劍正院

一、同 八升

正吉

一、同 九升

勇左衛門

一、同 七升五合

佐吉

一、同 三升

伴治郎

一、同 九升

政吉

一、同 六升

文弥

一、同 四升五合

藤重

一、同 三升

岩吉

ノ 五斗七升五合

ノ 岩倉孫瀨組

長五郎

伝右衛門

四月三日

一、玄米六升

六郎右衛門

一、同 壹斗五合

甚右衛門

一、同 七升五合

吉左衛門

一、同 七升五合
一、同 七升五合
一、同 四升五合

右人別^江味噌壹貫め・塩壹升

岩倉組

ふけん

一、同 三升
ノ 四斗六升五合

ノ 桜井組孫瀨・岩倉組

桜井組

六郎右衛門

孫瀨組

伝右衛門

岩倉組

長五郎

四月三日

一、玄米六升

勝左衛門

一、同 四升五合

龜藏

一、同 壹斗五合

八百八

一、同 六升

喜藤太

一、同 六升

慶左衛門

ノ 三斗三升

ノ 下平組

半右衛門

四月三日磯田音門殿御用状差出す、夫名主

口上覚

一、今度変災ニ付、村々之内、小前御百姓沢立願出候村方ハ、御救方御用難義

ニ付、其村々ニおゐて人撰、世話役申渡候も御坐候付、追而其次第二寄 御褒詞可被成下旨申渡候間、此段御聞濟被成下候様仕度奉存候

一、山平林村三役人之外、半右衛門江^江申含、居村之者急難御救方行届候様申渡、追々村役人差図を請願出、米・塩・^(味噌)噌相渡、此上耕地有之村方引移被仰付候迄、御救米相渡可申旨申渡候

一、吉原村小前御百姓沢立、私方江^江願出候付、役人之外善兵衛・三郎右衛門江^江申含、右村方急難之者被申論、村役并世話役之者差図を請、村役人ニ^ニ取調願出候分者御救方夫々相渡候旨申渡候

一、専納村役人私方江^江罷出、一村皆潰、住居も難出来付、麦作取入迄穀貳拾表^(俵)御救方願出候ニ^ニ付、願之通承届遣候

一、山平林村其外住居亡失之者共、隣村江^江罷越仮住居仕候者分者、仮住居村方役人江^江御救方米相渡為取続候、追々住居村江^江仮小屋相建引移候様申含、御救米相渡度奉存候

一、村方之内、余穀売払候分有之村方者、御他領江^江売払候義者、奉伺受御差図候様申渡候村方も御坐候、此段御聞置可被成下置候
右之通奉伺候、以上

四月三日

小林唯藏

磯田音門様

別紙申上候新町村近辺右村源六松本へ罷越、米穀通船積下シ為相請候由、右ニ^ニ而多分之者救方ニ^ニ罷成候風聞宜御坐候

一、犀川た、へ松本御領野平と申所迄水付上候由、右ニ^ニ而日名村住居半分程水付、上山和田村者不残水中、住家流失仕候由昨昼時承り候

一、中之条御役人⁽⁶⁷⁾与申方ニ^ニ而、犀川た、へ見分ニ^ニ罷越、長沼近辺御料所御座候場所右犀川た、へ切候節者従 此方様、右村方江^江立退候様 被成下度、柳沢

一郎殿江^江相願候由申上者可御坐候得共、承り候付奉申上候

〔注解〕(1) 田野口村(長野県長野市信更町田野口)の小林唯藏の住居を「居宅」と言っている。ここには、居宅とその周辺の被害を記している。(2) 酒藏の酒はゆれこぼれ、の意。(3) 小林唯藏の所有する下屋敷か。下屋敷は一般的には、災害などの避難場所として設置された。(4) 炭焼き小屋のことか。(5) 田野口村にある寺院。曹洞宗。(6) 割れ目、の意か。(7) 聖沢は聖沢村のことをいい、現在の長野市信州新町中牧。赤田は、長野市信更町赤田を言う。(8) 岩倉山とも記す。長野市信更町山平林に所在。弘化四年の善光寺地震に際して、南西部分が崩れ、山平林村の岩倉・孫瀬(馬曲)の集落が押し下った。(9) 長野県中央部の筑摩・安曇郡から水を集めて、千曲川にそそぐ川。長野県有数の大河。(10) 長野市信更町三水。(11) 松代城下の町名。(12) 山平林村の岩倉組と馬曲(まごせ)組。虚空蔵山の中腹にあるこの二組が崩れた。(13) 山平林村の上尾組。(14) 小林唯藏と同じく、勝手方御用役。(15) 今泉村。長野市信更町三水。(16) 新町村(長野市信州新町)と上条村(長野市信州新町上条)。(17) 長野市篠ノ井塩崎にある寺院。浄土真宗。(18) 長野市篠ノ井塩崎。(19) 長野県千曲市稲荷山。宿場町。(20) 長野市篠ノ井塩崎にある寺院。真言宗。(21) 長野市の中心部の地名。善光寺の南。(22) 回向、えこう。善光寺御開帳。(23) 長野市篠ノ井。(24) 文書を村から村へと引継いで順達すること。郡奉行の磯田音門から小林唯藏が山平林村御救方御用懸りに任命されたという文書が「村継」でもたらされたことをいう。(25) 田野口村か。(26) 田野口村か。(27) 田野口村か。(28) 長野市信更町吉原。(29) 久米路橋のこと。(30) 長野市篠ノ井小松原。(31) 長野市信州新町下市場。(32) 長野市信更町高野。(33) 長野市篠ノ井石川。(34) 長野市信更町赤田にある寺院。真言宗。(35) 長野市信州新町牧田中。(36) 長野市信州新町牧田中にある寺院。曹洞宗。(37) 長野市信州新町牧之島。(38) ひぐまむら。長野市信更町氷ノ熊。(39) 水内村のこと。長野市信州

新町水内。(40) 千曲市桑原小坂にある寺院。曹洞宗。(41) 不明。(42) 長野市篠ノ井布施五明瀬原田。(43) 長野市篠ノ井岡田にある寺院。曹洞宗。(44) 長野市篠ノ井岡田にある寺院。(45) 村名不明。(46) 長野市篠ノ井有旅。(47) 長野市篠ノ井有旅。(48) 下市場村。長野市信州新町下市場。(49) 長野市信州新町穂刈。(50) 長野市信州新町日原東。(51) 灰原村。現在の長野市信更町灰原。(52) 田野口村のうち。(53) 長野市篠ノ井上石川。(54) 長野市信更町赤田。(55) 小林唯蔵が氷熊村、入有旅村、三水今泉村に対して、出した指示書。以下、各村に対して出した文書が並ぶ。(56) ここに書かれた村は、犀川の満水に関係がなかった。家が潰れただけの被害であつたことを記す。(57) 安庭村(長野市信更町安庭)は、犀川の崩れ場所にあたるため、満水による被害の大きかったことを記す。(58) 水つきの村々について記す。(59) 長野市篠ノ井石川。(60) 千曲市屋代。(61) 千曲市雨宮。(62) 千曲市土口。(63) 長野市松代町岩野。(64) 長野市松代町清野。(65) 山平林村のうち。長野市信更町山平林。(66) 長野市篠ノ井有旅のうち。(67) 長野市篠ノ井小松原。(68) 越後高田を震源とする地震のこと。(69) 山抜けによって死失の後に残ったもの。住居のないもの。これらについては、一人に半表ずつ手当した。(70) 家の潰れにつき一表ずつ手当を支給する。(71) 二名共に勘定所元ノ役である。支出にあたる役職。(72) 長野市篠ノ井御幣川。(73) 長野市篠ノ井東福寺。(74) 長野市中条。(75) 松代藩家老恩田頼母のこと。(76) 長野市松代町にある寺院。真田家の菩提寺。(77) 長野市川中島町御厨戸部にある寺院。(78) 長野市篠ノ井小森。(79) 長野市信州新町牧田中。(80) 長野市信州新町中牧。(81) 長野市信州新町南牧。(82) 日原(千原村)か。長野市信州新町日原。(83) 日原村の一部。長野市信州新町日原西。(84) 和田村。長野市信州新町弘崎和田。(85) 野平村。現在の長野県大町市八坂野平。(86) 山和田村のこと。(87) 幕府領を支配する代官所役人。高木清左衛門のことか。(88) 長野市長沼。千曲川流域の村。

〔解説〕本史料は、国文学研究資料館所蔵真田家文書に含まれるものである(国

文学研究資料館蔵 真田家文書 あ三四四九)。

本史料は、すでに八木貞助著『更埴地質誌』(更級教育会、一九四三)で紹介されており、これを受けて、『信州新町史』(一九七九)などの自治体史は、八木貞助の翻刻を基に論述してきた。このたび、本史料集収録にあたって、原本によって正確を期した。

本史料の特徴は、田野口村に居住する給人格の小林忠蔵が、藩の命を受け、山平林村の虚空蔵山崩落にともなう山間部の被害状況や、これにともなって発生した犀川せき止めによる村の水没について状況を詳しく記していることである。地震被害に関わる部分について史料に即して説明しておこう。

三月二十四日の地震による被害として、小林忠蔵の居宅周辺の被害を述べる。○表庭・裏庭通り地が裂けた。○居宅に地形が繰り上がった。○居宅では、玄関寝間通の戸・障子・襖が破損。表石垣が二ヶ所、東土蔵下の石垣が一ヶ所、抜け落ちた。○居宅の他、座敷ともろい鞠懸り屋根、土蔵前倉、文庫倉、金倉、味噌倉すべて裏側に瓦が落ちた。○裏の雪隠は残らず碎け潰れた。○酒蔵酒は揺れ溢れ、倉は西の方へ二、三尺傾いた。○表塀一〇間ほど、社倉屋根瓦はき塀五間倒れ、奥庭外囲い塀倒れ、裏と東の塀四〇間あまり倒れた。以上が、小林忠蔵の居宅と敷地の被害状況である。

二十五日に報告された被害状況は、田野口村内の居家のほか、土蔵・灰屋などについて報告されている。また、村内では、石塔などの石造物が残らず倒れた。村内には地震による亀裂が走り、隆起がみられる。

その後、川中島平の寺社の被害、松代城下の被害が書かれる。

二十六日以降の記述は、虚空蔵山が犀川を堰き止めたことにより、流域の集落の水没状況が書かれている。

このほか、特筆すべきものとしては、三月二十八日と二十九日の記述である。

二十八日の八ツ時に大地震が起き、その後、八回地震が起きたとある。また、二十九日には、暁時六ツ時に大地震が起き、昼ごろに余震が起きたとある。二十九日は越後高田地域を襲った地震であるが、この地震が当地でも大きな地震と感じられたことがわかる。

本史料の性格を最後に述べておく。本史料には、二十五日条の最後に村の役人の印章が捺されていることから、公文書としての性格を持つことが推定される。このため、少なくとも虚空蔵山崩落に伴う被害状況の記載や、犀川堰き止めに伴う水没の状況については、信憑性が高いと思われる。

(原田・宮澤)

12 弘化四丁未年三月廿四日夜四時大地震ニ付諸雑談聞書覚

(表紙)

弘化四丁未年三月廿四日夜四時
大地震ニ付諸雑談聞書覚

白鶴葺⁽¹⁾

(表紙裏書)

「御領分

三月廿四日地震ニ付別条

- 一、死人式千八百六人
- 一、怪我人九百廿五人
- 一、牛馬式百十四疋
- 一、潰家五千六百十九軒

一、半潰式千四百九十三軒

一、堂宮并社倉・物置類不分明ニ付相除、但、口上訴ニ付追_而調

一、町家潰百三十式軒

一、半潰百十一軒

一、死人式十五人

口上調

同断

四月朔日調

一、死人式千六百十三人 外七百廿六人 四月三日調

一、怪我人八百六十三人 外九十人 同断

一、潰家五千百軒 外三百七十七軒 同断

一、半潰式千三軒 外百九十軒 同断

一、百六十五疋馬 外七十三疋 同断

一、外御城下死失式十四人

山平林⁽²⁾拔場所

一、長三間八十間程 一、下式百間程、内百間程、深式尺

一、定水勺水四丈程 一、壺番大石三間四方

一、山平林拔込之場所る松本領迄五里余水湛

四月三日調

「

弘化四丁未年三月中旬何となくどろ／＼と鳴音多く、十五日ハ日輪_ニ三重_ニ暈氣一重者尺余_リ見_江、二重めハ四尺余_リニ相見_江、色者至_而赤く見へ、廿日頃ハ昼夜鳴音山野_ニひびき、天氣も晴やかに平常_ニ替ることなく、天文学之者_ニ而者、戌亥の方_ニ火氣之運氣立候由風聴有之、中之糸易学洞春杯も右之次

第ヲ御代官川上金吾助様江御咄申上候ニ者、火氣相立候間存外之大火災と相見江候由、廿四日も天も晴風もなく、夜分迄も常の如く、唯何となく山野鳴音止事なく候処、同夜正四ツ時、東北へ南北の方家くハ、大波のゆするがごとく、大地もひるかへるかと驚く震動、鳴音有之、大雷よりも烈しく、鬼神のたゝりニ而家を潰かと唯十方ニ暮、身体ふるひ、更ニ地震とハ夢々心も附す、寝間ニ書物を見候処、行燈の燈皿三尺も飛び、誠の地獄と直ニ茶の間江出、家内之者ニ妻始小供庭江出候様申捨候処、家内と小供ハ守ニ背負れ、妻・家来ハ畳ニ取付、一所ニかたまり居、やうやく少し静り候付、表庭江出候処、居家ハ今ニ潰れ候様ミしく鳴渡り、西の方ニ而者人死となきさけひ、治兵衛と家来ニ、四人、右之方江遣し、斎太もかんでらを持、何とも申事もなくと欠付候内、表蔵も如何と案事参り呉、表庭ニ者中々立居も難成、土蔵・其外瓦屋根・ひさし共落候ニ付、下屋敷江逃、麦の畑・田の中ニ居候処、西の方北東南と火事有之、震動弥々強く、下屋敷ニ而も三、四度も方燈ころひ、油皿落候程之事、近所へ銘々見舞ニ参り呉、先家内人数怪我なしにて、大慶と申泣候事、此夜ハ田畑の中ニ雨露の凌もなく行明れハ、廿五目朝ニなり、屋敷外ニ而一見いたし候処、石垣表四ヶ所、土蔵杯者今ニ潰れ体、外圍堀者不残たをれ、鞠懸り者南西の角の石垣崩れ、ふらんと薬師の堂のさまニ相成、酒倉者四尺も西江かたかり、本柱者折なれとも、家の内江這入候義不相成、常の住居も一見いたし度候得共、震動止事なく、畑の中江鍋を三本木にて懸け朝飯の用意、古今未曾有之有様、立の俣ニ飯もくひ、湯一盃のむこともならず、此通りニ而者不相成と、下屋敷田畑の中江三間、五間位之仮小屋拵候処、先廿五日も七ツ頃ニ相成候処、山平林村者山崩ニ相成、死失式百人ニも及び候付、当座 御救方御当番磯田音門殿ハ御内沙汰之趣被仰渡、即座ニ村方江触面差遣し、近村者数ヶ村手充申、触日者暮致方も無之、翌廿六日ニ相成候処、山平林村地内岩倉虚空蔵山崩、犀川閑留候

而、廿五日七ツ時頃者三水村、四ツ屋と申所者住居も不残水下ニ相成、水内平も住居半分も水下ニ相成、追々新町も廿六日夕方ニ者不残水下ニ相成、廿七日者里穗刈・下市場も住居水下ニ相成、夫へ追々大原・山和田・日名辺不残水下ニ相成、川口・平・越中川・上生坂辺江水ゆたひ、四月十三日夕七ツ半時夜の四ツ過、九ツ時頃迄ニ、閑留候場所湛水押出し、川中島者大海の如くニ相成、扱地震者今以相止不申、時々大震にて諸人人心もなく御上へハ諸御役人様の齒を引如く廻村有之、田之口者潰家十五軒・半潰十九軒、其外酒倉・物置・土蔵潰多分、居家大損者式、三十軒も有之、怪我人も多く、死失者重右衛門孫、嘉七子のみにて、甚十郎親・妻者半死の様子、屋根下壁の下より掘出し、真福寺坏も同様、本堂・衆寮・くり・玄関・土蔵・物置迄皆潰レ、和尚も小僧も潰家より掘出しなれとも、怪我もなく、御高札者下石積崩れ御宮者参籠殿・拝殿・幣殿とも潰れ御本殿者不難ニ而、鳥居者常の如く、夜燈、其外石の宝殿たをれ、沢々川々用水埋り、田畑者不陸ニ相成、中ニも道陸神々赤田境迄ハ、田畑者九尺も高く相成、道筋所々大居切多、人馬通用不相成、漸廿七日頃へ步行ニ而人通用之処、里方江者小山田堤拔候沙汰ニ而通用無之、新町江者右の湛水ニ而通用無之、所々山抜 御奉行中直見にて漸道筋開き、又三月末へ小市者まかみ山拔崩、犀川閑留、水ハ一滴もなく、平林閑留押切候得者、川中島南へ水押出し候と 御評義一決して、御家老恩田頼母殿・郡御奉行中・道橋御奉行衆、小松原江御出張御賄被下、石工畔鉄御人足者鼠々力石、綱懸へ北、御領分之内御城下町人、川中島松平伊賀守様御領分・松平飛騨守様御知行所御領所共、四月十三日頃迄、数千人之御人足ニ而堀割、御賄者御代官出張ニ而御賄被下候由、既ニ上々様ニも御直見被為遊候

義度々被 仰出候得共、御家老中^二御差留中上候由、三月廿四日夜者

上様^②も御表御庭^江御立退、^{五月十一日}御馬場^{引ル常の通}へ御飯殿相立チ、御立退諸御

役所飯屋^二、右御馬場へ御家老衆始諸御役人相詰、善光寺其外御伺も右之場^二

而御伺相済、御近領、上田・松本・諏訪・小諸・須坂、其外御大名領^二御国使

者到来之由、從 公儀者四月十一日坂本宿着^二御普請役佐藤睦三郎方山平林

合犀川筋、十二日、^{安庭泊、小市昼、矢代宿}十三日見分之処、右十三日七ツ半時湛切候付、翌早朝高張

二舟用意、川中島荒所見分、其後御普請役佐藤友次郎方、小林大次郎方

御勘定役直衛倉之助様・松村忠四郎様

右犀川筋山平林・新町合上、川中島・越後堺迄損所御見分、越後国も地震^二付

御見分有之、松代懸りハ竹村金吾殿御勘定^二者元メ相成、春日儀左衛門・池

田良右衛門・草川吉右衛門・高野寛之進・春山儀治^③

道橋元メ兩人御手附四、五人^二見分

五月二日合山^④中筋者山寺源太夫殿、御勘定役兩人留役同心御引連、直見有之、

即座^二御手充被下、諸願等も其場^二御取上、御手充者寄、潰焼失之上水上^二相

成候分ハ、金三分壹軒へ被下、居家潰計者金式分、半潰者壹分被下、其外三月

廿五日合 御救米・塩・味噌等迄村々其次第^二寄被下、又者拝借被成下、右御

手元等并直見、川中嶋川北川東者、磯田音門殿廻村有之、

五月廿日頃合長国寺^⑤衆僧最上山^二大施餓鬼被 仰付^二、執行、御領分寺院

不殘於自坊施餓鬼も有之、赤坂山其外最寄^二修行

御領分庄死・焼死・溺死式千九百九十三人

潰家壹万軒程

斃牛馬

右回向之上と輪村々死失之教程、長国寺合出ル

扱善光寺者本堂・山門・大勧進殘、其余者ことく焼失、殊ニ如来回向^二付、

旅人多く寺領之者、千五百人余、旅人凡式千五六百人と者申候得共、骨ためし

而已、宿帳も無之死失候て、跡目も無之者、大門町計^二も十七軒皆焼失、東

門・西の門・後町・権堂・三十六坊・本願寺者不殘焼、松代^江 御救拝借兩度

御下渡^二相成

一、稻荷山者不殘焼夫、死失多、旅人も数不知焼死、上田合も御救米拝借金等

も有之由

一、久米路橋地震以前橋下水際迄常水、橋板合六丈四、五尺、今度廿日之間犀

川水湛^二、右之場所^二三十一間四尺合湛水、四十式間余、但大曲^二て見分、

水内村清左衛門・重吉兩人^二申聞

一、新町村者地震^二付潰、其上焼失、廿五日七ツ時頃^二者村七分通り水下^二相成

候由

一、上様御巡見御泊御用宿^二、鬼無里村御奉行竹村金吾殿出役、元メ菊池孝

助、御代官出役、廿四日夜大地震^二付翌廿五日川北泊り步行^二、野宿同様^二、

廿六日松代着之由

右^二付、手代鈴木藤太念仏寺村臥雲院泊り、廿四日夜地震、寺者諸堂共不殘

潰、拔埋、其上焼失、右藤太者逃出し無難^二松代^江着

一、右御巡見御用宿御勘定役高野寛之進、戸隱山中院廿四日夜止宿之処、地

震^二付、寺領役人等止宿^江見舞參、唯今奥之院大岩落、戸隱権現社潰^レ候由、

夫合高野氏善光寺通り候処、空腹^二步行六ヶ敷、市村川渡^シ參り候処、犀

川^二水一切無之^二付、相尋候処、山平林村岩倉山崩^二付犀川閼留、此渡場御越

被成候者、唯今^二も水押出し候得ハ、六ヶ敷由申候付、刀者僕^二為持、犀川

步行^二飛逃候得共、一切足も不相ぬれ、丹波島村^⑥へ參り候処、漸人心知相

成、同村勘左衛門見懸、同人方^二賄仕候由、戸隱合之道筋者藤つる其外岩

等へすがり参り候処、右次第、善光寺は地震潰、出火最中、誠地獄之有様ニ存られ候由相咄候

一、須坂者地震者強く候得共、家潰候程之義者無之、乍去御領分綿内村者、四月十三日犀川湛水押出し候節、住居大半流失之由

一、四月十三日、川中島者四ッ屋中島村者一軒ニ土蔵ニッ残相残流失、地所者不残石砂入損地

同日小市村者塚田源吾屋敷・酒倉半分残相残、居家・門口・油家共・文庫蔵・其外家財共不残流失、同人門口跡者壹丈余之淵ニ相成、右村七分通り流失、源吾弟圧死

一、小松原村者地震ニ付、凡七十人余圧死、潰家多之處、四月十三日湛水押出候節、田畑共流失多

一、南原伊藤一学・小出祐之助方者住居へ床上三尺余水つき、穀物等者水下ニ相成候ニ付、十四日・十五日、五明辺江相頼、干上ケ候由、家財者松代親類へ相頼候て無難ニ候由、町尻□□之辺ハ家流失

一、丹波嶋者十三日ニて村内三ヶ所切込、家三分通流失相残、七分通者砂入之由
一、真島村北村与右衛門方ハ、家財者保科村大島伊兵衛養子藤太方江持運び無難、住居家と酒倉との会の処、本瀬同様ニ相成候得共、穀物少々ぬれ水入、酒者無難之由、酒倉・居家共水者六尺余もつき候由ニ候得共、無難之由

一、押島田村梵天酒倉者流失

一、四月十三日山村山村者四十五軒流失、荒神堂も布施高田村芝沢辺ニ流出し候由、右荒神堂之上江式丈余も水流行候由、右者秋古之狭所ニ当り水返り候由ニ而

一、笹平村者新酒屋之方ハ流失、村上之方七、八軒流失

一、川中島三堰者、公儀御普請役御出役、此方様御役人御領私領之御役人出

張ニ而、五月十五日過用水通用之處村々分、堰埋其上苗差支等ニ而土用前日頃迄田植致し候

一、高田村甲田秀硯宅者、床上三尺余水下ニ相成、当用家村薬たんす家具衣類も水入ニ相成、門者雨宮通其迄流出し候由直咄ニ候、家内ハ松代中村周徹方江引越候由

一、新町村江島屋久右衛門者、娘婚姻ニ付善光寺堤専安方ニ而家来衆共十人余、栗田村源左衛門夫婦、郡村和田与八郎妻、其外婚礼之座之者、大半右廿四日夜四ッ時地震付圧死焼失、新町実家の方者久右衛門母・女房・女子壹人・家来共圧地死、残人数嫡子増太郎井妹壹人無事ニ而潰家ハ掘され助命、尤杜氏者無難之由承り候

一、同村質屋嘉源太方者小兒壹人圧死、家来一兩人圧死、家者潰レ
一、久保喜伝治方ハ、本宅ハ潰候得共、隠居家ハ不潰、家財も持出し、残焼失之上流失、家内人別者無難

一、大内源兵衛方ハ家潰・焼失・流失、家内者無難

一、大内勘右衛門方ハ小兒壹人圧地死、潰・流失

一、鍋屋源右衛門者家潰・焼矢・流失、家内無事

一、雲掃寺潰レ・焼失・流失、住寺者入湯ニ付、留主居四、五人圧死

一、安養寺潰・流失

一、源真寺潰レ流失

一、山平林村柳沢一郎、廿四日夜地震、家・門口・土蔵三ヶ所、鞠懸り・薪屋・明礬屋潰之上焼失、

右一郎妻并杣壹人・家来壹人圧死・焼死、

其夜境新田村壁のり林左衛門居合候処、是者、

金毘羅様心願ニ而大音声神号を唱ひ候処、屋根煙出しのけ出、直ニ境新田へ

逃歸り、氣絶致し候得共間もなく平癒、十日も過候節、自宅へ仕事ニ参り候

一、岡田村觀照寺智幢法印・弟子智丈兩人共圧死、本堂・庫理・其外共皆潰レ

一、同村玄峰院住寺圧死、本堂・くり・鐘楼・其外皆潰レ

一、同村庄や大沢六左衛門方^ニ而愛之助并四五右衛門妾子一人圧死、右村庄屋寺沢慶十郎圧死

一、白鳥山康樂寺本堂・くり・其外皆潰、女子壱人圧死、院主者江戸の上方の留主

一、天用寺皆潰、長谷寺半潰、長雲寺潰焼失

一、安庭村真龍寺、山平林村觀音寺潰レ

一、新町村雀森觀音、里穗刈安寺、大原村昌福寺、日名村常光寺潰之上流失

一、大岡今泉村天宗寺、中牧村清水寺潰レ

一、牧田中村興禪寺本堂大斜、庫裡潰、住寺并旅僧式人・尼壱人圧死、ノ四人

一、松代者増田家宅、八田呉服店、中町・肴町辺潰レ、御家中、御家人迄死失

一切無之、潰家も無之

一、専納村康平方者女房・女子壱人・小兒壱人、ノ三人圧死、家者拔出し、弥

右衛門屋敷跡^{江押出し}

嘉右衛門方ハ孫男子壱人圧死、家ハ潰レ

一、善光寺江戸屋市之丞方市之丞・順司并同人子兩人圧死、残老母・市之丞女房・同人女子壱人・順司女房、ノ四人残り家潰之上焼失、旅人百人程も圧・

焼死

一、飯山者城下町壱丈も地形上り、家寄潰、焼失、家中住居式軒潰候而残居候由、旅人多、凡九百九十人余圧・焼死

一、甚左衛門方者物置潰、居家者柱式十本余をれ立居、土蔵斜、家内無事

一、齊太方者酒倉不残、車屋・灰屋潰レ、家内無事

一、小才太方者居家潰候処、半分ヲコシ、当座小屋掛同様、家内無事

一、善兵衛方大斜、柱折レ、家内無事

一、幸吉方居家大斜、家内無事

一、吉郎次住家大斜、柱折、式階等都而落、別屋敷者用立土蔵半潰、家内無事

一、信之助方長屋潰レ、家内人別無事

一、長庵方大斜同断

一、龍洞院台所・居所式ヶ所無難

一、桑原邸者地震薄く、潰物多分無之由

一、八幡宮者御無難、村方者潰家多し

一、矢代者七、八軒潰、上田辺ハ潰家無之

一、松本・諏訪も潰家無之

一、三水村水下^ニ相成候人別、大喜・九十九・平左衛門・斧吉・善藏・与左衛門・佐左衛門・□□藏・幸右衛門・甚左衛門・喜三郎・与右衛門・藤吉・茂

吉・源右衛門・勇吉・藤十郎・戸作・友吉・小文治・伊左衛門・氷熊村權

次・政右衛門・常右衛門・利藤太、ノ式十五軒

此四人者跡山崩^ニ而住居相成不申

四ツ屋平者水つき居、住居相成不申

狂歌ワ 善光寺

鹿島から使伝置ハゆひものを、地震^ニこられ如来迷惑、後の世をねかふ心の人々も、かくはやしとハ、おもはさりけり

善光寺如来答

後のみか現世も施主に世話かけず、土葬水葬火葬までして、なんと難有じやごんせぬか

如来へ悔

如来様難波以来の御災難

○死たくは信濃へござれ善光寺、うそじゃない物本多善光

○しぬの、国善光寺

三損無陀如来利益

一、くたびれたが損

一、路銀か そんな

一、命 か そんな

御詠歌

○善光寺しなのてのふてしぬの也

地震にあふてとんたけちゑん

○姨捨の名前と聞し信濃路に

叔父を捨たハこんどはしめて

封廻状と言ことを

公儀御輿坊主の拵候由

当時御勝手方御用番阿部伊勢守様、寺社奉行出雲守様、御目付伊三郎様を引入て

風怪状

鹿島常陸神

名代

香取下総神

其方、往古今地震押のため鎮座被 仰付有之処、先年越後牧野備前守領分三条を震崩⁽⁸⁶⁾、老中領分之弁も可有之処、勘弁も無之致方、備前守⁽⁸⁷⁾も拝借金被 仰付候程之義、猶其後京都大地震⁽⁸⁷⁾にて、二条御城為及大破損、殊⁽⁸⁸⁾奉驚 帝意、其□□不軽之事⁽⁸⁹⁾候得共、神代之勤功被思召指控被 仰付罷在候処、

此度信州善光寺近辺地震、山川変地為致差控中不届至極付、蟄居被 仰付

月 日

右於伊勢神託出雲神出座伊勢神申渡御目付西宮夷三郎罷越

一、稲荷山村穀屋助四郎、地震⁽⁹⁰⁾付家潰候処、家内之者壹人も相見不申、手前者屋根を破、やうく命限りと逃出候得共、十方⁽⁹¹⁾暮居候内、存付女房・子供、詮義⁽⁹²⁾懸り候得共相知不申、其内式階裏の下⁽⁹³⁾わめく声、少々聞へ候付、先女房の両足を持引出し候処、首のけ体□□⁽⁹⁴⁾俣捨置、子供の手を取引、出候処、うでの□□付、是も致方無之、其のけ、手を其俣捨候処⁽⁹⁵⁾江火煙り、一円⁽⁹⁶⁾取まかれ、致方もなく、又命限り⁽⁹⁷⁾退のけ候間、唯壹人物⁽⁹⁸⁾相成咄⁽⁹⁹⁾候一、いなり山米屋定七は、右の手ひさし⁽¹⁰⁰⁾けたにはさまれ、足ハ鴨居⁽¹⁰¹⁾挟れ、声限り助呉くと呼候内、双方火懸り、誠眼前の地獄を見候得共、刃物は見へず立騒者も致方無之、右体の数不知由、扨田中友之丞方ハ、亭主者上田へ行候処、居家潰、家内もやうく人に掘出され候得共、五、六才の嫡子ハ圧死、其内火事と相成候付、穀物出し工夫⁽¹⁰²⁾相頼、夜も明方⁽¹⁰³⁾相成候付、元□□⁽¹⁰⁴⁾其外杭瀬下・新田⁽¹⁰⁵⁾等の人々、穀物出し呉と集、誰何表と何村誰と申事書留候と申⁽¹⁰⁶⁾付、此中右体の始末⁽¹⁰⁷⁾は迎も人力⁽¹⁰⁸⁾難及、頼⁽¹⁰⁹⁾任せ出し可申と存候得共、此者は盗人⁽¹¹⁰⁾は無之、急難救⁽¹¹¹⁾参り候と、右の断⁽¹¹²⁾引取と申、不残引取土蔵式⁽¹¹³⁾所質倉共不残穀倉は廿日も煙り出候得共、誰以世話いたし候も⁽¹¹⁴⁾の無之由、気の毒事共重り候

一、中牧村中村良左衛門并母圧死、倅量平御救の方へ初五十表差出候、尤良左衛門は煙草盆ヲ手⁽¹¹⁵⁾持、庇桁⁽¹¹⁶⁾打れ圧死

一、矢代村 智性院者僧侶、善光寺回向⁽¹¹⁷⁾付参り居候処、大地震⁽¹¹⁸⁾付、直⁽¹¹⁹⁾欠出し、鋸一丁持出し、所々潰家・圧人之分桁の物等を伐破、多分之人數助命い

たし候^ニ付、從善光寺本坊緋の□衣、其外数多もらひ、又松代よりハ、御目録金三両被下置候由、誠^ニ地震と火事^ニハ馴候由

尤四ヶ年以前、矢代宿百弍十有軒焼失之砌も、右村長右衛門宅へ行中^ニ而家内之者^江下知いたし防火いたし候由、此長右衛門も前後左右焼失之处、右智性院主之み影殿焼残り候由^ニ承り候

(貼紙)

覚

一、三月廿四日夜大地震上田より手当

□□□□^(一)五日米三拾表即座手当稻荷山^江

一、廿七日夕四月十七日迄壹人^ニ付米七合つ、

一、村々地震手当

本潰米壹俵つ、半潰米半俵つ、

一、変死人^江銀拾五匁つ、

一、水附者地震潰同様

一、中氷鉋^(四)・戸部^(四)・今里^(四)、右三ヶ村^江兼^而上田・塩尻^(四)・塩田^(四)辺被申付置苗、

此節専船筏又ハ馬^ニ而差送、尤駄ちん迄被下候

一、夫々手当、上田^ハ馬士^ニ而差送被下、尤村々請取^ニ馬士遣候ハ、壹駄^ニ

付ちん壹貫文被下渡候

一、外^ニ当村^江役々仮普請手当金凡八拾両程被下候

松平伊賀守様御領分

五月廿九日

岡由村庄やゝ

「

一、伊折村^(五)内藤沢組式十五軒之处、迎山^江突つけ拔出し、右者処城と申四軒有之处、家も住居も不残土中へ埋、藤沢の方をやうく右之内^ニ而隣村^江参

り居候者三人残拔圧死共一人も見不申、城之方ハ壹人も死体見^江不申
扶桑略記

光孝天皇、仁和三^丁未七月晦日、信濃国大地震大頽崩^{タイクイ}、山川溢溢流、六郡城廬^{シヨロ}払^レ地漂流人馬牛死ト云々

佐久・小県・更級・埴科・水内・高井

人の啼次に聞けりきしの声改めて心持たしちる桜

当四月十日大風雨、美濃・三河・尾張・田畑人多く死

同十七日勢州松坂辺、雷電厳大雨^ニ而、氷五寸程降、一ツ目方九匁、家弍軒雷

火^ニ而焼失

当未六月廿日昼後八ツ半頃、大雨雷あられ少降、志川村高円寺本堂・庫裡焼失、

但雷火^ニ而天火田の中へ落、本堂へころひ込、箱むね^江のけ小坂寺近所

本多豊後守内

寺内勘兵衛

和田七左衛門

真田信濃守様

御留主居中様

以手紙啓上仕候、然者兼^而為御知被申置候通、豊後守在所信州飯山三月廿四日亥刻頃ハ大地震^ニ而破損所等先達て御用番様^江先御届被差出候、其後地震相止兼猶損所出来、当六日阿部伊勢守様^(五)江御届書被差出両度荒増左之通

○一城内

二重櫓 潰損共弍ヶ所

石垣 崩三ヶ所

囲塀 皆倒数二ヶ所

土蔵 潰・半潰共拾壹棟・武器蔵共

物置 潰損廿三ヶ所 門 潰・半潰共拾壹ヶ所
 住居向 半潰二ヶ所 献上蔵 潰 壹ヶ所
 腰掛 潰 一ヶ所 稽古所小屋共 潰損 式ヶ所
 番所 損半潰五ヶ所 井戸上屋半潰 壹ヶ所
 ○外廻り 稻荷社拝殿共潰 建家 潰四ヶ所 番所
 ○家中侍居宅
 四十四軒潰、六軒焼失、六軒半潰、四軒損
 ○同門 十七ヶ所潰、三ヶ所半潰
二ヶ所焼失、八ヶ所損
 ○同土蔵 三棟焼失、式棟潰、五棟半潰
 ○侍并小役之者長屋 十八棟潰、十式棟焼失、三棟半潰
 ○番所 三ヶ所潰、一ヶ所半潰
壹ヶ所焼失、壹ヶ所損
 ○春屋 (98) 壹ヶ所 潰
 ○用会所 壹ヶ所 潰
 内
 土蔵 一棟潰
 同 一棟類焼
 門 一ヶ所半潰
 長屋 一棟潰
 物置 二ヶ所潰
 ○厩 壹ヶ所半潰、壹ヶ所半潰、内馬場一棟半潰
 ○献上蔵一棟 半潰 ○仲間部屋式棟 焼失
 ○作事小屋一棟 半潰 舟蔵一棟半潰
 ○侍分家内小役之者下々迄即死八十六人 男四十人
女四十六人
 ○城下町之内 御高札場壹ヶ所焼、但御高札外シ置

番所 一ヶ所焼失、同一ヶ所潰、土蔵上屋計二十二棟焼失
 粗倉 一棟焼失
 物置 百四ヶ所潰、五百四十七棟焼失
 同 三百式十九棟潰
 内
 土蔵百七十七棟焼失
 七軒山崩 二而 泥冠、六十九棟潰
 ○水車屋三ヶ所潰
 牢屋敷
 内
 寺院
 本堂 六ヶ所焼失、六ヶ所半潰、三ヶ所崩
 庫裏 十四ヶ所焼失・潰共 七ヶ所半潰・焼失共
 諸堂 二十三ヶ所焼失・潰共
 橋四ヶ所 落
 ○城下町人即死三百三人内 男百三十八人
女百六十五人
 外□□男壹人、□□男壹人、馬八疋
 ○領内在方之分
 ○御高札場 十四ヶ所潰、同三ヶ所半潰
 ○番所 二ヶ所潰
 ○郷蔵三十一ヶ所
 内
 山崩 二而 土中埋十ヶ所、九ヶ所潰、五ヶ所半潰、七ヶ所類焼

○居宅潰式千五十六軒 内八十三軒山崩^二而土中二埋

○同半潰七百三十軒

○同焼失式十三軒

○物置潰千式百四十八棟

○同四十三棟 半潰

○水車屋 三十四ヶ所

内

式十八ヶ所 潰

四ヶ所 半潰

式ヶ所 土中^二埋

○社五十九ヶ所

内五十四ヶ所潰、五ヶ所半潰

○寺院 十七ヶ寺内十式ヶ所寺潰、五ヶ寺半潰

庫裏 三十ヶ所潰 同三ヶ所潰

諸堂六十八ヶ所内式ヶ所焼失、五十六ヶ所潰

鐘樓堂十一ヶ所潰

橋九ヶ所落

○死失千百式十壺人 内 男四百九十一人
女六百廿七人
僧三人

斃牛 三疋

斃馬 式百三十四疋

荒地五千百六十壺石三斗余

此外変地数多有之

外□□小や七軒内<sup>六軒潰
壺軒焼失</sup>、内、女壺人死失

○用水路、水揚口の一里余之難場欠落、其外村々用水所所損、且往還筋式ヶ

所拔落并山崩川欠地割裂小橋損、青木倒数多^三而、難頭、怪我人夥敷、身体不具相成、農業出来兼候者多分有之、尤怪我人之義も数多故難取調御座候

別段

飯山表去月十三日夜今十四日迄、定水ヶ壺丈三尺相増、川添村々田畑水押入等之義、先達^而先御届被差出今六日左之通御届

○田畑水冠、石、砂入川成共高九百六十九石式斗三升八合

同水押荒地川欠 千百式十三石式斗壺升九合余

同水冠 式十四石九斗余

○用水路土手切

百十三間 一ヶ所 式百間余 一ヶ所

七十間 二ヶ所 百九十間 壺ヶ所

右之外、損所数十ヶ所、人馬怪我無御座候

右之通御座候損毛高之義者、追而收納之上、御届被差出候、右之段為御知被申置候、右御見廻小使者等之義御沙汰も御座候者、嚴重省略中之義付、堅御断被申置度、此段各様迄宜得貴意旨、豊後守被申付候条如斯御座候

五月

飯山

右者江戸屋敷今当御屋敷江到来之書状写

御届

私支配所信濃国水内郡善光寺荒安村并更級郡八幡村、当三月廿四日夜亥刻過大地震^二而寺領社領堂社居家町在共大破、其上出火^三而焼失并死失等之覺

御朱印地

善光寺領

如来堂 内陣造作大破 山門并経蔵小破

如来供所并供水漬 境内宮一ヶ所、社一ヶ所漬

仁王門并境内社式ヶ所焼失

本願上人住居向其外不残焼失

大勧進万善堂・護摩堂・聖天堂・堂内仏殿客殿・座敷・居間向大破

同台所向土蔵六ヶ所物見裏門漬

同土蔵一ヶ所焼失

寺中四十六坊焼失

本願上人并大勧進家来居家潰内八軒焼失

寺領内寺式ヶ所焼失、同一ヶ寺座敷勝手向漬

同庵三ヶ所焼失 同社式ヶ所潰内一ヶ所焼失

同毘沙門堂并供水漬

但、境内末社式ヶ所漬

同水茶屋式軒潰内一軒焼失

民家三十五軒潰 町家式千三百五十軒潰

内式千百九十四軒焼失

寺中并本願上人大勧進家来の内

百三十八人死失 内僧十五人 男五十四人
女六十九人

町家死失人千三百十九人 内 男六百廿四人
女六百九十五人

旅人死失凡千式十九人

但、寺中并宿方止宿右之外、旅籠や家内不残死失之者有之、止宿旅人生死

不相分

怪我人多分有之候得共、家業差障り候者無御座候

□□小屋三十五軒焼失 □□

牛馬別儀無御座候

以上

御朱印地荒安村

飯縄神社

社務仁科甚十郎門口潰、同居家半潰、土蔵一ヶ所半潰、民家四軒潰、三軒半潰、物置一棟潰、山崩六ヶ所、田畑道路地割床違ニ相成候場所数十ヶ所、

百姓压死三人内 男一人
女二人、怪我人三人 内 男一人
女一人

以上

御朱印地

八幡村

八幡神領

如法堂潰、别当神宮寺本堂半潰、庫裡半潰、

神主松田大膳居家半潰、門口長屋物置潰、

社僧庫裡一棟潰、同本堂式棟潰、庫裡三棟半潰

社家居家三軒半潰 土蔵物置五棟潰

压死人十七人内 男九人
女八人、怪我人十八人内 男十一人
女八人

以上

右之通御座候此段御届申上候以上

五月十日

御名

御領分五月朔日治定調

压死分 式千五百五十九人内 男式百三十人
女千三百三十人

内訳

三百九人 内 男百五十一人
女百五十八人 山拔土中江埋、死骸不見

僧八人、神主一人

式千貳百四十一人内男七十人
女三十一人

町町外

圧死分三十五人 内男十一人
女十二人

惣ノ圧死貳千五百九十貳人 内男千四百四十三人
女千三百五十一人

怪我分千三百六十六人 内男六百五十一人
女七百一十五人

六月廿日市村舟渡北吹上ニテ、大雷雨ニテ打潰され、尾張の旅人貳人即死、雨者一時計車軸を流す如く

花のゑん

如来善光の此世にあらハおんぶしよふ

常夏

○焼残る御堂守やハ持あまし

○目の覚た事と朝日て仰られ 是ハ如来朝日山へ飛といふニつけ

○科もなき仏をうらむ焼残り

○此度ハふらんと薬師目を廻し水内の蛙大海を知る

○稻荷山又怪我人ハうなり山

○地震とて萬歳楽と言けれと何たのしみにしやばのくるしみ

大絵事

地震

其方義、往古より鰻屋のミセ先江横行致候ニ付、蒲焼ニも可申付所、格別之憐愍を以、鹿島明神配下ニ申付、地震蟄居可為致筈之処、先年洛中地震を初、近年度々地震有之候処、去月廿四日夜信濃国ニ及乱妨、松代・飯山之両城をゆり潰し、大地を動し、高山を正明し、大川の流を留、土中ハ泥水を吹出し、人馬多く為致死失、郡村不残亡所ニ相成処も有、全く泥海ニ可致心底重々不屈至極付、

改て常陸神江御預ケ奈落江蟄居申付る者也

右ハ於瓢箪所申渡し

此書付所々地震番江張出有之

丁未四月風怪状

鹿島常陸神

名代

香取下総神

其方、往古ハ地震押之役被為仰付候処、先年洛中大地震ニ付、京都を驚し、且又二条御城所々令破損候段、御場所柄をも不弁致方、其上のみならず、御改革御趣意致忘却候哉、近年度々地震ニ而死亡・損失不少之段、其方あらん限ハ右様之義有之間敷処、畢竟手ゆるき故之義不都束之義付差控被 仰付之

右於伊勢神殿御差図之旨、於出雲神託申渡之

石野要人

那須野石郎

其方義、鹿島常陸神為配下、地震横行為致間敷筈之処、如何相心得候哉、中世以来数度地震有之、其方江押申付候申斐も無之、既ニ先達而水戸中納言殿掘出し可申越格別之御用捨ニ而其俣差置候をも致忘却、先年洛中者勿論、近年度々之地震ニ而御府内之者共を恐怖為致、其上ならず信州辺ニおゐて莫太之大地震打企候段、常々押イ付不申、瓢箪同様之心得方重々不埒ニ付、野見鉉之助を以こつぱニも可被 仰付所、常陸神ハ申立候趣も有之候間、格別之以御有免土中江其俣埋込申付るもの也

信濃地震八景

三井 善光寺晩焼

ゆり潰す地原とともに火の出て、諸国へひく丸焼の沙汰

堅田 畠田の落滅

こし近き川中嶋の地震ニハ畠田も野をもより返しけり

石山 飯山運の月

飯山や今宵よりくる地震ニは、城も町家も皆潰れけり

栗津 海津驚乱

此度の地しんさわきにも、人も千人もなみゐる海津にそよる

カラ崎 川中嶋涙雨

遠国ハ地震の鳴うつりつゝ、水をあんじてなく涙かな

セタ 弥陀殺生

諸国から人を集てみた如来、夕日に多く焼ころしけり

比良 修羅口説

焼灰の雪かきわけて諸人の骨をひろふて置を哀さ

矢橋 矢代危難

はたかにて矢代に帰る舟ハみな、ゆり潰されしあとの旅人

なぞ

此度の地震とかけて中気の尻ととく

○心はふるひ通した

ふみ出しの豆ととく

○潰したり焼たり

狐付ととく

○幾度も飛出す

丹波島の舟渡シトカケテ老母の也と解

水けがない

山中の水溜りとカケテ 臨月の女

今にも抜そふだ

犀川へ山拔と、ゝ、

にはか金持 日増にたまる

善光寺の焼跡

やぶれ風

骨計残る

一口咄し

本たてふらくするハ、娘の本田ハ是ハまよひの前た善光寺ハ今度の火事で

金も錢も皆焼たるふデモさひせん程ハ有ナゼさんもんハ残た

○病人か地震ニ逃出したが何処の人たるふ、あれわうなり山ダ

○犀川疱瘡として曰山クさつて水海と成

○しよふ親父地震ニ逃出して曰みかはハ大事だ

○柳沢一郎焼真字文小判三十式両、真文字壹分判三十七両、草文字壹分判十五

両三分、外銀一ツ、メ八十五両三分、六月廿一日、水井忠藏殿江頼

○松本松平丹波守様家老坪井覺太夫、善光寺回向ニ付同勤之士両三人誘引、僕

七、八人召連參詣致候処、善光寺宿方ニ而廿四日夜止宿、昼後ハ夜五ツ過迄權

堂へ行酒宴、夫ハ旅宿江帰り間もなく四ツ時過地震ニ付寄潰、覺太夫者庄死之

上、焼死致候付、同勤之士共ハ松本江飛脚相立、右死失之次第、委細ニ申越候義、

廿六日夜麻績村法善寺鈍牛承り、即刻松本家老并親類等江書面差遣、其文言者

坪井覺太夫善光寺ニテ病氣ニ付、拙寺江引取看病之旨申越、夫ハ善光寺江小僧一

人召連罷越、小市村通りニ而旅宿相尋候処、右坪井家来并同行之者共ハ死失申

立致候趣申聞候処、士道之義者変死等之届ニ候得ハ、家苗致断絶候を、各御承

知之上右様之御計不得其意義と和尚致立腹、松代出役江も坪井焼死候得共、右

之次第ニ付、病氣ニ而法善寺江引取候趣ニ御承知被下候様、和尚頼合其通り出役

も承り、右鈍牛和尚何者之骨やら少々持參、松本江右家来之者共召連、丹波島

步行渡と申処、家来并同行之者共危きを心附小市通り和尚と小僧而已ニ而丹波

島江步行渡リニ而、岡田近所迄罷越候処、迎之者多勢參り菩提所へ連行候と申候

ニ付、病氣之坪井、寺へ直ニて如何之訳と種々利解申含候処、迎之者在所家老江

伺之上と申引取実ニ病氣候ハ、屋敷江引取可申と挨拶ニ罷成、坪井屋敷へ骨持

參、家老中江申談事候得共、一旦同勤ハ死失之旨相届ケ候得ハ、旧知之義者御

引上、改易ニ相成候評義ニ相成候処、家老之内一人は尤と申、和尚江心添致候得

共、殘家老始中々承届不申候付、段々坪井家勤功之義をも申立、漸半知式百五

十石被下、坪井覺太夫^江倅^江家督と評義一決いたし候得共、和尚者戰場同様之場之御勘弁とひたすら申立、半知相止元のことく五百石倅^江被下家督被申付候由承り、其日数四十五日間、和尚松本^江罷越居相話候と申聞候

家老坪井覺太夫高五百石

同人弟宝善寺鈍牛弟子相成因縁を以荷担いたし候由

但、鈍牛者加州藩中出生^ニ而松本善久院^ニ漸罷在人撰を以、法善寺住職之由^ニ候

一、松平飛彈守様御知行所地震手充

潰家^江玄米三斗、死夫人一人^ニ付米壹斗被下旨承り、塩崎村^(四)中死失七十三

人、右村中^江百両程割

氷鉋・今井・今里之辺ハ、同様手充

用水堰国役普請賃錢、壹人式百五十文渡候趣、承り候

六月廿六日朝、雨少々降、地震三月廿四日より今以昼夜震申候、今日^ニ而九十日余御坐候

松平伯耆守様御在所丹後宮津

三百五十丁之土手、俄に出る

越後糸魚川

四月廿九日夜大風大地震、尤家たおし候程之事^ニ者無之

羽州 山形

洪水丈六丈程御城^江七尺水入、人多く流死失

三州 吉田

四月十日水ふる、尤茶わん位なるよし

奥州

此程中七ツのふしき成事

一、朝日の出 三ツ出ること

一、塩かま明神 神馬何方へか参り候哉七日め^ニどろ^ニ成帰ること

一、釣かねつかづに鳴こと

一、地われ泥吹出る事

一、大木うなりきり取又ほり候てもうなること

一、山^ニ女の姿式人見ゆること

一、片倉小十郎御城^(四)焼る事

右風聞書到来

地震とつちりとん

天地ひらけてふしきと言ハ、近江湖駿河の富士ハたつた一夜に出来たと聞た、それハ見もせぬ昔のことよ、爰に不思議ハ信濃の地震言も語るも身の毛のよだつ、頃ハ弘化の未の年の花の三月下旬之頃よ、廿四日の夜の四ツ過よ、ふひに寄くる地震のさわき、たはこ一ふくくゆらぬ内に、北ハ善光寺・飯山かけて須坂・松城・松本・上田・高田^(四)、御城下町々潰れ、ざいの村々家数しらず、潰家数ハ何万なるや、人馬死たは何千なるや、数も限りもあらまし計り、親ハ子を捨、子ハ親を捨、あかぬ夫婦の中をも言ず、既に逃出す其行先ハ、ほのふもへ立、大地かわれて砂を吹出し行事ならず、あつやくるしやたすけてくれと、なきつさけんでよび立声ハ、天にひゝきてあわれのことよ、せつな念仏唱へて見ても何のしるしも有ことあらん、扱もおそろしややんれ引

かゝる中にも、善光寺様ハ当時御開帳あることなれハ、諸国近辺参詣の人よ、大門藤やと申す方へ旅宿いたせしあまたの同行、其内^ニも千計り御堂へこもり、だんきの中てゆらりと震たして、旅中一時^ニ家内か潰れ水が出るやら、火がもへ立やら、昼夜地震の七日七夜、かゝる中^ニも、御地頭様で種々

の御手充有之程に、一家親類たつねて見ても、どこにどふして居るやらしれず、思ひ案する心の内を、ほんに聞のも哀のことよ、中^ニ難義の其人々ハ、思ひく^ニ古木を集め、大工いらすのうら屋を立て、是て漸雨風しぬく、かゝる中でも、かゝる中でも、御堂ハ残り実不思議や、三国一の如来様かと歎同行、此夜御堂^ニコもれる人ハ、いかな一ツも怪我なき事ハ、是も御りやくあ、有難や、こゝ、やかしこの怪我人なるハ、是ハ過世^(ママ)の^(業報)こふほふなるか、さてもあわれのことさやんれ引、

夫天地之變動するハ、陰陽順くハんの多少によるもしくは人力^ニも及へき^ニあらず、頃ハ弘化四丁未年三月廿四日夜四ツ時頃分、江戸を始め外地震する、此元ハ信州水内郡善光寺より北の方、吉田宿⁽¹¹⁾・稲積村⁽¹²⁾・山西条⁽¹³⁾・あら町宿⁽¹⁴⁾・徳間村⁽¹⁵⁾・新光寺⁽¹⁶⁾・神山中宿⁽¹⁷⁾・牟礼宿⁽¹⁸⁾・二小古間⁽¹⁹⁾・大古間⁽²⁰⁾ハ甚しく、黒姫山^ニ至る南の方ハ、石堂村⁽²¹⁾・問御所⁽²²⁾・中御所⁽²³⁾・あらき⁽²⁴⁾・和田⁽²⁵⁾・風間⁽²⁶⁾・松岡新田⁽²⁷⁾・上高田⁽²⁸⁾・下高田⁽²⁹⁾・柏原⁽³⁰⁾・権堂町、此近辺牛馬多損シ、夫高井郡に至り、東の方ハ小布せ宿⁽³¹⁾分須坂御陣や近辺迄、大地さけて大地中より水吹出し、更級郡丹波島近辺迄東西九十余村を^{此辺地震の処、かへつて寄こと、強く大地さけ煙りに死者多し}埴科郡松代御城下近辺十余ヶ村、夫小県郡上田御城下近辺百十二ヶ村、追分⁽³²⁾・軽井沢、水口惣上州口迄此辺山寄動て、雷の如し、筑摩郡松本御城下迄百余村、此辺農多く、家々寄潰ことなし、西の方ハみたけ山⁽³³⁾分しらどり迄、此辺前同様^ニ人馬多く死失、諏訪郡高島御城下分西の方^ニ至りて四十余ヶ村、此内諏訪の湖上り、人馬家々多ゆりつふす、佐久郡辺以外強、家・蔵土中へめり込、死人多シ、安曇郡北之方百三十余村破損す、此外筆紙^ニ尽し難し、村々在々老たるを助、幼をつれ、炎にむせびなきさけふ声、天地にひゝきて、おひたゝし、夫と善光寺如来、此節開帳、在々諸国より参詣多く、此大地震^ニ坊舎不殘寄倒シたれと、御堂ハ恙なし在こと三国一徳之仏と言、翌廿五日朝六ツ時、早々細見

御地頭所御代官分御手配あつく、人民を助、出火を取しづめ、大水を防給ふ事、有かたきことなり、爰に於て、漸々あんの思ひをなす、誠^ニ前代未聞の変事なれハ、有増書残し畢ぬ

神国のしるしの見へてかけまくも 神の宮居は潰れさりけり

柚人のすなどりと化す渡世替

龍宮^江預ケとなれる水内辺

此頃ハ水に影さす山くしら

山を見ぬ獵師はからす海を見る

炭焼を黒坊と見るにハか海

今宵こそ死^ニ来たなと、客かい、

似た人ハなき跡見れハ焼た人

科もなき仏をうらむ焼残り

稲荷山もふこんく^ニと焼たされ

火の廻りおのが勝手のふしをつけ

伯母と子か親兄弟を捨て逃

真黒になつて権堂て焼の客

人はきも雉子は声をぞ潰しけり

御災難なんば以来と思し召せ

おんぶせず自身朝日の山へ飛

吉光ハ娑婆^ニ居たならおんふしる

みたことでない大變て仏たち

既^ニけふ如来目に恋ふ所也

ちゞは逃ば、は泊りて人難義

地名とて一郡水内となりけり

山の芋今そうなきに成時節

善光寺権堂村田町組

一、家数七十式軒、外借家百十八軒

一、潰家五十一軒、外借家八十八軒、焼殘居家土蔵四ヶ所

権堂町組

一、死人式千四百八十六軒、内旅人千式十九人、男女共

出家十五人

男六百四十四人

女七百式十四人

以上

水損四月十七日迄申出候分

一、村数三十三ヶ村家流失六百貳十七軒、同千八百軒程石砂泥入・水入之分

流失人十三人

右者覚悟いたし候哉、死失至^而少々追々可申立哉

私在所信州松城一昨廿四日亥刻頃より大地震^ニ而城内仕住居向櫓并囲塀等夥數破損、家中屋敷、城下町、領分村々其外支配所潰家數多、死失人夥數、外^ニ村方^ニ而出火も有之、其上山中筋山拔崩、犀川^江押埋水湛追々充滿いたし、勿論流水一切無之、北国往還丹波島宿舟渡場干上り相成、此上溢水押出方^ニより、如何様之変地も難計奉存候、且以今相震申、委細之義者追^而可申上候得共、先此段御届申上候、以上

三月廿六日

御名家来

津田^②転

私在所信州松本一昨廿四日夜四ツ時頃より地震強、翌廿五日^ハ為差義も無之間遠^ニ相成候得共、以今相止不申、城内無別条、町屋敷其外所々在町破損御座候、遠在之義者、未相分兼申候、先此段御届け申上候、委細之義者追^而可申上候、以上

三月廿六日

松平丹波守

私領分信州高井郡之内、一昨廿四日亥刻頃より地震強、陳屋并家中居宅・長屋向破損數ヶ所、村々百姓家潰、其外田畑地割數ヶ所^ハ砂泥吹出シ、領地不殘押入、以今折々相震申候、於領分人馬怪我人等ハ無御座候、尤善光寺参詣亦者出稼等^ニ罷越候之者之内、死失人も有之哉^ニ相聞候得共、未取調不行届候、委細

之義者猶追^而可申上候、先此段申上候、以上

堀長門守家来

三月廿六日

須藤平馬

松平伊賀守領分、信州上田去月廿四日亥刻頃より地震^ニ而、更級郡之内稻荷山村々人家等^{フルヘ}寄潰、右潰家^ハ出火、一村荒増焼失仕、人馬繼立出来兼、其外小県郡之内、潰家并損所多人馬死亡有之、同廿五日^ニ至候得共、折々相震候旨在所役人共^ハ申越候、委細之義者追^而可申上候得共、右稲荷山宿場之義^ニも候間、伊賀守在大坂中^ニ付、先此段御届申上候、以上

松平伊賀守家来

四月朔日

大島群之丞

私在所信州飯山、去月廿四日亥刻頃^ハ地震仕、城内仕住居向櫓門并囲塀等夥數破損、家中屋敷城下町々潰家夥數^{アマタ}、死失怪我人等夥數、右^ニ付出火も有之、所々焼失仕候以今折々相震申候様、在所役人共^ハ申越、委細之義者追^而可申上候得共、先此段申上候、以上

四月朔日

本多豊後守

高田 私在所越後国高田、去月廿四日亥刻頃より大地震^ニ而城内仕住居向門櫓囲屏破損、家中屋敷城下町、領分村々潰家破損有之、北陸道往還筋所々欠崩等御座候旨、在所^ハ申越候、猶委細之義者、追^而可申上候、以上

四月四日

榊原式部大輔

信濃^ニ者よき哥よみか有と見へ

私在所信州松代、去月廿四日亥刻頃より大地震之儀、先達^而御届申上候通り御

座候処、其後今以相止兼、昼夜何ヶ度と申義無之折々相震、同廿九日朝・晦日
両日三度強震有之、手遠之村々相分兼候得共、城下町^二者猶又潰家等も有之、
近辺之山上^二巖石夥敷崩落、兼^而申上候通、犀川上手^二堪留候場所之義者、更
級郡之内安庭村山平林村之辺^二高山平兩端^二拔崩壱か所ハ三十丁、壱ヶ所者五
十丁程之間、川中^江押入其辺押埋候村方も有之候所、多分巖石之義付、迎も水
勢^二押切兼候様子^二依、次第^二堪平村より凡七八丈^二も可及、就夫数ヶ所水中^二
相成候湖水之体^二御座候、勿論種々手当申付候得共、人力^二者如何御届キ兼可
申哉、且又川中島平之者共者、右堪水何方^江一時^二押出可申哉難計と、心配仕
山手^江立退罷在丹波島継場等も同様之義^二人馬繼立等も出来兼申候間、精々手
当申付候、先此段御届申上候、委細之義者追^而可申上候、以上

御名家来

四月朔日

津田 転

私在所信州松代、当十三日先^二御届申上候通、居城際迄水逼付候次第者、犀川
押出口小松原村^二下続土堤乗越、夫^二川中島一円水押来、千曲川水上、城下^二
一里程隔り横田村^二辺より下続、惣^而突入候、水勢甚強、下筋よりも追々堪成夾
溢水^二相成次第^二逆流致シ、城内地続陸よりも水丈高く相成候処、去ル文政年
中御間置申上築立候水除土堤^二相防候処、及大破候得共、嚴重急難除申付其
内致水減候、危相凌城下町続^江も上下^二差込候程之義付、流末之義者川東西并
中野平迄致充滿成、湖水^二相見候処、次第^二及減水候付、早速見分差出候得共、
大小橋々多分流失、其上引候^而も地窪之處、水満道或押堀等^二、通路難相成場
所有之、水之見積りも出来兼候得共、岩倉山堪場破方之義者、段々水嵩相増、
深サ二十丈^二も及、少々宛乗^二隨ひ、岩倉山麓之方^江追々欠崩候て、水筋相付大
水乗初卜一時^二巖石押崩候由^二、岩倉山麓之方^江も多分欠込数多湛満も、大水

川中島^江押出候、兼て而右之為防、此度勦築立候、小市村舟場下続兩側岸之土
堤石垣之義ハ、川中島川東川北御領私領之村々難除之義^二付、領内之人力を相
尽、近領水冠^二も可相成村々^二も多人数差出、出精普請仕候義^二御座候処、
此度広大之水勢^二者万分之一^二之防^二も不相成、一時^二押流、兼而御届申上候犀川筋
押埋候場三ヶ所之内、小市村渡之船場北之方者真神山拔崩之義者、高サ式十間
程・南北八十間程・東西五十間程川式^江押出し、残幅僅七間程^二相成候、其俣
差置候而者、聊水^二も切込候義付、可成丈堀口申付候得共、中々人力^二不及^二
無之、此度激水^二急^二押流、数百人^二働候程之大石を、川下或者川中島と村
内耕地等押出、小市村突出シ、島者水丈六丈余^二及候次第、川中島村々之内^二
も、就中四ッ谷村之義者軒別八十軒之内六七間相残悉致流失、跡一円^二川原^二
相成、其他村々地震^二倒潰シ家居不残押流、其上山中筋水冠之村々流失之家
居水面^二浮居候付、為繋留置候処、湛満之水一時^二押払候^二付、何れも綱切、其
外山中筋兩岸之岸等多分欠崩候^二付、大木等も一同^二流出シ水押下居家^江突懸是
か為^二却^而押倒致流失候も夥敷、流死八人程、流家六百軒程、其余石砂泥水入
数多有之、川下村々之内、高井郡小沼村等者昨十六日^二相成漸々住居向水引候
得共、地震之耕地者猶壱丈程も水溜り居候次第^二、損地等之義者、中々凡見
極も不行届、丹波島宿辺迄千曲川・犀川落合之辺者一円乱瀬相成、丹波島・川
田・福島^二之方も前条之仕合^二、人馬繼立出来兼候次第、且又村方米穀之義ハ、
山手村々^江相移候様申付置候得共、川辺村々之外ハ順之水差上候得共、流失者
致間敷と心得棚等板^二上置候、穀物居家一同流失致候も不少右村々救方之義
者処々^江役人共差出、喰物・炊出并小屋掛手充等専申付、尤前条之通、大石土
砂押出候付、川中島用水三堰共水門場口跡形も無之押埋候^二付、吞水一切無之、
救方食物・炊出之義者地所^二式三十丁遠方^二水相運ひ候次第、其村々人別之義
ハ、地震^二居家倒潰候者迄も、急難除普請者申渡相待ず、日々出精築立候大

土堤一時ニ水溢参り破壊いたし、居家流失水冠等ニ相成、一統途方ニ暮為致候付、日用之吞水眼前之苗代水引方堰普請早速行届申間敷、誠ニ以差支人心不穩甚不安心奉存候、専手充方申付置候得共、兼而先々御届申上候大地震ニ而、城内始家中屋敷・城下町・領分村々潰家数多、死失人夥敷田畑通路等迄地裂床違・山々拔崩等之大変災付相続、此度も大水患、且先月廿四日以来、今以昼夜震止不申候、何歟氣支敷次第甚以心痛仕候、猶委細之義者、追而取調可申上候得共、再先御届申上候、以上

四月十七日

御名家来

私在所、信州松城去月廿四日夜大地震以来之次第、追々先御届申上候処、城下谷戊亥之方ニ当り、六七里程隔候、山中水内郡伊折村・梅木村・念仏寺村・上曾山村・地京原村・和佐尾村・椿嶺村・日影村・鬼無里村等江亘り候、大姥山・虫倉嶽と申高山、同夜震動拔崩之始末、近頃漸々通路も出来見分為仕候処、右九ヶ村之義者別而大災ニ御坐候処、其内ニ而伊折村・和佐尾村・梅木村・地京原村・念仏寺村、其五ヶ村者右山麓間近にて、念仏寺之内平沢組・臥雲組、梅木村之内城之越組・親沢組・地京原之内藤沢組・横造組、伊折村之内大田組・高福寺組・横内組・荒木組、和佐尾村之内栗本組、都合十一ヶ組之内、民家七十軒程、人別百九拾九人・馬三十疋無跡形も土中江押埋、右組々多分之亡所ニ相成候、且又右村々近村之内ニも、黒沼村之義者、家数四十四軒、人別貳百三十五人内、潰家五軒相殘三十九軒人別六十人余・馬六疋、并山中田中村之義ハ、家数三十九軒、人別四十三人、是又跡形もなく土中ニ埋、亡所ニ相成候程之儀付、間近村々変地、潰家死人殊之外夥敷御座候、右ニ候得共、未取調行届不申候前条之村々等ハ、里地と違村立耕地も山路相隔、高目不似合地広ニ而、物毎

手遠之上、惣而平常も巖石疊重辺を一步通、同様之嶮路御坐候処、此度之大災ニ而元之通、造形致滅却候故、当分巨細之見分者、行届申間敷、如何ニも歎ケ敷心痛之次第ニ付、最早災害之不甚之村方江相纏、救方夫々手当申付候得共、是迄も追々御届申上候得共、右大姥山虫倉嶽麓之村々変災、未曾有右之次第もの、就中甚敷ニ付、猶又此段、先御届申上候、以上

四月廿三日

御名家来

芭芭城に楯籠りたる水敵も君か威勢に落る越後路
水敵も落たる跡の穩に川中島ハ早乙女の声

〔注解〕(1) 小林唯蔵。田野口村(長野県長野市信更町)在住。(2) 山平林村。長野市信更町。(3) 松代藩代官。年貢収納はじめ村方諸事を担当する。(4) 蹴鞠をする場所。小林家は蹴鞠を嗜んでいたことが他の資料からもうかがえる(国文学研究資料館蔵小林家文書)。(5) 「ブランド薬師」の名で知られる長野市真光寺の八幡神社のこと。呼び名の由来は定かではないが、断崖絶壁に建てられたお堂が、風の吹く度にブラブラと揺れるためとも言われる。(6) 郡奉行、御勝手元メ兼帯。(7) 標高七六四メートル。長野市信更町山平林に位置する。善光寺地震により崩落をおこし孫瀬・岩倉の二集落をまきこみ、二十日間にわたって犀川を堰き止めた。(8) 長野市信更町三水。岩倉山崩落による犀川堰き止め箇所の上流にあたる。(9) 長野市信州新町。(10) 同前。(11) 同前。(12) 同前。(13) 同前。(14) 同前。(15) 長野市大岡甲。(16) 長野市大岡丙。(17) 同前。(18) 長野県東筑摩郡生坂村。(8) から(18)にかけての地名は、犀川上流にむかう順に記されている。(19) 長野市信更町。本資料作者の小林唯蔵居村。(20) 長野市信更町。田野口村の北東に位置する。(21) 長野市篠ノ井二ツ柳周辺。(22) 長野市安茂里。(23) 真上山(馬上山)。

長野市安茂里。(24) 山平林村。長野市信更町。(25) 長野市篠ノ井。(26) 上田藩主松平忠優。稲荷山(長野県千曲市)、塩崎・岡田(長野市篠ノ井)、今里・今井・戸部・上水鉋(長野市川中島町)、中水鉋村(長野市稲里町)の「川中島八ヶ村」と呼ばれる範囲を飛び地として領知していた。(27) 松代藩八代藩主真田幸貫。(28) 花之丸御殿の南に位置する。(29) 長野県埴科郡坂城町。(30) 長野市信更町。岩倉山より西に位置する。(31) 千曲市屋代。北国街道と、その迂回路である松代道(北国脇往還)との分岐点に位置する。(32) 松代藩御勘定役。(33) 松代藩御勘定役。(34) 同前。(35) 同前。(36) 同前。(37) 松代藩の行政区画。更級郡・水内郡の西部山間地をさし、全領の三割、三万石を占めた。(38) 松代藩郡奉行。(39) (6) 参照。(40) 長野市松代町にある真田家菩提寺。(41) 妻女山(さいじょさん。長野市松代町岩野)と推定される。(42) 妻女山のうち、招魂社が建つあたりを指すとされる。(43) 善光寺御開帳。(44) 稲荷山宿。千曲市。善光寺街道の宿場町。(45) 長野市信州新町水内、犀川にかかる橋。古くから名勝として知られる。(46) 長野市鬼無里。(47) 松代藩越石御代官、御勘定所元メ兼帯。(48) 松代藩代官の僚属。(49) 長野市中条日下野念仏寺。(50) 犀川の渡し場。丹波島の渡しから一キロメートルほど下流に位置する。(51) 長野市丹波島。善光寺から南に約五キロメートルの場所に位置し、宿場と渡場があった。(52) 長野県須坂市。千曲川を挟んで長野市の東に位置する。(53) 長野市若穂。(54) 長野市川中島町四ツ屋。(55) 長野市川中島町原。(56) 長野市真島町。(57) 長野市若穂。(58) 長野市小島田町。(59) 長野市篠ノ井山布施。(60) 長野市篠ノ井布施高田。(61) 長野市七二会。(62) 長野市高田。(63) 松代藩御番医。(64) 長野市栗田。(65) 長野市信州新町上条に位置する。(66) 同前。(67) 同前。(68) 長野市信更町。(69) 長野市信更町。(70) 長野市篠ノ井岡田。(71) 長野市篠ノ井塩崎に位置する。(72) 同前。(73) 同前。(74) 千曲市大字稲荷山荒町に位置する。(75) 長野市大岡乙に位置する。(76) 長野市大岡中牧。(77) 長野市信州新町牧田中。(78) 長野市松代町松代伊勢町に位置する。(79) 長野市中条専納。(80) 長野県飯山市。善光寺から三〇キロメートルほど北東に位置する。(81) 千曲

市桑原に位置する。(82) 千曲市桑原。(83) 武水別神社。千曲市八幡に位置する式内社。(84) 長野県松本市。善光寺から五〇キロメートルほど南南西に位置する。(85) 長野県諏訪市。善光寺から七〇キロメートルほど南に位置する。(86) 三条地震。文化十一年(一八二八)発生。(87) 天保元年(一八三〇)発生。マグニチュード六・五。(88) 千曲市杭瀬下。(89) 千曲市新田。(90) 長野市稲里町中水鉋。(91) 長野市川中島町御厨周辺。(92) 長野市川中島町今里。(93) 長野県上田市。(94) 上田市中野。(95) 長野市中条御山里。(96) 千曲市八幡。(97) 幕府老中阿部正弘。(98) つきや。穀物を精製する小屋。(99) 長野市富田荒安。(100) 千曲市八幡。(101) 封回状(要務の重職および関係長官などへ、武士の罪の責罰処分などを報告する場合の極秘の封書状)をもじったもの。(102) 長野市権堂町。水茶屋と呼ばれた遊女屋がならぶ一大花街として知られた。(103) 長野県筑摩郡麻績村。(104) 長野市篠ノ井塩崎。(105) 白石城。(106) 新潟県上越市。(107) 長野市吉田。市街地北東部に位置する。(108) 長野市稲田。吉田の北に位置する。(109) 長野市浅川西条。稲田の北に位置する。(110) 新町宿。長野市稲田。(111) 長野市徳間。稲田と浅川西条の間に位置する。(112) 長野市真光寺。吉田から三キロメートルほど北西に位置する山間地。(113) 神代宿(長野市豊野町豊野)のことか。(114) 長野県上水内郡飯綱町牟礼。北国街道沿いの宿場町で、新町宿から八キロメートルほど北に位置する。(115) 長野県上水内郡信濃町古間。(116) 同前。牟礼宿から六キロメートルほど北に位置する宿場町。(117) 長野市南長野。善光寺参道沿い。(118) 長野市鶴賀問御所町。善光寺参道沿い。(119) 長野市中御所。市街地南西部に位置する。(120) 長野市若里荒木。善光寺から三キロメートルほど南に位置する。(121) 長野市街地東部。善光寺から三キロメートルほど東に位置する。(122) 長野市風間。善光寺から四キロメートルほど南東に位置する。(123) 長野市松岡。風間の南に位置する。(124) 長野市高田。善光寺から三キロメートルほど南東に位置する。(125) 長野県上水内郡信濃町柏原。北国街道沿いの宿場町で、前出古間から二キロメートルほど北西に位置する。(126) 長野県上高井郡小布施町。千曲川を挟んで長野市の北東。須坂市の北に位置する。(127) 長野

県北佐久郡軽井沢町追分。中山道と北国街道の分岐宿として栄えた。(128) 御嶽山か。(129) 松代藩御留守居役。(130) 長野市篠ノ井横田。松代城から四キロメートルほど西に位置する。(131) 長野県中野市。長野市の北東に位置する。(132) 川敷。川が増水した時、その流域となる敷地。(133) 中野市三ツ和。現在の千曲川の流路から三キロメートルほど東に位置する。(134) 長野市若穂川田。北国脇往還沿いの宿場町。(135) 須坂市福島。大笹街道と北国脇往還の分岐点に位置する宿場町。(136) 長野市中条日下野梅木。(137) 長野市戸隠祖山。(138) 長野市中条御山里。(139) 長野県上水内郡小川村稲丘和佐尾。(140) 上水内郡小川村稲丘椿峰。(141) 長野市鬼無里日影。(142) おおばやま。長野市信州新町の長者山と左右集落をはさみ南に対峙し、大町市八坂との境に位置する。標高一〇〇六メートル。(143) 虫倉山。長野市中条御山里に位置する。標高一三七八メートル。(144) 長野市七二会倉並。(145) 長野市山田中田中か。

〔解説〕

本史料「弘化四丁未年三月廿四日夜四時大地震ニ付諸雑談聞書覚」(国文学研究資料館蔵真田家文書あ三四五〇)は、信濃国更級郡田野口村小林唯蔵の筆になるものである。小林唯蔵の体験談や、聞き書きなどから成る。興味深いのは、地震後の世情を皮肉を交えて記していることである。地震被害のほかに、当時の社会情勢が読み取れるのである。

表紙裏には、御領分(松代藩領)における被害状況について、四月一日調べのもの、そして四月三日調べのものが載せられており、被害の集約がなされている。

本文は、地震前の予兆を天文学などの学問的な知識から書き始められている。また、地震の状況を事細かに記す。

地震被害については、前掲史料Ⅱの『弘化四丁未三月廿四日夜 正四時大地震大変覚』に詳しく記されているせい、ここでは省略されている。小林唯蔵の居村である田野口村の被害については、潰家一五軒、半潰一九軒、その他の建物被害は三〇軒ほどであった。けが人は多く発生し、死亡したのは一人のみであった。

本史料のなかで特筆すべきは、甚大の被害を蒙った虚空蔵山の崩落箇所に対する松代藩役人たちの動向が書かれていることである。

また、各村の被害状況が記されており、小林唯蔵の身内人の様子についての記載もある。

巻末には、松代藩をはじめとする各藩が幕府に提出した被害届が載せられている。

全体として、善光寺地震の被害状況を、虚空蔵山の崩壊にともなう被害、犀川堰き止めによる水害の様子、これら被害に対応する松代藩の動向、当時の社会情勢を揶揄した文芸、各藩が幕府に届け出た公的な届出が載せられており、善光寺地震を多角的にとらえられる好史料といえる。

(宮澤・原田)

13 | 1 安政六末年三月 吉城郡小鷹利郷角川村・中沢上村・保木村往還損所并取繕等普請出来方 龔繪図

御役所⁽⁸⁾

(奧書)

右者、吉城郡小鷹利郷角川村⁽¹⁾・中沢上村⁽²⁾・保木村往還損所、今般道附替并取繕等普請出来方、間数⁽⁵⁾、巨細取調、繪圖奉仕上候、以上、

安政六末年三月

角川村

徳兵衛（黒印）

新名村^⑥

久次(黒印)

同
村

主名

弥右衛門（黒印）

二本木村^⑦

白主

仲右衛門（黒印）

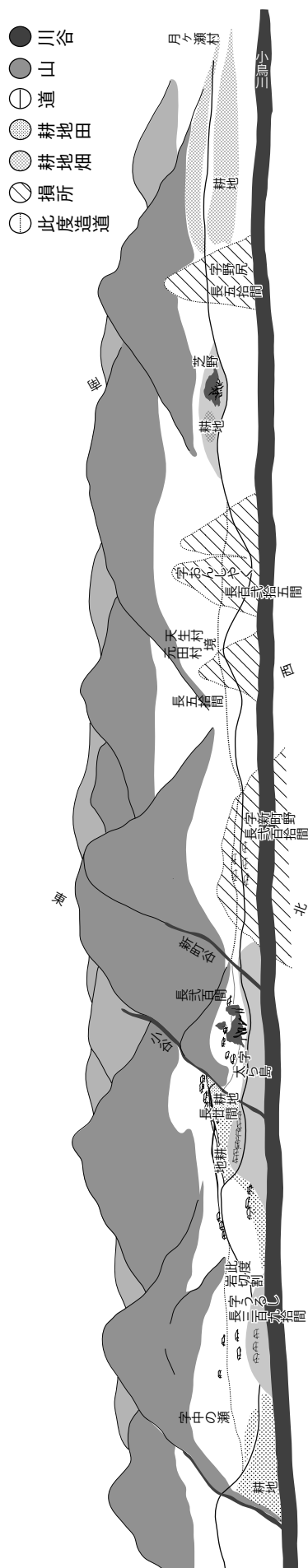
高山

〔読み下し〕

右は、吉城郡小鷹利郷角川村・中沢上村・保木村往還の損所、今般道の附替え並びに取繕い等、普請出来方、間数、巨細取調べ亀絵図を仕上げ奉り候、以上

〔注解〕（１）岐阜県飛騨市（旧吉城郡古川町西部および河合村・宮川村の宮川以西の地域）、中世・近世の郷名。（２）飛騨市河合町角川（つのがわ）。（３）飛騨市河合町中沢上（なかそうれ）。（４）岐阜県飛騨市河合町保木。（５）間（けん）の数、六尺（約一八〇センチメートル）を一間とし、それを単位として測った長さ。（６）飛騨市河合町新名（しんみょう）。（７）岐阜県高山市清見町二本木。（８）江戸幕府が飛騨国を直轄領として支配するために高山（高山市八軒町）に設置した代官所、飛騨郡代役所。

13—2 安政六末年三月 吉城郡小鷹利郷元田村・天生村・月ヶ瀬村往還損所并取繕等普請出来方 鹿絵図



(奥書)

右者、吉城郡小鷹利郷元田村・天生村・月ヶ瀬村往還損所、今般道附替并取繕等普請出来方、間数、巨細取調 鹿絵図面奉仕上候、以上、

安政六末年三月

角川村

徳兵衛 (黒印)

新名村

久次 (黒印)

同村

名主

弥右衛門 (黒印)

二本木村

名主

仲右衛門 (黒印)

高山

御役所

〔読み下し〕

右は、吉城郡小鷹利郷元田村・天生村・月ヶ瀬村往還の損所、今般道の附替え、並びに取繕い等、普請出来方、間数、巨細取調べ 鹿絵図面を仕上げ奉り候、以上、

〔注解〕(1) 飛騨市河合町元田 (げんだ)。(2) 飛騨市河合町天生 (あもう)。(3) 飛騨市河合町月ヶ瀬。

〔解説〕13—1、2は、飛越地震の発生から約一年後の安政六年(一八五九)三月、飛騨国吉城郡の小鳥川筋六ヶ村(角川・中沢上・保木・元田・天生・月ヶ瀬)の往還の姿を描いた絵図二点のトレースおよびそれぞれの奥書である。飛越地震は、安政五年二月二十六日の未明(一八五八年四月九日午前二時頃)に現在の富山・岐阜県境付近、跡津川断層の活動により発生した直下型地震であるとされる。各奥書の記載により、角川村の徳兵衛、新名村の久次、同

村名主の弥右衛門、二本木村名主の仲右衛門が高山御役所へ提出した絵図であることがわかる。13―1は角川村・中沢上村・保木村、13―2は元田村・天生村・月ヶ瀬村の往還の損所における道の付替・取締などの普請を終えた状況や間数を調べて描いた亀絵図であることがわかる。

絵図を見ると、被害のあった道と新たに付け替えた道（「此度造道」）の所在について字名・距離が明記され、各道の位置関係が丁寧に描かれている。新たに付け替えた道を見ると、両絵図ともに、浸水被害のあった道（川沿いの低地の道）はすべて避けて以前よりも高台に道が造られていることがわかる。また、山崩れのおきた「損所」においても、震災以前よりも高台に道を造っているところが多いことがわかる。13―1の中沢上村では、長さ六〇間にわたり石積みによる腹付工事を行い、その上に道を造っている。家屋の描写は、基本的には実線で描き、屋根は薄墨色、壁は茶色で塗られる。いっぽう、山崩れや浸水のあった場所に位置する家屋は破線で描かれていることから、破線で描かれる家屋は、被災した家屋であると考えられる。

（小野・片桐）

13―3 安政六末年三月 乍恐以書付奉申上候

乍恐以書付奉申上候

右者、吉城郡小鷹利郷之内小鳥川筋角川村外五ヶ村往還損所道造之儀、村々に為手傳^①自普請^②を以相仕立候様、私共江世話方被 仰付奉畏、則当月十五日より廿三日迄二出精皆出来仕候二付、出来形間合亀絵図面、并村々出勤人足帳共、別紙之通奉書上候処、相違無御座候、以上、

安政六末年三月

世話方

角川村 徳兵衛（黒印）

同

新名村 久次（黒印）

同

同村名主 弥右衛門（黒印）

同

二本木村

名主 仲右衛門（黒印）

高山

御役所

〔読み下し〕

恐れながら書付を以て申し上げ奉り候、

右は、吉城郡小鷹利郷の内、小鳥川筋角川村の外五ヶ村往還損所、道造りの儀、村々に手伝いとして自普請を以て相仕立候様、私共へ世話方仰せ付けられ畏み奉り、則ち当月十五日より廿三日迄に精を出し皆出来仕り候につき、出来形間合亀絵図面、并に村々出勤人足帳共、別紙の通り書き上げ奉り候ところ、相違御座なく候、以上、

〔注解〕（１）江戸時代、幕府が命じて大規模な道・川・橋の普請などの土木工事を分担させること。（２）村々が費用を出して土木工事を行うこと。（３）団体や会合などを組織し運営する際に面倒をみる人、世話役。

〔解説〕13―3は、13―1・2の両絵図とともに高山役所へ提出された書付である。記載によると、角川村の徳兵衛、新名村の久次、同村名主の弥右衛門、

二本木村名主の仲右衛門の四人は、「角川村外五ヶ村往還損所」の道造り普請のために「世話方」として仰せ付けられたことがわかる。そして、同年三月十五日から二十三日までの期間で普請を完了したことがわかる。

(片桐)

一、人足 拾六人

上ヶ嶋村^④ 出人足

一、人足 六拾四人

元田村 出人足

13―4 安政六末年三月 小鳥谷筋往還損所道造人足書上帳

一、人足 貳拾九人

天生村 出人足

(堅帳表紙ウワ書)

一、人足 貳拾五人

月ヶ瀬村 出人足

「 安政六末年三月

小鳥谷筋往還損所道造人足書上帳」

一、人足 百拾貳人

保村^⑤ 出人足

覚

一、人足 百五人

角川村 出人足

一、人足 三拾六人

船原村^⑥ 出人足

一、人足 拾五人

有家村^① 出人足

一、人足 貳拾五人

大谷村^⑦ 出人足

一、人足 三拾七人

中沢上村 出人足

一、人足 貳拾八人

江黒村^⑧ 出人足

一、人足 貳拾貳人

保木村 出人足

一、人足 四拾人

池本村^⑨ 出人足

一、人足 拾六人

有家林村^② 出人足

一、人足 七拾貳人

二本木村組 出人足

一、人足 三拾壹人

羽根村^③ 出人足

合人足 七百三人

一、人足 三拾人

新名村 出人足

右者、村々より出人足書面之通ニ御座候、以上、

御普請世話方

角川村

徳兵衛（黒印）

同断

新名村

久次（黒印）

同断

同村

名主

弥右衛門（黒印）

同断

二本木村

名主

仲右衛門（黒印）

高山

御役所

- 〔注解〕（１）岐阜県飛騨市河合町有家（うけ）。（２）飛騨市河合町保木林、（３）飛騨市河合町羽根。（４）飛騨市河合町上ヶ島（じょうがしま）。（５）飛騨市河合町保。（６）飛騨市河合町舟原。（７）岐阜県高山市清見町大谷。（８）高山市清見町江黒。（９）高山市清見町池本。

〔解説〕 13―4は、13―1・2の両絵図および13―3の書付とともに高山役所へ提出された帳面である。表紙のウツ書に「小鳥川筋往還損所道人足書上帳」とあり、小鳥川筋往還の損所の道造りに動員された人足を書き上げている。記載によると、普請には一七ヶ村七〇三人（角川村一〇五人、有家村一五人、中沢上村三七人、保木村二人、有家林村一人、羽根村三人、新名村三〇人、

上ヶ嶋村一人、元田村六人、天生村二十九人、月ヶ瀬村二十五人、保村一二人、船原村三十六人、大谷村二十五人、江黒村二十八人、池本村四〇人、二本木村七二人）の人足を動員したことがわかる。人足を出した一七ヶ村は、13―1・2の両絵図に描かれる六ヶ村を含む小鳥川沿いの村々である。小鳥川が宮川へ合流する下流域の角川村から上流の二本木村まで順に書き上げられている。「御普請世話方」は、一七ヶ村のうち最下流部の角川村と最上流部の二本木村から各一名と、13―1の三ヶ村と13―2の三ヶ村との間にある新名村から二名が命じられており、絵図に描かれる被災した村の者は任じられなかったことがわかる。

13―1・4は、岐阜県歴史資料館所蔵の「飛騨郡代高山陣屋文書」に「吉城郡小鷹利郷小鳥川筋往還損所道造自普請一件」として所収される史料である。四点は、高山役所への上申書類として一括して紙袋に入る。袋のオモテには「□□郡小鷹利郷／□「鳥」川通／□「地」震災道切開普請出来形絵図 式枚／外、出来形届書 沓通／道造人足書上帳 沓冊」と記される。

（片桐）

地震と遺跡——新潟県——

齋藤瑞穂

1 新潟県内の発掘調査で検出される地震痕跡

阪神・淡路大震災は、考古学が地震に対する意識・関心を高める直接的な契機となった。新潟県域における地震痕跡も、それ以来集成の度に数を加え（春日ほか一九九六、高濱ほか一九九八、卜部・高濱一九九八、尾崎二〇〇四、加藤二〇一三、加藤ほか二〇一四など）、現在は七五例が知られる（第1表）。

発掘調査で最も多く検出されるのは、噴砂である（写真1）。噴砂は、地表面にマウンド状の高まり（噴砂丘）を形成するが（写真2）、流れるか、あるいは片づけられてしまうため、この部分まで残ることはほとんどない。村上市三面アチャ平遺跡や小千谷市三仏生遺跡など山手の遺跡では、礫の噴出がみられた（写真3）。

噴砂や噴礫のほか、流動変形（写真4）や地割れ（写真5）や隆起・陥没（写真6）の痕跡がある。燕市・長岡市五千石遺跡では、地震発生前に構築された遺構が流動し、ズレが生じた（写真7～9）。

最近では、津波堆積物の調査も行われている。越後側、佐渡側双方のコアで、イベントの年代がよく対応しているという（卜部二〇一三bなど）。

2 新潟県の歴史地震痕跡概況

〔旧石器時代〕小千谷市真人町真人原遺跡の液状化が、発掘調査で確認されている最古の地震痕跡である。始良Tn火山灰（AT）降灰面の下位にみられることから、三万年（中川ほか二〇一三）より前に位置づけられる。また、発掘調査地点直下の段丘崖では、それと同時期の噴砂脈と低角の逆断層とが検出された（真人断層）。変位量から、マグニチュード7クラスの地震が発生したと推測されている（高濱ほか二〇〇二）。

近傍の真人郵便局で造成工事が行われた際にも、液状化と断層の活動とが確認されている。断層活動は真人原遺跡で人類活動が営まれた頃（浅間—草津黄色軽石（As—YPk）下位）と期を同じくする可能性があり（高濱ほか前掲）、最近の年代観でいうと、これは一万五八〇〇年より前にあたる（早川二〇〇九）。

〔縄文時代〕新潟平野の北部に痕跡が集中する^②。草創期や早期の例は未検出だが、村上市アチャ平遺跡や同市天神岡谷地遺跡で前期初頭の噴砂・噴礫が、五頭山地西麓の阿賀野市保田ツベタ遺跡や同市草水野中遺跡で中・後期の地震痕跡が、それぞれ確認されている。五頭山地西麓では、液状化が五〇〇〇年前（中期）、四〇〇〇年前（中期末）、三六〇〇年前（後期中葉）に起こっており、

新発田―小出構造線（月岡断層）の活動に因ると考えられている（高濱ほか一九九七）。

集落の消長と液状化の時期とは調和的である。野中遺跡における四〇〇〇年前の液状化痕跡は、縄文時代中期後葉の大木9式の包含層を貫き、同遺跡での営みも末葉の大木10式古段階で潰える^③。他方、近傍のツベタ遺跡ではこの頃から人々の活動がみられることから、災害に伴う集落移動が想定されている（渡辺一九九七）。

櫛形山脈と北蒲原砂丘との間に形成された阿賀北の遺跡群には、後期中頃から晩期にかけて頻発した大規模地震の痕跡がみとめられる。その始まりは胎内市大出江添遺跡の廃絶後に生じた地震で、二・五メートルの沈降を引き起こしており、マグニチュード7クラスの直下地震が推測されている（高濱二〇〇五、二〇〇六）。この地震と、先に挙げた五頭山地における後期中葉（三六〇〇年前）の液状化との関係性は明らかでないが、全く別個の地震か、あるいは新発田―小出構造線の複数のセグメントが連動しているのか、関係の有無は議論されてよい。

続く地震は「昼塚川」・「古道下川」を出現・消滅させるなど、この地の環境を度々変え、晩期前葉の大洞B2式頃にも大規模な地震が起こる。小松原ほか（二〇〇七）によると、地震動をともなう紀元前一五二〇―九九〇年の断層活動が、新発田市金山トレンチで検出されていることから、これらの地震のうち一回が櫛形山脈断層帯の活動に由来する可能性がある。

晩期の中頃に一旦静穏期を迎えるが、弥生時代直前になると再び地震活動期に入る。新発田市金塚青田遺跡の調査は、鳥屋2a・2b式期に五回の地震が発生したことを明らかにした（写真10）。

〔弥生・古墳時代〕新潟市江南区西郷遺跡に弥生時代の、燕市・長岡市五石

遺跡に古墳時代中期の液状化がみられる。五石遺跡では、古墳時代前期の集落が洪水によって絶えた後の中期に発生していて、地磁気年代測定で四三〇±二〇年という値が導出されている。前期に溝や柱穴を掘り込んだ場所が流動し、上下でズレが生じている（写真7～9）。遺跡の位置からみて、長岡平野西縁断層帯の活動が地震を発生させた可能性が高い。

最近、南魚沼市余川中道遺跡でも、古墳時代の地震痕跡が検出されている。

〔古代〕古代の地震痕跡は、新潟平野の各所で散見される。新潟市西区釈迦堂遺跡では地震二回分の噴砂脈がみだされ、その前後の層が八世紀末―九世紀後半に相当する点から、高濱ほか（一九九八）は一方を①貞観五年（八六三）の越中越後地震に、他方を②仁和三年（八八七）の地震にあてた。いまのところこの年代観が継承され、加藤（二〇一三）も①は越中越後地震に、②は「断言することは難しい」との但し書きを添えつつ、「仁和三年を当てることが最も適当と考えられる」とする。

新発田市青田遺跡でも、九世紀の地震が確認されている。胎内・加治両川間の低地帯は、この地震で地盤が沈降し、紫雲寺潟（塩津潟）へ転じる（卜部二〇一三a）。以上の古代の地震が文献に記録されたものに相当するかはともかく、九世紀が活動期であったことは、新潟県の発掘調査データからみても間違いないところであろう。

〔中世・近世〕中世では、阿賀野市月崎山口野中遺跡と上越市今泉用言寺遺跡で一三世紀の、新潟市南区小坂居付遺跡で一四世紀末―一五世紀中葉の噴砂が検出されている。阿賀野市百津境塚遺跡の例も、一四世紀の可能性が高い。

近世越後を襲った大規模地震は一〇件余知られる（宇佐美ほか二〇一三）。新発田市中曾根小船渡遺跡の噴砂は、一六五〇±一五〇年の値が地磁気年代測定で導出され、新発田城の石垣が崩壊した寛文九年（一六六九）の地震が候補

に挙がっている。

新潟市中央区近世新潟町跡でも複数回の液状化が確認された。層位からみて、一方は宝暦十二年（一七六二）の地震に^④、もうひとつは天保四年（一八三三）の庄内沖地震に相当するようである。庄内沖地震では津波が発生して新潟湊や新潟町などを襲い、その被害は新潟地震（一九六四年）より内陸にまで及んだ（矢田二〇一二）。発掘調査では未検出だが、最近、その痕跡が新潟市西蒲区うぶすめの崖面で確認されている。

県央方面では、三条市元町近世三条城跡などで文政十一年（一八二八）三条地震の噴砂がみられる（写真1）。一方、高田地震をはじめ、上越方面も大きな地震に見舞われているはずだが、地震痕跡自体があまりない。

3 分布の偏りとその背景

新潟県域で検出されている地震痕跡の多くは、液状化と関わる。そして、そのほとんどは新潟平野でみいだされ、高田平野では一例にとどまる。この偏りは、何に起因するのであろうか。

もちろん、高田平野は地震の空白域でない。中世では、上越市用言寺遺跡で一三世紀の液状化が確認され、近世には①寛文五年（一六六六）に寛文高田地震が、②寛延四年（一七五一、十月に改元して宝暦元年）に宝暦高田地震が、③弘化四年（一八四七）に善光寺地震が高田平野を襲っている。②の地震における高田城下町屋地域の家屋被害率は、全壊のみで七一パーセント、全半壊率は八五パーセントにも達した（矢田・ト部二〇一一）。発掘調査が少ないわけでもない。

〔段丘の発達〕高田平野は、東西両頸城丘陵の間に位置し、南側で妙高の山裾

に接する。沖積面の大部分を高田面が占め、構成する層は高田層と呼ばれる（高田平野団体研究グループ一九八一、鈴木二〇〇六）。高田城と城下町は、この面に形成される（戸根一九八六）。

平野を縦貫する関川がこの層を開析する。関川面が形成されるが、その分布は狭い。これらが段丘化する時期について、成案は得られていないが^⑤、遅くとも古代には高田面が完陸化し、中世頃から関川面の離水も進むという。

したがって、高田平野に液状化痕跡が乏しい理由として、段丘化による地下水位の低下を、まずは挙げることができる。すなわち、①砂地盤である（地下二～三メートルの浅い位置に砂層が存在する）、②N値が低い（砂がふんわりと溜まっていて締め固まっていない）、③緩い砂の層が地下水で満たされている、といった液状化の三条件に照らしあわせると（国土交通省北陸地方整備局・地盤工学会北陸支部二〇一二）、高田平野の大部分が条件③を欠く、というわけである。

なお、唯一例である用言寺遺跡は、高田面の縁辺に位置する。

〔厚い粘土層〕高田層は、高田礫層、下部高田層、上部高田層に区分される^⑥。このうち上部高田層の層厚は三〇メートル程で、粘土層やシルト層からなり、砂層や礫層を一部に挟む（長谷川二〇〇二）。

あくまで部分的ではあるものの、高田駅や高田公園の北側を通る地質断面図「高田東西」を縦覧すると、国道一八号上新バイパス付近に境に、東側の広い範囲では粘土層の堆積が確かに厚く、挟在している砂層は薄い^⑦（新潟県地盤図編集委員会（編）二〇〇二）。

このような条件下では、激しい震動が加わり、水圧が高まっても、大規模な液状化は発生しにくい。噴砂となって粘土層を引き裂くことができないため、水平方向の微弱な移動にとどまるからである（例えば、写真4）。層の堆積と

直交する噴砂脈に比べて、発見率も低下する。

〔液化化痕跡発見の可能性〕以上、大規模地震が発生する地域であるにも関わらず、高田平野で液化化痕跡が乏しい理由として、⑦段丘の発達と④厚い粘土層とが挙げられる。新潟平野であれば液化化するレベルであっても、高田平野では痕跡が残らない可能性は充分にあり得るのである。当然、液化化の「しやすさ」・「しにくさ」をわきまえず、ただ痕跡の存否のみをもって被災範囲を絞り込むことは適切でない。

ただし、高田平野においても、上新バイパス以西の関川・青田川流域では、砂層や砂礫層が卓越する。「関川沿い」の南北断面によれば、妙高山麓から河口までこの状況が続くようである。

関川が粘土層を削り、供給土砂が堆積するこの地帯ならば、用言寺遺跡のほかに、液化化が発生していておかしくない。

註

(1) 噴砂が圧倒的に多く、噴礫は珍しい。ただし、礫の上昇は他地域でも確認されており、新潟のみにみられるわけではない(成尾・小林一九九六、成尾二〇〇四など)。

(2) 信濃川中流域の縄文時代遺跡では、地すべりや土石流堆積物などが確認されている(笠井二〇一三)、それらが地震動によって発生したか、あるいは別の要因か、考古学だけでは判断が難しい。

(3) 三陸地方でも、大木9式前後に津波が発生しており(駒木野・相原二〇一四)、低地部の集落が一斉に潰えるほどの被害をもたらした(齋藤二〇一四)。日本海側と太平洋側との連動・連続ぶりは、縄文時代中期後・末葉頃についてもあてはまる可能性がある。

(4) 「新潟で土蔵上塗に亀裂を生」じている(宇佐美ほか二〇一三、一〇九頁)。

(5) 高田面の段丘化は、遺跡の分布から、弥生時代末期ないし古墳時代に始まると考えられてきたが(高田平野団体研究グループ一九八一、岡本一九九九)、近年、同面上で縄文時代の遺跡も確認されたことで、見直しが迫られている。

(6) 高田平野団体研究グループ(一九八一)では、最下部高田層、下部高田層、中部高田層、上部高田層の四層に区分されていた。

(7) 一例として、上越市大字東中島地内に建設が進められている(仮称)上越市新クリーンセンター用地の地質調査の結果を挙げておく。粘土層は表土下五〜八メートルほど堆積しており、「深度二〇メートル以浅において砂質土は粘性土中にレンズ状に挟在する程度である」(上越市二〇一三、一〇四頁)という。

引用文献

伊藤秀和「三条地震の考古学的痕跡について―加茂市釜淵遺跡の調査から―」『加茂郷土誌』第一六号、加茂郷土調査研究会、一九九三年、四二〜四九頁。宇佐美龍夫ほか『日本被害地震総覧五九九―二〇一二』東京大学出版会、二〇一三年。卜部厚志「古代の越後平野における地震活動」『古代の災害復興と考古学』高志書院、二〇一三年a、六七〜八〇頁。卜部厚志「新潟地域における堆積物調査による津波履歴の復元」『新潟大学災害・復興科学研究年報』第二号、新潟大学災害・復興科学研究所、二〇一三年b、八三〜八四頁。卜部厚志・高濱信行「新潟県内の活断層と液化化跡」『新潟の災害と防災―新潟大災害研創立二〇周年記念講演会資料―』新潟大学積雪地域災害研究センター、一九九八年、六五〜七三頁。岡本郁栄「新潟県の地形概観」『新潟県の考古学』高志書院、一九九九年、三〜一〇頁。尾崎高宏「新潟県の遺跡における地震・大規模災害痕跡について」『古代学研究』第一六五号、古代学研究会、二〇〇四年、四三〜五〇頁。笠井洋祐「遺跡からみた災害の痕跡―津南町・十日町市を中心として―」『大地の履歴から探る災害―大地と自然、そして人―予稿集』津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会、二〇一三年、六〜一五頁。春

日真実ほか「新潟県」『発掘された地震痕跡』埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会、一九九六年、二七三～二九〇頁。加藤 学「貞観五年越中・越後地震に関する一考察」『研究紀要』第七号、新潟県埋蔵文化財調査事業団、二〇一三年、一九～四〇頁。加藤 学ほか「新潟県における古地震の考古学からの研究アプローチ」『日本情報考古学会講演論文集』VOL・一二、日本情報考古学会、二〇一四年、四七～五〇頁。国土交通省北陸地方整備局・地盤工学会北陸支部（編）『新潟県内液状化しやすさマップ』二〇一二年。小林昌二「新潟県中越地震と貞観五年の越中越後地震記事」『新潟史学』第五三号、新潟史学会、二〇〇五年、七八～八〇頁。駒木野智寛・相原淳一「岩手県における古津波堆積層と遺跡」『岩手考古学』第二五号、岩手考古学会、二〇一四年、七～二六頁。小松原琢ほか「櫛形山脈断層帯の活動履歴調査」『活断層研究』第二七号、活断層研究会、二〇〇七年、一二一～一三八頁。齋藤瑞穂「三陸海岸で検出された津波イベント堆積物の年代と遺跡の消長—岩手県域を中心に—」『二〇一四年前近代歴史地震史料研究会講演要旨集』前近代歴史地震史料研究会、二〇一四年、七～一〇頁。上越市『平成二四年度生環委第二四〇一号（仮称）上越市新クリーンセンター施設整備事業に係る地質調査業務委託【新潟県上越市大字東中島地内】報告書』二〇一三年。鈴木郁夫「高田平野とその周辺」『日本の地形』第五卷—中部—、東京大学出版会、二〇〇六年、一二三～一二六頁。高田平野団体研究グループ「高田平野の第四系と形成史—新潟県の第四系・そのXXIV—」『研究紀要』第二五号、新潟大学教育学部高田分校、一九八一年、二〇九～二七二頁。高濱信行「昼塚・江添遺跡の地質解析」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書』XI、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団、二〇〇五年、一五七～一六〇頁。高濱信行「昼塚遺跡の地質解析」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書』XX、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団、二〇〇六年、六八～七一頁。高濱信行ほか「五頭山麓における液状化跡の発見とその意義（予報）」『地表変動と遺跡の成立・破壊の関連の研究—文部省科学研究費（No.〇六四五〇一〇）基盤研究（B）研究成果報告書—』新潟大学積雪地域災害研究センター、一九九七年、

三九～四四頁。高濱信行ほか「新潟県における歴史地震の液状化跡—その一—」『新潟大学積雪地域災害研究センター研究年報』第二〇号、新潟大学積雪地域災害研究センター、一九九八年、八一～一〇四頁。高濱信行ほか「三面川上流・朝日山地奥三面地域の第四期末期の遺跡、河成段丘とネオテクトニクス」『新潟大学積雪地域災害研究センター研究年報』第二二号、新潟大学積雪地域災害研究センター、二〇〇〇年、一～一六頁。高濱信行ほか「越後平野中部における古代・九世紀前後の液状化—新潟県における歴史地震の液状化跡、その二—」『新潟大学積雪地域災害研究センター研究年報』第二三号、新潟大学積雪地域災害研究センター、二〇〇一年、四五～五二頁。高濱信行ほか「真人原遺跡にみられる古地震痕」『真人原遺跡』Ⅲ、真人原遺跡発掘調査団、二〇〇二年、一二八～一三四頁。高濱信行ほか「新潟地域の地盤災害に関する研究の現状と展望」『新潟大学積雪地域災害研究センター研究年報』第二六号、新潟大学積雪地域災害研究センター、二〇〇四年、一～九頁。戸根与八郎「関川改修埋蔵文化財発掘調査報告書—高田城下鍋屋町遺跡—」新潟県教育委員会、一九八六年。中川 毅ほか「水月湖クロノロジーに基づいた、いくつかの広域テフラの精密な年代決定」『日本第四紀学会講演要旨集』第四三三号、日本第四紀学会、二〇一三年、一三二～一三三頁。成尾英仁「鹿児島県地震と遺跡」『古代学研究』第一六六号、古代学研究会、二〇〇四年、四五～五五頁。成尾英仁・小林哲夫「アカホヤ噴火時に発生した噴砂と噴礫」『日本地質学会第一〇四年学術大会講演要旨』日本地質学会、一九九七年、三九二頁。新潟県地盤図編集委員会（編）『新潟県地盤図』新潟県地質調査業協会、二〇〇二年。長谷川正「沖積平野の地質」『上越市史』資料編1—自然—、上越市史編さん委員会・上越市、二〇〇二年、五三～六一頁。早川由紀夫「浅間山の風景に書き込まれた歴史を読み解く」『群馬大学教育学部紀要自然科学編』第五八巻、群馬大学教育学部、二〇一〇年、六五～八一頁。早川由紀夫ほか「新潟焼山早川火砕流噴火の炭素14ウイグルマッチング年代」『地学雑誌』第一二〇巻第三号、東京地学協会、二〇一一年、五三六～五四六頁。矢田俊文「文献史料による一八三三年庄内沖地震の津波到達点の研究—新潟市内を中心に—」

『資料学研究』第九号、新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」、二〇一二年、一二～二二頁。矢田俊文・卜部厚志「一七五一年越後高田地震による被害分布と震源域の再検討」『資料学研究』第九号、新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」二〇一一年、一～二三頁。渡辺文男「新潟県安田町草水野中遺跡の発掘調査についての覚えがき」『地表変動と遺跡の成立・破壊の関連の研究―文部省科学研究費（No.〇六四五〇一〇）基盤研究（B）研究成果報告書―』新潟大学積雪地域災害研究センター、一九九七年、二九～三八頁。

発掘調査報告書は省略に従い、第1表に発行主体・年を記した。

〔付記〕小稿をまとめるにあたり、相田泰臣、安藤正美、池田 亨、卜部厚志、小野映介、勝山百合、加藤 学、加藤由美子、鴨井幸彦、鈴木 暁、高木公輔、土橋由理子、古澤妥史、保坂吉則、矢田俊文、山岸洋一、渡邊朋和の諸先生・諸氏、ならびに阿賀野市教育委員会、魚沼市教育委員会、株式会社興和、三条市市民部生涯学習課、上越市自治・市民環境部、長岡市教育委員会、新潟市文化財センター、新潟県埋蔵文化財調査事業団の諸機関に格別なる御高配をいただきました。末筆ではありますが、御芳名を明記して深甚なる謝意を表する次第です。

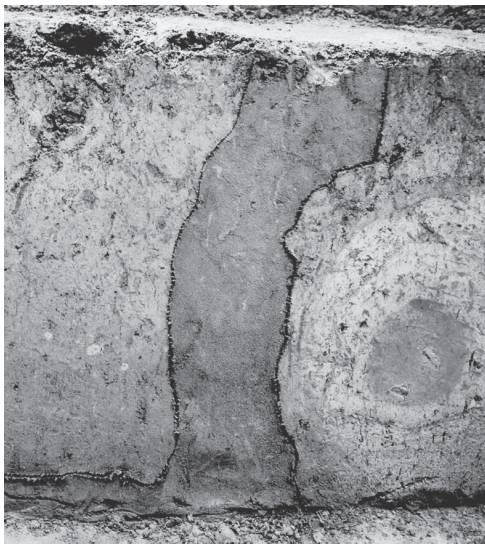


写真1 噴砂脈（近世三条城跡）



写真2 中越沖地震の噴砂



写真3 噴礫（三仏生遺跡）



写真4 流動変形（石船戸遺跡）



写真5 地割れ（吉津川遺跡）



写真6 隆起と陥没（石船戸遺跡）

1・5. 三条市提供、2. 保坂吉則氏撮影・提供、3. 新潟県埋蔵文化財調査事業団提供
4. 齋藤撮影、6. 阿賀野市教育委員会提供



写真7・8 柱穴の横ズレ（五千石遺跡）



9 溝の横ズレ（五千石遺跡）



10 柱穴から噴き出した噴砂（青田遺跡）



11 河川作用で生じた段差（谷地遺跡）



12 河川作用で生じた段差（覚屋遺跡）

7～9. 長岡市教育委員会提供、10・11. 新潟県埋蔵文化財調査事業団提供

12. 池田亨氏撮影・魚沼市教育委員会提供

第1表 新潟県の遺跡等で検出（推測）された地震痕跡（齋藤作成、2015年1月現在）

	遺跡名	痕跡の内容	時期	備考、時期決定の根拠	文献
1	佐渡市相川鹿伏 かまんどう	津波堆積物	—		加藤学氏教示
2	村上市三面 元屋敷	平面リングタイプの噴砂、引き込み、流動変形	縄文時代晩期末以降	層位	高濱ほか(1998) 高濱ほか(2000)
3	三面 アチャ平	噴礫、引き込み、地すべり	縄文時代前期初頭	層位	高濱ほか(1998) 高濱ほか(2000) 尾崎(2004)
4	古渡路	噴砂	縄文時代以降	層位	県221集(2011)
5	天神岡 谷地	①噴砂 ②噴砂礫、陥没と引き上げ	①縄文時代前期初頭 ②縄文時代前期以降、後期以前	層位 ①花積下層式～黒浜式併行（布目式中心） ②後期とみられる層は影響を受けていない	県193集(2010)
6	牛屋 中部北	噴砂	縄文時代後期中葉以降、古代以前	層位	県179集(2008)
7	南新保 道端	噴砂	縄文？		県127集(2003)
8	胎内市大出 江添	○江添遺跡の廃絶 ①噴砂、側方流動、沈降運動(2.5m) ②「昼塚川」の出現	①縄文時代後期中葉以降 ②縄文時代後期中葉以降 ③縄文時代後期中葉以降 ④縄文時代晩期前葉頃 ⑤縄文時代晩期中葉以降 ⑥縄文時代晩期中葉以降	①高濱はM7クラスの直下地震と推定 ②C14（3300calBP） ③C14（3200calBP） ④層位（大洞B2式） ⑤層位 ⑥層位	県147集(2005) 県167集(2006) 県174集(2007)
9	大出 昼塚	③「昼塚川」の液状化と河岸崩壊＝「昼塚川」の消滅、「古道下川」の消滅 ○昼塚遺跡、道下遺跡の成立			
10	古館 道下	④噴砂、遺構の切断 ○昼塚遺跡、道下遺跡の廃絶 ⑤⑥噴砂			
11	八幡 野地	噴砂、断層	縄文時代晩期前葉以降	層位（大洞BC2式）	県196集(2009)
12	船戸 蔵ノ坪	噴砂	9世紀代	川跡SD808	高濱ほか(2001) 県115集(2002) 加藤(2013)
13	新発田市金塚 青田	①砂脈 ②～⑤砂脈、噴砂マウンド ⑥断層運動による沈降、紫雲寺湯の出現 ⑦・⑧流動変形	①縄文時代晩期後葉 ②縄文時代晩期後葉 ③縄文時代晩期後葉 ④縄文時代晩期後葉 ⑤縄文時代晩期後葉 ⑥9世紀 ⑦⑧紫雲寺湯出現以降	①層位（鳥屋2a式） ②層位（鳥屋2a式） ③層位（鳥屋2a式） ④層位（鳥屋2a式） ⑤層位（鳥屋2b式）	県133集(2004)
14	金山トレンチ	噴砂	1520-990calBC	C14	小松原ほか(2007)
15	稲荷岡 住吉	大規模な流動変形	①②13～16世紀以降	層位	高濱ほか(1998)
16	湖南 砂山中道下	噴砂	14or15世紀以降	層位	高濱ほか(1998)
17	野中 野中土手付	噴砂、流動変形	9～14or15世紀の間	層位	高濱ほか(1998)
18	中曽根 小船渡	噴砂、断層	1650±150	地磁気 寛文9年（1669）の地震と推定	県247集(2014)
19	佐々木 馬見坂	流動変形	鎌倉～室町以降	C14	県165集(2006)
20	新潟市北区 松影A	噴砂	—		県106集(2001)
21	阿賀野市山倉 腰廻	噴砂、噴砂マウンド、流動変形	8～12世紀の間	層位	高濱ほか(1998)
22	長起 前田	噴砂、引き込み、流動変形	9世紀後半	層位	高濱ほか(1998) 笹神村9集(1999)
23	猫山	噴砂	—		阿賀野市3集(2010)
24	飯森杉 村前東A	噴砂	13世紀中葉以前	層位	県223集(2010)
25	月崎 山口野中	噴砂	1275±25	地磁気	県248集(2013)
26	百津 境塚	噴砂、概ね北東—南西方向	11～14世紀、特に14世紀	地磁気	阿賀野市4集(2011)
27	百津 三辺稲荷	噴砂	—		阿賀野市5集(2011)
28	堀越 石船戸	噴砂（砂脈が切り合う）、流動変形、地波、地すべり、層の分離、隆起・沈降	縄文晩期初頭～古代・中世の間に3・4回		現地説明会資料

	遺跡名	痕跡の内容	時期	備考、時期決定の根拠	文献
29	阿賀野市 保田 ツベタ	土石流堆積物の噴出、引き込み	①縄文時代中期 ②縄文時代後期	①5010±100BP—4920±250BP ②3600±155BP	高浜ほか(1997)
30	草水 野中	噴砂、引き込み、地割れ、土石流	縄文時代中期末葉	層位（大木9式の検出面を貫く）、大木10式古段階で集落は断絶	渡辺(1997)
31	新潟市東区 石動	噴砂	①古墳時代前期以後 ②9世紀後半～14世紀	層位	春日ほか(1996)
32	東区 古屋敷	噴砂	—	新潟地震と推定	春日ほか(1996)
33	東区 山木戸	噴砂	①— ②中世以降	層位	春日ほか(1996) 新潟市(1999)
34	中央区 近世新潟町跡	噴砂	①宝暦12年(1762) ②庄内沖地震(1833)	複数回分の地震痕跡があり、層位から宝暦12年3月4日の地震と庄内沖地震とに推定	県187集(2008)
35	江南区 前山	噴砂	—		新潟市(1997)
36	江南区 上郷	噴砂	—		春日ほか(1996)
37	江南区 西郷	噴砂、地割れ	①弥生時代前期頃 ②弥生時代中期以降 ③古墳時代前期以降	層位、いずれも古代以前	県200集(2009)
38	秋葉区 沖ノ羽	噴砂	—		春日ほか(1996)
39	秋葉区 大沢谷内	噴砂	—		市教委教示
40	西区 釈迦堂	噴砂、地割れ、断層	①越中越後地震(863) ②仁和3年(887)か	高濱ほかは、2つの地震痕跡をそれぞれ越中越後と仁和3年にあてる。 ①の層位は9世紀第3～4四半期、②も9世紀で、10世紀には入らない。	高濱ほか(1998) 県100集(2000) 加藤(2013)
41	南区 小坂居付	噴砂、沈降運動	14世紀末～15世紀中葉	C14	県埋文(2012)
42	南区 浦廻	噴砂、地波	14世紀前半以降	層位	県126集(2003)
43	西区 四十石	噴砂	9世紀末以降	9世紀末を下限とする包含層を貫く	新潟市(2012)
44	西蒲区 うぶすめ	津波堆積物	①1000BP(8世紀以降) ②1000BP ③庄内沖地震(1833)	①9世紀 ②11世紀か ③層位	新潟大学調査 新潟日報 (2014.4.28)
45	燕市米納津 北小脇	噴砂、地割れ(概ね北北西—南南東方向)	9世紀中頃以降	層位	高濱ほか(2001) 吉田町9集(2002) 燕市3集(2008)
46	米納津 小諏訪前B	噴砂	①8世紀後半以前 ②8世紀後半～9世紀初頭 ③9世紀以降～12世紀以前(規模大) ④14世紀以降	層位	高濱ほか(2001) 吉田町12集(2005) 燕市3集(2008)
47	米納津 小諏訪前	噴砂	—		吉田町13集(2006)
48	米納津 大橋	噴砂、噴砂マウンド、地割れ(東西方向中心)	①9世紀 ②9世紀 ③中世	高濱ほかは、①と②を1つの地震の本震と余震とみる	高濱ほか(2001) 吉田町9集(2002)
49	米納津 花立	噴砂	8世紀後半	層位、遺構確認面に噴砂	吉田町13集(2006)
50	米納津 江添D	噴砂(多くは北西—南東方向)	9世紀第2 or 第3四半期以降	層位	吉田町8集(2002)
51	松橋 三角田	噴砂(いずれも東西方向)	8世紀前半以降	層位	高濱ほか(2001) 燕市1集(2001)
52	南蒲原郡田上町 保明浦	噴砂	三条地震(1828) or 新潟地震(1964)	層位	春日ほか(1996) 田上町21集(2004)
53	加茂市新栄町 釜淵	噴砂	三条地震(1828)	層位	伊藤(1993) 春日ほか(1996)
54	三条市元町 近世三条城跡	噴砂	三条地震(1828)	高濱ほかは、三条地方に被害をあたえた宝暦12年(1762)の地震と三条地震のうち、震源域に近い後者に比定	高濱ほか(1998) 月刊文化財発掘出土情報(1999.3)

	遺跡名	痕跡の内容	時期	備考、時期決定の根拠	文献
55	三条市栗林 信濃川築堤地区	噴砂	三条地震 (1828)		速報展資料(2007)
56	井栗 藤ノ木	噴砂、地割れ	室町以前	中世土坑まで達していない	高濱ほか(2001) 三条市24号(2008)
57	下保内 吉津川	噴砂、地割れ、遺構の切断	—		三条市21号(2008)
58	下保内 新田川	噴砂、地割れ	—		三条市22号(2008)
59	加茂市下条 馬越	噴砂	① 8世紀以前 ② 9世紀後半以降	層位	加茂市19集(2010)
60	三条市茅原 石塚	噴砂	三条地震 (1828)	層位、茅原は三条地震の全壊地域	栄町 5 輯(1992) 春日ほか(1996)
61	燕市五千石 長岡市寺泊敦ヶ曾根 五千石	燕市調査区：噴砂、遺構の切断 長岡市調査区：噴砂、遺構の切断	古墳時代中期 430±20	層位 地磁気	燕市 6 集(2010) 長岡市(2011)
62	長岡市島崎 八幡林	地割れ	越中越後地震 (863)	層位 建築部材の横倒状況から、小林は建物倒壊の可能性を指摘。	和島村 3 集(1994) 春日ほか(1996) 小林(2005) 加藤(2013)
63	小島谷 下ノ西	流動変形	9世紀代	層位	高濱ほか(1998)
64	上沼新田 観音寺	噴砂	三条地震 (1828)	層位	中之島町 1 集(1995) 春日ほか(1996)
65	沢下条 岩田	地割れ	9世紀以降	層位	越路町21輯(1997)
66	小千谷市三仏生	噴礫	—		高濱ほか(1997) 高濱ほか(2004) 県92集(1999)
67	三仏生 金塚	平面リングタイプの噴砂	—		高濱ほか(1998)
68	真人町 真人原	①液状化、M7クラスの地震動をともなう断層活動 ②断層活動 (真人郵便局)	①AT降灰(30009±94calBP)以前 ②As-YPk降灰(15800BP)以前	①真人原遺跡での人類活動以前 ②真人原遺跡での人類活動と同時期の可能性あり	都立大 7 集(2002)
69	十日町市中条 笹山	土石流	3800BP以降	十日町断層の最新活動期に対応すると主張	十日町市 28集(2005)
70	南魚沼市余川 余川中道	噴砂	①古墳時代中期 ②古墳時代中期 ③古墳時代中期		現地説明会資料 加藤ほか(2014)
71	中魚沼郡津南町 正面ヶ原D	平面リングタイプの噴砂	—		高濱ほか(1998)
72	津南町 上郷小学校	土石流	縄文時代中期or後期?	中期前葉の層と後期中葉の層との間に3mを超える土石流の層が堆積。その原因を局地型地震と推定	津南町17輯(1995)
73	南魚沼郡湯沢町 川久保	液状化構造	縄文時代中期中葉	液状化した地盤の形成直後に大木8a式の集落が始まる	県233集(2012)
74	上越市今泉 用言寺	噴砂	13世紀	YK-KGc (1235年前後)以降、13世紀の遺物包含層以前	県183集(2007) 加藤ほか(2014)
75	糸魚川市東寺町 笛吹田	噴礫	—		市教委教示
※	魚沼市中島 覚屋	地割れ	地震動に由来しない	洪水による陥没	広神村 1 集(2001)

歴史地震史料目録

年月日	西暦	地震名	資料番号	掲載史料名	掲載頁
永享五年	一四三三		1―1	鎌倉大日記（書籍館旧蔵本）永享五年条	1
永享十二年	一四四〇		1―2	鎌倉大日記（書籍館旧蔵本）永享十二年条	2
文明十八年	一四八六		1―3	鎌倉大日記（書籍館旧蔵本）文明十八年条	2
明応四年	一四九五	明応関東地震	1―4	鎌倉大日記（書籍館旧蔵本）明応四年条	3
文禄五年七月九日	一五九六	文禄伊予地震	2	愛媛県松山市薬師寺大般若経卷第十七奥書	3
万治二年	一六五九	万治会津地震	3―4	寛文以来万覚書 宝永七年条（万治会津地震記事）	5
天和三年	一六八三	天和日光大地震	3―1	寛文以来万覚書 天和三年条	4
元禄十六年	一七〇三	元禄地震	3―2	寛文以来万覚書 元禄十六年条	5
宝永四年十月四日	一七〇七	宝永地震	4	野村家記録	8
			5	柏井氏難行録	10
			6	江府京駿雑誌	13
			7	地震海溢記	18
			8	岡本元朝日記	33
			9―1	享保十一年午ノ四月 志摩国英虞郡浜島村差出帳	39
			9―2	享保十一年午四月 志摩国英虞郡片田村指出シ帳	40
			9―3	享保十一年午四月 志摩国英虞郡畔名村差出帳	41
			9―4	享保十一年午ノ四月 志摩国英虞郡和具村指出シ帳	42
			9―5	享保十一年午ノ四月 志摩国英虞郡迫子村指出帳	42
			9―6	享保十一年午之四月 志摩国英虞郡御座村指出シ帳	43

9 ― 27	9 ― 26	9 ― 25	9 ― 24	9 ― 23	9 ― 22	9 ― 21	9 ― 20	9 ― 19	9 ― 18	9 ― 17	9 ― 16	9 ― 15	9 ― 14	9 ― 13	9 ― 12	9 ― 11	9 ― 10	9 ― 9	9 ― 8	9 ― 7
享保十一年丙午四月十三日 志摩国答志郡堅神村指出帳	享保十一年午四月十三日 志摩国答志郡松尾村指出シ帳	享保十一年午四月 志摩国答志郡千賀村差出帳	享保十一年午ノ四月 志摩国答志郡坂崎村指出帳	享保十一年午四月 志摩国答志郡国府村指出帳	享保十一年午ノ四月 志摩国答志郡三ヶ所村差出シ帳	享保十一年午四月 志摩国答志郡下之郷村指出シ帳	享保十一年午四月 志摩国答志郡堅子村差出帳	享保十一年午四月十三日 志摩国答志郡浦村指出シ帳	享保十一年午四月 志摩国答志郡蛸村差出帳	享保十二年午之四月 志摩国英虞郡 檜山路村指出帳	享保十一年午之四月 志摩国英虞郡 塩屋村指出帳	享保十一丙午年四月十三日 志摩国答志郡安楽嶋村指出シ帳	享保十一年午四月 志摩国答志郡安乗村差出帳	享保十一年午四月十三日 志摩国答志郡指出シ帳 岩倉村	享保十一年午四月十三日 志摩国答志郡河内村指出帳	享保十一年午四月 志摩国英虞郡神明浦村指出帳	享保十一年午ノ四月 志摩国英虞郡鵜方村指出帳	享保十一年午四月 志摩国英虞郡甲賀村差出帳	享保十一年午四月 志摩国英虞郡志嶋村差出帳	享保十一年午ノ四月 志摩国英虞郡立神村指出シ帳
64	64	63	62	60	60	59	59	57	56	55	54	53	52	52	51	50	47	46	45	44

年月日	西暦	地震名	資料番号	掲載史料名	掲載頁
宝永四年十月四日	一七〇七	宝永地震	9―28	享保十一年午四月十三日 志摩国答志郡白木村指出帳	65
			9―29	享保十一年午ノ四月 志摩国答志郡穴川村指出シ帳	65
			9―30	享保十一年午四月 志摩国答志郡相差村指出シ帳	67
			9―31	享保十一年午ノ四月 志摩国答志郡飯浜村指出帳	69
			9―32	享保十一丙午年四月十三日 志摩国答志郡船津村指出帳	70
			9―33	享保十一年丙午四月十三日 志摩国答志郡桃取村指出帳	70
			9―34	伊勢国度会郡中郡村指出帳（享保十一年）	71
			9―35	享保十一年勢州多気郡広瀬大堀川新田差出帳（志州鳥羽町地主吉崎与惣右衛門・同大野屋吉兵衛・同地手代新田所伊右衛門）	71
			9―36	享和元年酉十二月伊勢国三重郡六呂見村差出帳	72
			9―37	享和元年酉十一月伊勢国三重郡塩浜村差出帳	73
			9―38	享和元年酉十二月伊勢国三重郡馳出村差出帳	73
			9―39	天保九戌年閏四月村差出明細帳 伊勢国三重郡塩浜村	73
			9―40	天保九年戌閏四月村差出明細帳 伊勢国三重郡六呂見村	74
			9―41	寛保三年い（亥）ノ十一月度会郡有滝村差出明細帳	74
			9―42	宝永七年寅七月志摩国英虞郡鵜方村指出シ帳	81
			9―43	享保三年戌四月志摩国英虞郡鵜方村指出帳	83
			9―44	享保十一年午ノ四月 志摩国英虞郡鵜方村指出帳扣	85
			9―45	享保十一年午四月 志摩国答志郡安乗村差出帳	87
			9―46	天明二年 乍恐以書付奉願上候	88

宝永七年	一七一〇	会津南山地震	3 3	寛文以来万覚書 宝永四年条	5
享保八年	一七二三		3 5	寛文以来万覚書 享保八年条（万治会津地震記事）	7
寛延四年	一七五一	越後高田地震	3 6	寛文以来万覚書 寛延四年条	7
安永八年	一七七九	安永佐渡地震	3 7	寛文以来万覚書 安永八年条	8
文政十一年十二月	一八二八	越後三条地震	10 1	長岡藩御附録 文政十一年十二月条	108
天保四年十二月	一八三三	庄内沖地震	10 2	長岡藩御附録 天保四年十二月条	111
弘化四年三月二十四日	一八四七	善光寺地震	11 12	弘化四丁未三月廿四日夜 正四時大地震大変覚 弘化四丁未年三月廿四日夜四時大地震ニ付諸雜談聞書覚	112 125
嘉永七年	一八五四	安政地震	9 49	「嘉永七年海嘯ノ記」（『念仏寺記録』写）	98
安政五年二月二十六日	一八五八	飛越地震	13 1	安政六未年三月 吉城郡小鷹利郷角川村・中沢上村・保木村往還損所并 取繕等普請出来方鹿絵図	144
			13 2	安政六未年三月 吉城郡小鷹利郷元田村・天生村・月ヶ瀬村往還損所并 取繕等普請出来方鹿絵図	145
			13 3	安政六未年三月 乍恐以書付奉申上候	146
			13 4	安政六未年三月 小鳥谷筋往還損所道造人足書上帳	147
			9 47	「宝永六年極月一日 奥熊野尾鷺組流失已後建家之品書上帳（控）」（「尾鷺組大庄屋記録」）	90
			9 48	「見聞闕疑集」	95
			9 50	「宝永海嘯ノ記」（『念仏寺記録』写）	99
			9 51	「大地震之事」（金五郎日記歳代覚書） 蘭目作司氏筆写史料	103
			9 52	「年代記 上野田郷馬草村山田氏」（蘭目作司氏撮影収集史料）	108

執筆者一覧

- 小野 映介（新潟大学教育学部准教授）
片桐 和彦（東京都練馬区文化・生涯学習課郷土資料調査員）
齋藤 瑞穂（新潟大学災害・復興科学研究所特任助教）
谷口 央（首都大学東京大学院人文科学研究科准教授）
西尾 和美（ノートルダム清心女子大学文学部教授）
西山 昭仁（東京大学地震研究所特任研究員）
原 直史（新潟大学人文学部教授）
原田 和彦（長野市立博物館）
宮澤 崇士（長野市立博物館）
矢田 俊文（新潟大学人文学部教授）

歴史学による前近代歴史地震史料集

二〇一五年三月二十五日

編者 前近代歴史地震史料研究会

発行者 新潟大学人文学部

〒九五〇―一二八一 新潟市西区五十嵐二の町八〇五〇番地

正誤表

歴史学による前近代歴史地震史料集, 2015 年 3 月

164 頁

正 片桐昭彦

誤 片桐和彦